野郎ども待たせたな! UFC、日本上陸決定!!

kamipro

紙のプロレス

MMA & PRO-WRESTLIN

enterbrain MOOK

2011
156
特別定価940yen

10th thanks! eb!

特集 梶原一騎
高森篤子
真樹日佐夫
原田久仁信
斎藤貴男
島田十九八
玉ちゃんの変態座談会
ジョージ高野&ドン荒川

2.12ストライクフォース
ヒョードル完敗に
格闘家の春夏秋冬を見た!

美しき落日——!!

夢のスペシャルマッチ再び!
今田耕司×RENA

大会速報、選手ブログは携帯で!
kamiproMove

オレたちの青春、K-1

佐竹雅昭

アンディ・フグ　マイク・ベルナルド

24時間テレビ「愛は地球を救う」（1999.8.21〜22放送）の番組企画のオークションにK-1が3組セットで出品したもの。アンディ、佐竹、ベルナルドの3選手はこの時行われた「K-1スピリット99」のスペシャルワンマッチの勝利者（この日の試合で使われたグローブではありません）。　佐竹:「愛は地球を救う 24h」、ベルナルド:「JESUS LOVES YOU」の一言入り
※アンディのグローブのみ左右でサイズが違います。

特別価格¥105,000-

2011 No.156 CONTENTS

kamipro

表紙写真／Esther Lin（STRIKEFORCE）

特集 梶原一騎

いまこそ〝男の教科書〟を読み直せ!

©島田十九八事務所

MMA

Ikki Kajiwara

kamipro Special

Columns

哀しく、切ない、一つの時代の終焉……、
ヒョードル2連敗、そして引退へ――。

初めての“終わり”

皇帝が与えた初

エメリヤーエンコ・ヒョードルが負けた。2連敗、そして完敗だった。

2月12日、ニュージャージー州IZODセンターで行なわれた『STRIKEFORCEワールドGP』ヘビー級トーナメント1回戦。ヒョードルはアントニオ〝ビッグフット〟シウバに徹底的に叩きのめされた。パンチを被弾し、テイクダウンを許し、パウンドを数十発も落とされ、続けざまにサブミッションを狙われた。そのすべてに耐えたが、結末はドクターストップだった。

ヒョードルが連敗を喫しただけでも大事件なのに、試合後にはさらなるショックが待っていた。「これが最後になるでしょう」とケージ内でのインタビューで引退発言と取れる言葉を残したのだ。ブーイングであれ歓声であれ、選手に対しては常に〝大騒ぎ〟でリアクションするアメリカの観客が、このときばかりは静まり返った。太平洋を隔てて衛星中継の映像を観ている僕も、黙りこくるしかなかった。

哀しい。切ない。そういった感情は当然あった。信じられない、とも思った。ただ、それだけではなかった。何か、もっと大きなものに立ち会っているような気持ちになったのだ。それは〝一つの時代が終わった〟という常套句では表現しきれない感情だった。

ヒョードルは2000年8月にリングスで日本初登場をはたすと、瞬く間に成功の階段を上っていった。リングス2戦目でKOKトーナメント出場。2回戦で高阪剛に出血TKO負けを喫したものの、そこからは負けることがなかった。ヘビー級、無差別級の二冠を達成し、戦場をPRIDEに移すと3戦目でアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラを下してタイトル奪取。ヘビー級GPで優勝し、最強のチャレンジャーであるミルコ・クロコップにも完勝した。

高阪戦が2000年12月で、ファブリシオ・ヴェウドゥムの三角絞めにタップしたのが2010年6月。ヒョードルはじつに10年間も勝ち続けた。文句なしの最強だった。

そういう選手が、闘いの舞台から去るという。スコット・コーカーCEOがコメントしたように、試合後の選手は冷静さを失なっているものだ。翻意する可能性がゼロなわけではないだろうし、契約を消化するために試合を行なうかもしれない。

ただ、試合後のヒョードルの顔は落ち着いているようにも見えた。ドクターチェックを受け、試合の裁定を待っているあいだに、彼が信じる〝神の意思〟を受け入れたのかもしれない。彼が今後、試合を行なうかどうかはわからないが、ビッグフット戦で〝皇帝が退位した〟ことは間違いない。

哀しく、切ない現実。一つの時代の終わり。だが忘れてはいけないこともある。それでも闘いは、格闘技は続いていくということだ。ヒョードルの〝最後の試合〟がトーナメントだったことは、偶然とはいえ象徴的だともいえる。このトーナメントで、あるいはUFCで、これからまた凄まじい速度で〝次の時代〟が進んでいくのである。

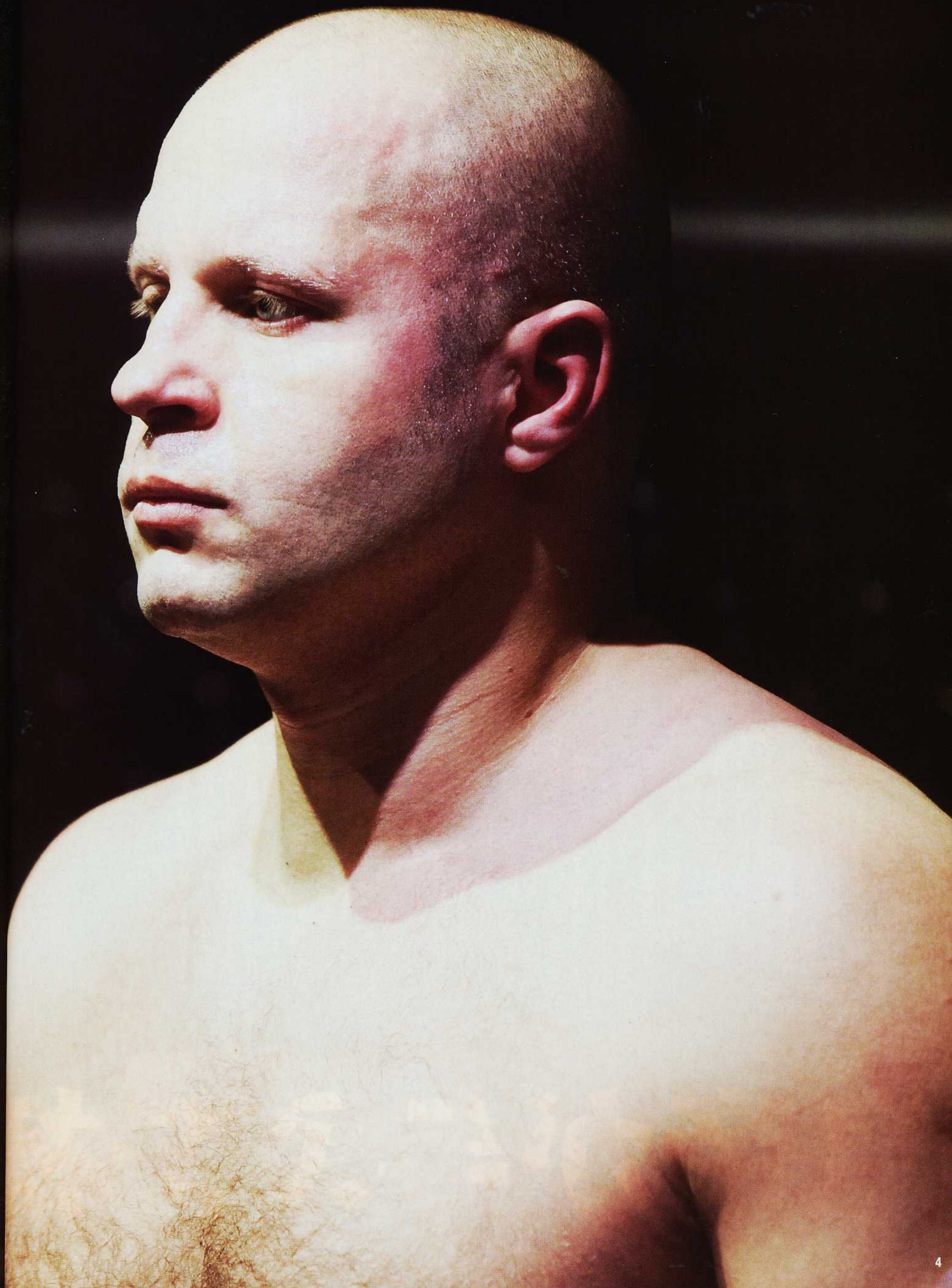
「ヒョードルのことなんかさっさと忘れろ」と言いたいわけではない。だいたい、忘れようにも忘れられるはずがない。ただ、ここで歴史が止まったわけではないということだ。

どんな伝説的名選手にも〝終わり〟のときは来る。そして次の時代が進み、また新たな名選手が現われる。歴史はそうやって紡がれていくものだ。ファンは長嶋茂雄、モハメド・アリ、ペレといった伝説たちを見送り、イチローやマニー・パッキャオやメッシといった新たな伝説の担い手に喝采を送る。その繰り返しが歴史というものだ。

だがMMAは新興スポーツである。ファンは大きな〝終わり〟を経験したことが少ない。時代を築いた選手、時代の中で大きな役割をはたした選手が（フェードアウトではなく）はっきりとしたかたちで引退したのは髙田延彦、高阪剛、チャック・リデルくらいだろう。そしてヒョードルは彼ら以上に特別な存在だから（というより、ヒョードル以上の特別な存在などいないのだが）、〝引退〟の重みもまた凄まじいものになった。

もしかすると、ヒョードルの連敗と引退発言によって、MMAというジャンルは初めて〝歴史〟という概念をもつことになるのかもしれない。ヒョードルが日本デビューした2000年は、桜庭和志が対グレイシー4連勝を飾った年でもある。まさにこの年、一つの時代が終わり、新しい時代が始まったのだ。

そして2011年、ヒョードルの時代も終わりを迎えた。〝終わり→始まり→終わり〟というサイクル、単発の事件の繰り返しではなく、大河の流れのような歴史を、我々は見届けたのだ。その経験があるからこそ、次の時代に期待することもできる。ヒョードルは、MMAファンが〝歴史に立ち会う〟大人になるきっかけを与えてくれた。

（橋本宗洋）

運命を受け入れた
皇帝
ありがとう ヒョードル 座談会

昨年6月のファブリシオ戦で事実上の初黒星をつけてしまった皇帝ヒョードル。
復帰戦の舞台はストライクフォース・ヘビー級GP1回戦、相手はアントニオ・シウバとなったが、
まさかの完敗、悪夢の2連敗。そして衝撃の引退発言――。
我々はこの事態をどう受け止めればいいのだろうか――!?

試合写真／Esther Lin（STRIKEFORCE）

——先ほどスカパー！のメディアセンターでヒョードルvsビッグフットが行なわれたストライクフォースのＰＰＶを観てきたんですけども、これはおもしろかったですねぇ！

橋本 強烈なイベントだったねぇ。

——なにより最大の衝撃はヒョードルがまさかの連敗だったわけですが、まさしく堀江さんの事前の予想どおりでしたねぇ。

ガンツ もうヒョードルとは付き合いが長いからねぇ……虫の知らせというのかな。今回はカードが発表されたときから「もう、このカードだけはやめようよ！」って思いました。

——それはどういった理由ですか？

ガンツ ま、一番は相性ですよね。ビックフットって、まだそこまで評価は高くなってない選手ですけど、このところの充実ぶりは素晴らしい。しかもあれだけデカくて動けて、打撃も寝技もうまい。これまでも完敗を喫した試合はないですし、負けるときもギリギリの負け。ただ衝撃的な勝利がないっていうだけの選手なんで「これはマズイかなあ……」と。それでも、なんとかヒョードルの勝利を信じてたけど、内容も予想とドンピシャだったという……。

高橋 体重差も20キロ近くあって、確かに相性も悪いけど、それでもなんとかするかなと思っていましたけど。あれだけの体格差があるとグラウンドがキツイですよね。チェ・ホンマンみたいにグラウンドがザルだったら話は別ですけど。

ガンツ ＵＦＣのトップファイター何人かに予想してもらったら「ヒョードル優勝！」の声が多かったんですけど、そういう人は必ず「オレはヒョードルのビッグファンだ」って言うんですよ（笑）。

橋本 「勝つ」ではなく「勝ってほしい」なんだ。

ガンツ アメリカでもそこまでの存在だったことは、やっぱり凄いことですよ。

橋本 実際、会場でも圧倒的一番人気。多くの観客が「これはヒョードルの復活トーナメントだ！」と思ってたんだよねぇ。

——相手のビッグフットも強烈な存在感でしたし、入場からおもしろかったですね。まったくエミネムが似合わないっていう（笑）。チェ・ホンマンのラップもそうでしたけど、誤解を恐れずに言えば、怪物が普通の人間であることを必死にアピールするおもしろさがあって。

高橋 「普通の人間になりたい」みたいな感じですよね（笑）。

橋本 やっぱりここは『ジャイアントプレス』での入場が必要だったと思うよ（笑）。ワカマツみたいなマネージャーをつけたりさ。

ガンツ あのデカさは、もうゲームになったら凄く使いたい！ あの「ビッグフット」っていうあだ名は、デカ足じゃなくて「雪男」のことでしょ。

高橋 いや、「デカ足」でついてますね、ブラジル時代に。ポルトガル語で「ペザウォン」と呼ばれてたんですけど。

ガンツ どう考えてもイエティを連想させるというか。「ゴリラに柔術を覚えさせたら最強なんじゃないか」っていうのを具現化してる。相原コージ先生の『真・異種格闘技大戦』の世界ですよ！

——ちょっと「人間vs人間」の対決に見えませんでしたもんね。試合後のドーピングチェックで「人間のＤＮＡが検出されませんでした」なんていう結果が出てもおかしくない（笑）。

橋本 じつはしっぽが生えてたとかさ（笑）。

ガンツ 今回のトーナメントはボクらの大好きな古き良きプロレスのキャラクターが揃ってて。こんなに世界各国の選手がいるトーナメントがアメリカで行なわれることの不思議。アメリカ人のジョシ

ュとロジャースの影が薄いっていう（笑）。

高橋 あのジョシュの人気のなさ。出ただけでブーイングっていう。

らず草木が死に絶えていく冬もある。格闘家としての春夏秋冬をちゃんとまっとうしてるっていうさ。負ける姿をこう

座談会出席者

高橋ターヤン
ＵＦＣをはじめ、おもに海外系の情報に詳しいフリーライター。携帯サイトｋａｍｉｐｒｏＭｏｖｅでも海外情報を扱うコラム『Ｔｈｉｓ Ｗｅｅｋ ＭＭＡ』を連載中。

橋本宗洋
フリーライター。取材対象は格闘技のみならず映画、グルメ、飲み会にうるさい通称〝飲みオジ〟。ＤＥＥＰメガトンＧＰの実行委員でもある。

堀江ガンツ
本誌編集部。ちっちゃな頃から熱狂的プロレスファンでならし、『週プロ』の「プレッシャー」会員という恥ずかしい過去を持つ。変態座談会主宰者。

[司会]ジャン斉藤
本誌編集長。〝雀鬼〟桜井章一の内弟子を経て『ｋａｍｉｐｒｏ』編集部へ。永久電機など、アントニオ猪木の怪しげな事業の調査をライフワークとする。

ありがとうヒョードル座談会

顔を腫らしたまま、いつもの微笑で時折はにかみながら引退を示唆した

れることの不思議。アメリカ人のジョシ

ュとロジャースの影が薄いっていう（笑）。

高橋　あのジョシュの人気のなさ。出たけでブーイングっていう。

——『アフリクション』消滅事件の前から人気がないですもんねぇ。PRIDEラスベガス大会のときに唯一、グッズが売れ残った選手がジョシュだったっていう。

ガンツ　あの人気のなさは世界9番目の不思議かもしれない（笑）。

橋本　WWEで言えば、世界8番目の不思議がアンドレ・ザ・ジャイアントで、9番目の不思議がチャイナだから、ジョシュは10番目でしょ（笑）。

——しかし、今回のメンツはまさしく『ストリートファイターII』の世界というか。エドモンド本田役で鈴川（真一）あたりが入ってると完璧だったんですけどね。マニアからは毛嫌いされそうだけど（笑）。で、ヒョードルが試合後に引退を示唆するコメントをしましたよね。

ガンツ　ケージの中で顔を腫らしたまま、いつもの微笑で時折はにかみながら、言ってたよね……。

橋本　「メイビー・イッツ・ラストタイム」みたいな感じだったよね。日本の中継では「これが最後かもしれないし、最後じゃないかもしれない」って訳されて。いわゆる「引退を示唆」っていうやつかな。

ガンツ　これは事実上の引退だと思いますけどね。だって大横綱が大関に降格して続けられないでしょう。そういうことだと思うんですよね。

——今後、M—1グローバルの役員として試合をする可能性はありますよね。いわゆる会社の仕事として。

ガンツ　それはある。でも、皇帝物語は事実上の最終回かなあ。そしてヒョードル自身もそう思ってると思うんだよ、あの表情からして。ファブリシオに負けたときは凄く悔しそうでショックな顔をしてたんだよね。だけど今回は「やるだけやった」っていう顔で……。そして「もしかしたら今日が終わりだったかもしれません」っていう、あのボコボコになった顔で、はにかみながら……。

［11.2.12 STRIKEFORCE］
米国ニュージャージー州イーストラザフォード、IZODセンター

×エメリヤーエンコ・ヒョードル
vs アントニオ・シウバ○
（2R終了 TKO）

体格差で劣るヒョードルは飛び込んでからのスタンドで活路を見いだすがビッグフットに冷静に対処される。２ラウンド早々、右ストレートに合わせられてテイクダウンを許す。そのままマウントに移行され、パウンド連打、そして肩固めで追い詰められる皇帝。なんとかこのラウンドを闘いぬいたが、右目の負傷がひどく試合が止められた。

橋本　あのインタビューのとき、あれだけ騒がしいアメリカのファンがさ、水を打ったように静かになってたんだよ。まさに陛下のお言葉を聞いてるわけ。

——まさに玉音放送だ。

ガンツ　アメリカのファンのあいだでもヒョードルが神格化してたんだよね。だってヒョードルの試合のときは必ずみんなスタンディングオベレーション。もう「生きる伝説、生きる神」扱いだったんですよ。

橋本　で、ケージからヒョードルが出ていくときにさ、お客さんから「ヒョードル！」コールが起こる。これまでは、そういう敗者に対するエモーションがアメリカの客にはないとされてきたんだけど、やっぱあるんだよねぇ。

——燃え盛る夏もあれば、極寒で日も当たらず草木が死に絶えていく冬もある。格闘家としての春夏秋冬をちゃんとまっとうしてるっていうさ。負ける姿をこうしてさらけ出してるところも含めて素晴らしき落日ですよ！

ガンツ　運命に身を任せ、日々を楽しく生き、それを受け入れるだけですっていう感じで。

——ボクがヒョードルを最後に取材したのは06年『やれんのか！』の直前だったんですけど、上半身裸の撮影する際「十字架を外してくれ」って頼んだら「これだけは絶対に外すことはできない」って言うんですよ。「いままでそんなことはなかったのに……」ってビックリしたんですけど、あのときぐらいからロシア正教の信仰が深まってて。今回のオープニングVでも、GP参加選手が上半身裸で装飾品を着けずにシャドーするなか、ヒョードルだけは十字架を外してないんだよね。

高橋　今日もケージに入る際、最初のボディチェックのところで「外してください」って言われて問答になってましたね。きっとギリギリまで着けていたかったんでしょう。

橋本　自分がリングとかケージに上がったら億単位の金になるって考えたら、これは怖いよね。ましてや勝てば勝つほど負ける重みもデカくなってくし、M—1の首脳の一人としての役割もあるし、自分一人の身体じゃないというかね。

——競技者としても怖いですよね。「なんでオレだけ勝ち続けてんだろう?」って考えたときに精神世界に向かうのは、どんなジャンルのトップを見てもわかりますし。

高橋　もちろん練習して実力があるんだろうけど、毎回、宝くじが当たってるようなものじゃないですか。MMAがいまみ

たいなレベルになってくると、どんな相手でも負ける要素っていっぱいあるわけで、それが必ず勝ち目に出るっていう怖さは当然あると思いますよね。

ガンツ　ヒョードルは神様に頼るんじゃなくて向かい合ってるんだよね。勝敗っていうのはやっぱり欲が出るじゃない。「負けるのが怖い、勝ちたい」。そういうのをすべて乗り越えてリングに上がるためには、もう自分じゃない別の人にすべてを預けるしかないっていう。

橋本　「あとは神様が決めることだ」っていうね。宗教じゃなくても、会社の経営者で孔子とか中国の古典にハマる人っているでしょ。そうすると必ず出てくるのが「天命」っていう言葉で。「自分じゃない、天が決める」みたいな。ヒョードルはその域に達した選手だったってことだよね。

——すべてを受け入れてるから美しいんでしょうねぇ。入場から何から荘厳で。

橋本　それでビッグフットっていう、バカでかくて、なおかつ技術やスタミナもあるっていう怪物に完膚なきまでにやられて、「ここが天命」じゃないけど、「オレの引退するタイミングなのかな」と。負けも受け入れ、引退も受け入れた。

高橋　一つだけ物足りなさを挙げるとすると、ヒョードルがビッグフットに何かを受け渡したっていう感じがしなかったことなんですよ。

橋本　闘魂伝承ではないです、全然。

——闘魂伝承という意味では、ヒョードルがアキレスを極めにいったときに「そこじゃねぇよ、ヒョードル？」っていう猪木さんばりのアピールがありましたよね（笑）。

橋本　「角度が違う！」っていう（笑）。

高橋　そういう意味でいうと、今回の試合は『ロッキー・ザ・ファイナル』に近い感じなんですよ。ロッキーがやりきって、負けても凄くさわやかに帰っていく。で、観客は勝者ではなくみんなロッキーのほうしか見てないっていう。

ガンツ　ヒョードル、ホッとした顔してたもんね。あの結果を受け入れた顔をしてた。だからファンより誰よりも、ヒョードルがあの結果を受け入れてるんだよね。

高橋　ファンだけじゃなくてファイターたちも受け入れてないですからね。試合が終わった2分後ぐらいにケニー・フロリアンがツイッターで「ヒョードル、まだ終わっちゃいねえよ。まだ引退じゃないよ」ってツイートしてて（笑）。

橋本　まさにビッグファン！（笑）。

ガンツ　オレたちみたいな小僧はもうオロオロオロオロしちゃうんだけど。もうヒョードル本人は心穏やか。あのロシア軍団のなかの誰よりも冷静だったもんね。

今回のヒョードルは『ロッキー・ザ・ファイナル』に近い感じだった

——M―1グローバル代表のワジムさん、ケージの中で取り乱してましたもんねぇ。

ガンツ　あのときヒョードルは「今日が私の最後でした」っていうふうに言ってもいいんだけども、そうするとM―1という会社が大変なことになっちゃうから。

——そういう意味では、MMAファイターの終焉ってどうとらえていいのかわからないところがあるじゃないですか。MMAというジャンル自体がまだ始まったばかりだから。

橋本　MMAって選手の引退に慣れてないジャンルなんだよね。選手の下り坂にも慣れてないし。ある程度名前を知られてる選手がきちんと引退したのって、日本でいうと髙田延彦、髙阪剛くらいでしょ。

——アメリカだとチャック・リデルか。……マーク・コールマンは「俺はまだ終わってねえ！」って吠えまくってるし（笑）。

高橋　ダン・スバーンも56歳になって、いま8連勝中ですけどね。誰が負けてんだって思うけど（笑）。

橋本　勝ってることが問題じゃない、負けてるやつが問題だっていう（笑）。そうやって、第一世代が終わってなかったりするからさ。最後までまっとうするというかたちを見せられるのは、まあショックなんだけど、このサイクルが格闘技でもあり、スポーツであるというか。

ガンツ　いままで観てきた大河ドラマのラストシーンなんですよ、この試合は。横浜文体の猪木vs藤波を超えちゃったね。あれって猪木の事実上の引退試合じゃない。最後に「旅姿六人衆」が流れてる感じがしてね……。

橋本　だからここはミルコかノゲイラが長州ばりにヒョードルを肩車するっていう画がいいよね〜。

——ノゲイラは今頃、駆けつけてるはずだよ。そしてヴァンダレイと一緒に飲みに行ってる（笑）。

橋本　みんなで味わってるよ、この負けを。オレのツイッターには「ヘビーとライトヘビーのあいだに階級を作ったほうがいいんじゃないか」とか、そういう意見も来ててさ。もちろん、ボクシングみたいに階級が細分化する可能性もあるんだけど、「今日のところはそういう話はいいじゃないっすか」と。競技論とかじゃなくて、このドラマを味わおうよ。

高橋　最後の退場シーンではいままでの思い出が走馬灯でしたよね。やっぱ、いろいろ思い出しちゃって。

橋本　ジョシュとも抱き合っていたみたいだし。ヒョードルがこれからどうするかはわかんないよ。でも、事実上の最終回っていうさ。誰とは言わないけど、連載をずっと引き延ばす漫画家みたいなことをやってもしょうがないわけじゃないですか。「事実上のクライマックスはここだったな」っていうのは、漫画でもやっぱりあるし、今日は凄く大きなピリオドなわけで。

ガンツ　超感動ですよね。心残りがあるとすればヒョードルvsブロック・レスナーが観たかったんだけども、オレは結果的に

ヒョードルはUFCに行かなくてよかったかなって、いま結果を受け入れたあとは思ってる。なぜかっていうと、あそこに行

フスキー×

ハリトーノフはプレ
ボディで効かせて後
叩き込み死神が衝

橋本　いやあでも、ホントにうれしかったからね。ここ数年は「普通のロシア人ファイターになっちゃったなあ」

シア圏の出身ファイターで、サンボベースでボクシングがうまくて、アメリカのスター選手。自分がこれから目指していくような選手だったじゃないですか。まあ北

ありがとうヒョードル座談会

ヒョードルはUFCに行かなくてよかったかなって、いま結果を受け入れたあとは思ってる。なぜかっていうと、あそこに行ってたら、ヒョードルもUFCって大きななかの一人であり、一番評価されたとしてもランディ・クートゥアーやチャック・リデルと並ぶレジェンドにしかならなかった。その上にはダナ・ホワイトがいるようなイメージがあるじゃないですか。そうじゃなくて、ヒョードルはダナとも対等にレジェンドでいられる人だと思うの。完敗なのに、しかもドクターストップで負けてるのに、最後までヒョードルという存在は揺らぐことはなかった。

橋本 うん。ボロボロになりながら2ラウンドの最後にアキレスを極めに行ったとことかさ、やっぱスゲエ意地だなと思ったよ。

高橋 肩固めを耐えきったところも。

ガンツ ホント、ヒョードルありがとうですよ！ ヒョードルは敗れてホントに神聖な存在になった。皇帝の座を降りて、聖者になったよ。

○

ハリトーノフはニンジャ戦やシュルト戦クラスの衝撃を全米のファンに与えた

——セミファイナルのハリトーノフvsアルロスフキーも素晴らしい試合になりましたね。

橋本 今日はスカパー！さんのプレス試写会で観たんだけど、部屋にオレが入ってったら『kamipro』勢しかいない。もう一つの横の部屋ではほかの専門誌媒体、スポーツ紙記者が固まって、もう一方の部屋には『kamipro』勢という。

高橋 隔離病棟ですよ（笑）。

橋本 「バカを混ぜるな！」みたいな感じで。

高橋 だって到着早々「Bの部屋でお願いします」って指定されましたもんね（笑）。

——そのB（＝バカ）の部屋では、ハリトーノフが勝った瞬間、全員が拍手して絶叫という。

高橋 隣はシーンとしてるのに（笑）。

橋本 オレたちは「よっしゃ——ッ‼」って。

——プレスとは思えない！（笑）。

ガンツ Bの部屋はハリトーノフ陣営だからね。

［11.2.12 STRIKEFORCE］
米国ニュージャージー州イーストラザフォード、IZODセンター
○セルゲイ・ハリトーノフ vsアンドレイ・アルロフスキー×
（1R2分49秒、TKO）
ボクシングに自信がある両雄の一戦。手数で攻めたてるアルロスフキーにハリトーノフはプレッシャーをかけながら、重いパンチで対抗。そして首相撲からのアッパー、ボディで効かせて後退したところを追い打ちの右フック！　倒れたところに追撃のパウンドを叩き込み死神が衝撃の全米デビューを飾った。

橋本 いやあでも、ホントにうれしかったからね。ここ数年は「普通のロシア人ファイターになっちゃったなあ」みたいな感じになってたんだけど、ここにきてアメリカでの再生だよね。まさに死神の再生というか。

——K—1でも噛ませ犬でしかなかったしさ。

橋本 あからさまなアリスターとのバーター感みたいな。大晦日も噛ませ犬とは呼ばれないけど、「水野竜也の相手」だったよね。結果としては勝ったけども。

ガンツ ぶっちゃけ、使い方が悪いよ！

橋本 それこそ野球選手の「場面を与えてやれば、まだまだ輝く」じゃないけどさ。あとはやっぱりMMAファイターにとって全米デビューの意義はデカいだろうね。そりゃ燃えるよ。残っていた落下傘部隊魂に完全に火がついたよ！

——アメリカのファンの衝撃って、我々がニンジャ戦やシュルト戦の惨劇を観たときと同じだと思うんですよ。しかも試合が終わったあとにケージサイドの選手を映したら、みんな唖然とした顔をしてて。

橋本 ロジャースの顔がよかったね、「やっべ、何こいつ……」っていう。シュルト戦を控室で観てたランデルマンが「人を殺しそうなヤツだな」ってつぶやいたけど、あれと同じ。やっぱモチベーションだったり場面だったりっていうので選手は生まれ変わるね。

高橋 しかも相手が自分と同じようなロシア圏の出身ファイターで、サンボベースでボクシングがうまくて、アメリカのスター選手。自分がこれから目指していくような選手だったじゃないですか。まあ北米目線でいうと、そろそろアルロフスキーに復活してほしかったんですけどねえ。

ガンツ ハリトーノフは、ゴールデングローリーに行った成果がようやく出たなって気もした。最近ずっといい練習ができてたんだろうなって。アリスターともガンガン練習やってるし。オレ、リングス・ロシアが大好きなんだけども、ハッキリ言って練習環境は全然ダメだった気がするから（笑）。そういう幻想とか物語を抜きにすると、「これはいい練習環境でずっとやってるんだろうなあ。これはそろそろ成果が出たらいいな」と思ってたら、出ましたね。

——これでジョシュvsロジャースの勝者とハリトーノフ。ビッグフットがアリスターvsファブリシオの勝者と準決勝。

橋本 やっぱ観たいのはアリスターvsビッグフットだよ。これはゴリラvsサイボーグみたいなもんかな。

——『グラップラー刃牙』の世界になってきたなあ。

橋本 ホントそうだよ。優勝者は等身大のカマキリと闘うみたいなことがあるんだよ（笑）。

——もう一方のブロックはロシア軍vs北斗神拳伝承者が観たい（笑）。

高橋 みんなキャラが立ってるなあ。

橋本 アリスターvsビッグフットはいいなあ。身長差はあるけど、パワーとか圧力負けみたいなのは全然しないでしょ、アリスターは。

ガンツ いや、これはビッグフットの完勝です！ まだアリスターを信じきれない

んだよな……。
——ピンチなると、あっさり試合を捨てる〝リングス・オランダ病〟が残ってる（笑）。
ガンツ　ファブリシオには相性的に勝てる感じがするんですけどね。ファブリシオはそんなにテイクダウンがうまいタイプでもなさそうなので。
橋本　アリスターってまだMMAでしんどい試合を制したみたいなことがないんだよね。
高橋　確かにないですね。常に圧勝か完敗。予想が難しいですね。
ガンツ　それがヘビー級のおもしろさでもあるんですけどね。

◯

——その前に行なわれた『UFC126』もメチャクチャおもしろかったですね。堀江さんは現地取材をされてきましたど、いかがでした？
ガンツ　KIDや小見川は「やられた、負けた！」っていう気がどっちもしてないんじゃないかなあっていうかね。あのケージっていう広い空間の中で、勝つためのプランそのものが凄く違ったっていうか。感覚的には、ブラジリアン柔術が日本に来たばっかりの頃みたいな感じだったよね。彼らは強いというより、バーリ・トゥードの勝ち方を凄く知ってるなあというのがあったじゃない。それを感じた。
——とくにKIDの試合にはそれが表われてましたね。
橋本　だからそこでUFCで闘ってる以上は、「全然、負けた気しねえよ」「もっとケンカしようぜ」ってノリでいたら厳しいよね。UFCで勝とうとするんだったら、あそこで「悔しい」ってならないと。本人たちはなってると思うけどね。
ガンツ　だからもうケンカで勝てる世界じゃなくなってるんだよね。そしてUFCの勝ち方をみんな知ったうえでチャンピオンクラスがとんでもない世界に突入してるっていう。
——ポイントゲームをさせないことが前提なんですよね。
高橋　ポイントゲームをする相手との闘いのなかできっちりと結果を出す、ちゃんとKOで勝つことが評価されていくのがUFCなんで。結局、ポイントゲームで逃げ回られて、ところどころでポイント獲られて負けて「これじゃ試合やった気にならない」と言ってるようじゃやっぱダメなんでしょうね。
橋本　そのポイントゲームの権化だと思われてたフランキー・エドガーとグレイ・メイナードが今年の1月に凄まじい名勝負をやってのけたりしてるわけで。そのポテンシャルを持ってるやつらが勝負に徹したときの凄味みたいなのもあるわけですからね。
ガンツ　もっと簡単にいうと、極めは強くてもポジショニングが弱というか。
——よく「髙田延彦は横四方になったら強い」って言われてたけど、その横四方の体勢にならないっていうか（笑）。
ガンツ　佐野なおきがホイラーとやったときに「極めっこだったら負けるわけがない」って言ったけど、極めっこの前の話な

アリスターのGP1回戦の相手は"ヒョードルを極めた男"ファブリシオ。対戦経験は一度あり、そのときはPRIDE無差別級GPで一本負けを喫しているが、勢いに乗るアリスターがリベンジに成功するか。アリスターが所属する吉本興業も注目の一戦だ！

アリスターってまだMMAでしんどい試合を制したことがないんだよね……

んだよね。だからKIDも殴り合いだったら負けないんだけど、あの広い空間であのルールではそれをやらしてくれないっていう。それに相手はKIDは殴り合いにくることをわかってる。
——KIDサイドはあそこまでレスリングができると思ってなかったんでしょうけど、もうUFCにはオールラウンダーしかいないと思ったほうがいいですよね。
橋本　オールラウンダーなうえにパンチが強い、オールラウンダーなうえに寝技が強いということだから。まったく蹴りを出さない選手はいないし、いきなりタックルしてくる選手もいないし。
ガンツ　オレ、小見川の試合を観て「小見川のほうが絶対に強い」って思ったもん。だけど試合はフルマークの判定負けだったんだよね。小見川のほうが強いのに完敗にされる闘い方。
高橋　ちゃんと印象づけてくるんですよね。
ガンツ　KIDみたいな大物がかわいそうなのは、研究する材料がもうイヤというほどあること。で、KIDは相手の情報が2試合しか手に入ってない。そしてそのファイトスタイルを見ると、アグレッシブでキックボクシングでくる相手だから、じゃあプレッシャーかけて打たせないでカウンターを取るって闘い方をしてたんだけども、相手は全然踏み込んでこないし、パンチ打ったかと思うとタックルがくるっていう。
橋本　頭を完全に切り替えていかないと難しいねぇ。
——UFCはポイントゲームだという一方で、ジョン・ジョーンズ、そしてアンデウソンの勝ちっぷりも凄かったですね。
ガンツ　メインのアンデウソンvsビクトーはね、事前の盛り上がりも凄かった！その理由の一つにブラジルで夏にUFCがあるじゃない。ブラジルがMMAの元祖なのにニュースポーツみたいな感じで盛り上がり始めてる。
橋本　アメリカからやってきたニュースポーツ！（笑）。アメリカからやってくると途端にカッコよく見えるみたいなさ。
ガンツ　ブラジルからもマスコミが凄く来てたのよ。サッカーのワールドカップがあるときとか、女子アナ連れて各局こぞって現地に向かうじゃない。あんな感じで。
——その盛り上がりの中で炸裂した、あの前蹴り！
ガンツ　アンデウソンの十六文キック!! UFCは馬場の勝ち、SFではアンドレの勝ちっていう（笑）。
高橋　アンデウソン、ダルシムみたいですもんね（笑）。
——あの前蹴りをスティーブン・セガールが伝授したっていう幻想爆発エピソードもあって。
ガンツ　試合後にセガール本人が「あれワシが教えたんや！」「空手とはちゃうんやで」って関西弁で言ってましたから（笑）。
橋本　〝沈黙〟しないよね、そこは（笑）。
——PRIDEもさ、金と名誉が集まると

ころに一流のファイターが集まって凄い試合をやってたじゃないですか。UFCも同じなんですよね。そこにはスティー

なことを言ってるよね。
ガンツ　会場の規模はボクにはわからないですけど、UFCが予定してるのはナン

発表されてるかもしれないけど、まあ、五分五分でしょうね。会場も幕張メッセを仮予約したとかで日本側の受け入れ体勢

ころに一流のファイターが集まって凄い試合をやってたじゃないですか。UFCも同じなんですよね。そこにはスティーブン・セガールもやってくるわけなんですよ（笑）。

高橋　で、次にGSPとジェイク・シールズの結果次第ではGSP vsアンデウソンがあるんじゃないかっていう話ですね。

ガンツ　ダナはそれを組みたくて組みたくてしょうがないっていう。

橋本　超スーパーマッチだからね。

ガンツ　ダナはトロントのスタジアムでやりたいって言ってたね。

高橋　それかテキサスのカウボーイズ・スタジアムですね。8万人ぐらい入る。

――GSPとジェイク・シールズってGSPの地元トロントでやることもあって、UFCファンクラブの会員先行発売で即日4万枚も売れたんでしょう？　異常ですよね……。

橋本　MMA史上最多動員数記録確定なんでしょ。

高橋　これまでは『Dynamite!USA』が4万2757人の記録を持ってましたけど、ほとんどは招待券でしたからね。

――あれは実券では3700枚ぐらいという話でしたもんね。

ガンツ　というか、国立の『Dynamite!』も実券で超えちゃった。

――たしかあれは実券で3万とかなんとかって話でしたもんね。

高橋　でも、アンデウソン vsGSPの機運って、そこまで高まってるんですか？

ガンツ　どうなんですかね？

――少なくとも俺は観たい!!　正義超人vs悪魔超人を（笑）。

高橋　アンデウソンはどっちかっていうと上の階級に行きたい選手で、GSPは170パウンドが適正じゃないですか。

ガンツ　どう見てもウェルター級がベストですね。

高橋　BJが階級を上げたときはもの凄く盛り上がったんだけど、GSPが上げるのってどうなんですかね。

ガンツ　GSPは相手がいないっていうのと、アンデウソンが上げてもライトヘビーにスーパーマッチになる相手がいないんですね。だからGSP vsアンデウソンになる。

高橋　確かにGSPなんかもう対戦相手が二周目に入ってますもんね。

――UFCは日本大会の話も浮上してますけど。

ガンツ　間違いなくやるでしょう。

橋本　最初の記者会見では、『UFCファイトナイト』的な規模の大会になるみたいなことを言ってるよね。

GSP vsジェイソン・シールズはチケット発売即日で4万枚売り切っている

ガンツ　会場の規模はボクにはわからないですけど、UFCが予定してるのはナンバーシリーズです。これは間違いない。時期としては年内12月が有力だと思います。

高橋　そこで岡見のタイトルマッチにはならないですかね。

ガンツ　メインカードは「日本だから」っていうのはまったく考えてないみたいです。

橋本　ナンバーシリーズにする以上、PPV収益が求められるし、普通のUFCを持ってくるってことなんでしょうね。

ガンツ　ヴァンダレイが出るとか、多少は日本を意識するとは思うんですけど。タイトルマッチとスーパーファイトが混ざってるような感じで、日本人の軽量級がアンダーカードで出るっていうモデルを考えてるんじゃないのかな、と。

橋本　どのぐらい入るのかな？

ガンツ　オレ、横浜アリーナだったら超満員になると思う。ハッキリ言って金のかけ方が違うし。

――つまり、プロモーションに金かけるってことだよね。

ガンツ　今後を見据えてプロモーションするはずだし。

――日本で観たことがない選手を観たいですね。来ないだろうけど、GSPとか。

橋本　へたに日本を意識するよりGSPとかジョン・ジョーンズとか生粋の北米ファイターが観たいよねえ。

――KIDをメインに持ってこられても「去年、観たしなあ」っていう（笑）。

橋本　で、SFの4月日本大会説はどうなりそうなの？

――これもうタイムリミット越えてるんですよね。この号が発売されてる頃には発表されてるかもしれないけど、まあ、五分五分でしょうね。会場も幕張メッセを仮予約したとかで日本側の受け入れ体勢は整ったけど、テレビ局のSHOWTIMEが反対してるらしくて、スコット・コーカーが絶賛交渉中みたいです。で、交渉が長引けば長引くほど、アメリカ開催の目がなくなって日本開催の可能性が高まるとか（笑）。

橋本　日本なら2週間前でも大丈夫（笑）。

――ヘンな話だけど、ちゃんと話がまとまって、川尻vsメレンデスも合わせてできれば、アリスターも出るんだし、TBSの深夜でも中継はできるみたいな話もあるんだけど。DREAMとしても、SF日本大会に協力するっていうかたちで2011年のスタートを派手に切りたい意向はあるらしいですけどね。

ガンツ　やってほしいな。DREAMが求心力を取り戻すチャンスなんだから。

橋本　K―1も5月開催説が流れてるでしょ。

――みたいですね。いちおうTBSもフジテレビも放送はする前提で話をしてるみたいだし。ということは、『Dynamite!!』はやるということなんだと思うんだけど、問題は新体制を整えて興行をちゃんと打てるかどうか。大会がなければ放送だってできないですからね。

ガンツ　でも、しばらく大会はないわけだから。やっぱりSF日本大会が実現しないと、日本の格闘技界の熱が冷めきっちゃうよ。

――行き場を失ないますよね。というわけで、日本の話をし始めるとキリがないから、ここまで。谷川さん頑張れ！　そして ヒョードルよ、ありがとう！

【11年2月13日／都内・某所にて収録】

ありがとうヒョードル座談会

ダナ　それにしても日本からわざわざ俺の部屋まで追いかけてくるとは、あいかわらず取材熱心だな。

――日本格闘技界がたいへんな時期ですが、今回はＫＩＤ選手、小見川選手の試合をはじめ、好カードだらけなので、アメリカまで来てしまいました（笑）。

ダナ　日本の格闘技界はそんなに問題を抱えてしまっているのか。以前よりも悪くなっているのかい？

――ＤＲＥＡＭ、ＳＲＣという日本の二大格闘技団体は、それぞれ年末の大会を成功させることはできたのですが、いまだに今年の大会スケジュールが明確になってないんですよ。

ダナ　それはクレイジーな状況だな。日本にはたくさんのＭＭＡファンがいるのに、そんな状況になっているのが信じられないよ。ま、日本のファンたちには「テレビを通じてＵＦＣを観て楽しんでくれ」と言っておいてくれ（笑）。

――日本人ＵＦＣファイターが増えてきたこともあり、日本でもＵＦＣへの注目度がどんどん上がってきていますからね。では、まずはＫＩＤ選手を獲得した感想を聞かせてください。

ダナ　みんなも知っているとおり、俺はＫＩＤの大ファンであり、昔から興味のあった選手なんだ。ただ、彼がＵＦＣに来るということは半ばあきらめていた。ＫＩＤは日本の大スターだし、いくら日本の格闘技界が沈みかけているといっても、ＫＩＤは日本に残っていればそれなりの大金をもらい続けていたはずだからね。そういった日本での地位や収入を捨てて、よくアメリカに来る決心をしてくれたと思う。ついに長年の思いが伝わった感じだね。

――今回、ＫＩＤはスター選手にもかかわ

UFCついに年内日本上陸!!

独占ロングインタビュー

ダナ・ホワイト

「日本大会はすでにスケジュールに入っている!」

KID、小見川の獲得で、さらに日本のファンの注目度が上がっているUFC。その先にはもちろん悲願の日本進出計画があることは言うまでもない。今回、本誌は2.5『UFC126』の前にズッファ本社を訪れ、ダナ・ホワイトを独占キャッチ。気になる日本大会について聞くと、ダナからはこれまでにない発言を得ることができた!

聞き手&撮影／堀江ガンツ　通訳／石井史彦　試合写真／Josh Hedges（UFC）、Getty

White

UFC PRESIDENT

Dana

KID本来の闘いを見せてくれたら ここアメリカでもビッグスターになる

らず、契約内容に関する要求をほとんどしてこなかったらしいですね？

ダナ　契約の細かなことはほかの人間に任せているが、クールな奴だよ。とにかくUFCのケージの中で、いままでどおりフラッシーなファイトを見せてくれればと思っているんだ。今週末のデビュー戦を楽しみにしているよ。

――UFCはKID選手にどんなことを期待していますか？

ダナ　今回は対戦相手がDJ（デミトリウス・ジョンソン）ということで、とくにファストペースでエキサイティングな展開を期待しているんだ。〝WAR〟そのものの闘いをね。ただ、いままで何百回も聞いているだろうけど、どんなエキサイティングなトップファイターでも、デビュー戦では動きが止まってしまうものなんだ。KIDがこれに当てはまらないことを祈るだけだよ。DJもWECで闘ってきて、UFCではデビュー戦となるから、そのリスクは少ないはずだしね。ところで、このインタビューはいつ記事になるんだい？

――2月23日に発売される号に掲載されます。

ダナ　だったらおまえたちに、まだ誰も知らないことを教えてやるよ。明日、正式発表することだから、UFCがリリースを出したらいち早くツイッターでつぶやいても問題ないぞ。

――どんな発表があるんですか？

ダナ　UFCでは我々の試合を全世界に発信させようと常に新しい手法を探っているんだよ。前回の大会ではFacebookでライブ放映してのは知っているかい？　今回も1試合だけこのFacebookで放送することに決めたんだ。とはいえメインカードはPPV、プリミナリーカードはスパイクTVでの放送が決まっているから、それ以外でファンが注目するカードということで、KID vs DJのカードを選んだんだよ。

――KIDのUFCデビュー戦をFacebookで生放送ですか！

ダナ　これで全世界の人々がFacebookを通じて、KIDの試合を観ることになる。彼のプロモーションには持ってこいの話だろ？　ただ、日本はWOWOWでの有料放送があるから、ブロックされてしまうけどね。

――UFCでもKID選手のプロモーションに力を入れているわけですね。やはりKID獲得は新たに始まったUFCバンタム級を盛り上げる大きな力になると思いますか？

ダナ　もちろんさ。あのアグレッシブなファイトを見せてくれたら、日本とかアメリカとか関係なくビッグスターになることは間違いないよ。

――KID選手のUFC出場を歓迎する声が多い一方で、五味選手と同様に「2～3年遅い」という声もありますが、どう思いますか？

ダナ　確かにKIDは2～3年前のプライムタイムのときにアメリカに来るべきだった。そう思っていることは確かさ。俺としては、いまでもその頃のKIDであることを祈るばかりさ。PRIDEラスベガス大会で行なわれたゴミとニック・ディアスの試合を覚えているだろう？　あの試合でゴミは敗れたが（試合後、ニックにマリファナの陽性反応が出たため無効試合）、素晴らしい試合だった。KIDもゴミも3年前にUFCに来ていたら、いま頃は大スターになっていたことは間違いないね。ランペイジ・ジャクソンだって2007年に初めてUFCに来た頃は、コアファン以外、誰も知らない存在だったんだ。でも、いまではメジャーな映画からオファーが来るほど知名度が上がっている。ヴァンダレイだって同じだ。いまでは世界中のファンに愛されている。だからKIDもゴミも、あのタイミングで来てくれていれば……という思いはあるが、とにかくKIDにはかつての輝きを取り戻してくれることを祈っているよ。

――これまで観たKID選手の試合で最も印象に残っている試合はなんですか？

ダナ　KIDの試合はほとんど観ているが、どれか一つと言われたら、試合開始直後にフライング・ニーで相手をKOした試合になるな。

――わずか4秒でTKO勝ちした宮田和幸戦ですね。

ダナ　あの試合は、いまでもMMA史上最も短い試合時間なんじゃないか？　あんな鮮烈で早いKO勝利は観たことがない。まあ、例外としてはヒース・ヒーリングに試合開始前にキスしてKOされたヤツがいるくらいだろう（笑）。

――ダハハハハ！　ヒーリングvs中尾の〝キス事件〟をご存知ですか（笑）。

ダナ　あれ以来、ヒースは世界中どこに行っても、キスのことを聞かれるらしいからな（笑）。

――中尾KISSの話はともかく、もう一

White

人の日本人ファイター、小見川選手はチャド・メンデスというハイクラスのファイターが相手になりましたが、これに勝てばす

べきだった。彼は年末の試合で負けたばかりだろう？　UFCとしては負けたばかりの選手と契約することは絶対にない

ンド開始早々に両足タックルでテイクダウンにいったところ、ヒザを合わされてKO負けです。

アオキはもっと早くUFCに来るべきだった。負けた選手と契約することはないんだよ

人の日本人ファイター、小見川選手はチャド・メンデスというハイクラスのファイターが相手になりましたが、これに勝てばすぐにでもタイトル戦が見えてきますか？

ダナ オミガワとチャド・メンデスという日米を代表するタフなファイター同士の試合だからね。その勝者は間違いなく次のタイトルコンテンダーとなるだろう。

——それは楽しみですねえ。今回、KID、小見川、福田力と3人の日本人ファイターと契約しましたけど、それ以外にほしい日本人ファイターはいますか？

ダナ いま現在、具体的な名前は出てこないな。いつも言っているとおり、UFCは日本にかぎらず全世界で常に新しいタレントを探しているんだ。そのなかで、日本に優秀なファイターがいたら興味があるのは当然だし、とくにフェザー級、バンタム級ができたことによって、これまで以上にアジアンやメキシカンのファイターが参戦するようになってくるだろう。

——フェザー級の日沖発選手や、かつて五味選手に一本勝ちした元・戦極ライト級王者の北岡選手には興味はありませんか？

ダナ ヒオキ？ キタオカ？ ……すぐには思い浮かばない名前だな。どんなファイターなのか、ジョー・シルバ（UFCマッチメイカー）に聞いてみればわかるだろうけど。

——最近、青木真也選手がアメリカで闘うことへの興味を口にしましたが、青木選手には興味はありませんか？

ダナ アオキはもっと早くUFCに来るべきだった。彼は年末の試合で負けたばかりだろう？ UFCとしては負けたばかりの選手と契約することは絶対にないんだよ。また連勝の山を築いてその強さを証明してくれたらと思っている。とてもユニークなファイターだからな。

——大晦日の青木真也 vs 長島☆自演乙☆雄一郎戦はご覧になりましたか？

ダナ いや、試合は観てないんだ。「アオキが負けた」っていうことを聞いただけさ。どのように負けたんだい？

——1ラウンドはK—1ルールで、2ラウンドはMMAルールという形式で、2ラウンド開始早々に両足タックルでテイクダウンにいったところ、ヒザを合わされてKO負けです。

ダナ アオキはそんな試合をしていたのか。そんなルールなんてクソ食らえだ。俺はそんなシットなルールなんて絶対に認めないね（笑）。アオキがそんなことでキャリアを汚すなんて、理解できないよ。

——ところで、今回のアンデウソン・シウバ vs ビクトー・ベウフォート戦でアンデウソンが勝ち、4月のGSP（ジョルジュ・サンピエール）vs ジェイク・シールズでGSPが勝ったら、アンデウソン vs GSP実現の可能性はありますか？

ダナ アンデウソンがビクトーに勝ち、GSPがシールズに勝ったら、間違いなくアンデウソン vs GSPをミドル級のタイトルマッチとして実現させるよ。

——となると、ミドル級王座への次のチャレンジャーは岡見勇信選手ではなくなると……？

ダナ そういうことだな。俺はファンが望むカードを優先して実現させたいんだ。アンデウソン vs GSPが実現したら、どれだけのビッグファイトになるか簡単に想像がつくだろう？ アンデウソン vs 岡見という選択肢もあったが、それはせいぜい1万人クラスの会場でしかできない。でも、アンデウソン vs GSPだったら、5万人のスタジアムを満員にできるカードだ。そういったファンが望むカードは、優先して実現させるべきなんだ。

——岡見選手の挑戦が後回しになったのは、昨年11月のネイサン・マーコート戦の試合内容に不満もあるんですか？

ダナ ノー！ あの試合のオカミの闘いぶりは素晴らしく、なんの文句もないよ。ダメだったのはマーコートのほうで、オカミは自分の実力を証明したんだからね。いつも言っているとおり、俺はオカミのことは好きだし、グレートファイターだと思っている。ただ、アンデウソン vs GSPを優先したいというだけだ。

——岡見選手はタイトル戦まで待ちたいという意向があるようですけど、となるとしばらく試合がなくなってしまいますよね。そのへんはどうお考えですか？

ダナ GSPがシールズに勝ったら、オカミの次の試合を考えないといけない。オカミは自分がミドル級で世界ベストだと証明したいのだから、タイトルマッチにかかわらず、試合をしてほしい。そうして挑戦者としてふさわしい実力をみんなに知らしめてほしいんだ。それに試合に出てファイトマネーを稼がないと、生活もたいへんだろうからね。

——今回の日本人ファイター複数獲得によって、日本大会開催は近くなりましたか？

ダナ UFCのファンは大会がどこで開催されようとも、ベストファイターの試合を観たいんだよ。もちろん日本大会では多くの日本人ファイターを出場させることになるだろうけど、メインカードはそのときのベストなカードを用意する予定だよ。

——先日、UFCアジア担当のマーク・フィッシャー氏が「年末か来年初頭に日本大会をやりたい」と発言していましたが、実現の可能性は？

ダナ マークの発言はそのとおりさ。まだ開催日時を発表することはできないけど、年内開催の方向で動いていることは確かだ。実現すると思ってくれても問題ないだろう。

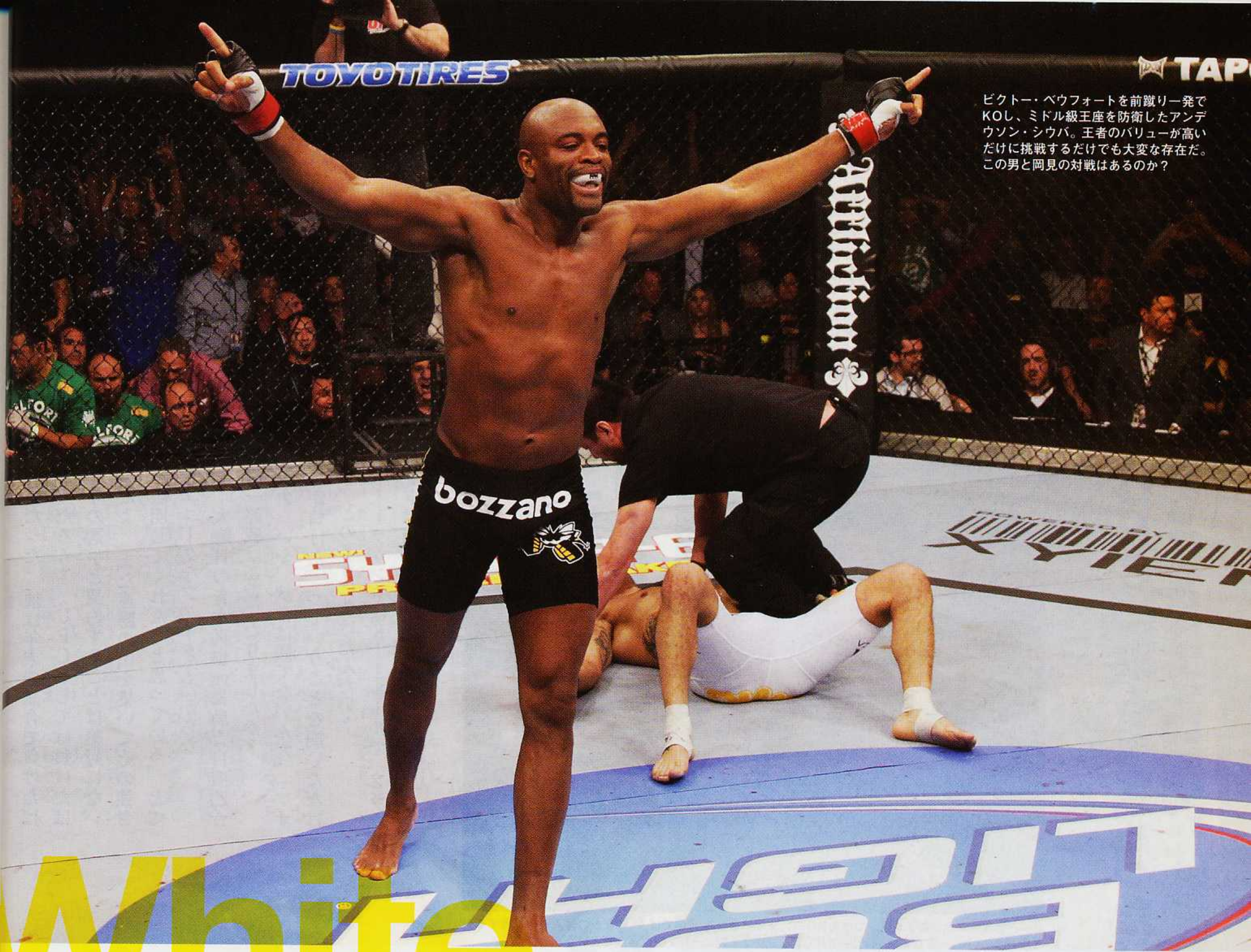
——ついに日本大会開催決定ですか！

ダナ じつを言うとすでに年内の開催予定に入っているし、その期日に向けて着々

着々と日本人スター選手が揃いつつあるUFC。来るべき日本大会では、このなかの何人かが参戦するだろうが、メインカードは現在進行形のUFCトップクラスのカードを組む意向だという。

FCヘビー級王者と闘うレベルかといえば、「ノー」だな。
――優勝者をUFCに参戦させてやって

ること」を確認し、その確認ができなければ試合を組むことはできない仕組みになっているからね。

ビクトー・ベウフォートを前蹴り一発でKOし、ミドル級王座を防衛したアンデウソン・シウバ。王者のバリューが高いだけに挑戦するだけでも大変な存在だ。この男と岡見の対戦はあるのか？

岡見はもう1試合やって挑戦者としての実力をみんなに見せつけてほしいんだ

aWhite

と進んでいるんだよ。

――UFC日本大会開催に正式なGOサインを出すには、いま何が足りませんか？

ダナ　障害となるものなんて、ホントは何もないんだ。あとはGOサインを出すタイミングだけだということさ。

――いや〜、これは朗報ですね！　日本大会については、ストライクフォースも4月に開催をぶち上げていますが、どう思いますか？

ダナ　「グッドラック！」の一言さ（笑）。せいぜい頑張ってくれればいい。

――ストライクフォースは2月から日本でのPPV生放送を開始しますが、UFCは日本でのPPVは考えていませんか？　PPVではなくても、WOWOWは録画中継なのが問題点としてあると思うのですが。

ダナ　ストライクフォースのPPVがどれだけ売れるっていうんだい？（笑）。PPVは『FOR BUY』のビジネスモデルなんだよ、まあ、結果を見てからの質問ということだね（笑）。UFCはPPVのビジネスを始めてからすでに11年、それにフリーTVのビジネスを始めて5年は経ってる。ストライクフォースはどのようにビジネスを運営していいのか理解していないんじゃないのかい？

――ストライクフォースはナショナルテレビジョンネットワークであるCBSがバックとなるSHOWTIMEと契約してますが？

ダナ　おいおい、勘弁してくれよ。SHOWTIMEでのストライクフォース視聴者数なんてたった20〜30万世帯と言われている程度で、ほとんど誰も観ていないに等しいんだよ。それに対し、UFCを放送するスパイクTVのすべての録画放映は120万世帯が観ているんだ。ライブだとストライクフォースの6〜7倍は観ていることになるんだよ。いかにストライクフォースがナショナルテレビジョンのネットワークで、またPPVで放映するといっても同じ条件で比較できないということなんだ。まあ、日本でPPV放映されたときにどの程度の数字が獲れるか楽しみだよ。もちろん頑張ってほしいけどね。

――ストライクフォースはヘビー級GPを開催しますが、どう思いますか？

ダナ　UFCと差別化するということではおもしろい企画じゃないか？　ただ試合を組んでも、チケットはちっとも売れないんだから、いろんな手法を使ってみんなの興味を引こうというのは、賢いやり方だと思うよ。

――意外と言ってはなんですが、けっこう評価してるんですね（笑）。

ダナ　俺はいつでも正直に話しているだけだ。悪口を言おうとして言ってるんじゃないんだよ（笑）。

――では、ストライクフォースのヘビー級GP優勝者とUFCヘビー級王者を闘わせたい気持ちはありませんか？

ダナ　ストライクフォースのヘビー級GP優勝者がUFCのヘビー級ファイターと試合するというのはおもしろいけど、U

を務める『TUFシーズン13』は、すでに撮影に入っているし、そのコーチ対決の勝者が現ヘビー級チャンピオンであるケイ

できるカナダ・トロントのスタジアムで開催する計画もある。それらを含め2011年は計31大会の開催を視野に入れてい

FCヘビー級王者と闘うレベルかといえば、「ノー」だな。

——優勝者をUFCに参戦させてやってもいいけど、ヘビー級王者に挑戦できるようなレベルではない、と（笑）。

ダナ そのとおりだ。UFCヘビー級のトップクラスと対戦するための〝予選〟としてはいいんじゃないか？ UFCのタイトルというのは、UFCのトップファイター相手に何試合か勝って、実力を証明しなければ決して挑戦できないものなんだよ。

——では最後に、昨年末は恒例の「ダナ・ホワイト・アワード」を聞くチャンスがなかったのですが、あらためて2010年の「ジョーク・オブ・ザ・イヤー」を教えてください（笑）。

ダナ いいだろう（笑）。たくさんシットなことがあったが、ファイターにファイトマネーを支払わないプロモーターがいるというのは本当にクソだし、ジョークにもならないことだな。

——なんだか耳が痛い話ですね……。

ダナ ファイターはいろんなものを犠牲にして、命懸けで試合をしているんだよ。それで金が支払われないなんて、あってはならないことだ。だからこそ、トップファイターはUFCで、ちゃんとアスレチック・コミッションの管轄のもとで試合をすることが重要になってくるんだよ。アスレチック・コミッションは試合前、「メディカルテストにてファイターの健康状態が安全であること」、そして「ファイターが試合後すぐにファイトマネーを受け取れること」を確認し、その確認ができなければ試合を組むことはできない仕組みになっているからね。

——では、日本のファンへのメッセージをお願いします。

ダナ 日本のUFCファンのみんなは、UFC日本大会開催に関する噂話をたくさん聞いていると思うけど、もう少しだけ待っていてほしい。日本大会開催には自信を持っているからね。個人的には日本にはPRIDEの頃から通っているし、大好きな国の一つであり、日本の国民性やパッションに興味があるんだ。だからこそ、ついにUFC日本大会を開催できると思うと、俺自身、とても興奮してくる。また、日本大会以外にも期待していてほしいんだ。今年は数々のビッグカードが組めると自信を持っている。ブロック・レスナーとジュニオール・ドス・サントスがコーチを務める『TUFシーズン13』は、すでに撮影に入っているし、そのコーチ対決の勝者が現ヘビー級チャンピオンであるケイン・ヴェラスケスに挑戦することになっているからね。

——そのカードは日本の格闘技ファンも大注目しますよ。

ダナ すでに実現が決まっているフランク・ミアvsビッグ・カントリー（ロイ・ネルソン）はおもしろい試合になるだろうし、シェーン・カーウィンも復帰してくるから、ヘビー級だけでも相当なカードになる。GSP vsジェイク・シールズ戦については、ジェイクをあまり評価していない人もいるようだけど、彼は過去6年間も無敗を築いているんだよ。知っていたかい？

——はい、2005年から負けなしですよね。

ダナ それもカーロス・コンディット、マルティン・カンプマン、ダン・ヘンダーソン、ポール・デイリーという錚々たるメンバーから勝利を奪っているんだ。そのジェイクにGSPが勝ち、アンデウソン・シウバがビクトーに勝てば、アンデウソンvs GSPというスーパードリームマッチが実現するんだよ。この一戦は5万人収容できるカナダ・トロントのスタジアムで開催する計画もある。それらを含め2011年は計31大会の開催を視野に入れている、まさにクレージー・イヤーになることは間違いないんだ。

——そして、その31大会のなかに日本大会があるわけですね？

ダナ （ニヤリとして）正式発表を期待していてほしい。そのほか、並行して新しい計画を実行し、MMAのインダストリーに変遷をもたらそうとしてるんだ。ここ2～3カ月で発表があるからこちらも楽しみにしててくれ。

——このインタビュー前に、日本のファンにツイッターでダナへの質問を募集したのですが、「僕たちが何をすればUFCが日本に来てくれますか？」というものがあったんですよ。

ダナ 「何をすればいいのか？」だって？（笑）。答えは簡単さ。我々は近い将来、必ず日本大会を開くからそのとき、「必ずチケットを買って観に来てくれ！」ということさ（笑）。ちゃんと適正価格にするから安心してくれ！ 今日はここまでだ！

【11年2月1日／米国ネバダ州ラスベガス、ズッファ社長室にて収録】

DANA WHITE■1969年7月28日、米国コネチカット州出身。プロボクサーやMMAファイターのマネージメントを経て、ズッファ社の社長に就任。MMA界一の毒舌家でツイッターでも活躍。

ストライクフォースのヘビー級GPはUFCの〝予選〟としてはおもしろい

ダナ・ホワイト
2.5『UFC126』大会後のコメント

「KIDにかぎらずどんなファイターにも起こりうることだ」

——今夜の結果を受けて、今後のKID＆小見川選手はどうなりますか？

ダナ　アイ・ドント・ノー……。まだわからないね。

——今夜のパフォーマンスは期待はずれでしたか？

ダナ　ノー。そうではないさ。UFCで試合をするというのは、どんなに実績のあるファイターでも、いままでとまったく異なったところで闘うということなんだ。いくら日本で、どんなに大きな会場で試合を経験していても、まったく違う雰囲気のなかで同じパフォーマンスをすることの難しさを痛感したことだと思う。これはいままで参戦してきたファイターみんながそうで、KIDにかぎったことじゃないんだ。

——次の『UFC127』シドニー大会では、もう一人の日本人ファイターであるリキ・フクダが参戦しますが。

ダナ　リキのことは知っているよ。日本のミドル級トップだと聞いている。ぜひ、UFCデビューでのジンクスを破ることを期待しているよ。

さ」

「次は倍返しする。
何をしなきゃいけないかわかった」

KD”徳郁

2.5 UFC126 SILVA vs BELFORT in LAS VEGAS

KID、UFCデビュー戦で判定負け!

「封じられたKIDらしさ」

“神の子”がオクタゴンに飲み込まれた!　ついにUFCデビューを飾った山本“KID”徳郁。
日本のスーパースターとしてUFCの期待も大きかったが、デミトリウス・ジョンソンに持ち味を封じられ、無念の判定負け。
“ケンカ”ができないまま、試合終了のブザーを聞いてしまった。
その試合翌朝、ラスベガスの空港でKIDを独占キャッチ。悔しい胸の内を聞いた。

聞き手／堀江ガンツ　試合写真／Josh Hedges（UFC）、Getty

山本“K

――昨日のUFCデビュー戦は、残念な結果に終わってしまいましたが……。
KID 残念です。ホントに残念としか言いようがないですね。
――では、一夜明けて試合の感想を聞かせていただきたいのですが、いかがでしたか？
KID いや、テイクダウンされて。相手のペースにはまっちゃったかなって。
――後半、デミトリウス・ジョンソンがどんどんタックルでテイクダウンを奪いにきて、それに対応しているうちに試合が終わってしまったというか。
KID そうっすね。それだけだったんですけど。
――では、ダメージはそんなにないわけですか？
KID ダメージは全然。何もないです。(テイクダウンされて)下になってもなんもやられなかったし。すぐ起きれたし。またスタンドで突き放して打撃をやろうと思ってたんだけど、またタックルにきて。それの繰り返しで3ラウンドが終わっちゃった感じでしたね。こっちはダメージなくても結局(ジャッジの)印象は悪いし。
――相手は判定でもとにかく勝つために、かなりKID選手の研究をしてきた印象がありますけど、いかがでしたか？
KID もうテイクダウンに徹してるなっていうのは、あからさまにわかったし。でも、そこで俺もタックルにヒザを合わせたりすればよかったけど、パンチでいきすぎでしたね。
――ジョンソンがああいう闘い方をしてくるというのはちょっと意外でしたか？
KID はい。なんかもう、アスリートだなって思ったっすね。
――「ファイター」というより「アスリート」だと。
KID 凄いアスリート。
――フルラウンド、運動能力が落ちませんでしたしね。
KID そうですね、ずっとタックル、タックル。もう何をやってもタックルだから(苦笑)。
――パワーはべつに感じませんでしたか？
KID パワーじゃなくて(タックルに入る)タイミングが、ガッチリ向こうは勉強してきてましたね。
――KIDさんのストレートやフックに合わせて、パーンとタックルに入ってましたよね。
KID ねえ。
――KIDさんも倒されながら、ベタっと背中をつくことはなく、クルッと回転したりして、リカバリーはしてたんですけどね。では、試合前とジョンソンの印象はかなり違いましたか？

パンチでKOを狙うKIDの思惑を見透かしたかのように、パンチにタックルを合わせてテイクダウンを奪っていったジョンソン。テイクダウンのポイントが重視されるアメリカの判定基準も考えての戦法か。

YAMAMOTO"KID"NORIFUMI

収穫はかなりあった。ちょっとなんか変えればガッチリはまる

KID なんか戦績見たらKOもあるし、ビデオを観てもバンバン手数が出るタイプだったんで、ずっと打ち合いになるかな、とは思ってたっすね。でも、そうじゃなかった。
――やっぱり初めてのUFC、オクタゴンということで、勝手が違う部分はありましたか？
KID いや、べつに。ないっすね。もう純粋に、ペースがあっちにガッチリはまっちゃっただけで。
――UFCのオクタゴンは、日本のリングよりかなり広いと思いますが、広さは気になりませんでしたか？
KID オクタゴンの広さはちょうどいい広さだった。凄く動けたし、あれくらいがちょうどいい。
――あ、そうですか。広くてやりやすいくらいで。
KID だから、ちょっとなんかを変えれば、ガッチリはまると思うんですよ。
――では、やってみて収穫はありましたか。
KID 収穫はかなりあったっすね。やってみなきゃわからないことってやっぱり多いし。
――試合前はラスベガスのあの会場の雰囲気で闘うのを楽しみにしてましたけど、どうでしたか？
KID 気持ちはよかったっすけど、なるべくそういうことは考えないようにしてたから。気負わず、いつもどおりに。
――日本との違いって、いろいろあったと思いますけど、気持ち的にはいつもどおりだった、と。
KID 自分としては、いつもどおり闘えたっすね。でも、UFCはオールラウンドじゃないとダメだって。そういうことがわかったし。
――今回はデビュー以来初めてくらいに減量がありましたけど、それはどうでした？
KID 減量は3キロぐらいあって。でも、全然大丈夫でしたよ。二日あれば落とせる。こっちに来てから試合前も食いながら落としてたから。
――ラスベガスに来てからも、周りのみんなと同じように食事してましたもんね。
KID ちょっと減量着を着るだけで減量は大丈夫。ただ、もうちょい肉つけようかなって。1キロ筋量が増えたら、これはだいぶ違うから。
――減量したあと、試合当日にもう少しでかくなる身体を作りたい、と。
KID うん。そうっすね。もっとパワーもつくし、それでスピードも落ちないだろうし。
――今回の結果によって、あらためて燃えてくるものはありましたか？
KID ありましたね。もうUFCで必要なものもわかったし。自分の試合だけじゃなく、ほかの試合を観てもテイクダウンっていうのがかなりポイントになるってことも知ったし。
――テイクダウン一つでかなり判定で有利になりますからね。
KID そうっすね。こっちはダメージなくて、やられた気がしなくても、判定の
こえなかったんですけど、雰囲気でわかりました。
――しかも、KID選手の試合はFac

［11.2.5 UFC126］
米国ネバダ州ラスベガス マンダレイベイ・イベントセンター
○デミトリウス・ジョンソン vs 山本"KID"徳郁×
（3R終了 判定3-0）
アメリカのファンの大きな声援を受けて、初めてUFCのオクタゴンに足を踏み入れたKID。豪快なKOが期待されたが、タックル中心のジョンソン相手に自分のペースをつかめぬまま試合終了。判定負けを喫してしまった。

利になりますからね。
ＫＩＤ　そうっすね。こっちはダメージなくて、やられた気がしなくても、判定の印象ではバッチリ向こうについちゃうんで。
――これからは練習内容とかも変わってきますか？
ＫＩＤ　レスリングの量が増えるかな。レスリングは子どもの頃からやってるんで、そのぶん、ちょっと打撃とかのほうに比重を置きすぎてたかなって。これからは、ガッチリやっていきますよ。
――事前は「日本の強さを見せる」っていう思いを語ってましたよね。
ＫＩＤ　はい、その気持ちはあったっす。最初から日本を背負って出るつもりだったんで、そういう意味でも苦しいっすね。俺はアメリカに来たけど、日本で俺に期待してくれてる人もいるし。こっちに来てみたら、こっちのファンも期待してくれてる人がたくさんいて。歓迎してくれる人がいたから。俺、それはわからなかったから。
――まさかアメリカでＫＩＤ選手の試合を待ってる人があんなにいるとは思わなかった。
ＫＩＤ　全然思ってなかった。こっちに来てから「こんなにいるんだ」って気づいて。期待して、歓迎してくれた、その人たちにも申し訳ないし。日本のみんなにも悪いなって。
――アメリカ人のファンが日の丸振ってましたもんね。
ＫＩＤ　しかも旭日旗。「オオ～～！」って思って。
――だから前日の公開計量から声援って聞こえてました？
ＫＩＤ　声援はヘッドホンしてたんで、聞こえなかったんですけど、雰囲気でわかりました。
――しかも、ＫＩＤ選手の試合はＦａｃｅｂｏｏｋで全世界放送することも急きょ決まって。
ＫＩＤ　あ～、そんなときに負けたのか～、クソーッ！　まあ次は倍返しなんで。誰が来ても必ずやり返します。
――次の試合はいつ頃を考えていますか？
ＫＩＤ　（ＵＦＣから）話が来たらいつでもいける。
――すぐにオファーが来てもオッケーですか。身体的には大丈夫ですか？
ＫＩＤ　全然なんもダメージないから。ちょっとだけリラックスして、またすぐ試合のための練習始めようかなって思ってるんで。
――では、次こそ本物のＫＩＤが観られることを期待してます。
ＫＩＤ　はい、絶対に借りは返すんで。
――わかりました。では、またよろしくお願いします！
【11年2月6日／米国ネバダ州ラスベガス、マッカラン国際空港にて収録】

やまもと・きっど・のりふみ■1977年3月15日、神奈川県出身。01年に修斗でプロデビュー。04年にはK－1 MAXに出場しブレイク。05年には須藤元気、宇野薫らを破り『HERO'S』ミドル級トーナメント優勝。昨年末にUFCと契約。163センチ、61キロ。

MMAのおしゃべりクソ野郎

青木真也先生の初心者でもわかるUFC126

さてさて日本人選手がドドンと出る『UFC126』！

今回は記事を書かせてくださるということなのでマスコミ気取りの選手目線で書かせていただこうと思います。

小見川選手VSチャド・メンデス

チャド・メンデスはアメリカのDEEPとも言うべき、アメリカのメジャーへの登竜門的なTPF（タチパレスファイト）上がりの選手。TPFの前身のPFCからやってるみたいでレコードは全勝。WECに上がってからも4連勝でその中にはハビエル・バスケスやカブス・ワンソンを含んでいるからWECトップの選手であることは間違いない。そして今回がUFC初参戦。

スタイル的にはボクシング＆レスリングのアメリカのトレンドをおもいっきり前面に出したスタイル。決着がギロチン、バックチョーク、パンチというあたりからもわかるかと。ハッキリ言って強敵。

対するは日本人フェザー最強、日本プロモーション敵なしの小見川さん。サンドロ、日沖に競り勝ち。高谷選手をKO。LCデイビス、ナム・ファン、ミカ・ミラー、コール・エスコベドから勝利を収めていることからもわかるように実力は世界トップ。

スタイル的にはボクシングと柔道ベースの組み。テイクダウンが投げでタックルでないから、じつはアメリカ的に見えてアメリカ的でないスタイル。

戦前の予想としてはお互い打撃とトップからの攻めという、方法は違えど部分ではやりたいことがかぶるので凌ぎ合いになると予想。ほかの引き出しという部分では、下になったときの小見川さんの腕固めとスイープが生きてくるんではと

選手も小見川選手も相手よりも勝っているんではないかと思うところもある。

しかし、MMAとして勝負をしたとき

展開を読む。

小見川さんはもともとは下からの選手だったことを忘れてはいけないし、あの打撃の強さを活かすのがあの寝技なのである。

格闘技的には小見川さんが優位に立つんだけども、向こうの判定基準をうまくやられてメンデスが競り勝つ展開かなとイヤな予感がよぎりながらも試合を見る。もちろん小見川さん全面応援!!

試合は小見川さんがいつもどおりに頭を振って前に出ていく展開。メンデスはとにかく止まらずに距離を保ち、でも下がりすぎることなく要所で前に出てパンチを当てる。小見川さんとしても広いケージで足を使われたこともあり、前に出続けるのは難しかったんではないかなと青木は感じた。

距離が詰まって完全にパンチの距離でここぞとばかりに勝負に出た小見川さんに、まるで待っていたかのような透かしのタックル！（GSPがよくやるテクニック）。思わず声を上げてしまいました。

やってる人でないとなかなかわからない凄さではあるんだろうけど、MMAとして素晴らしい技術だし、戦略。

このあとのグラウンドの展開は小見川さんが下から必殺のアームロックを狙うものの、半ば掛けさせ逃れてトップキープでパウンドを当てる。これまたMMAな展開には「これがMMAなんだよなあ」と考えてしまった。

このまま1ラウンドが終わり、2ラウンド開始とともに、ポイントを挽回するため1ラウンド以上に前に出た小見川選手に、左手ではたいての右ストレートでダウンを奪う！（ウィラサクレックのゲンナロンが得意にしてるゲンナロンパンチだ）。

なんとか凌いでパンチの圧力で小見川さんが攻勢をかけるも、前蹴りで突き放

アンデウソンのモチベーション低下だけが心配だなと思ってみる。でも格闘技は何があるかわからない。こんなときに

し、さらに出てきたところにタックルでテイクダウン。これがラウンド終盤のためパンチでのダウンとテイクダウンでメ

説ってな感じかな。

この試合でポイントとなるのはKID選手のコンディションの部分。初のバン

©Josh Hedges(UFC)

し、さらに出てきたところにタックルでテイクダウン。これがラウンド終盤のためパンチでのダウンとテイクダウンでメンデスのラウンドだということを決定づける。まさにジャッジへのダメ押しである……。

3ラウンドは1&2ラウンドを明確に獲ったと確信したメンデスは基本的に流す展開。

小見川さんがタックルを切ったもののギロチンを狙って下になってしまう。これは北米のジャッジの傾向で見るとテイクダウンと同じというか、トップポジションにいることを評価する。

スタンドで再開するもののまたまたテイクダウンを取られてしまう。そしてラウンド終了。30-27での判定負け。小見川さんが相手よりも劣っているとは思わないし、むしろ強い部分が多いと思う。でも勝者じゃない。ここらへんについてはKID選手と合わせて書きたいと思う……。

KID vs デミトリウス・ジョンソン

ジョンソンは青木もよく知らないのだけども7勝1敗でAMC所属。ダマシオ・ペイジにギロチンで勝ってブラッド・ピケットに負けてる。判定勝ちが少なくKO一本が多いことからもアグレッシブな選手であることは容易に想像がつく。

我らが日本のKIDさん。満を持してのUFC初参戦。それも適正階級のバンタムでの参戦！

70キロでも普通に勝ってて65キロのフェザーでもハニ・ヤヒーラやビビアーノ・フェルナンデスから勝利。ジョン・ウォーレンに負けたもののあの時期は不調であったのはあきらかだし、昨年は復活のKO勝利をあげてる。もう説明不要の伝説ってな感じかな。

この試合でポイントとなるのはKID選手のコンディションの部分。初のバンタムであるし、試合感覚も空いている。選手で個人差はあると思うけども、青木真也の場合だと試合感覚は空けたくない。それはファイターにしかわからない微妙な感覚の部分であるし、個人差が大きい部分でもある。

試合予想としては万全ならばワンサイドでKID選手。これは誰もがそう予想すると思います。圧勝を期待して試合を観る……。

試合開始。いきなり右フックを狙うが不発。ジョンソンは動いて距離を保つ。時折スイッチを見せて的を絞らせない。これは最近のアメリカの選手の流行というかトレンドのように感じる。グレイ・グイダが五味選手との試合のときもそうだったしさ。

そしてサウスポー対オーソドックスの八の字のときに、左ストレートに合わせて回り込む両足タックルを取られてしまう。このタックルは基本に忠実なかたちでとにかくきれい。

テイクダウン後、KID選手は下から潜るもののなかなか立てずという展開。スタンドに戻ってもスイッチされて距離を詰めれずにテイクダウンをされる展開が3ラウンド続いた。

これもまたテイクダウンというか北米MMAにしてやられたという感覚。KID選手が弱いんではない。そう感じた試合だった。

さてさて二つの試合で勝負を分けたのはテイクダウンだからテイクダウンの時代だとかテイクダウンが強ければ良いみたいなことを考える方々が多いと思う。

青木の考えはちょっと違う。完全にMMAとしてやられたんだと思う。打撃だけやテイクダウンだけで比べたらKID選手も小見川選手も相手よりも勝っているんではないかと思うところもある。

打撃だけやテイクダウンだけで比べたら KID選手も小見川選手も 相手よりも勝っているんではないか

しかし、MMAとして勝負をしたときは今回の結果になった。なかなか説明するのは難しいのだけどもMMAをMMAとしてとらえるという感じかな。

もっとわかりやすく言うと、すべて一つのものに入れて混ぜ合わせるようなイメージだと思う。これ以上書くと難しくなるからこれくらいにしておこうかな。

それと判定で不利になるようなことは極力しない。常にトップをキープしてリスクを冒さない。

アンデウソン vs ビクトー

この試合は凄く盛り上がってるようだけど青木としてはピンときていないというか……。それはアンデウソンが抜けているからなのと、ビクトーが2010年は試合をしていなくて、リッチ・フランクリンに勝った1勝だけでタイトルマッチになったことに関して、すっきりしていないのだとも思う。

アンデウソンが強すぎてアンデウソンを倒すみたいなのがテーマになってる部分はあるんだろうし、アンデウソンはレスラータイプ、グラップラータイプと一芸に秀でた選手を倒しているからアンデウソンに打撃で勝てる選手がやったらどうなんだろうということからビクトーが組まれたんだなというのもわかる。

もちろんビクトーは強い。ボクシング技術が長けてるから、アンデウソンの打撃とどうなるんだろうという見方で楽しもう。

アンデウソンに関してはもう抜けすぎてると思う。倒してきた相手が違う。そして階級超えても強さを示す。階級上のフォレスト・グリフィン倒すとか凄すぎ。

アンデウソンのモチベーション低下だけが心配だなと思ってみる。でも格闘技は何があるかわからない。こんなときになんかあるもんだしね。というわけで、なんだかんだでドキドキしながら試合を観る。

ビクトーのパンチをしっかりと見て、もらわないアンデウソン。

ローもしっかりとカットしている。ビクトーとしては打撃で勝負したいのだけども攻略の糸口が見つからないから手詰まりになってしまっていたところにアンデウソンの左前蹴り一閃。

MMAでなかなか前蹴りでのKOはないからびっくりした。打撃ルールでもコヒ選手や山内選手くらいしか記憶にない珍しい決着。

アンデウソンの前蹴りはムエタイ的にヒザを引きつけて打つかたちでもなく、横蹴りのように蹴る前蹴りでもなく、空手的なしならせる前蹴りだ。

ムエタイ的な前蹴りはよく見るけども、このかたちはなかなか見ないし、奥の足で蹴る前蹴りは当たらなかったときのリスクが大きいためになかなか使う選手はいない。

そんな難しい前蹴りを世界最高峰のUFCのタイトルマッチでやってしまうアンデウソンは本当に凄い。格闘技雑誌はジャンルに関係なく前蹴りが得意な選手にこの前蹴りについて技術解析をしてほしい。石川直生選手、コヒ選手、神村江里香選手等々にさ。『kami-pro』さん、お願いします（編集部注☆やりません）。

冗談はこのくらいにしてアンデウソンの強さが異常なほどに抜けているこの階級。岡見選手の挑戦がどうなるか非常に楽しみであり期待してしまうのは日本人ならばあたりまえでしょう。

最後に一言。すげー大会でした!!

——チャンピオン、少しお話を聞かせてもらっていいですか？

ると思う。

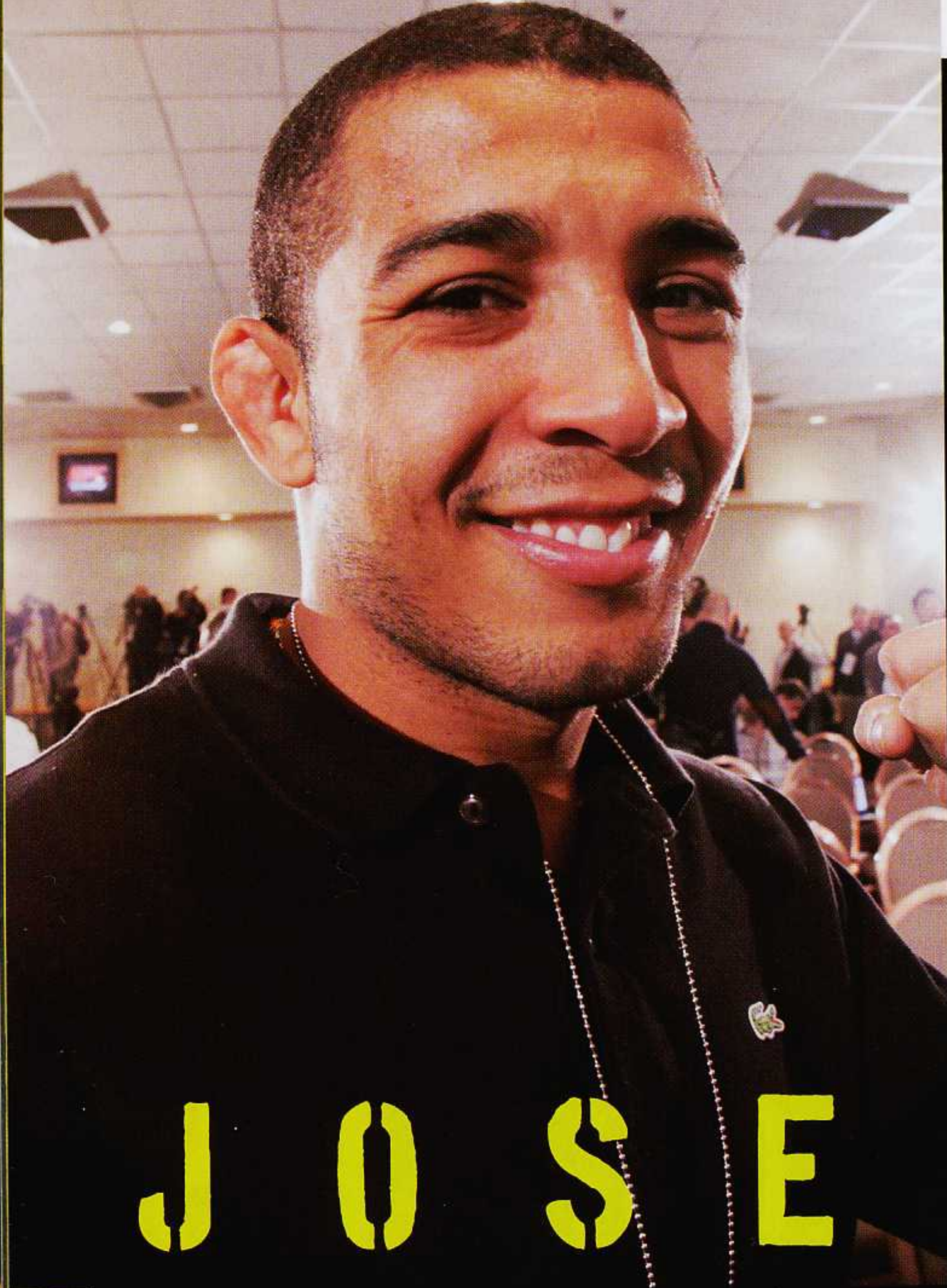
——あなたなら日沖とどう闘いますか？

UFCは軽量級も超強豪がゴロゴロいる！
フェザー級、バンタム級のトップ3人を直撃!!

THE RIVALS

KID、小見川のライバルたち

今年からWECが統合され、いよいよUFCのフェザー級、バンタム級がスタート。
日本から山本“KID”徳郁、小見川道大も参戦し、軽量級がおおいに盛り上がることは間違いない。
そこでKID、小見川がライバルとすべき、UFCのフェザー級、バンタム級のトップ3人にインタビュー。
いずれも強豪ぞろい。日本人ファイターはこの男たちを倒すことができるか？

聞き手&撮影／石井史彦　試合写真／Josh Hedges（UFC）、Getty　構成／堀江ガンツ

“パウンド・フォー・パウンド”と呼ばれる男

UFC世界フェザー級チャンピオン

ジョセ・アルド

「日沖発がUFCに来たら ボクの挑戦者になれるだろう」

UFCに統合される前のWECフェザー級王者時代から“パウンド・フォー・パウンド”と呼ばれるほど、圧倒的な強さを見せているジョセ・アルド。強力すぎる打撃を武器に現在11連勝中。この強すぎる男は“フェザー級日本最強”小見川の参戦をどうとらえているのか？　同門マルロン・サンドロを倒した日沖発についても聞いてみた。

JOSE ALDO

1986年9月9日、ブラジル出身。ノヴァウニオン所属。現UFC世界フェザー級チャンピオン。18勝1敗の驚異的なレコードを持つ、文字どおりの軽量級世界最強の男。173cm、66kg。

――チャンピオン、少しお話を聞かせてもらっていいですか？

アルド　OK。問題ないよ。

――まずは次のUFCフェザー級タイトル挑戦者が決まりましたが、マーク・ホーミニックの印象を聞かせてください。

アルド　素晴らしいファイターの一人で、タイトルに挑戦する資格を充分に持っている。でも、試合では自分のほうがグレートなファイターであることを証明することになるよ。

――そのホーミニックに二度勝っている日本の日沖発について、どう思いますか？

アルド　ヒオキはホーミニックに2回勝っただけでなく、マルロン（・サンドロ）にも勝ったばかりだろう？　その戦績だけでただ者じゃないことはわかる。かなりタフなファイターだと思っているよ。

――日沖vsマルロン・サンドロの試合をご覧になられてたら、感想を聞かせてください。

アルド　お互いが自分のいいところを出し合ったとてもいい試合だった。マルロンは負けてしまったけど、彼が素晴らしいファイターであることは、あの試合からも証明できたと思う。

――日沖選手のことをどう評価していますか？

アルド　もちろん素晴らしいファイターの一人だと評価しているよ。彼がボクたちの闘いに加わる日を待ってるよ。

――日沖選手がUFCに来たら、タイトルのトップコンテンダーになれると思う？

アルド　それは間違いないだろうね。さっきも言ったけど、マルロンやホーミニックに勝っている戦績がそれを証明していると思う。

――あなたなら日沖とどう闘いますか？

アルド　スタンドでもグラウンドでも、どんな局面になっても緊迫したいい試合になることは間違いないね。ボク自身はヒオキにかぎらず、チャンスがあればいつでも倒しにいくよ。スタンドでもグラウンドでもね。

――今回UFCに出場する日本の小見川選手は、日沖選手に勝利しています。彼をどう評価していますか？

アルド　オミガワの試合は彼が155ポンド（ライト級）でUFCに出場したときも、また日本での試合も観ているけど、145ポンド（フェザー級）で、どんなパフォーマンスを見せてくれるか楽しみなんだ。

――小見川vsチャド・メンデスの試合はどう予想しますか？

アルド　レスリングのトップと柔道のトップが対戦するという、非常に興味深いカードだよね。どっちが勝つにしても内容の濃い接戦になると予想しているよ。また勝ったほうとは、近い将来、対戦する可能性も出てくるから、じっくりと試合を見させてもらうよ。

【11年2月4日／米国ネバダ州ラスベガス、マンダレイベイ・イベントセンターにて収録】

アルドの持ち味はキックを中心とした強烈な打撃。軽量級のスター、ユライア・フェイバーをローキックだけで倒すほどの実力を備えている。

UFC最軽量級のスターファイター

元WEC世界バンタム級チャンピオン

ミゲール・トーレス

「KIDとのカードが実現したら この階級をアピールできる」

サイクルの速い軽量級のなかで、一昨年までWEC世界バンタム級王者として最強の名をほしいままにしたミゲール・トーレス。現在も同階級のトップランクに位置し、前田吉朗、水垣偉弥という日本人ファイターと名勝負を展開したトーレスに、かつて対戦を熱望したKIDのUFC参戦について話を聞いた。

MIGUEL TORRES

1981年1月18日、米国インディアナ州出身。MMA42戦39勝3敗という、凄まじい試合数&勝利を誇る。元WEC世界バンタム級王者。175cm、61kg。

——いよいよ明日はUFCでの試合ですが、コンディションはいかがですか？

トーレス　見てのとおり、コンディションはバッチリだよ。WECがUFCに統合されて初めての試合、しかもメインカードに組まれた試合だからね。自分でも気合いが入っているし、ベストファイトを約束するよ。

——今回から山本KID選手がUFCに参戦してきたことについてどう思いますか？

トーレス　素晴らしい決断をしたと思う。日本でベストの135ポンドのファイターが、WECを統合したUFCに参戦してくるということは、同じUFCのオクタゴンでベストのファイター同士が試合をしていくということだからね。それに今後のKIDのキャリアにとってもチャンスが増えていくと思うよ。

——KID選手とは同じ階級になりますが、いかがですか？

トーレス　対戦するチャンスがあることを祈っているよ。ボクは数年前からKIDとの対戦をアピールしていたからね。

——明日のKID vs デミトリウス・ジョンソンはどんな試合、結果になると思いますか？

トーレス　二人はお互いレスリングをベースにした、とても動きの速いファイターだ。でも、KIDのほうがパンチにパワーがあるというアドバンテージを持っていると思う。ただしケガで試合から遠ざかってしまっているし、UFCの観客、またオクタゴンという初めての空間で、どのようなパフォーマンスを見せてくれるかは未知数だね。結果を予想すると、KIDのほうが試合経験もあるし、大観衆の前の試合にも慣れているぶんだけ、KOで試合を終わらせると予想するよ。

——もしKIDと対戦することになったら、どのように闘いますか？

トーレス　スマート・ファイトを心がけるよ。彼は軽量級でありながら、一発で試合を終わらせるパンチを持っているからね。そんなKIDと打ち合うのは得策じゃない。自分の闘い方で、相手に試合をさせないことが重要になると思う。いずれにしても、もし闘ったら興味深い内容になるんじゃないかな。

——あなたとKID選手の対戦が実現したら、多くのファンが注目するでしょうね。

トーレス　そうだね。UFCバンタム級のなかでも、とくにファンが観たいカードの一つだと思う。実現すればこの階級を大きくアピールできると思うし、その日を楽しみにしているよ。

——では、明日の試合、頑張ってください！

【11年2月4日／米国ネバダ州ラスベガス、マンダレイベイ・イベントセンターにて収録】

2.5『UFC126』では、グッドルッキンなアントニオ・バヌエロスに判定勝利。いきなりメインカードに登場するなど、期待も大きい。

——山本KID選手がついにUFCに参戦してきたことについて、どう思います

——そもそもバンタム級に落とすことに決めた理由はなんでしたか？

軽量級の象徴
“カリフォルニアKID”

元WEC世界フェザー級チャンピオン

ユライア・フェイバー

「“KID対決”をこのスポーツを爆発させる起爆剤にしたい」

軽量級ファイターで最大の人気を誇る、WECの象徴的存在だったユライア・フェイバー。世界フェザー級王座からは陥落したものの、階級をバンタムに落としたいまも、そのカリスマ性は衰えない。“カリフォルニアKID”として、長年比較された“本家”KIDのUFC参戦をどう感じているのか?

URIJAH FABER

1979年5月14日、米国カリフォルニア州出身。03年にデビュー。05年にKOTCバンタム級王座奪取。07年にWEC世界フェザー級王者となり5回の防衛をはたした。168cm,66kg。

——山本KID選手がついにUFCに参戦してきたことについて、どう思いますか?

ユライヤ　とてもエキサイトしてるよ! 昔はMMAといえば日本で、ボクが日本に行かないとKIDと対戦することはできないと思っていたけど、いまではUFCを中心に動いているということなんだろう。そのUFCに日本のスーパースターが参戦してきたんだから、興奮しないわけがないよ!

——KID選手はあなたに対して「同じ階級になったし、もう逃がさない」と言っていますが、どう思いますか?

ユライヤ　ハハハハ、同感だね! ボクもKIDを逃さないよ。イッツ・ドゥー・イット!

——明日のKID vsデミトリウス・ジョンソンは、どうなると予想しますか?

ユライヤ　KIDが勝つことを祈っているよ。勝てば自分とのスーパーファイトが実現に近づくわけだからね。いままで135ポンドクラスのファイターでも興味あるカードがたくさん組めるけど、そのなかでもKIDは特別だからね。予想するならKIDが勝つ場合はKOで、マイティ・マウス(デミトリウス・ジョンソン)が勝つなら判定だろうね。

——そもそもバンタム級に落とすことに決めた理由はなんでしたか?

ユライヤ　もともと145ポンド(フェザー級)のなかでもボクは小さかったんだけど、当初はWECにも135ポンド(バンタム級)がなかったから、145ポンドクラスに参戦していたんだ。それでも減量は簡単なことではないけど、まったく心配はしてないよ。

——KIDとあなたが闘ったら、どんな試合になると思いますか?

ユライヤ　お互いレスリングをベースにヘビーハンドを持っているので、間違いなくエキサイティングな試合になるだろうね。

——あなたとKIDの試合が実現したら、UFCバンタム級を大きくアピールする試合になると思いますか?

ユライヤ　もちろんだよ! 日本のKIDとカリフォルニアKIDが対戦するということで、間違いなく日本でもアメリカでも盛り上がるだろうね。UFCバンタム級を大きくアピールするばかりでなく、MMAをスポーツとして世界中に認めさせる起爆剤にもなると思ってるよ。だからこそ、明日はKIDに勝ってほしいんだ!

【11年2月4日/米国ネバダ州ラスベガス、マンダレイベイ・イベントセンターにて収録】

UFC公式モバイルサイト『UFCモバイル』が配信開始!

1月24日、クラウド秋山道場で行なわれた記者会見で、UFCを運営するズッファ社がTVバンク株式会社と日本国内におけるPCとモバイルのインターネット配信コンテンツのライセンスパートナー契約を結んだことを発表。TVバンク社は、UFC公式モバイルサイトを3キャリア向けに配信するほか、株式会社NTTぷららが運営する「ひかりTV」のテレビサービス(多チャンネル放送)およびビデオサービス(VOD=ビデオ・オン・デマンド)で、2月6日よりUFC大会映像が提供されることも合わせて発表された。

UFC公式モバイルサイト「UFCモバイル」(月額280円/税別)は、すでに配信スタート。UFCに関するリアルタイム試合速報や、KOシーンを中心とした試合映像を配信。PRIDEに関する情報も満載だ。

“日本人キラー”が今春ついに復帰!
誰かこの男を止めろ!!

「川尻を日本でKOする! 自演乙とK-1ルールで闘ってもいい」

ギルバート・メレンデス

Melendez

昨年4月ナッシュビルで青木真也を下したメレンデス。
大晦日の『Dynamite!!』では青木との再戦が実現しなかったが、
ここにきて、ジョシュ・トムソンを破った川尻達也との対戦が浮上してきた。
それも4月に噂されるストライクフォース日本大会。はたして、これは実現するのか?
1.29ストライクフォース・サンノゼ大会で直撃した。

聞き手/石井史彦　試合写真/Esther Lin(STRIKEFORCE)　構成/堀江ガンツ

Gilbert M

——いまニック・ディアスvsエヴァンゲリスタ・サイボーグのストライクフォース世界ウェルター級タイトルマッチが終わったばかりですが、試合の感想を聞かせてください。

メレンデス 「アメージング！」の一言だね。試合前はもっと〝WAR〟状態の接戦となり、お互いに削り合う内容になると思っていた。ところがニックはサイボーグに何もさせないまま最高のタイミングでフィニッシュすることができたんだからね。本当に感心してしまう素晴らしい内容だった。

——ニックの勝因はなんだと思いますか？

メレンデス 常に試合の流れを先手先手で読んでいて、ジャブを有効に使ったことだね。たとえば最後だってテイクダウンされてもすぐにアームバーで切り返したり、ストライカーのサイボーグに対して、コンビネーションを使うことで自分のゲームに持ち込んだり、本当にニックは天才だよ。

——チームメイトのニックが素晴らしい試合をしたことで、あなたも早く試合がしたくなったんじゃないですか？

メレンデス うずうずしてるよ（笑）。早く俺も試合がしたいね。

——昨年4月の青木真也戦以来試合をしていませんが、いまのコンディションは？

メレンデス コンディションはバッチリだよ！ 確かに〝試合〟は昨年4月からしてないけど、ジムでは休まずにずっとニック（・ディアス）やネイト（・ディアス）たちと〝ファイティング〟をしてきたからね。すぐにでも試合に出られるくらいさ。多くのファイターは試合がないとトレーニングをしないっていう初歩的なミスを犯しているけど、俺は試合をしてないあいだも、これまで以上にハードなトレーニングを積んでいるから、過去最高のカーディオ（スタミナ）が身についているよ。

——ここまで欠場が長引いた原因はなんだったのでしょうか？

メレンデス 噂で知っていると思うけど、まずストライクフォースとの契約更新の交渉をしていたということが一つ。あとは子どもが生まれたばかりで子育てに忙しかったり、前の試合でのケガもあったからね。それにニックとメイヘムのポストファイトの件（ダン・ヘンダーソンvsジェイク・シールズの試合後、メイヘムがケージに乗り込んできたため、メイヘムとシーザー・グレイシー軍団が乱闘となった）で、2010年末までライセンスが停止となってしまったんだ。自分としては昨年末か今年1月には試合をしたかったんだけどね。

——大晦日の『Dynamite!!』で青木真也戦が実現しなかったのも、やはりライセンス停止が原因だったんですか？

メレンデス いや、そうじゃない。まずアオキ戦のオファーは俺のところまで正式には届かなかったんだ。ストライクフォースとマネージャーのあいだでは話をしていたんだろうけどね。だから、俺自身としても本当に実現するのか半信半疑だった。それに契約更新交渉の件もあっただろう？ ストライクフォースとの契約交渉の真っ最中にほかの試合を組むというのは難しい。だから、アオキとの再戦が実現しなかった一番の原因は「タイミングが悪かった」ということにつきると思う。

昨年大晦日、青木真也をKOした長島☆自演乙☆雄一郎。このときはMMAのラウンドに入ってすぐのヒザ蹴りだったが、メレンデスはK-1ルールでも勝つ自信があるという。この試合も実現したら興味深い！

川尻でも青木でも自演乙でも、試合の2カ月前のオファーならOKだ！

——あなたは青木選手に勝っていますが、あなたにとっても青木選手との再戦は意味のあるものですか？

メレンデス もちろん。アオキはいまでもライト級のトップ5に必ずランクされているトップファイターだからね。ファンのためにもぜひ実現させたいよ。だから、俺としては再戦に異存はないんだけど、せめて試合の2カ月前には正式なオファーがもらえたらと思っている。ただ、いまはアオキとの再戦以上に、アオキをKOしたジエンオツ（長島☆自演乙☆雄一郎）とK–1ルールで試合をしてみたいと思ってるんだ。

——自演乙とK–1ルールで対戦！

メレンデス もともとK–1には興味があったし、アオキが負けたことでMMAファイターがキックボクサーより弱いと思われたらシャクだからね。俺だったらジエンオツをK–1ルールでもKOできると確信しているから、ぜひやってみたいんだ。あとはジョシュ（・トムソン）に勝ったカワジリにも興味がある。とにかく日本でもアメリカでも、誰とでも試合をする準備はできているさ。

——あらためて大晦日の青木vs長島☆自演乙☆雄一郎戦の感想を聞かせてもらえますか？

メレンデス アオキの〝不注意〟の一言だろうね。1ラウンドはアオキがただ逃げ回るだけで、チャンスを見てクリンチにいくという消化不良のラウンドになったけど、2ラウンドは1ラウンドで簡単に組みつけていたんで、同じタイミングでテイクダウンを奪いにいったとき、ヒザを合わせられてKOされてしまったんだからね。その瞬間、『オ〜〜〜！ ステューピッド！』って溜息を漏らしてしまったよ。

——ああいったミックスルールという試合形式についてどう思いますか？

メレンデス 個人的には嫌いだよ。バカバカしいね。打撃系格闘技のファイターも組み技系格闘技のファイターも同じルールで闘うために、MMAが存在するんじゃないか。MMAがミックスルールそのものなんだよ。ラウンドごとにルールを変える必要なんて、どこにもないのさ。

——では、もし自演乙戦のオファーが青木選手と同じミックスルールで来たら、受ける可能性はありませんか？

メレンデス ミックスルールでの対戦にはまったく興味はない。K–1 MAXのリングで、K–1ルールで闘うというのであれば、ぜひ試合したいけどね。俺は〝ライト級のアリスター・オーフレイム〟になる自信があるからね。

——もう1試合、川尻達也vsジョシュ・トムソン戦の感想を聞かせてください。

メレンデス 俺がカワジリのゲームを学ぶうえでグレート・ファイトだったよ。ファンのみんなからすると、エキサイティングとは言えず、いま一つという内容だったかもしれないけど、俺としてはカワジリの動きをじっくり観察させてもらったし、たくさんのことを学ばせてもらったんだ。

——川尻選手を研究するうえで格好の試合になった、と。この試合でトムソンの敗がら、すべての面を強化しているね。際立ってどこが変わったという成長ではないけど、レスリングはもちろんのこと、スタン

2006年大晦日の『PRIDE男祭り』で対戦しているメレンデスと川尻達也。このときは壮絶な殴り合いの末、メレンデスが僅差の判定勝ち。しかし、どちらの転んでもおかしくない試合だった。

Gilbert Melendez

くさんのことを学ばせてもらったんだ。

――川尻選手を研究するうえで格好の試合になった、と。この試合でトムソンの敗因はなんだったと思いますか？

メレンデス　一言で敗因を言えば、「ジョシュ自身が川尻のボディロックを誘ってしまった」ことだろうね。カワジリはトップポジションで押さえ込むのが得意なファイター。それなのにジョシュはスタンドのコンビネーションのあと、自分からクリンチにいってしまい、カワジリは何もせずにボディロックからテイクダウンをいう流れを作れたからね。最初の1～2回はわかるけど、ジョシュは3～5回と同じミスを繰り返していた。もしこれが修正できていればもっと接近戦になっていたはずなんだ。

――スコット・コーカーはこの結果を受けて、あなたの次の相手を川尻選手にしたい意向があるようですが、あなた自身はどう思いますか？

メレンデス　とても光栄なことだよ。俺は誰の挑戦でも受けるから、スコットにはファンのみんながエキサイトする試合を組んでほしいね。前回、カワジリと対戦したとき（2006年大晦日）は、まだ自分も若かったこともあり、不用意な面がたくさんあったんだ。いまでは当時とまったく異なったファイターになっているから、それを証明するためにもカワジリ戦には興味がある。2006年の試合は俺の判定勝ちだったけど、自分のなかでは引き分けだったたと思っている。でも、今度対戦したら確実にフィニッシュしてやるさ。

――あなた同様、川尻選手も成長していると思いますが、ここ数年の川尻選手をどう評価していますか？

メレンデス　自分の強いところを伸ばしながら、すべての面を強化しているね。際立ってどこが変わったという成長ではないけど、レスリングはもちろんのこと、スタンドでのコンビネーション、柔術、グラウンドでのパス、コントロールとすべての面で成長していることがわかる。ライト級の世界トップ10にふさわしいファイターだ。

――あなたにとって青木選手と川尻選手、どちらが強敵ですか？

メレンデス　二人ともタフで強敵ではあるけど、まったく異なったタイプのファイターだから、ゲームプランもまったく違ってくるし、一概には比較できないね。カワジリはフィジカル面が強いので、試合では間違いなく〝WAR〟になる。アオキはテクニカル面で細心の注意を払わなければいけない相手で、一つのミスで試合が終わってしまう恐ろしさがある。だからアオキのようなファイターが相手だとダメージを受けることがないので、そういった面でナーバスになることはないけど、カワジリのようなタイプは勝っても負けても確実にダメージを受けるので、プレッシャーをより感じることは確かだね。

――昨年7月に行なわれた青木真也vs川尻達也の直接対決はどう思いましたか？

メレンデス　アオキというファイターを通して、自分のほうがカワジリよりスマートなファイターだと、自信を持たせてくれたよ。俺はアオキにあのようなレッグロックを狙われても、どのように対応したらいいかわかっているからね。だから、カワジリが足を取られた瞬間、「なんでカワジリはあんな動きをするんだ⁉」って、不思議だったんだ。あれは完全にカワジリのミスだよ。アオキは3連勝したあと敗戦するというパターンを繰り返しているけど、また連勝していってほしいね。

ハッキリ言って、俺はUFC王者のフランク・エドガーに勝つ自信があるよ

――川尻選手以外にあなたへの挑戦者としてふさわしい選手は誰かいると思いますか？

メレンデス　カワジリは最高の挑戦者の一人であるけど、スコットが組んだ相手ならバッド・マッチアップになろうとただ倒すだけだよ。誰が挑戦しようと喜んで受けて立つだけさ。

――現時点でストライクフォースとの契約更新がまとまっていないようですが、長引いているのにはどんな理由が？

メレンデス　すべての条件面で満足いくものであってほしいからさ。俺はストライクフォースの契約ファイターであることも、現在提示されている内容にも満足している。あとは契約書自体の細部を確認するだけなので、そろそろ契約が締結できる段階にきているんだ（このインタビューの数日後、メレンデスはストライクフォースと正式に再契約を締結）。噂される4月の日本大会にはぜひ参戦したいし、そこでカワジリと対戦したいからね。そのためにも早く締結できればと願っているんだ。

――UFC参戦という選択肢はありませんか？

メレンデス　俺が契約交渉しているのはストライクフォースだから、UFCという選択肢はないよ。

――ストライクフォース王者のあなたより、UFC王者のフランク・エドガーのほうが高く評価されている現状について、どう思いますか？

メレンデス　まあ、それが〝現実〟というものなんだろうけど、それは団体の規模の違いというだけで、実際の実力のことじゃないさ。俺はハッキリ言って、フランク・エドガーに勝つ自信があるよ。ダナとスコットがチャンピオン同士の試合を組んでくれれば、どっちが強いか証明できるんだけどな。

――エドガーvsメイナード戦はどう思いましたか？

メレンデス　お互いに長所を出しきった素晴らしい試合だったと思うよ。俺自身、観ていて得るものもたくさんあった。

――どういったものを得ましたか？

メレンデス　具体的な言及は避けたいけど、俺はエドガー、メイナードのどちらと闘っても勝てるっていう自信を持たせてもらえたよ。

――あの試合を観て、あらためて自信を持ちましたか。では、あなたとエドガーが対戦したら、どんな試合になると思いますか？

メレンデス　エドガーが走り回るところをとつかまえてノックアウトするだけさ。

――あのBJペンを二度破ったエドガーの弱点をあなたはつかんでいる、と？

メレンデス　BJに二度勝ったといっても、いまのBJはトップ10にもランクされていないし、プライムタイムのBJじゃないからね。そのBJを二度破ったからといって、恐れるものは何もないよ。エドガーの最大の弱点は〝サイズ〟じゃないかな。彼はライト級ファイターのなかでも一番小さいだろう？　あとは打たれるのを嫌っているという噂をよく聞く。そのエドガーが俺の重いパンチをもらったら……どうなるかわかるだろう？

――一方で、ストライクフォースに、あなたが倒すべき相手が少なくなっている現状についてどう思いますか？

メレンデス　俺はチャンピオンベルトをできるだけ長く保持し、対戦相手を確実にフィニッシュさせることを心がけている。そうやって確実に自分の強さを証明できれば、それで充分だと思っているよ。それに強いファイターは次々と生まれてくるだろうしね。

――今年ストライクフォースはヘビー級の大規模トーナメントを開催します。この大会をどう思いますか？

メレンデス　「オーサム（凄い）！」の一言だね。ヘビー級のトーナメントをただ開催するだけでなく、参加するファイターたちの顔ぶれが素晴らしいからね。現ヘビー級チャンピオンであるアリスター・オーフレイム、伝説的なチャンピオンであるヒョードル、真の実力を証明したいファブリシオ、そしてダークホース的なジョシュ・バーネットと、考えただけでもエキサイトするメンバーだ。このトーナメントをしっかりプロモーションして、最高の大会にできれば、ストライクフォースはもっと大きくなるだろうし、MMA全体の発展に寄与することは間違いないよ。

――あなたはヘビー級GPで誰が優勝すると思いますか？

メレンデス　難しい質問だけど、アリスターかな。ただ、アリスターのブロックにはヒョードルとファブリシオもいる激戦区だから、潰し合いになって、もう一方のブロックにいるジョシュ・バーネットの優勝というのも考えられるね。

――ヒョードルvsビッグフット・シウバ、アリスターvsファブリシオはどうなると思いますか？

メレンデス　ヒョードルvsビッグフットはヒョードルの勝利を予想するけど、非常に興味深いマッチアップで、もしかしたらビッグフットが勝つんじゃないかという気もする。ビッグフットはトーナメント参加選手で一番大きいし、アリスターやバーネット、誰とやっても勝つ可能性はあるだろう。アリスターvsファブリシオについては、ファブリシオのことは好きだしいい試合になると思うけれど、予想しろと言われたら「アリスターのKO勝利」だろうね。

――あなたの今年の目標を聞かせてください。

メレンデス　去年は1試合しかできなかったので、今年は定期的に試合をしてすべて勝つ。ストライクフォースの王者として、確固たる地位を築くことだね。おそらく日本でも防衛戦をやることになると思うから、期待していてくれ！

【11年1月29日／米国カリフォルニア州サンノゼ、HPパビリオンにて収録】

GILBERT MELENDEZ■1982年4月12日、米国カリフォルニア州出身。02年にMMAデビュー。04年にWECライト級王座奪取。その後、修斗、PRIDEで活躍。09年にジョシュ・トムソンを破り、ストライクフォース世界ライト級王者となる。175cm、70kg。

Gilbert Melendez

レスナー、ヴェラスケス、ストライクフォース勢だけじゃない！ヘビー級超新星はここにもいる!!

JUNIOR DOS SANTOS

ジュニオール・ドス・サントス

『TUF』コーチ対決でレスナーをKOし、その次はヴェラスケスを眠らせる!

ヘビー級ビッグネームをズラリと揃えたストライクフォース・ワールドGPがついに開幕した。
その一方で、UFCはレスナーをKOした王者ヴェラスケスが長期欠場中。一見、停滞しているようにも見えるが、
じつは世代交代の大きなうねりが起こっており、ニュースターの時代になりつつあるのだ。
王者ヴェラスケスと並ぶ、UFCヘビー級新世代のトップファイターが、このドス・サントス。
リアリティショー『ジ・アルティメット・ファイター』のコーチにも決まった旬な男に直撃した。

聞き手／石井史彦　試合写真／ Josh Hedges (UFC),Getty　構成／堀江ガンツ

いまMMAヘビー級が空前の黄金時代を迎えている。

2月12日に開幕したストライクフォース・ヘビー級GPでは、非UFC系のトップ8が集結。いきなり〝皇帝〟エメリヤーエンコ・ヒョードルがアントニオ・シウバに完敗を喫し、セルゲイ・ハリトーノフが本来の怖さを取り戻し、衝撃のアメリカデビューをはたした。

さらに一方のブロックでは、アリスター・オーフレイム、ファブリシオ・ヴェウドゥム、ジョシュ・バーネット、ブレット・ロジャースが控える。

そしてUFCにはもちろん〝大魔王〟ブロック・レスナー。そして、そのレスナーをボコボコにして血の海に沈めた、新世代の怪物ケイン・ヴェラスケスが存在する。

そんなヘビー級黄金時代で、大きな鍵を握る存在が、このジュニオール・ドス・サントスだ。

ドス・サントスは現在MMA12勝1敗。UFCでは6戦無敗。ヒョードルに一本勝ちしたファブリシオを秒殺KOし、ミルコを戦意喪失に追い込み、ゴンザガに引導を渡したMMA屈指のハードパンチャー。

すでにヘビー級王座挑戦が決まっていたが、王者ヴェラスケスの長期欠場により、急きょ『ジ・アルティメット・ファイター シーズン13』のコーチとなることが決定。しかも、もう一人のコーチはあのブロック・レスナーだ。

このまさにブレイク寸前の次世代ヘビー級トップファイターを『UFC126』の会場でキャッチ。MMAを観るなら、この男に注目せよ！

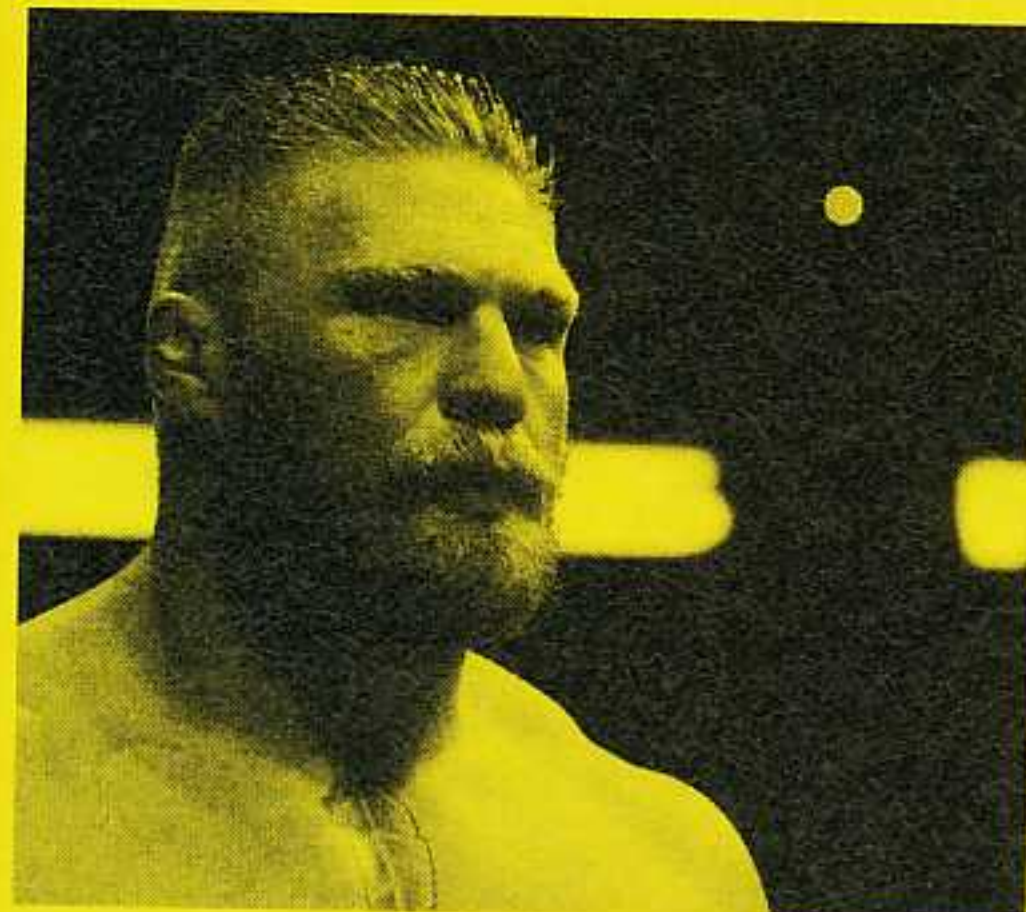
——ジュニオール、日本のMMAマガジン『kamipro』といいます。インタビューよろしいですか？

ドス・サントス　OK。なんなりと聞いてくれ。

——リアリティショー『ジ・アルティメット・ファイター（TUF）シーズン13』のコーチとなったいまの心境はいかがですか？

ドス・サントス　『TUF』のコーチという新しいことにチャレンジするということで、とても興奮しているんだ。自分の経験を若いファイターたちと一緒にシェアできることがとてもうれしいよ。とにかくベストをつくしたいと思っている。

——あなたがコーチする出演ファイターは、どんな選手がいるんですか？

ドス・サントス　いろいろ話してあげたいんだけど、番組が放送される3月13日までは、すべてがコンフィデンシャルで

右がヘビー級とは思えないほどのスピードと、ストライキング技術を持つUFCヘビー級王者ケイン・ヴェラスケス。ドス・サントスはこの王者に挑戦するはずだったが、ケイン長期欠場のためレスナーと「TUF」コーチ対決へ。どちらの試合も興味深い！

何も話せないんだよ。

——なるほど、番組内容はトップシークレットなんですね（笑）。

ケインとタイトルを賭けてすぐに試合をしたかったことは事実。でも、こうなったからには、コーチをやることでより経験

くてとんでもないパワーも持っている。まさにモンスターそのものなので、テイクダウンされて下になってしまったら、

画だと思う。自分はリーグが違うから、トーナメントに参加することはできないけど、MMAファンの一人としてこのビッ

アリスター？　パワフルで素晴らしいけど自分よりだいぶスピードが劣ってるね

JUNIOR DOS SANTOS

何も話せないんだよ。

――なるほど、番組内容はトップシークレットなんですね（笑）。

ドス・サントス　ぜひ、放送を期待してほしいね。『TUF』は日本でも観られるのかい？

――はい。WOWOWというペイTVで観られるんですけど、翻訳してアフレコしたりする関係で、アメリカよりたいぶ遅れて放送されるんですよ。

ドス・サントス　じゃあ、なおさら内容は知らないようにしておかないといけないな（笑）。

――今回、『TUF』のコーチになったのは、王者ケイン・ヴェラスケスの負傷欠場で、ヘビー級タイトルマッチが延期されたことが影響していると思いますが、この結果はあなたにとっていい結果をもたらすと思いますか？

ドス・サントス　もちろん「タイトルマッチをする」ということが、自分にとって一番の希望だよ。でも、ケインが試合をできるようになるまでには、約1年かかると聞いているんだ。数カ月なら待てるけど、さすがに1年も試合をしないまま待つことはできないので、UFCに（タイトルマッチとは別の）試合を組んでもらうように頼んだら、このコーチの話が出てきたんだ。もちろんコーチに選ばれるなんて素晴らしいことなんだけど、ケインとタイトルを賭けてすぐに試合をしたかったことは事実。でも、こうなったからには、コーチをやることでより経験を積むことができるし、レスナー戦でその実力を見せつけて、自分がナンバーワン・タイトルコンテンダーであることを証明するつもりなんだ。

――6月に対戦が予定されている、あなたとブロック・レスナーのコーチ対決はどんな試合になると思いますか？

ドス・サントス　ブロックは素晴らしいレスリング技術を持ったとても危険なファイターだけど、スピードは自分のほうが勝っているので距離を保ちながら動き回り、ボクシングの技術で対抗する予定だよ。ボクシングには自信を持っているし、自分の最大の武器でもあるからね。

――ブロック・レスナーは具体的にどんなところが危険ですか？

ドス・サントス　ブロックは身体が大きくてとんでもないパワーも持っている。まさにモンスターそのものなので、テイクダウンされて下になってしまったら、その重さとパワーでコントロールされてしまい、立ち上がることが困難になってしまうというところがとても危険なんだ。それを避けるためにも常にスタンドでの自分のゲームができるようにしたいんだ。

――ケイン・ヴェラスケス同様、テイクダウンを防いでパンチで勝負する、と。

ドス・サントス　ケインの闘いはとても参考になったけど、ブロックもあの敗戦で、自分の弱点を修正してくると思うから、より厳しい闘いになるのは覚悟しているよ。でも、俺はチャンピオンになりたいから、まずはブロックを必ず倒すよ。それに下になっても、俺はミノタウロ（アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ）と、ずっと柔術のトレーニングを積んでいるからね。一本で極めることだってあると思う。

――あなたとケイン・ヴェラスケスの闘いが実現したら、どんな試合になると思いますか？

ドス・サントス　いままでの試合と同様に、ボクシングで闘う予定だよ。やはり相手が強敵になればなるほど、自分が自信を持っている最大の武器で勝負すべきだと思うからね。とにかくスタンドのボクシングでKOを狙っていくけど、もちろんグラウンドになることも想定して、柔術、レスリングの準備を積んでいくから、どんな試合展開になっても勝つことを信じているよ。

――同じヘビー級ファイターとして、ストライクフォースのヘビー級トーナメントをどう思いますか？

ドス・サントス　かつてのPRIDEヘビー級GPを思い出させる、とてもいい企画だと思う。自分はリーグが違うから、トーナメントに参加することはできないけど、MMAファンの一人としてこのビッグトーナメントを楽しみにしているんだ。

――エメリヤーエンコ・ヒョードルのことはどう評価していますか？

ドス・サントス　彼はかつて、間違いなく世界ナンバーワンのファイターだった。いまは「ナンバーワン」と言うことはできないと思うけど、とても危険で最強のファイターの一人であることは間違いないね。自分はヒョードルの大ファンでもあるからね。今回のトーナメントでも、彼の活躍に期待しているんだ。

――ヒョードルと並ぶ優勝候補の筆頭であるアリスター・オーフレイムのことは、同じストライカーとしてどう評価していますか？

ドス・サントス　とてもパワフルで素晴らしいストライカーではあるけど、自分よりだいぶスピードが劣っているね。もし彼と闘ったら、パンチをもらわずに、自分のパンチを入れることができるよ。

――では、このヘビー級トーナメントで優勝するのは誰だと思いますか？

ドス・サントス　ヒョードルが優勝することに賭けるよ（※このインタビューはヒョードル vs アントニオ・シウバ戦の前に収録）。彼のファンとして、その結果を望んでもいるしね。

――では、日本にもあなたの試合を楽しみにしているファンがたくさんいます。日本のファンにメッセージを。

ドス・サントス　ぜひ『TUFシーズン13』の放送を楽しみにしていてほしい。そして、そのあとはブロック・レスナーをKOするから、見逃さないように！

【11年2月6日／米国ネバダ州ラスベガス、マンダレイベイ・イベントセンターにて収録】

JUNIOR DOS SANTOS■1984年9月12日、ブラジル出身。05年に柔術を始め、06年にMMAプロデビュー。08年からUFCに参戦。いきなりファブリシオを秒殺。その後もミルコ、アイブル、ゴンザガらを連破。今春『TUF』シーズン13のコーチとなった。193cm、108kg。

UFCの日本大会もブラジル大会も俺に任せろ!

ヒザの手術からの復活に始動! 俺たちのシウバが帰ってくる!!

ヴァンダレイ・シウバ

昨年7月、ヒザの手術のため秋山成勲戦をキャンセルして以来、長期欠場を続けていたヴァンダレイ・シウバが復帰に向けていよいよ始動! 今夏予定される1年半ぶりの復帰戦に向けてトレーニングを開始した。今年のUFCはブラジル進出がすでに決定。日本進出も予定されており、いよいよこの男の出番がやってきた。2.5『UFC126』の3日前にジムを訪れヴァンダレイを直撃した。

聞き手 & 撮影／堀江ガンツ　通訳／石井史彦　試合写真／Josh Hedges（UFC）

――長期欠場の原因となったヒザの状況はいかがですか?

いい休養となったので、きっといい結果につながると思う。復帰戦までのトレー

ヤリアの次は、ジムの経営者としてのキャリアを成功させたいので、とてもうれ

なく、世界中のMMAファンのためにもなると思うからね。

――今回、アンデウソン vs ビクトーとい

復帰戦は7月くらいを考えている。ビクトーとのリベンジマッチを希望するよ

——長期欠場の原因となったヒザの状況はいかがですか？

シウバ　とても順調に回復していて、このあいだMMAのトレーニングを開始したところなんだ。手術した箇所は以前よりも強靭になったし、同時にフレキシブルに動くようになってるんだよ。コンディショニングが整えればいつでもオクタゴンに復帰できる状態さ。

——あなたにとって初の長期欠場でしたが、気持ち的にどうでしたか？

シウバ　みんなも知っているとおり、俺のファイトスタイルはリングやオクタゴンで、自分の持っているハートをすべてぶつけるタフなスタイルなんで、どうしてもケガがつきものなんだよ。だから、ここ2年間は試合をしては、小さな手術をすることの繰り返しになってしまっていた。でも、今回は身体全体のトリートメントができるいいチャンスでもあったので、欠場中もあせったりはしなかったよ。だからファンのみんなも、完全にチューンナップされたヴァンダレイ・シウバの復帰を楽しみにいていてほしい。

——復帰戦に不安はありませんか？

シウバ　ノー！　またオクタゴンに入ることを考えただけで、全身がワクワクしてくるよ。

——では、今回の長期欠場は今後、いい結果に結びつきそうですか？

シウバ　もちろんだよ。そのための欠場だからね。俺は10年以上、休まずに闘ってきたから、今回は肉体的にも精神的にもいい休養となったので、きっといい結果につながると思う。復帰戦までのトレーニングは自分の身体と相談しながら、あせらずに調整していく予定なんだ。

——長期欠場中だからこそ取り組めたことはありますか？

シウバ　息子や妻、家族との時間を大切にできたことだね。もちろんチームのメンバーや、ジムの生徒たちとの時間もたくさん持てた。おかげで2010年度の世界で「ベストMMAジム」に選ばれたんだ。

——へえ、そうなんですか。確かに設備も雰囲気も素晴らしいジムですもんね。

シウバ　アリガトウ（ニッコリ）。とても光栄なことだよ。ファイターとしてのキャリアの次は、ジムの経営者としてのキャリアを成功させたいので、とてもうれしいことなんだ。

巨大なヴァンダレイのジムの入口には、これまでのヴァンダレイの激闘写真や雑誌等に掲載された様子がビッチリと貼られていた。KIDとともに表紙になった『kamipro』や、『MMA Legend』の表紙および誌面もいい場所に貼られていた！

——非常に充実した数カ月だったわけですね。復帰はいつ頃になりそうですか？

シウバ　7月くらいかな？　8月のブラジル大会というのも考えられるし……。まあ、ボス（ダナ・ホワイト）次第だね（笑）。

——そのボスは、クリス・リーベンをKOしたブライアン・スタンとあなたを闘わせたいようですが、どう思いますか？

シウバ　タイミング次第だね。今日現在は「ノー」だけど、いいタイミングでのオファーがきたら、ブライアン・スタンとはぜひ対戦したいと思ってる。

——今回の2・5『UFC126』は、メインイベントがブラジル人同士（アンデウソン・シウバvsビクトー・ベウフォート）ということで、ブラジルのメディアがたくさん来ています。8月にはUFC開催も決まり、いまブラジルでのMMAの盛り上がりはいかがですか？

シウバ　ここ数年でまたMMAファンが急激に増えたんだ。それによってジムの数も増えたし、またUFCブラジル大会開催が正式に決定したことで、とても盛り上がっているよ。

——母国のMMA発展のために、今後あなたはどのような活動をしていきたいですか？

シウバ　ブラジルにはまだ世界には知られていない素晴らしいファイターが隠れているので、ビジネスを成功させてブラジルにもジムをオープンし、無料でそのタレントを伸ばし、ここアメリカに連れてきてスターになるように育てたいんだ。

——選手発掘もしていきたい、と。

シウバ　それはブラジルのためだけじゃなく、世界中のMMAファンのためにもなると思うからね。

——今回、アンデウソンvsビクトーというブラジル人対決が組まれていますが、次はあなたがビクトー・ベウフォートと闘いたいんじゃないですか？

シウバ　そのとおりだね。できれば、ビクトー・ベウフォート戦はタイトルマッチとして実現させたい。そうすれば最高のリベンジにもなるだろう？

——では、週末のアンデウソンvsビクトーは、ビクトー勝利を予想しますか？

シウバ　いや、アンデウソンが勝つと思っているよ。だから残念ながら、ビクトーとの試合が実現してもタイトル戦にはならないだろうな（笑）。

——あなたはチェール・ソネンとも闘いたいと言っていましたが、それはやはりソネンのブラジル人に対する発言が元になってますか？

シウバ　あいつはブラジルのことをいろいろ言いすぎだ。いろいろな問題があったとしても、ブラジルのことを知っている我々が話すのならばいいけれど、何も知らないソネンが言うべきことじゃないんだ。たとえば、自分はソネンのカルチャーに関係するようなことは知らないし、失礼なことなんで話すことなんてありえない。でも、あいつは他人のエリアを土足で荒らしていく。一般常識としておかしいことはわかるだろう？

——そうですね。

シウバ　MMAは世界に広がるスポーツだからこそ、他国の文化を尊重しなければならないんだ。それと同時に、自分の国を愛することもね。

——8月のブラジル大会は、シウバ選手自身も出場したい気持ちはありますか？

昨年2月にイギリスの大人気ファイター、マイケル・ビスピンに判定勝ちしたヴァンダレイ。その後、ヒザの手術のため、同年7月の秋山成勲戦をキャンセル。すでに1年間、試合から離れているが、今夏の大復活に期待！

故郷ブラジルと〝第二の故郷〟日本で再び闘うことが自分の夢だからね

シウバ　もちろんさ！　ブラジル人ファイターみんなが、8月のブラジル大会出場を望んでいると思うよ。

——母国での試合は、あなたにとってどんな意味がありますか？

シウバ　俺は長いあいだ母国ブラジルで試合をしてないこともあって、ホームタウンで試合をすることは自分の夢でもあるんだよ。〝第二の故郷〟日本で再び試合をすることと、ブラジルで試合をすることが、自分にとって望みだったからね。

——日本で再びヴァンダレイ・シウバの試合を観ることは、日本のファンの夢でもありますよ。

シウバ　日本といえば、昨年末にUFCゲームを発売している会社がコンタクトしてきて、日本に仕事として招待されたんだ。

——あ、そういえばUFCゲーム発売の記念イベントのスペシャルゲストとして、ヴァンダレイ・シウバが登場するという話は僕も聞きました。あれは結局、実現しなかったんですよね？

シウバ　じつはそうなんだ。でも、日本までは行ったんだよ。

——そうなんですか？

シウバ　ファーストクラスを用意してもらって、飛行機で日本まで行ったんだけど、ビザがなくて入国できなかったんだ（笑）。

——ええ〜!?　なんでまた。

シウバ　ブラジル人は日本へはビザがないと行けないんだけど、俺はこれまで日本には何度も行ってるし、いまはアメリカに住んでいることもあって「パスポートだけあれば、ビザがなくても日本に行けるよ」ってアメリカの友人が言うもんだから、それを真に受けてビザなしで日本に行ってしまったんだ（笑）。ところが成田に着いて、イミグレーションを通ろうとしたら「ビザは？」って質問されて、それまでひさしぶりの日本で上機嫌だったのに、一瞬にして青ざめてしまったよ。結局、日本の土地を踏めずに同じ飛行機で成田からアメリカに逆戻りさ（笑）。

——そんなことが……。UFC日本大会が実現したときは、ちゃんとビザを取得して来てくださいね（笑）。

シウバ　オーケー、オーケー（笑）。

——日本大会の成功にはヴァンダレイ・シウバの力が必要不可欠ですから。

シウバ　日本大会が正式に決定したら、

この日も多くの人で賑わっていたヴァンダレイのジム『WANDファイトセンター』。巨大な空間に最新鋭の設備。そして、誰でもウェルカムな雰囲気で、さまざまなファイターがここを訪れている。

ボスに直訴してでも出場したいね。日本のファンは生のUFCを観たがっている

——ファイターはより上を目指すから、そうなってしまうんですけどね。今回、山本〝KID〟徳郁選手がUFCに来たこと

ないと思う。KIDにとっては大きなチャンスだし、ここで世界に名前を売って、数試合後にはタイトルに挑戦していると

めると予想するよ。

——優勝するのは誰だと思いますか？

シウバ　ズバリ、ファブリシオだね。彼と

ストライクフォース・ヘビー級GPの優勝者はずばりファブリシオだね！

ボスに直訴してでも出場したいね。日本のファンは生のUFCを観たがっているはずだし、そこにヴァンダレイ・シウバのファイトカードがあることもね（笑）。

——近い将来、ひさしぶりに日本に行ったら、何かやりたいことはありますか？

シウバ　まずはたくさんの友だちに会いたいね。あとはロッポンギに行きたい（笑）。それはジョークだけど、ロッポンギにあるなんでも置いてある、あの大きなストアはなんていうんだっけ？

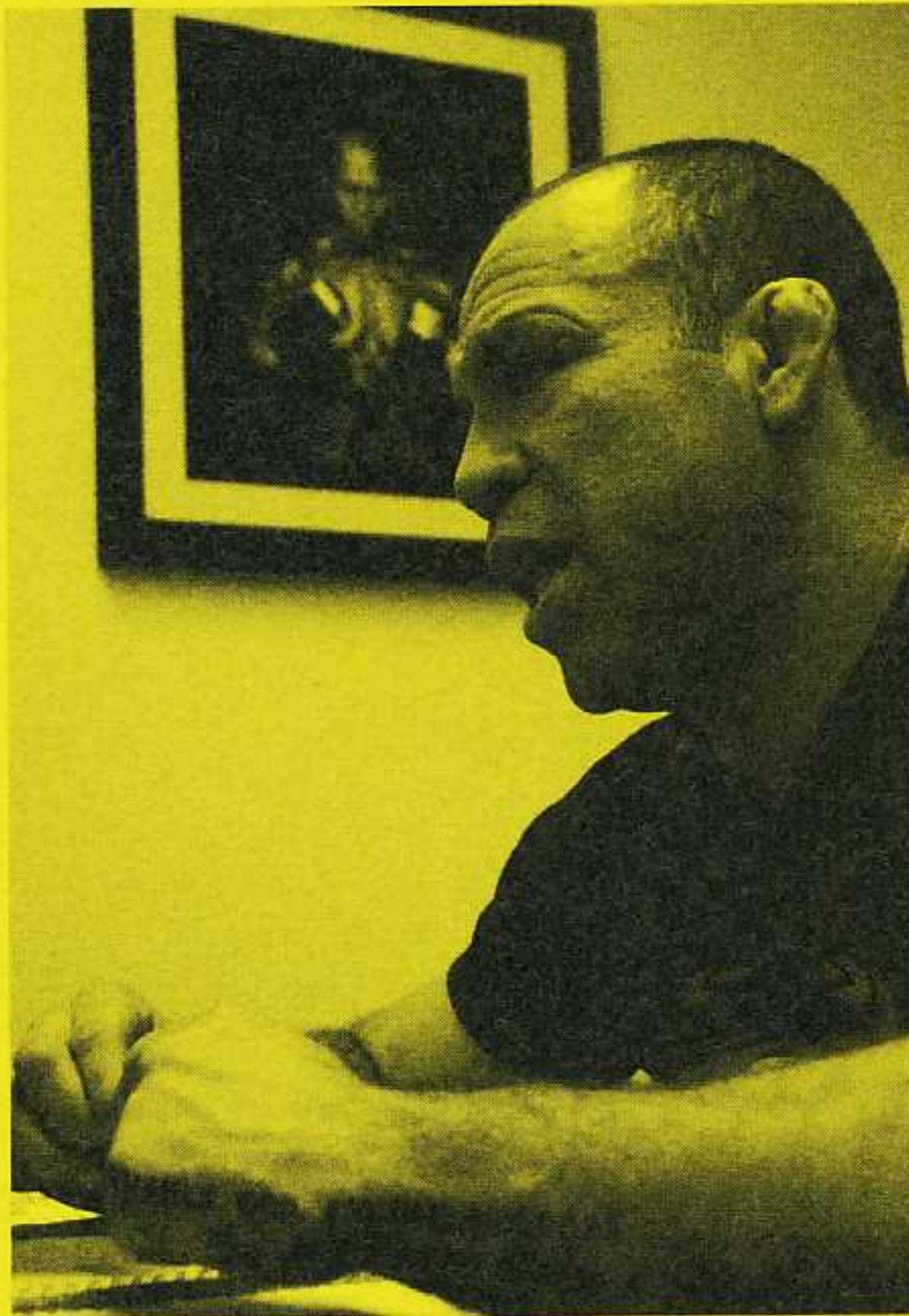
——……ドン・キホーテですか？

シウバ　そう！　ドン・キホーテだ。あのユニークなショップでまた買い物がしたいよ。世界を見渡しても、下着からロレックスまで、同じビルの同じストアで買えるところなんて、あそこくらいじゃないのかい？（笑）。

——ドン・キホーテ六本木店にヴァンダレイ・シウバがいたら、日本のファンはきっと驚くと思いますよ（笑）。いまの日本格闘技界の状況についてどう思いますか？

シウバ　DREAMもセンゴク（SRC）もいい大会を開催していると思う。ただし、UFCやストライクフォースにトップファイターがどんどん移籍している現状を見ていると、タフな状況に直面しているのでは、とも思ってしまうけどね。

——ファイターはより上を目指すから、そうなってしまうんですけどね。今回、山本"KID"徳郁選手がUFCに来たことについて、どう思いますか？

シウバ　アンビリーバブルだね！　昨日、ジムでKIDと話したけど今後の活躍が楽しみだよ。彼は日本ではビッグスターだけど、アメリカではこれからだからね。ぜひUFCでも素晴らしいパフォーマンスを見せて、世界のスターになってほしい。ダナはKIDの試合をFacebookで放送することを決めただろう？

——急きょ、決まったみたいですね。

シウバ　これによって、世界中でどれだけのファンがKIDの試合を観ることになるか知ってるかい？

——ダナは「6億人が観る」と予想してましたね。

シウバ　その数字はあながち間違いじゃないと思う。KIDにとっては大きなチャンスだし、ここで世界に名前を売って、数試合後にはタイトルに挑戦していると思うよ。

——KIDがUFCで成功するためには何が必要だと思いますか？

シウバ　いままでのKIDのアグレッシブなスタイルで、彼の本領をそのままUFCで発揮すればいいだけさ。

——今回、かつてあなたと激闘を展開した吉田秀彦選手の弟子でもある小見川選手もUFCに参戦します。柔道トップ選手の実力についてどう思いますか？

シウバ　ヨシダもそうだったけど、彼らは力が強く、独特の技術を持っている。オミガワもUFCでその実力を見せる素晴らしいチャンスだと思うよ。チャドに勝てばそれを証明できるし、すぐにタイトルも見えてくるだろうからね。

——ストライクフォースのヘビー級GPについてどう思いますか？

シウバ　とてもいいアイデアだと思う。それに参戦するファイターたちも素晴らしいトップファイターばかりだからね。

——アリスター vs ファブリシオ、ヒョードル vs ビッグフットはどうなると思いますか？

シウバ　アリスター vs ファブリシオは、ファブリシオがPRIDEで闘った前回同様、アームロックで試合を決めると思う。そしてヒョードル vs ビッグフットは、ビッグフットがみんなを驚かす結果を見せるんじゃないかと思っているんだ。ビッグフットは体格でも優位だし、現在ヒョードル戦に向けてハードなトレーニングをこなしていて、体型はまるで170ポンド（ウェルター級）のように絞れているからね。ビッグフットが判定勝利を収めると予想するよ。

——優勝するのは誰だと思いますか？

シウバ　ズバリ、ファブリシオだね。彼とは一緒にトレーニングもしているけど、いまとても充実しているし、ファブリシオはオールラウンダーでありながら、柔術という飛び抜けた武器を持っている。全試合一本勝ちでの優勝だってありえるんじゃないかな。

——この大会で優勝したファイターがヘビー級世界最強だと思いますか？

シウバ　ノー。やはりUFCのチャンピオンを倒さないかぎり、世界最強だとは言えないね。それは多くの人もそう思っているはずさ。

——では、ファブリシオがもしケイン・ヴェラスケスが対戦したらどうなると思いますか？

シウバ　ファブリシオは誰と対戦しても極めることができるさ。その対戦は、俺自身、興味があるね。

——では最後に、あなたを待っている日本のファンにメッセージをお願いします。

シウバ　日本のみんなとしばらく会えなくて寂しいけど、ツイッターでぜひフォローしてくれ！　毎日つぶやいているよ。また、ラスベガスに来ることがあったら俺のジムに気軽に立ち寄ってほしい。ファンのみんなにはいつでも開放しているんだ。運が良ければ有名なファイターに会うことも可能だよ。いまはKIDヤマモトが練習に来ているし、もう少し経つとファブリシオや（マウリシオ・）ショーグンも来る予定になっている。もちろん、日本のみんなのことはジムのオーナーである"ヴァンダレイ・シウバ"も大歓迎してくれるはずさ！（笑）。

【11年2月2日／米国ネバダ州ラスベガス、WANDファイトセンターにて収録】

WANDERLEI SILVA

WANDERLEI SILVA■1976年7月3日、ブラジル・パラナ州クリチバ出身。96年にMMAデビュー。01年に桜庭和志を破りPRIDEミドル級王者となり、5年半無敗の絶対王者と呼ばれる。PRIDE崩壊後、UFCに参戦。ラスベガスに移住し、WANDファイトセンターを設立。180cm、84kg。

級の腕前であり、七段を獲得して大阪で
合気道道場を継承するにまで至った超本
格派である（そのときにもうけた子ども

にも堂に入っていすぎるからだ。
　それに対してセガールが肯定も否定も
しないことによって、現在に至るまでフ

アンデウソン・シウバ
劇的勝利の陰にコノ男がいた！

最強ハリウッドスター

UFCでセガール拳炸裂！

皆さんは『UFC126』におけるアンデウソン・シウバの素晴らしき前蹴りをご覧になっただろうか。その感動も冷めやらぬなか、勝利後のアンデウソンが口にしたのは「あれはセガールから指導を受けた」という衝撃の一言。はたしてその真相は？ そしてセガールの実態とはいったい!?

文／高橋ターヤン　写真／Josh Hedges (UFC),Getty

『UFC126』のクライマックスは、あまりにも突然に、そして巨大な衝撃とともに訪れた。

UFCミドル級の絶対王者アンデウソン・シウバにとって、じつに8回目の王座防衛戦。天才柔術家であり、プロボクシングの試合もこなす最強の挑戦者ビクトー・ベウフォートを相手に、序盤にテイクダウンを取られるなど苦しい展開も予想されたが、その直後にアンデウソンが前蹴り一閃。崩れ落ちたビクトーに追い打ちのパウンドを浴びせて、圧勝で8度目の防衛をはたした。

フィニッシュとなった前蹴りに関して、ビクトーは完全に意表を突かれたかたちとなり、全世界の視聴者が度肝を抜かれた格好だ。

そしてさらに大きな衝撃を与えたのが、試合後にアンデウソンはインタビューに答えて「あの前蹴りは、この試合に向けた最終調整のトレーニングで、当日セコンドとして帯同してもらったスティーブン・セガールに指導してもらって完成したものだ」と答えたことだった。

セガールは言わずと知れたアクション映画俳優である。日本では『沈黙』シリーズの主人公として知られており、「ごんぶと」や、「アリナミンA」などのCMにも出演していたので、日本での知名度は抜群の俳優だ。

しかしその経歴や正体についてはあまりにも多くの不明点があり、その真偽が議論される不可解な俳優でもある。

1952年生まれのセガールは、7歳から空手などの格闘技のトレーニングを開始し、17歳で武道修行のために来日している。

日本では大阪に在住し、英語教師のアルバイトをしながら空手、柔道、剣道などを学んでいたが、なかでも合気道は達人級の腕前であり、七段を獲得して大阪で合気道道場を継承するにまで至った超本格派である（そのときにもうけた子どもが女優の藤谷文子と元俳優で武術家の剣太郎セガール）。

その後、いろいろな理由で離日し、空白期間を経てワーナー・ブラザース社製作の『刑事ニコ／法の死角』で、突然ハリウッド映画主演デビューを飾ったのだ（基本的に俳優としてのキャリアのない男がハリウッド映画主演デビューはありえない）。

この作品は元CIAエージェントの刑事が、不正がはびこるシカゴで犯罪組織と闘う映画。本作はわずか8億円の制作費で制作された低予算映画であるにもかかわらず、アメリカ国内だけでも制作費の3倍を稼ぎだすスマッシュヒットとなった。

本作で新人俳優セガールが見せた、合気道やフィリピノカリといった東洋武術をベースとした斬新なアクションシーンや、リアルすぎる銃器の取り扱い方法は、シルベスター・スタローンやアーノルド・シュワルツェネッガーによる大味なアクション映画に飽きていたアクション映画ファンに衝撃を与えた。

そしてセガールが元特殊部隊員の料理人ケイシー・ライバックを演じた『沈黙の戦艦』は全世界で150億円以上の興行収入を叩き出すメガヒット映画となり、セガールを一躍ハリウッドのトップスターに押し上げたのだ。

そして演じる役の多くが元CIAエージェントや元特殊部隊員であるセガールは、「武道家時代に本当にCIAのエージェントだったらしい」という噂が立ち上る。映画のなかでの人の殺し方があまりにも堂に入っていすぎるからだ。

それに対してセガールが肯定も否定もしないことによって、現在に至るまでファンのあいだでは元CIA説が定説であるかのように語られ続けている（のちに本人は否定している）。

その後はメッセージ性の強い作品（山に産廃を撒き散らし、敵を殺しまくって環境保護を訴える『沈黙の要塞』とか）や、類似の作品（『沈黙の断崖』『沈黙の陰謀』『沈黙のテロリスト』とか）に出まくって低迷。『DENGEKI 電撃』で一時復権するものの、その後はやはり類似作品に出まくっており、日本での〝セガールはハリウッドスター〟という認識とは裏腹に、現在はVシネ俳優として活動中である。

近年は武道家として、アンデウソン・シウバやリョート・マチダに合気道を指導。リョートがマウリシオ・ショーグンにKO負けした際には「セガールなんかと遊んでるからだ！」という直球すぎる批判も上がっていたが、今回アンデウソンがセガール直伝の前蹴りで勝利を収めたことによって、その存在感があらためてクローズアップされている。

しかし今回の前蹴り秘話は、アメリカで知名度を上げたいアンデウソンサイドと、映画業界で落ち目なセガールサイドが仕組んだプロモーションであるという無根拠な説も挙がっている。しかし前述の元CIA話と同様に、虚実が入り混じったエピソードこそがセガールの魅力であり、「もしかしたら」と思わせる説得力を持つのがセガールという存在なのである。

今回の前蹴り秘話は……その判断は読者の皆さんにお任せしたい。

UFCのメディア戦略とは？

UFCは全世界でビジネスをするためコンテンツを100%自社管理しています

UFC映像&メディア部門のトップを直撃！

Executive Vice President, Operation & amp; Production

クレイグ・ボーサリー

急激に進化を続けるUFC。選手のレベルアップや興行数、興行規模の巨大化と発展の一途をたどっているが、ここ数年、事前番組を含めた映像のレベルアップも見逃せない。そこで今回本誌は、ズッファ本社オフィス隣にあるメディアセンターを取材。映像&メディア部門のトップであるクレイグ氏に話をうかがった。

聞き手＆撮影／堀江ガンツ　通訳／石井史彦

――はじめまして。我々は日本のMMAマガジン『kamipro』と

……

制作はしていたんですね。

クレイグ　はい。私がズッファに入社したのは2005年ですが、すで

……

た展開ができるわけですね。

クレイグ　そして、UFCではその方法がとてもうまくいっています。

……

するために使われるものであり、ファイターが自分を売り込むのに重要なツールとなっているはずです。そ

……

を極力受けずに、自分たちのコンテンツを提供して、世界市場に売り込んでいくというわけですね。

現在メディアセンターだけで30名社員がおりロスに支社もあります

―はじめまして。我々は日本のMMAマガジン『kamipro』といいます。今回は忙しいなか、貴重なお時間を割いていただきありがとうございます。

クレイグ こちらこそ、わざわざ取材に来ていただき、うれしく思います。

―今回、ボクたちが興味を抱いたことは、UFCの映像&メディア戦略についてです。UFCではプロモーターであるズッファ自身が映像などすべてのコンテンツを管理するだけでなく、撮影クルーを抱え、プロダクション業務のすべてを行なっていますよね？

クレイグ はい。UFCでは自前の映像班が、映像コンテンツ制作を行なっております。

―そもそも、なぜUFCは独自にメディアセンターを持つことにしたんでしょうか？

クレイグ UFCが映像等のコンテンツの100パーセントすべてを自分たちで管理し、独自のプロダクションを行なう組織作りを始めたのは、ズッファが買収してからです。そして、なぜ独自でのコンテンツ制作を行なっているかというと、これは全世界にビジネスを展開していくうえで、柔軟に対応していけるように、というのが第一の理由として挙げられます。

―では、かなり前から独自に映像制作はしていたんですね。

クレイグ はい。私がズッファに入社したのは2005年ですが、すでに2001年から独自に制作されていました。これは非常に重要なことです。ほかのスポーツを見ればわかるとおり、コンテンツなどの権利がチームやエージェントなどに分散され管理、保持されていることによって、ビジネス展開の妨げになることが多々あるのです。

―なるほど。権利を分散させず、一つにまとめることで、おもいきった展開ができるわけですね。

ラスベガスにあるこの建物がUFCを運営するズッファの本社ビル。かつてはワンフロアだけだったが、いまはビル全体がUFCとなっている。そしてこの建物の隣にメディアセンターがあり、さらにロサンゼルスにもメディアセンターはあるという。すげえ！

クレイグ そして、UFCではその方法がとてもうまくいっています。今日現在、このズッファ本社ビルの隣にメディアプロダクション専門のオフィスがありますが、これは2005年に開設され、30人の正社員が勤務しています。それ以外にロサンゼルスにもメディアセンターを開設しているんです。

―ロサンゼルスにも、メディア制作の支部がありますか。

クレイグ もちろん大きなイベントの際には、外部のプロデューサーやプロダクションクルーと契約して雇いますが、編集以降の作業はズッファの社員スタッフがプロダクション業務を行なっています。またロサンゼルスには、すべてのコンテンツをテープにして管理、補完している倉庫もあるのです。このインタビューのあと、隣のメディアセンターのツアーにご案内しますので、楽しみにしてください。

―そこまでUFCがコンテンツを管理することで、ファイターにはどのような影響がありますか？

クレイグ ここで制作されるファイターのドキュメンタリーや試合の映像は、すべてファイターたちのキャラクターを表に出しプロモーションするために使われるものであり、ファイターが自分を売り込むのに重要なツールとなっているはずです。それにファイターは独自のコンテンツを作成する権利を持ってますので、メリットはあってもデメリットはないと考えてます。ランペイジ・ジャクソンやランディ・クートゥアーのように映画に出ることも自由です。今日現在で約3万本のテープに試合が収録されており、合計で約10万時間におよぶ試合映像が保管されています。

―10万時間ですか！ それはもちろんPRIDEの映像なんかも含むわけですよね？

クレイグ そうですね。UFCはもちろん、ほかの団体でもズッファが映像権利を持つものは、すべて保管されています。

―よく比較対象として挙げられるストライクフォースでは、このようなメディアセンターを持ってませんが、何が違うのでしょう？

クレイグ 他団体はおそらく、まだ自立するには力が足りないのでしょう。ですから成長するためには、外部の助けを多分に必要としています。それに対し、UFCの場合は企業の成長を重要視しており、独自にコンテンツを持ち制作・管理することで新しい市場に食い込んでいくチャンスを広げているのです。その際にコンテンツをUFCだけで管理していることにより自由度が増すのです。たとえばTHQと組んで、世界中のゲーム市場に乗り込んだりするのが、その一つの例ですね。

―放送するテレビ局や外部の影響を極力受けずに、自分たちのコンテンツを提供して、世界市場に売り込んでいくというわけですね。

クレイグ 世界市場に売り込むということはUFCというブランド力も必要ですが、同時にファイター自身の知名度もカギになります。たとえば今回UFCデビューをするKIDヤマモトですが、Facebookで全世界にライブで試合映像を発信することにより、日本のスターをUFCというブランドを利用して、全世界に売り込みをかけることになるのと同じなのです。

―UFCのブランドでKIDを紹介し、その結果、KIDが世界市場でバリューが生まれたとき、KIDの知名度がUFCに恩恵をもたらすという構造ですね。

クレイグ KIDに関しては、プレミナリーの試合に出場する選手が、大会直前記者会見に同席するという前代未聞のアレンジをしていますし、Facebookでその試合を全世界に発信するという、力の入れ方をしています。しかも、じつはこの決定はなんと30分前にダナが決定したことなのです。

―そうなんですか！ じつはボクたち、1時間半前にダナにインタビューして、そのあと会議だったらしいですけど、そこで決まった、と。

クレイグ 記者会見に出席してもらうことも、Facebookで放送することもKID側には、これから伝えることですからね（笑）。

―なんと、我々のほうが早く知っちゃいましたか（笑）。では、話を変えてUFCのプロモーション映像の

制作方法についてうかがいます。以前は試合前のプロモーションというと、対戦相手を罵り合うようなものがよく見られましたが、最近では変わってきているように感じます。これは意図的なものですか？

クレイグ　まず、MMA自体がスポーツとして進化してきており、またマーシャルアーツの原点でもある対戦相手同士が尊敬し合うことが根底にはあるので、自然な流れでそうなってきているのだと思います。もちろん、そこにはシナリオなんて存在しません。我々撮影クルーはマーケティングに専念していると言っても過言ではないほど、ファイターそのものを自然なかたちで撮影し、いかにありのままの姿で視聴者に伝えるかということを重要視しているのです。

——ファイターによっては、インタビューなどで挑発的な発言をする人もいれば、逆に常に優等生のようなファイターもいますね。

クレイグ　それはファイター自身のことであり、我々が「どのように振る舞ってほしい」と口を挟むことはありません。それらを映像に収め編集することで、一人のファイター像としてファンに映るのです。ファンによっては挑発的な受け答えを好む人もいますし、またその反対のケースもありますね。たとえばGSPのように相手をリスペクトして、暴言を吐くようなことをしない選手もいます。ファンはGSPのそんな姿が好きなのですが、それを「退屈だ」という人もなかにはいる。人にはいろんな考えがあるので、やはり我々はファイターのそのままの姿を映し出したいのです。

——日本で作られたPRIDEの試合煽りVTRについてはどう思いますか？

クレイグ　プロダクションを統括する立場から見ても、とても素晴らしいビデオ映像だと思いますし、エンターテインメントを望む日本の市場にはとても合っていると思います。ただし、試合直前にも物語性を盛り込む手法は、アメリカ国内では受け入れ難いというのが現実ですね。

——試合前はもっとシンプルでないとダメですか。

クレイグ　はい。UFCの場合は、ファイターのメンタリティや、試合に対する姿勢などは、事前のテレビ番組などで繰り返し特集しています。そして、多くのファンはそれらを観て会場に足を運んだり、PPVを購入したりしているので、あらためて試合直前に説明する必要性というものが、あまりないのです。

——なるほど。アメリカでは試合直前ではなく、試合のずいぶん前から煽りVやその試合に向けてのドキュメンタリーを含めた事前番組が、じゃんじゃん流れているということですね。

クレイグ　はい。ですから事前のドキュメンタリーと、試合前の映像は意味合いが違ってきますね。

——ダナ・ホワイト代表が映像に口を出すことはありますか？

クレイグ　ダナは映像からファイターの入場曲まですべてのプロダクション作業に関与しており、最終の承認を行なっています。

——へえ、ダナの承認なしでは、勝手にテーマ曲や映像を流すことはできないわけですか。

クレイグ　はい。ダナはUFCというイベントの総指揮者ですからね。では、メディアセンターへ移動しましょう、ビルの内部をご案内いたします。

（メディアセンターの中へ移動）

クレイグ　ここの広さは4000スクエアフィートあり、ここでは映像に関する一切のプロダクション作業を行なっています。ただ、会場で流す音楽に関しては、ここではなくロサンゼルスのメディアセンターで管理されています。本社ビルの中には撮影用のスタジオもあり、映像を使ったダナのインタビューはほとんどがそこで撮影されます。

——ちゃんと撮影スタジオもあるんですね。

クレイグ　続いてここはマシーンルームで、現在のコンテンツをすべてデジタル・アセット・マネージメントシステムに移行しているところです。これが完了するとインターネットを通して、またワイヤレスにて世界中どこにいても編集などの作業が行なえるようになります。そうすれば映像のテープをいちいち送ったりすることもなくなるので、作業時間を短縮することが可能になってきます。ここにあるのはそれを実現するためにサーバーたちです。

——莫大な映像をすべてデジタル化している、と。

クレイグ　このラックにある映像テープは、UFCが持つコンテンツの約5分の1で、残りはロサンゼルスにある保管庫で管理しています。また、ここではDVDも独自に制作しています。

——DVDソフトまですべてが自社制作ですか。

ダナは映像から選手の入場曲まで すべての最終承認を行なっています

クレイグ　はい。以前は外注だったのですが、自社で製造したほうがコンテンツを安全に管理できるほか、作業も早く、製造コストが安いというメリットもあります。

——いやあ、ズッファはすでに〝興行会社〟ではなく、総合的なコンテンツ製造会社になってるということですね。

クレイグ　はい、そういうことですね。

——今日は大会前で多忙のなかインタビューだけでなく、メデイアセンターの案内までしていただきありがとうございました！

クレイグ　今後もメディアセンターはもっともっと大きくなっていくので、また機会があったら取材に来てください。

——わかりました！

【11年2月2日／米国ネバダ州ラスベガス、ズッファ本社にて収録】

MMA界のなかでも屈指のジェントルマンであるジョルジュ・サンピエール。UFCの映像はそんなGSPのありのままの姿を伝えるとともに、カナダロケを敢行して、その強さの秘密に迫ったりもしている。

クレイグ氏は以前、スポーツ専門テレビ局「FOXスポーツ」に勤務。UFCのコンテンツを契約したことからダナやロレンゾと知り合い、ズッファに誘われ2005年に入社。当時のズッファは正社員20名程度だったが、いまでは200名を超えているという。

椎名基樹のサムライ三昧

第58回

『ヒョードルとアンデウソンを見て思う』

何から書いたらいいだろう？

筆者を格闘技好きと知る友人からは、すでに過去の流行のように語られ「あれ、まだ好きなの？」と流行遅れのダサ男くん扱いされることも普通になってしまった日本のMMAであるが、海の向こうのアメリカは、年明け早々ビッグカード連発で、MMAが狂い咲きだ。オレ、アメリカ人に生まれれば良かったよ。戦勝国だし。

だが、よくよく考えてみると、MMAというスポーツの可能性は、いま、アメリカをはじめ世界中で証明されつつあるのに、先んじていた日本では過去の流行になりつつあるのが不思議だ。MMAそれ自体は「過去の流行」などになるものではなく、これから新しいスポーツとして世界中に定着して、ビッグイベントが開催されていく可能性が高いように見える。

このようにスポーツが形作られるダイナミックな過程に、人の生涯の中で立ち会うことは、じつは奇跡的な確率なのではないだろうか。大げさだけど。調べるのも面倒だから適当な意見であるが、現存するスポーツで一番新しいのは、アメリカンフットボールあたりだろうか？　だが、もちろんその成り立ちの過程なぞ知らない。だがMMAはグレイシーファミリーをはじめ未来には神格化されそうな選手に感情移入して観ることができたのだ。

そんなMMAを「そういえば昔流行っていたよね」的なものにしてしまった日本って、どうにもマヌケに思える。それもこれも、半分はファンのものだったPRIDEをテメーのものだと思い込んだ人が、潰してしまったことが原因であることは間違いない。あれほど盛り上がっていたMMAが、いっぺんにしぼんでしまったのは、UFCに選手を引き抜かれていいカードが組めなくなったからではなくて、ファンが「裏切られた」と感じているからだ。

そもそもPRIDE崩壊直後は夢のカードがいくらでも組めるメンバーがいたし、UFCに引き抜かれた選手のほとんどは、いまではただのやられ役だ。日本のMMAがダメになってしまった原因は、ただただPRIDEの崩壊それ自体にあるのだ。別れた女と1年間の期間をおいて再び付き合って、前と同じ関係が築けるなんて甘い考えだ。

もしあのままPRIDEが続いていたら、今回のストライクフォース（以下、SF）のヘビー級トーナメントは、日本で開催されていた可能性があったのではないだろうか？　だとしたらスーパーアリーナは興奮に包まれていただろう。

つーことで、ここでやっと冒頭の一文に戻るが、最初に語る今月の試合は、我らが皇帝・ヒョードルvsビッグフット・シウバからにしよう。

ヒョードルが負けた。今度は「過信した」などという言い訳は通用しないほど完璧に負けた。リングス以来のファンとしては、寂しくもあり残念だが、これで完全にMMAから前時代の呪いが解けたような気持ちもある。でも、2ラウンド最後にドルヒョーがアキレス腱固めにいって、解説者が「グラウンド・マスター・サンボ！」と叫んだシーンは妙に興奮したなあ。

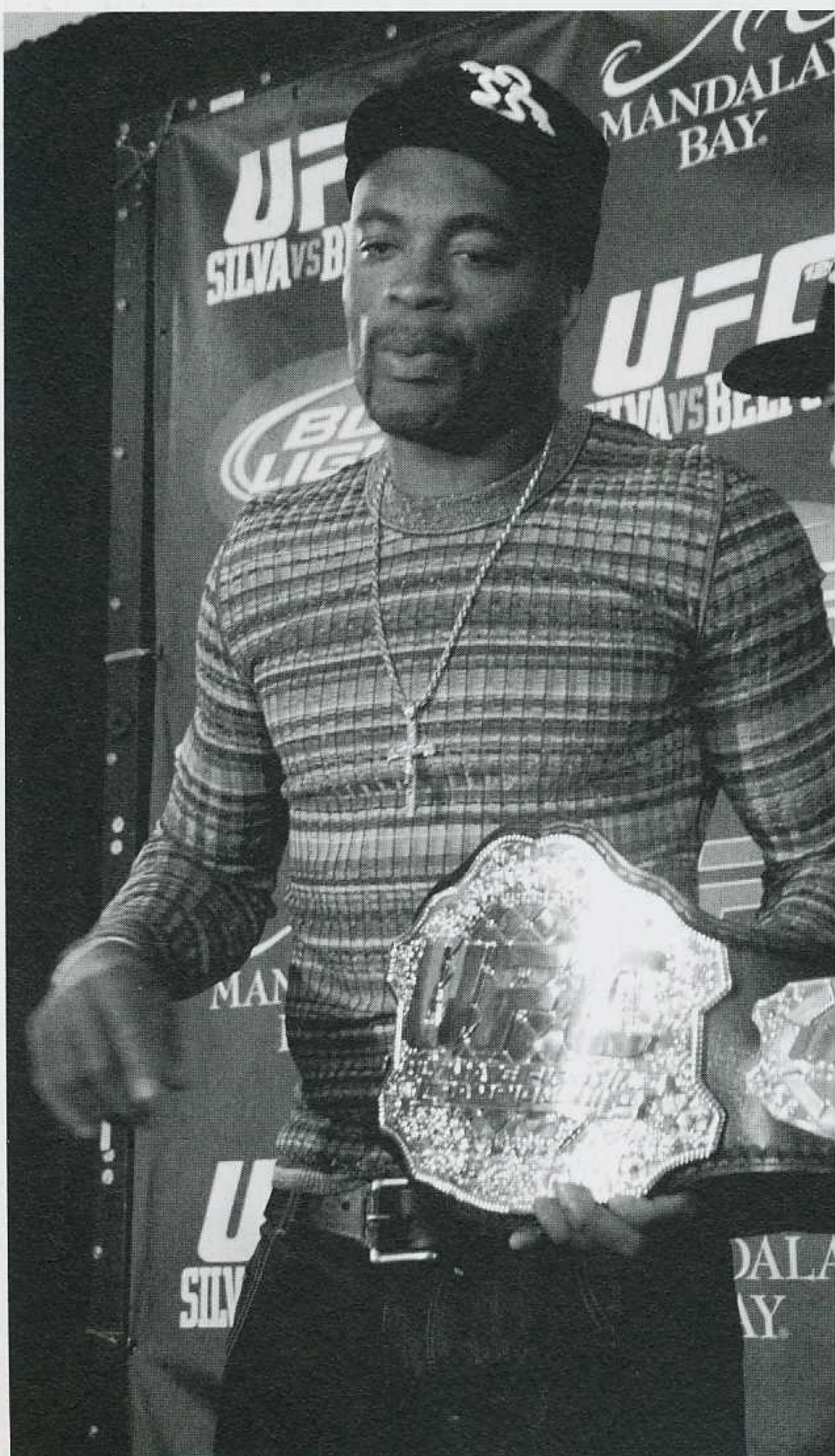
時代が変わっていることを実感せざるをえない結果だったが、この試合を観てさらに鮮明になったのは、UFCの闘いの新しさ、鮮烈さが確かであるという思いだった。素晴らしいメンバーで、このあとも興味を持って見守ることは確かであるが、もうSFのトーナメント参加選手で幻想が持てるのはアリスターだけだ。

そのUFCの鮮烈さを、これ以上ないかたちで見せつけたのが、『UFC126』でとんでもない勝ち方をしたアンデウソン・シウバだ。誰もの想像を上回る、凄まじい前蹴りで一撃勝利。陳腐な言い方だが、MMAが誕生して15年以上経って、完璧に完成されたMMAの選手が生まれたように感じる。

「完成されたMMAの選手」というのが、陳腐で結果論的であるならば、ファンが「こんな選手がいたらなあ」という想像する闘い方を、あらゆる局面で現実の中で上回っている選手がアンデウソン・シウバではないか。

きっと「知らんがな」と言われてしまうだろうが、筆者はあのアンデウソンが見せた、振り上げた足が真っすぐ、アッパーカットのように顎をとらえる前蹴りが、格闘技の中で見られないかとずっと想像していたのだ。それは前にもこのコラムで菊野選手の三日月蹴りについて語ったときにも書いたのだが、ゲームのバーチャファイターでジャッキーがする「ダッシュハンマーキック」が、この種の前蹴りとほぼ同じであり、現実に可能であれば非常に有効だと、ずーと思っていたからだ。

だが、ゲームであるから、技が「当たった」という判定だけがあって、どの部分がどういうふうに当たったかまではわからない。現実では、足先のような小さな部分で急所をとらえるようなことは不可能なのかなあと思っていた。

しかし、アンデウソンは見事にやってのけて、筆者の夢をかなえてくれた。何度もスローモーションでインパクトの瞬間を見てしまった。どうやら、アンデウソンは足の裏の五指の付け根あたりで、ビクトーの顎をとらえているようだ。なるほどなあ。先端を急所に入れるのは、武術の打撃の極意であり特徴だと思う。その中でも不器用な足を使う技は難易度が高い、極意中の極意ではないか。打撃技とは、とどのつまり「どの骨をどういう角度で当てるか」である。な〜んってな。とにかく宇宙人的なレベルまで達したアンデウソンであり、そうさせるUFCという舞台なのであるのだった。

いまもなお、とんでもない進化を続けるアンデウソン・シウバ。人前では英語を話さず、いつも飄々とした受け答えをしていることから、その人間性がミステリアスなのも興味深い。

堀江ガンツが行く
本当の北米
ラスベガス取材旅日記

今回、山本“KID”徳郁のUFCデビュー、“フェザー級日本最強”小見川道大のUFC再登場をはじめ大注目のカードが組まれた2.5『UFC126』。この大会を取材するために、堀江ガンツが渡米！ その舞台裏を含めた旅日記をお届けします。

文＆写真／堀江ガンツ

『UFC126』の前日、フーターズホテルでティトがサイン会を開催！

ラスベガスのファイトミュージアムで見つけたPRIDEミドル級GPのチャンピオンベルト。なんだか複雑な気分。

1月31日（月）

この日からラスベガスへ出発。時差の関係で、現地に到着するのも31日（月）の午後。大会が5日（土）だから、5日前の現地入りはちょっと早いかと思うかもしれないが、このくらい早く入らないとダナ・ホワイトら大物の独占インタビューはなかなか難しいのだ。

ただでさえ忙しいダナやトップファイター。それが大会直前になれば、それこそ分刻みのスケジュールでインタビューどころじゃなくなる。こうした早めの現地入り、早めのアポ取りも独占インタビューを実現させるための大きな要素なのだ。

というわけで、この日、成田に向けて出発。ただ、僕はこの2日前から胃腸の調子が悪いので朝イチで近くの病院へ。診断結果はウィルス性の急性胃腸炎。明日からのアメリカでの食事が胃に負担かかりそうだなあ。

病院に行ったあと、近所のうどん屋で軽く食事。そこで作務衣姿の若者に「お世話になってます」と挨拶された。ハテ？ 誰だったかな……と思ったら、骨法の内弟子さん。普段着も師匠と同じなのか！

フライトは17時なので、お昼前に自宅を出発。空港に着いてからもろもろの手続きをして、飛行機に乗り込む。座席に座っていると、KID軍団がやってきた。

そう、今回はKID軍団と同じ飛行機だったのだ。しかも、KIDとは偶然二つ隣の席。今回の取材についての挨拶をする。KID選手は機内では乾燥防止マスクで完全防備。リラックスした表情で調整は順調な様子。一緒の飛行機でアメリカに向かうと、自分も〝チーム・ジャパン〟の一員になったような気持ちになるから不思議だ。

8時間半のフライトを経て、サンフランシスコを経由してラスベガスに到着。KID選手は空港のバゲージクレイムで早速、日本人観光客に記念撮影をせがまれていた。さすがの知名度！

空港ではUFCのスタッフがKID一行を出迎える。そしてホテルまで車で送ってくれるというので、僕も一緒に乗せてもらい、今回の『UFC126』会場でもあるマンダレイベイ・カジノ&リゾートへ。

チェックイン後、少し仮眠して夕方からホテル内を散策。マンダレイベイはUFCが頻繁に開催されるだけあって、ホテル内にファイトミュージアムというMMAとボクシングのミニ博物館がある。有名選手のサイン入りグローブやコスチュームが飾られているのだが、そこにヴァンダレイが腰に巻いたPRIDEミドル級GPベルトを発見！ 日本の美術品を海外の美術館で見るような複雑な気持ちになった。

夜は通訳の石井さんと食事。昨年、日本でもオープンして話題となった「フーターズ」に行ってみた（どんな店なのかは各自調査）。店の入口に「UFC126 $30」と書いてあるポスターを見かける。『UFC126』はすでにチケット完売状態で、入れない人のために会場であるマンダレイベイホテル内ではクローズドサーキットを行なうようだが、ここフーターズでも30ドルのチャージでフーターズガールと一緒にUFCのPPV観戦ができる模様。フーターズとUFCのコラボ、これぞ男の夢だ！

ちなみに今週末、フーターズホテルで、ティト・オーティズがサイン会を開催。さすがティト！ イメージどおり！ ラスベガスの街は早くもUFC開催ムードに包まれ始めていたのだ。

2月1日（月）

時差ぼけで寝たり起きたりを繰り返しながら、8時半起床。

正午からはズッファ本社でダナ・ホワイトの独占インタビュー。格闘技界で最も忙しい男が『kamipro』だけのために、こうして時間を割いてくれるのだから、ありがたい。

社長室に通してもらうと、ダナとがっちり握手。デスクの上には『kamipro』が何冊か置いてあったのだが、ダナのデスクに上田馬之助が表紙の雑誌が置いてあるというのがなんともシュール。

しかも、社長室のドアには『kamipro』に掲載されたUFCマッチメイカー、ジョー・シルバのインタビューページに落書きしたものを貼りつけているんだから、ダナ・ホワイト、ホントに『kamipro』大好きなのかも（笑）。

ダナのインタビュー終了後、UFCの映像&メディアのトップのインタビュー。格闘技の映像といえば、これまで〝煽りVアーティスト〟佐藤大輔の独擅場だったが、最近のUFCは映像のクオリティも高い。ズッファも映像に力を入れており、本社の隣に映像編集のためだけの別棟を作ったほど。

夕刻、ホテルの部屋に戻り作業&仮眠。時差ぼけがひどくて、数時間おきに強烈な睡魔に襲われる。そして夜はKID軍団にご一緒させてもらい、日本料理店で食事。

社長室のドアに本誌前号に掲載したジョー・シルバのページを貼ってご満悦のダナ。いいツラだ！

移動の車の中や、食事中も笑いが絶えず、KID選手もリラックスそのもの。いい精神状態で試合当日を迎えられそうだ。

2月2日（水）

午前中、部屋で仕事したあと、午後からの『UFC126』プレスカンファレンス（大会直前記者会見）へ。

UFCプレスカンファレンスでは、会見前にプレスに向けてランチが振る舞われる。バイキング形式なのだが、これがじつに豪華。サラダ、パスタなど前菜、それにメインは4種類ほど用意されている。パンも数種類食べ放題で、ドリンクも飲み放題。これが楽しみで、朝食はしっかり抜いて、たっぷり食べた。

スーパーボウルウィークエンドのビッグマッチだけに、会見場は各国のプレスにより超満員。とくにメインイベントがアンデウソン・シウバvsビクトー・ベウフォートというブラジル人同士の対戦のため、ブラジルからのマスコミも多数。雑誌やウェブサイトだけでなく、女性リポーターつきのテレビ局も来ていた。

このプレスカンファレンスは、通常メインカード（PPV放送カード）に出場する選手のみが登場するのだが、ここに山本〝KID〟徳郁とデミトリウス・ジョンソンも出席。これは前日にダナ・ホワイトの〝鶴の一声〟で決まったものだ。ダナのKIDへの期待値の高さがうかがえる。

実際、この会見でダナは「KIDヤマモト出場に際し、コアファンを中心に『なぜKIDの試合がPPVやスパイクTVで観られないんだ』という声がたくさんあがった」と発言。そして、その場でKID vsジョンソンがFacebookで全世界生放送されることを発表。「KIDヤマモトはおそらく、ファイト・オブ・ザ・ナイトかKO・オブ・ザ・ナイトを獲得するような活躍を見せてくれるだろう」とまで発言していた。

KID自身もこの会見で、質問にはすべて英語で答えていた。会見だけでなく、その後の各媒体の個別インタビューでもKIDはしっかり英語で対応。こういった部分もアメリカで成功するためには必要なのだろう。ま、そういう僕はカタコト英語

じつに豪華なUFCのケータリング。記者会見と大会当日、どちらもたらふく食べられる。

現地メディアの取材を英語で受けるKID。〝インターナショナル・スーパースター〟の異名どおり。

なのだが……。

会見後、部屋で少し休んだあと、KID軍団とともにヴァンダレイ・シウバのジムへ。その途中、KID軍団と小見川道大率いる吉田道場勢がホテル内でバッタリ。お互いに健闘を誓い合う。小見川選手にはセコンドの中村カズ、田代トレーナー、J－ROCKの國保代表に噂の美人妻も同行。小見川いい顔してた。期待！

車でヴァンダレイのジムに到着し、KID軍団はオクタゴンでスパーリング。僕はヴァンダレイ・シウバのインタビュー。ちなみにKIDはヴァンダレイのジムでも記念撮影攻めに遭っていた。全米デビュー前なのに、あらためて、その〝レジェンド〟ぶりを実感。

練習＆取材後はタイ料理店で食事。KID選手はこの時点で減量もリミットまで残り1キロ。直前に汗をかくだけで落とせる数値なので、昨日に続いてしっかりと食事。仲間とリラックスして、精神的にも肉体的にも調子が良さそう。UFCデビュー戦での爆勝に期待！

2月3日（木）

時差ぼけがひどく、夜中に起きたり寝たりを繰り返す。あらためて海外で試合をする選手はたいへんだな、と思う。

渡米前から胃の調子が悪く、この日は頭痛にも苦しめられる。ちょうどUFC公式行事がない日だったので、おもいきって休養にあてる。

午後、昼寝から目覚めたら、なぜか僕の部屋で『MMA WEEKLY』のスコット・ピーターソンがKID選手のインタビューをしていた。なんでもインタビュー場所がないので、KID選手の部屋からすぐの僕の部屋ということになった模様。『kamipro』にも何度も登場してくれた元日本在住スコットとこんなところで再会というのも不思議な感じだ。

『MMA WEEKLY』のインタビュー終了後も頭痛は治まらず、結局、このまま寝続ける。KID選手はこの日もヴァンダレイのジムで練習。小見川選手も来ていたようだ。行けなくて残念。

そして夜起きると、今度は隣のベッドに朴光哲選手が寝ていた。朴選手は昨日までKID選手と同室だったのだが、計量前日と試合前日は選手が一番神経を尖らせているときなので、気が散らないようにと僕の部屋に転がり込んできたのだ。それで僕と同室だった通訳の石井さんは、他の部屋にいる知人のところで寝ることに。

そんなこんなで、間接的にKID選手をバックアップ。なお、この日からKID選手は僕のことを「ガンツマン」と呼ぶようになった。……マン？（田村潔司調）。

語感もいいから、まあいいか。

2月4日（金）

前日、一日中寝ていたので、体調はすっかり良くなった。午前中はホテルの部屋で仕事。KID選手は予備計量に備え、ホテルのワークアウト施設でサウナスーツを着て、汗を出していた。

午後になってからKID選手が僕と朴光哲選手がいる部屋に来る。なんでもアメリカの友だちが、KID選手の試合観戦のためにアリゾナからラスベガスに来るから、しばらく部屋にいさせてやってほしい、とのこと。

英会話に不安はあるが、KID選手の頼みなので快くOKの返事。するとしばらくして、その友だちが部屋にやってきた。ドアを開けてみてビックリ。身長2メートル、体重150キロぐらいありそうな超巨体なのだ！

べつにファイターでもなんでもないということの友だち。KID選手とは超凸凹コンビだ。彼は気さくな男で、すぐに打ち解ける。とくに朴光哲選手とはすっかり仲良くなっていた。

ボクはしばらくして、UFCの公開計量取材のため会場に移動。そして会場に入ってみてビックリ。平日午後だというのに、2000人以上のファンでギッシリ。日本でいえば、JCBホールが満員になっているような感じだ。無料イベントとはいえ、単なる公開計量でこれだけの人が集まるのは驚きだ。

そんななかで、KIDはアメリカのファンにも大人気。初参戦ながら計量の場に現われただけで大歓声が上がり、なかには日の丸や旭日旗を振るファンまでいる。続いて登場した小見川選手は、パッキパキに仕上がった上半身を披露。二人とも気合い充分な様子。

ちなみにメインカードに出る選手たちには、異常なほどの大歓声が上がっていた。とくにジョン・ジョーンズの人気は抜群。次世代のスーパースターになるのは間違いないだろう。

公開計量後、プレスルームでライターの高島学さんと立ち話。

夜は朴光哲選手、通訳の石井さんとともに、翌日の試合やいろんなことについて語り明かした。

パキパキに仕上がった小見川の肉体。翌日の激勝を期待させたが……。

朴光哲とKIDのアメリカの友だち。見てのとおり超デカい！

2月5日（土）

いよいよ試合当日。遅くまで取材になることは間違いないので、朝11時まで就寝。昼にちょっと原稿を書き、午後3時に会場入りした。

受付でプレスパスをもらう。UFCは一媒体に対し、最大でも2名まで（通常は1名）しかパスは発行されない。しかも、いまは世界中からプレスが集まるので、プレスの席もオクタゴンサイド最前列から、スタンドの屋根裏みたいな場所までピンキリなのだ。

そして今回はオクタゴンサイド2列目！　まさにスペシャルリングサイド。以前、会場周辺でパスを首からぶら下げてたら、チケットが買えなかったファンに「その首から下げてるヤツ、オレに3000ドル（約25万円）で売ってくれ！」と言われたことがあったなあ。特等席に陣取り、気合いが入る。

試合結果はご覧のとおり。UFCの厳しさを見せつけられる。日本の報道陣も意気消沈だ。

大会終了後、記者会見場は大混雑。いろんなファイターや各国のプレスがいるなか、ひと際異彩を放っていたのがスティーブン・セガール。この人、近くで見ると超デカい。何やらプレスに囲まれながら語ってるので、その輪に入ると「日本人、勝たなあかんがな～。わし疲れてまんがな」と、日本語で語るセガール。怪しすぎる！

もう一人、異彩を放っていたのが〝闘魂ストーカー〟イズマイウ。この人、記者が集まるとこには必ず現われるな。

会見後は夜中まで仕事。そして、翌朝早くに日本に向けて出発だ。

2月6日（日）

2時間ばかり仮眠をとって5時に起床。そこからKID軍団とご一緒させてもらいに、UFCの送迎車に乗ってラスベガス、マッカラン空港へ。そして、フライトを待っているあいだにKID選手がインタビューを受けてくれた。

悔しさをにじませながらも、前向きな姿勢。

今回は残念だったが、次回はぜひ頑張ってほしい。

飛行機は小見川選手一行とも同じ便。ところが、ロサンゼルス行きの飛行機にトラブル発生。急きょ、飛行機が飛ばなくなり、8時半の便で飛ぶはずが、10時の便に変更になってしまった。ここでまず大わらわ。

すぐに日本に帰国せず、数日ロサンゼルス滞在予定のKID選手と朴光哲選手は、あっさりと「車でロスに向かいます」と、予定変更。僕とクレイジービーの堀口選手、小見川選手一行は便変更で向かうことになった。

とはいえ、便変更になったということは、飛行機乗り換えの時間がほとんどなくなるということ。しかも、国内線はユナイテッド航空からアメリカン航空に変更になったため、ロスでは違うターミナルへ移動しなければいけないのだ。

というわけで、ロスに着いてからはみんなでユナイテッドの国際線ターミナルまで走った、走った。それでなんとかギリギリで搭乗。10時間のフライトを経て、ようやく成田到着。

ところが最後にまたアクシデントが。やはりフライト変更があったため混乱し、ボクのスーツケースと小見川選手のスポーツバッグが届かなかったのだ。

海外に行くと、こういうことがつきもの。こういう細かなアクシデントも乗り越え、次は日本人ファイターの激勝に期待したい！

ここにも現われた、イズマイウ！ 取材陣は誰も声をかけず。

第63回

もしも　豆リングの汁

花くまゆうさく

UFCで小見川もKIDも負けちゃって残念。でも輝いてるあの場に上がってることが観てうれしいよね。

メインのアンデウソンvsビクトーには、ぶったまげた。あの蹴りはセガールが教えたというエピソードは夢があっておもしろいが、馬場さんがあんなリアル16文やってたらプロレスの歴史が少々変わっていたかもしれないとも思った。

そのUFCの『TUF』、WOWOWで始まった新シーズンがまたおもしろい。初回からブルース・リーロイが目立っておもしろいが、コディ・マッケンジーにも注目してる。

マッケンジーは初回登場時から、そのだらしなさそうな顔＆ボディが、大好きなボンクラ系俳優ダニー・マクブライドになんとなく似てたから目を引いたが、試合でもマッケンジーギロチンという独特のグリップのギロチンで勝利したので好印象！　今後も注目。

あと、チーム・コスチェックのコーチ陣の中にデイブ・カマリロがいるのがうれしい。彼の教則本は飛びつき系のカッコイイ技ばかりなので大好き！（アームドラッグで飛びついて着地時に腕と足取ってる技は即マネした）。

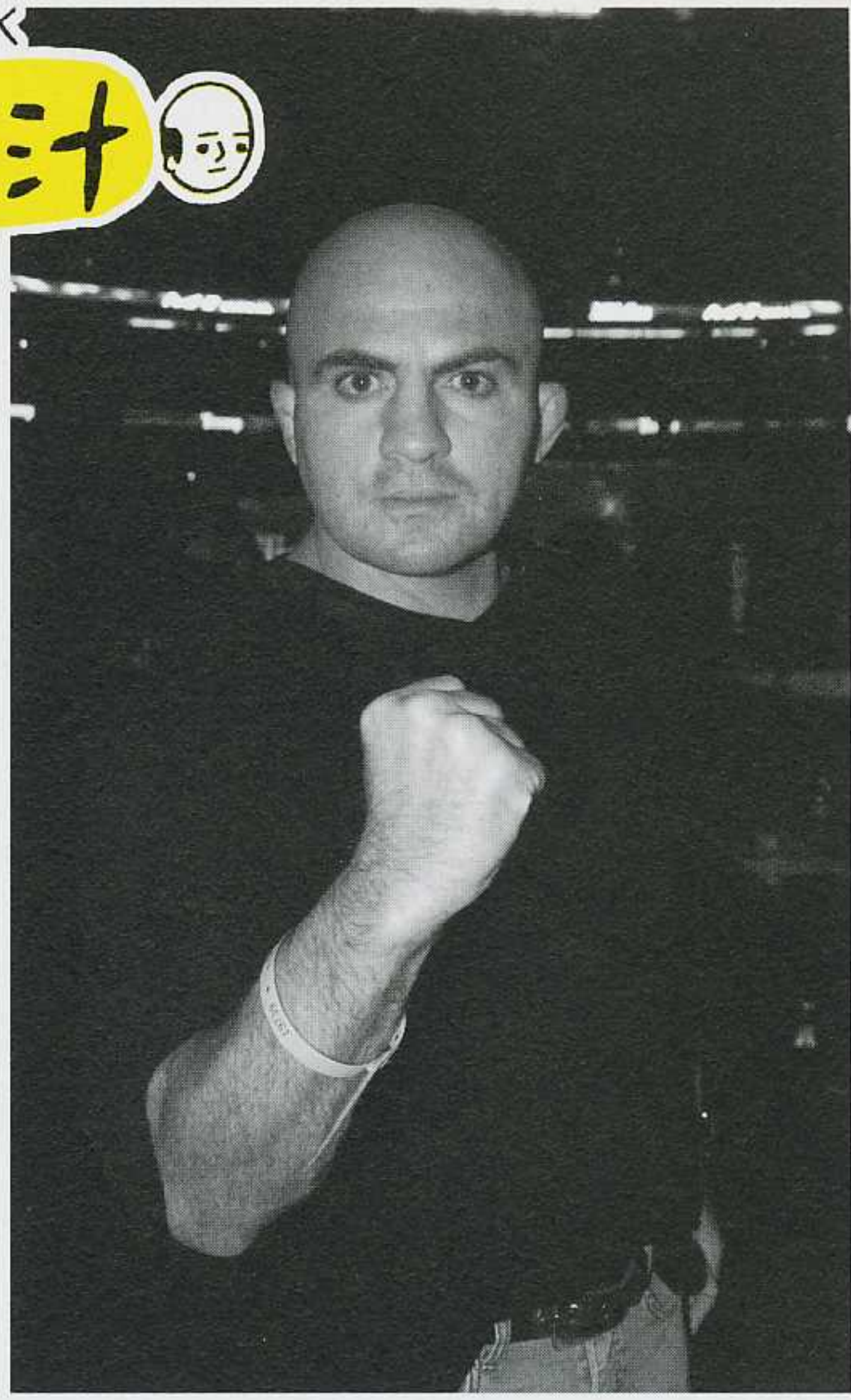
コーチ陣にカマリロいるの見て思いついたのが、いつか今後のシーズンでイズマイウがコーチ陣の中にいたらおもしろいな、と。選手やメインコーチそっちのけでしゃべりまくり、カメラに映ろうとするイズマイウに、現場もアメリカの茶の間も大困惑……そして途中解雇。そんな光景が目に浮かぶ。

ダニー・マクブライド

the Foot Fist Way

Hanakuma Yusaku ◎マクブライドのこの↑映画おもしろいよ！

金ちゃんのどこまでやるの？

第55回 リングス20周年秘話の巻

今月は2・13『THE OUTSIDER』ディファ有明大会に行ってきたよ。

ちょうどこのあいだ、前田（日明）さんと電話で話す機会があってさ。「前田さん、ボクもっと試合がしたいんですけど、いい大会ないですかね？」みたいなことを言ったんだよ。そしたら「試合はないけど、今度の『THE OUTSIDER』手伝ってくれないか？」って言われて、今回手伝うことになったんだよ。

俺の役目は「ベストバウト賞」「ベストサブミッション賞」を選んで、記念品を渡すプレゼンテーター役。あとは乱闘があったら止めるっていうもので、普段はエンセン（井上）がやってるんだけど、今回はエンセンがほかの用事でやれなかったんで、俺がやることになったんだよね。

当日は朝10時入りでさ、試合開始まで凄く時間があるから「何したらいい？」ってスタッフに聞いたら「ずっと前田さんについててください」って言われて、なんか一日中、前田さんの付き人状態だったよ。

前田さんとこんなに長い時間一緒にいたのは、ホントにひさしぶりなんだけどさ、けっこう時間があったからいろんな話を聞いたよ。

UWF解散の真相から、UWF時代の高田さんの話とか、俺がまだファンだった頃の話はホントに興味深かったな。

あと印象に残ったのは前田さんのアレキサンダー・カレリン戦の裏話。あのとき、前田さんの引退試合としてカレリン戦を発表してて、ちゃんとカレリンは来日したんだけど、直前になってカレリンが「試合はできない」って言い出したんだって。やっぱりカレリンはロシアの人間国宝みたいな人で、当時はオリンピック4連覇がかかってたから、側近がやめさせようとしたみたいなんだよね。

で、リングスもなんとかカレリンを出場させようと、ギャラアップを提示したんだけど、あの地位の人だから、お金じゃ全然動かなかったんだって。そんな状態だったけど、カレリンってちゃんと前田さんと試合したでしょ？　あれはなんでカレリンを出場させられたかというと、リングス・ロシア代表の故パコージンさんが、泣きながらカレリンを説得したんだって。

「マエダは多くのロシア人格闘家が食えない時代に、助けてくれた恩人だ。あなたはロシア人として、そのマエダを裏切れるのか」って。

いい話だよね～。やっぱり前田さんと、リングス・ロシアの結びつきってそれくらい強かったんだよね。「だから（ヴォルク・）ハンは『マエダの兵隊だ』って言うんや」って自慢気に言ってたよ（笑）。

ちょうど、この『THE OUTSIDER』があった日に、リングス・ロシアが生んだ最強の男ヒョードルが敗れたって聞いてさ、ちょっと悲しくなったよね。あれだけの選手だから、また復活してほしいな。

でも、リングス出身選手って凄いよね。今回のストライクフォース・ヘビー級GPでも、リングス・ロシア出身のヒョードル、ハリトーノフ、リングス・オランダ出身のオーフレイム兄弟と、4人もリングス関係の選手が出場してるんだから。とくにヴァレンタイン・オーフレイムはリングス時代の俺のライバルだったからさ、彼がアメリカで勝ったことは刺激になってるよ。俺もまだまだ頑張りたいね。

なんか前田さんに聞いたら、今年はリングス旗揚げ20周年だから、何か記念になることも考えてるんだって。「もし20周年記念大会をやるなら、田村潔司vs金原弘光戦を組んでください」って言ったら、笑ってたけどね（笑）。

今年は俺もデビュー20周年だから頑張ります！

Hiromitsu Kanehara
◎本音炸裂コラムほぼ毎日更新中!
金原弘光オフィシャルHP
http://www.hiromitsu-kanehara.com/

特集

梶原一騎

タイガーマスクを
知らない読者に送る
“最初の晩餐”を
堪能せよ!

極真↓PRIDEをつないだ最強列車の車掌 梶原一騎——!!

今回の『kamipro』は梶原一騎特集をお送りする。「なんでいま、いきなり梶原一騎?」と疑問を持つ読者がいるかもしれないが、答えはいたってシンプルだ。昨年末から今年の初めにかけて〝タイガーマスク運動〟が大きな話題になったことがきっかけである。

群馬県の児童相談所へランドセルが届いたことから始まって、全国各地で〝伊達直人〟を名乗る人物からおもちゃ、文房具、商品券などが寄贈されることになったこの運動。タイガーマスクの名が冠されたのは、伊達直人が漫画『タイガーマスク』の主人公で、プロレスで稼いだ金で自らが育った孤児院に寄付をするキャラクターだったことが理由だ。

話題が広まれば、もちろんテレビが飛びつく。2011年初頭のテレビでは、『タイガーマスク』の原作者である梶原一騎の実弟にして作家、空手道真樹道場の総帥である真樹日佐夫先生がさまざまな番組でコメントし、さらには初代タイガーマスク・佐山聡がNHKに登場するという昭和のような光景が繰り広げられた。

おもしろいのは、まさにこの部分なのである。『タイガーマスク』を単純に漫画(アニメ)としてだけ考えれば、作品だけを紹介すればいい話だ。コメントが必要ならば、真樹先生でこと足りる。しかし、NHKのスタッフはそうは思わなかったのである。「タイガーマスクといえば?」の答え、その一つは間違いなく「佐山聡」でもあるのだ。

すなわち——。タイガーマスクは、現実と密接にリンクしているのである。まさに「この男は実在する!」のだ。

いや、『タイガーマスク』に限らず、梶原一騎原作の漫画は、その多くが現実とリンクしていた。梶原作品のメインストリームをなすスポ根(スポーツ根性)もの。そのほとんどに実在の団体・人物が登場する。

『巨人の星』『侍ジャイアンツ』はいうまでもなく読売ジャイアンツを舞台としており、川上哲治監督や長島茂雄、王貞治といった選手たちが重要な役割をはたす。『空手バカ一代』は極真カラテの創始者・大山倍達が主人公であり、『プロレススーパースター列伝』はその名のとおり現実のプロレスラーの物語。そしてもちろん『タイガーマスク』にも、ジャイアント馬場やアントニオ猪木が登場。マンガ版におけるタイガーマスク最後の試合の相手はドリー・ファンク・ジュニアだ。

実在の団体・選手が登場することで、読者は梶原作品から他の漫画以上のリアリティを感じることになった。さらに、一般的な基準からすると異常なまでに多いネームを費やして解説される技術の裏づけ。それがどれだけ荒唐無稽なものであっても、〝梶原理論〟は少年読者を強引に納得させてしまうパワーに満ちていたのである。

実在の選手が登場しない『あしたのジョー』でも、現実とのリンクが見られた。主人公・矢吹丈のライバルである力石徹が激闘のはてに命を落とすと、作家・詩人である寺山修司の呼びかけによって講談社の講堂で葬儀が行なわれることになったのだ。漫画の登場人物の葬儀が、実際に行なわれたのである。

そして『四角いジャングル』は、アントニオ猪木の異種格闘技戦など、現実のマット界を同時進行で漫画化。その試合映像はドキュメンタリー映画として劇場公開されてもいる。空想の世界に想いを馳せるのではなく、あくまでも現実に根ざしていることが梶原作品の大きな特徴であり、魅力だった。

の格闘技大国たりえたことになる。K—1もまた、そのルーツをたどれば極真カラテに行き着く。

せるのではなく、あくまでも現実に根ざしていることが梶原作品の大きな特徴であり、魅力だった。

一方で梶原作品には『カラテ地獄変』をはじめとする〝大人向け路線〟も存在した。〈人間の性　悪なり〉をテーマに闘いと裏切りがはてしなく繰り返され、女は徹底的に凌辱される異様かつヘビーな物語である。編集者とのトラブルによる逮捕、女優とのスキャンダル暴露も含め、梶原一騎にはコワモテにしてダークで、そしてダーティなイメージがつきまとったことも確かだ。

しかしそのことは〝現実とリンクした物語を描き続けた作家〟に苦みを伴なった深い味わいを加えたともいえる。作品と実人生が一体となって〝梶原伝説〟は形成されていったのである。未完の最終作『男の星座』は〈完全なる自伝〉とうたわれた。漫画原作者として、梶原一騎は最後まで紙の上に現実を投影し続けたのだ。

現実とリンクした梶原作品は、その読者を現実の世界で行動に駆り立てた。『巨人の星』を読んで野球を始めた者、『あしたのジョー』の影響でボクシングを始めた者は数知れない。『タイガーマスク』は現実に新日本プロレスでデビューし、一大センセーションを巻き起こす。その活躍は、やはり多くの若者にプロレス団体の門を叩かせた。

もし梶原一騎がいなければ、スポーツ界とその歴史は実際のそれよりもずいぶんとやせ細ったものになっていたのではないか。たとえば、タイガーマスクに憧れてプロレスラーを志した一人に桜庭和志がいる。ＰＲＩＤＥに隆盛をもたらした最大の功労者である。つまり梶原一騎がいたからこそ、かつて日本は世界トップの格闘技大国たりえたことになる。Ｋ―1もまた、そのルーツをたどれば極真カラテに行き着く。

梶原一騎に関しては『梶原一騎をよむ』（高取英・編）、『夕やけを見ていた男 評伝梶原一騎』（斎藤貴男）という決定版ともいえる良書が存在する。作品のおもしろさや数々のエピソード、スキャンダルなどについては、この二冊を読めば充分ともいえる。いや、それよりもまず膨大な作品群の中のどれか一つでも読めば、誰もが夢中になるはずだ。

それでも本誌が特集するのは、Ｋ―1・ＰＲＩＤＥ以降に格闘技ファンになった人たちにも梶原一騎の存在を深く味わってもらいたいからだ。90年代からの格闘技ブーム以前にも、この世界に巨大な山脈がそびえ立っていたことを知ってほしいからだ。

力道山からアントニオ猪木へ、猪木からＵＷＦへ、ＵＷＦからＰＲＩＤＥへ。あるいは極真からＫ―1へ。マット界の歴史は、ファンが乗り継いできた〝最強列車〟と言い換えることができる。

そして梶原一騎という人物は、70年代から80年代にかけて、あるいは死後にも残った影響力という意味では00年代前半まで〝最強列車〟の車掌だったのである。

ＵＦＣが世界最大のプロ格闘技団体となり、〝最強列車〟の路線が海外に移ったいまだからこそ、タイガーマスク運動をきっかけにして梶原一騎という存在の大きさと魅力にあらためて触れることも無駄ではないだろう。

この特集が、30代後半以上の読者には梶原一騎との〝再度の晩餐〟として、若い読者には〝最初の晩餐〟としてゴージャスなものになれば幸いである。（橋本宗洋）

壮絶夫婦一直線！

私が愛した梶原一騎

「ほかの女とお風呂に入ってる梶原を私は起きて待ってました」

梶原一騎 夫人

高森篤子

梶原一騎特集といえば、この方にお話を聞かないわけにはいかない。梶原一騎とともに人生を歩まれた高森篤子夫人である。篤子夫人自身が執筆されている著書を読むだけでも、いかに壮絶な夫婦生活だったかが想像できるが、今回はあらためて梶原一騎との思い出を語っていただいた。

聞き手／青柳直哉

——今日は聞きたいことがたくさん
ありすぎるんですけど……その前に

てますから（苦笑）。怒られても何さ
れても理にかなってると、なんにも

味じゃなくて、夫婦ってそういうも
んじゃないかなって。亭主のミスで

ら」とか、そういう感情はなんにも
ないのよ。「白だ」って言うから「はい、

く熟したトマトを出すとするじゃな
い？ すると、「トマトは青くて硬い

「カラスは白だ」って言われたら「はい、白です」という感じなの

――今日は聞きたいことがたくさんありすぎるんですけど……その前にまず、なんてお呼びさせていただければよろしいですか？

高森　あっちゃん、とか？（笑）。

――いや、あっちゃんはさすがに……。

高森　冗談、冗談、フフフ。

――篤子さん、でもよろしいでしょうか？

高森　いいですよ。人によって、篤子さん、奥様、夫人、高森さんとかいろいろ。でも、篤子さんでも全然。

――今回、篤子さんの著書（『スタートは四畳半、卓袱台一つ』講談社刊）も読ませていただいたんですけど、非常におもしろいエピソードが満載で。読み終えて、篤子さんは凄く梶原先生のことがお好きだったんだな～って。

高森　まあ、人間的にね、あんなおもしろい男いないから。

――良くも悪くも、ですよね？

高森　そうです。ホントに。こんなおもしろい男いない。いろんな男性がいらっしゃいますけど、だいたい主人のこっちの部分はあるけど、こっちはないなっていう。その点、主人は多面性を持ってますんで。それも両極端に。

――梶原先生って、何事においてもけっこう極端な感じですもんね。

高森　それが私はけっこう感化されてたね。マインドコントロールされてますから（苦笑）。怒られても何されても理にかなってると、なんにも言えないでしょう？　「だって……」とかね、そういうのはダメなワケですよ。

――それは、先生ご自身が、そういうのを嫌う人だから？

高森　そうです。ミスを犯すとか、できなかったとか、いろいろありますよね。苦労したり努力したり向上心はあるんだけど、でも、主人が納得できるところまでいってない。こっちとしては、「だって」って言いたいときもあるけど、それがダメなんですよね。

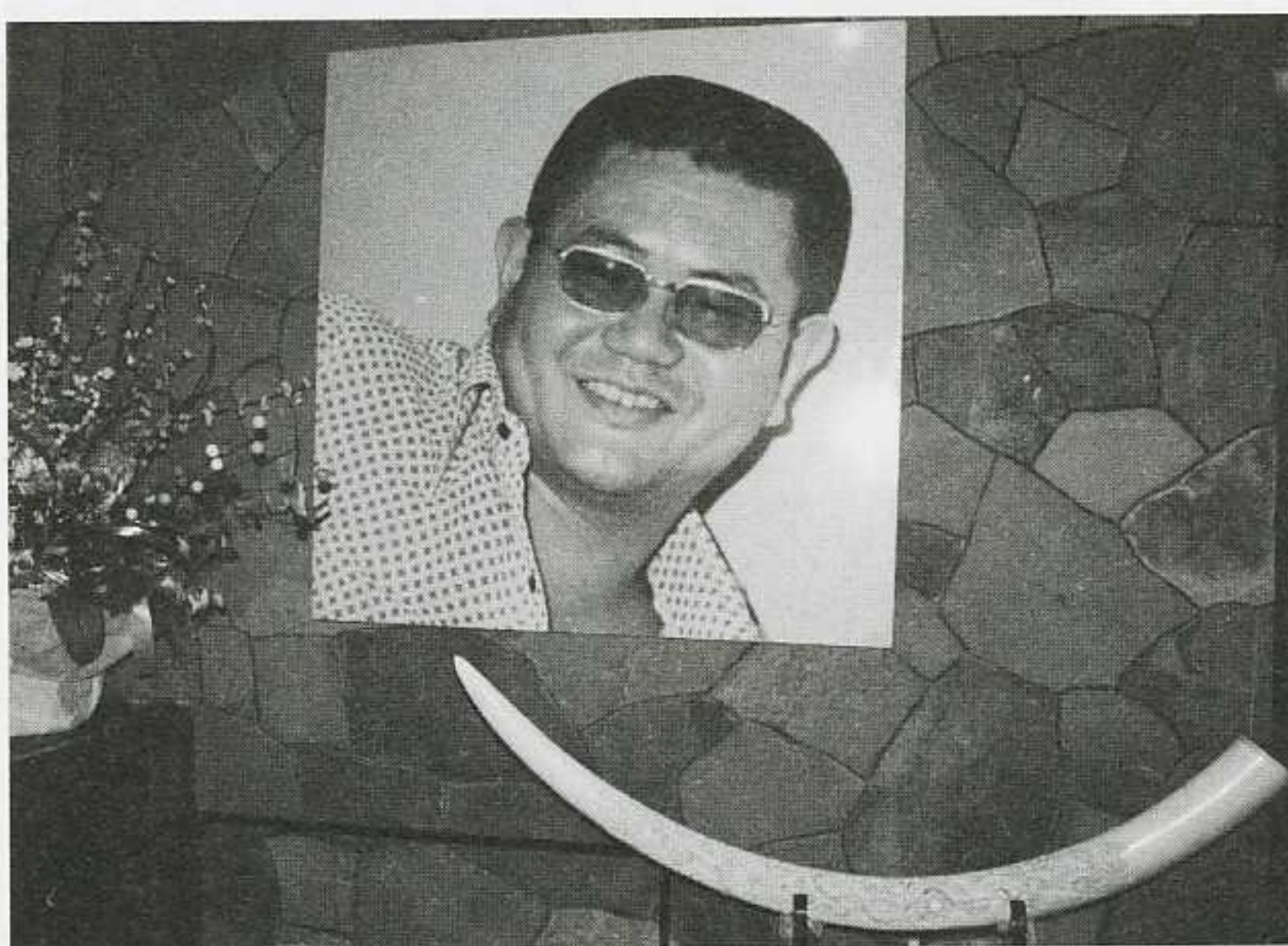
――凄いなと思ったのが、著書の中で篤子さんは何においても「主人が絶対」って書かれてて。

高森　そうです。天皇陛下より。

――それを象徴する話が、篤子さんが先生の運転する左ハンドルの車の助手席に乗られてて、自分の身体がどう見てもセンターラインをはみ出してるのになかなか言えなかった、と。で、先生の車に乗るときはいつも死を覚悟して乗ってたっていう。

高森　フフ、そうそう。でも、それは「この人と死ぬならいいわ」という意味じゃなくて、夫婦ってそういうもんじゃないかなって。亭主のミスで死んだら、そのことについて何も意見を言えないじゃないですか。だって運命共同体なんだから。

――でも、ご自分の身体があきらかにセンターラインをはみ出してるワケですから、そこはさすがに早く言ったほうが……（苦笑）。

高森　それを言うことよりも主人のほうが怖いから（笑）。だから一方通行の道でも、主人が「右折しろ」って言うと右折するんです。おまわりさんとか全然怖くないんですよ。主人が「いい」って言ったからいいんです。たとえば、「カラスは白だ」って言われたら、「黒じゃないかな？」って思うけど、「そうですね、白です」って。でも、そこには「そう言わなきゃ怒られる」とか「言わなきゃ怖いから」とか、そういう感情はなんにもないのよ。「白だ」って言うから「はい、白です」って。そういう感じなの。たとえが悪いけれど。

なんと、ご自宅で取材をさせてもらえることとなった今回の篤子夫人の取材。まず玄関にお邪魔すると、巨大な梶原一騎の写真がお出迎えしてくれた。

――篤子さんは、先生と知り合う以前にも男性の方と交際されたことはあったんですか？

高森　ほとんどないですね。友だちはいましたけれども。

――じゃあ、結婚後は先生のルールというか、そういうものに慣れて暮らしていくしかなかったっていう感じなんですかね。

高森　私の場合、母が紙問屋の娘だったので、サラリーマンとか、いわゆる平凡な家庭というサンプルが周りにないんですよ。父もいないし、男の兄弟もいない。サンプルがあればまだ良い悪いって判断が下せるけど、私は主人しかわからないじゃないですか。結婚するときも仲人さんに「普通の夫婦の幸せを望んじゃいけないよ。そういう奥さんの望みというのは梶原さんをダメにしてしまうから」って言われたのね。そのとき、まだ18歳でしたから意味はハッキリとはわからないんだけど、とにかく才能を壊さないように、主人の自由にっていうか、主人が好む女房になりたいと思ってたから。それで、19歳になってすぐ結婚したんですけど、非常に短気で多面的な部分が多すぎて理解できない。私のなかで。

――きっと先生の態度とかルールって、その日の気分によって変わったりするワケですよね？　このあいだは怒られたけど今回は怒られない、とか。

高森　それもあった。たとえば、赤く熟したトマトを出すとするじゃない？　すると、「トマトは青くて硬いほうがいいんだ」って怒るワケよ。で、今度は青くて硬いトマトを出すと、「なんだ、これは！」って怒んのよ。

――完全に先生のさじ加減なんですね（笑）。でも、そこで「あのときはああ言ったじゃない」っていうのは言えないワケですよね。

高森　そんなこと言えませんよ。

――キレポイントがよくわからないというか。

高森　そうそう。それがわかればね、まだ回避のしようもあったんでしょうけど、わからないから。だから、主人がリラックスしてても周りの人は気を使うのよ。いつもよかれと思ってやってることが、怒られちゃうんだもん。それから子どもができてくると、今度は私の意思だけじゃなく子どもの泣き声だとか、主人だけをかまってあげられないことが起こってくるでしょう。

――そうですよね。19歳で梶原先生とご結婚されて、一度、離婚されるまで、何年暮らしてたんでしたっけ？

高森　9年。

――その9年間のあいだに、4人お子さんを産まれてるんですよね？

高森　結婚した翌年に生まれて、あと下3人は年子。私、24歳のときに子どもが4人いたんだもん。

――相当大変だったでしょうね。梶原先生の子育ても独特というか、こちらの著書でも、娘さんにオマルでのおしっこのやり方を教える場面で、最初はやさしく教えてあげてた

のに、なかなかおしっこしないことに業を煮やした先生が、最終的に娘さんの頭にカップラーメンをぶっかけた、っていう……。あの話とかハチャメチャですよね。申し訳ないながらも笑っちゃったんですけど。

高森 笑っちゃうし、笑ってほしいんですよ。梶原の笑っちゃう部分が、私は書きたかったんだもの。

――日々、そういう大変な思いをされるなかで、篤子さんが家を飛び出したときは完全に「もう梶原先生にはついていけないな」っていう感じになっちゃってたんですか？

高森 ガスが溜まりすぎて、呼吸ができない感じだった。

――それは、先生が漫画原作者として売れ始めると同時についていけない部分というのも出てきたんですか？

高森 離婚したときはもう長者番付に載ったりしてたけど、確かに、貧しかった頃は離婚は考えなかった。逃げるかたちになるから。余裕が出てきた頃だったから、「アタシが望んでたのはこれじゃない」ってことを伝えられた部分は、あったかもしれないですね。

――先生は金銭的に恵まれても、性格的なものはあまり変わらなかった？

高森 どうでしょう、主人のなかでは多少は違ったかもしれない。ただ、「金持ちケンカせず」って言うけどね、そういうワケにいかないのよ、彼は。どうなったってケンカしちゃうの。

――昔からそういうところはあったみたいですもんね。ケンカ好きというか。

高森 粗野っていうか、男の本能っていうか、やっつけちゃいたいのよね、なんか。

――初めて会う人を対面でじっと見据えるようなことも、よくあったそうですけど。

高森 うん。それはね、威嚇して「この野郎」って思いで見てるんじゃないのよ。その人の全体をキャッチしようとしてるらしいの。困るよ～、ジーッと見られると。女房でも。

――会話はないんですか？

高森 ないですね。ただ、極端に目が悪いからジーッと、「どこを見てるんだろう……」っていう。で、そのあいだ、自分は動かないんですよ。「あ、見てる」って思うけど、「なんですか？」とも言えないから困っちゃうのよ。きっと何か主人のなかであるんでしょうね、その人を見る感覚みたいなのが。私は、主人という人は、人を信じることに一生を懸けた人だと思ってるの。信じることができたらハッピーだし、事実はどうあれ信じた者勝ちじゃないですか。そのことに人生を懸けたと思う。私、ずいぶん疑われたもん、いろんなことを。

――信じるまでにいろいろあるんですね。梶原さんのなかでのプロセスみたいなものが。

高森 でも、人って簡単に信じられないでしょう？ 信じるってことは、相手がもし裏切っても信じるんだよ？ 信じきるってことは、相手がこちらを裏切ったってことも信じないってことだから。普通の人は「人を信じたい」と、そんなに思わないでしょ？ 生きていくのに。主人は、「信じたい」って凄く思っていたと思うのね。

写真は梶原一騎が亡くなったあとに発見されたという辞世の句が刻まれた湯飲み茶碗。そこには「我が命、珠のごとくに慈しみ、天命尽くば珠と砕けん」と刻まれており、どこか詠み手の覚悟が感じられる。

――そのわりには、敵を作ってしまう感じの言動も多かった感じで。

高森 だから、正直というのはね、はたして本当にいいのかどうか。

――正直すぎて敵を作っちゃうんでしょうかね。

高森 そうそう。何も自分を取り繕うこともしないで、思ったとおりをストレートに。それを見抜いてくれないと「暴言ばかり、ワガママばかり」ってことになるけど、正直な人ですよ。ちょっと話は変わるけど、あの、アントニオ猪木さんの監禁事件があったでしょ。あんなことがあって、猪木さんは主人と面識があるのに「梶原なんて男は知らない」ってコメントして。

――凄いこと言ってたんですよね。梶原先生を「ファンですから、ただの」みたいな。

じーっと見るのは、その人の全体をキャッチしようとしてるらしいの

高森 ええ、ひどかったですよ、もう。「（梶原は）人間じゃない」みたいな言い方をして。それなのに主人は、「オレは猪木が好きなんだよ」って言ってましたからね。そんな当時も。

――へえ～、懐が深いですね。

高森 うん。「華がある人間がオレは好きだ」って。

――自分の取り巻きとのあいだで何があったとしても、プロレスラー猪木は好きだった、と。

高森 そう言ってましたよ、ずっと。そこをちゃんと一線を置けるのって凄いですよね。だから、話を戻すと私は結局、主人を信じられなかったワケ。家を出ちゃったから。「オマエだけはオレのそばを離れないと思ってた」って言ってたからね。

――離婚されたときは、何か決定的なことがあったんですか？ それとも積み重ねで？

高森 積み重ねがあって息ができなくなったんだけど、自宅の階段を上がっていったところに廊下があって、主人の部屋は2階なんですけど、女の人に電話してたんですね。でも、そんなのはもう飲みに行っては女の人と帰ってきたり、お風呂に入ったりしてるし、そんなことじゃ別れやしないんですよ。

――え、お風呂ってご自宅の？ そこにほかの女の人を連れ込んで、ってことですか？

高森 そうそう（さらっと）。

――ええ～!! それで篤子さんは……。

高森 帰るまで起きて待ってるんですよ。

――え～!? その女の人もたいした度胸ですね。

高森 だから、いないと思ったか寝てると思ったかでしょうけど、私は年中、応接間に見に行くワケですよ。「いまどういう状態だろ？ あ、まだいらっしゃる」、なぜかっていうと、皆さんがお帰りになったあと、主人にごはんを作らなきゃならないから。言われたときに作んないといけないから待ってるんですよ。

――凄い話だな～……。

高森 そうですか？ で、私がそのとき正直な話、どう思ったかっていうと、きちっとした、いい女房の姿をしてないんですよ。カーラー巻いちゃって、化粧落としちゃって。

――まあ、夜ですもんね。

高森 その女の人に、「あら何、梶原先生の奥さんってブサイクね」って思われたら困ると思って。主人が恥ずかしいだろう、と。そう思って、絶対、顔は出さなかったですね。

――「そんな女の顔は見たくない」っていう理由で出ないとかなら、まだわかるんですけど、それは一般の感覚ではないですよね。

高森 そうだと思いますね。でも、いま作って言ってるんじゃなくて、ホントに、そのときはそう思ってま

高森篤子

した。

—で、その女性が帰るまで篤子さんは待ってるワケですよね？

高森　そう。主人が寝るまで寝れないの、絶対。夜遅く帰ってきて、ピンポーンって鳴らしますから。それか「迎えに来い！」って言われれば、渋谷まで行ったり六本木まで行ったりして。

—確かに、心休まるときはないですね……。すみません、話が脱線しましたが、梶原先生が2階で女の人と電話をしていて、どうなったんですか？

高森　そのとき、すご〜く主人の口調がね、やさしかったのよ。その電話の応対が。それを聞いたとき、『妻の道―梶原一騎と私の二十五年』（91年発売の篤子夫人の前著）にも書きましたけど、「私はあの人をいま、あんなやさしい口調にさせてあげることはできない」と思ったんですよ。

—ああ……。

高森　その敗北感かな。やっぱプライドはあって、どんなに女性問題があろうと私は妻だから互角になっちゃいけない。主人が『巨人の星』を書いたあとでもそう。どうであれ私は妻だからへんなジェラシーは必要ないんだ、と思ってやってましたけれど。私にも結婚する前とか新婚時代はそんな口調だった。でも、いまの私は主人にあんなやさしい言葉を使わせることはできないんだと思ったときの敗北感ですね。

—それが一番の……。

高森　うん。そうなったら、もう頑張る拠りどころがなんにもないもん。そのときのやさしい口調を聞いて、ダメだと思ったんです。暴力を振るわれたり、物を投げられたり割られたりしても、「私がいたらないからだ」って思える。だけど、私が「うとましい」と思われたんだったら、私はいられないから。

—離婚されてから篤子さんが先生のところに戻ってこられるまでのあいだって、何年ぐらい空いてるんでしたっけ？

高森　えっと、そのときは私も37歳か38歳になってましたから。やっぱそれも9年ぐらい。そのあいだにも年中会ってるんですよ。だって、子どもの養育費を振り込んでもらわなきゃいけないのに、振り込んでくれないんですよ。その都度「ちょっと来い！」って言ってくるから、取りに行かなきゃいけない（笑）。で、いっぱいマンション持ってたからね、「風呂、入ってけ」とか、「メシ食ってくか？」とか、いろいろ言ってきて。

—先生が逮捕されたときっていうのはどういう感じだったんですか？

高森　やっぱり離婚中でしたけど、私は二人の子どもたちと、主人の持つ伊豆の別荘に住まわせてもらってたの。そこで、ある日、一人でテレビを見てたら「逮捕」って。そのとき私はカーペットを叩いて……ホントにあれを慟哭っていうんだね。ホンットにもう、私のあの人がそんなことになっちゃあ困るワケなのよ。あってはならないことなの！　でも、必ず吹き出すウミだったのよね……。それはわかっていましたから。主人と暴力団の付き合いとか、それは結婚して主人がいままで生きてきたかたちがね。

—何かしらそういうことになるんだろう、っていうのが。

高森　ありました。法律どおりに生きてきてない人だから。でも、私にとっては天皇陛下より高い人だから、それが地に落ちてはならないワケ。だから、身をよじってっていうか、身を絞ってっていうか……自分が初めて経験した涙でしたね。

—先生の拘留中は会いに行かれたりしたんですか？

高森　行きませんけど、電報を打ったんですよ。一生懸命考えて七五調で。それがまた「へんだ」って、警察では勘違いされたらしくて。

—何かの暗号じゃないかって（笑）。

高森　だからそのあと主人と会ったとき、「オマエがへんな電報なんか打つからだ！」って怒られたけど。

—どんな内容だったんですか？

高森　「いまは木の枝にとまって羽を休めているだけなのよ」と。「必ず日は昇るから」、そういうのを一生懸命なんやかんやって考えて七五調にしたんだけど、警察はそれを暗号かなんかだと思ったらしいのよね。

—結局、そのぐらい先生は警戒されていたってことですよね。逮捕されたときの先生は、覚醒剤の密売ルートへの関与を疑われていて、当局は、「梶原一騎は日本版マフィアのボスになりかねない」と踏んでいたフシもあったそうですけど。そういう話ってどういうふうに思われてました？

高森　日本っていうのは「人が集まるところにはとても危険性がある」って思ってるのね。マルボウや、ヤ○ザにしても、なんでも。

—実際に暴力団関係の事件捜査をする捜査四課が動いたっていう。

高森　そう、マルボウね。でも、そのときの刑事さん、主人が亡くなってからも、私、何回かお食事してるんですよ。もう定年退職なさってるんですけど、「自分の警察官としての人生で尊敬する人は二人です。一人は梶原先生だ」ってさ。だから、捜査当局が勝手に思っちゃったのよね。当時、主人の三協映画が制作していた映画で主演を務めていたショーケンの大麻の件（大麻取締法違反で逮捕）で。主人を含めてその周りにいる人間が、みんな覚醒剤と大麻をやっていたと警察は誤解したみたい。

—そうなんですか。

高森　うん。それと主人は第三のプロレス団体を作ろうと思ってたワケ。千代の富士とか、高見山とか、あういう人たちを集めて。

—ユセフ・トルコさんたちと動いてたみたいですね。

高森　そうです。もうホントに動いていたのよ。政界、財界、ヤ○ザ、芸能界、ほとんど全部にこう。そういう人間ってあまりいないじゃない。だから警察はフィクサーじゃないかって疑ったわけ。でも、いくらオシッコを検査したって全然覚醒剤の反応なんかなく、アルコールしか出ないのよね。

—暴行と傷害の容疑での逮捕は、あくまでも麻薬の密輸ルートの件を追求するための表向きの理由だったワケですよね。

高森　そうそう。でも、そういうの、嫌いな人ですよ。なのに事件が起こったら、ぱーっとクモの子を散らすようにね、みんないなくなっちゃった。それで、拘置所を出て半年もしないうちにすぐ病気をしちゃうワケだけど、あれがあったから家族もま

ⓒ島田十九八事務所

映画『四角いジャングル』の重要人物として登場したベニー・ユキーデと談笑している梶原一騎。強さを語りだすと真剣かつ止まらなかったというから、きっとこの場もおおいに討論がなされた場だったのだろう。

高森篤子

たね。ああいうことがなければ戻れなかったと思う。

——お嬢さんのオマルの件にしてもそうですけど、先生は普通の父親とは異なる部分がかなり多かったんじゃないかと思うんですけど、父親としてはどんな感じだったんですか?

高森 かわいそうよね。だって、30~50までの20年間で100も作品を作った男だけど、30から、亡くなる50までが子どもと父親業をやらなければいけないときだったのよ。それは梶原一騎ですごした20年だから、亭主や父親ですごした20年にはならないの。あんだけ忙しかったから。だけど、主人の随筆を読んだんだけれど、「父親というのは友だちであってはいけない」と書かれてあった。

——そういう父親像みたいなものが、ご自身のなかにあったんですね。

高森 うん。「怖くて、偉くて。父親が亡くなって、自分が父親に近い年齢になってきたときにやっと男の悲しさがわかったり、偉大さがわかったり。それでいいんだ」みたいなことを書いてたのを読んだことがある。主人は、お父さんに対してそうだったんだろうと思いますよね。

——倒れられる前と倒れられたあとの先生って、やっぱり印象が変わられましたか?

高森 全然変わりましたね。倒れる前はもう、自分でもわかんなくなっちゃってたと思うのね。必ず朝になったら人が集まってきて、その人たちにたかられちゃって。関係ない人の飲み食いから何からガソリン代まで全部主人の会社のツケで。秘書も運転手も社員もいて、もちろん主人を尊敬し支えてくださった方が大半だけど、その人たちのなかにも、いろんな人がいて……。できればうまく自分のほうへ、一銭でも多くかすめたいみたいな感じの人たちに囲まれてていたんじゃないかしら……。

——なるほど……。

高森 だから、たまに伊豆のほうへ来るといつも言うんですよ。「自分のガキを4人も産んだ女は、気が休まるなあ」って。きっと、ほっとするんでしょう、私といると。一緒に話したりなんかしてて、主人がお酒を飲みますよね。で、ふっと振り返ったとき、もうカーッて寝てるの。もう、それを見たとき、かわいそうでならなかった。こんなに疲れてるんだ……って。

——梶原一騎であり続けることで、精神的にも相当疲れてたんでしょうね。

高森 それはね、学歴のことでも、両親の愛情に関してでも、コンプレックスを抱いていた男が女房に逃げられちゃったら、世間にどういうふうなポーズをとったらいいのか。あの梶原一騎のポーズを守っていく以外なかったと思うの。そこは申し訳なかったと思うんだけどね。

——倒れられたあとの梶原先生は、そういうことから解放されたところもあるんですかね。

高森 うん、そういう有象無象がいなくなったっていうのと、体力がなかったせいもありますけど、アクが抜けましたよね。退院後に書いた『男の星座』のなかでも、自分が学歴をごまかしてたことや、感化院は親に入れられたってこととか、初めてすべてを世間に告白できたからね。そうするともう偉ぶらなくっていい、カッコつける必要がない状況にあったと思うの。それまではず~っと鎧を着て生きてたと思うんだよね。

——梶原一騎という鎧を。

高森 病気になって、それが必要なくなったのよね。でも、やっぱり短気は残ってんのよね。そこは治んないの。前の本には書いたけど、やっぱり毒があってもなんでも、牙がある梶原一騎のほうがいいのかなあって思いました。だって私の知る梶原じゃないワケだから。

——でも、退院後は多少は丸くなられたワケじゃないですか。

高森 そうです。そしたら尊敬できるようになってきた。私は梶原以外の男性を知らなかったから。離婚して初めてほかの男性と恋愛したり。

——あ、そういうのはあったんですか。

高森 うん。離婚後は遊んだから。で、やっと比較対象ができるワケよ。

——篤子さん、ビックリしたんじゃないですか? 梶原さんがいかにほかの人と違うか。

高森 そういうことじゃなくてね、いかにほかの男が主人より劣ってるか、って。

——うわ~、そこですか!

高森 うん。主人にないのはなんなのかっていうと、やさしさ、それだけだったのよ。

——やさしさだけがなかった(笑)。

高森 私が思う、やさしさよ。やさしさはあったんでしょうけど、私が感じられないからね。逆に離婚後、私が好んだ男性、恋愛対象になる人ってのはやさしさだけの男だったのよ。で、アウトローが多いの。そういう人っていうのは。相手を傷つけないような思いやりのある言葉を言いながら、根っこが生えてないとかね。

離婚後、いかにほかの男が主人より劣ってるかがわかったんです

——篤子さんご自身が、どっちかっていうとアウトローっぽい男性に惹かれるっていうところが。

高森 あるんです。どうしてわかんの?(笑)。

——いや、いまお話を聞いてたらそうなのかなって。

高森 そうなんだよね。だってね、こないだ凄いショックだったの。中城健先生(梶原原作の『カラテ地獄変』などの作画担当)っているでしょ。あの人にパーティで会ったんだけど、「梶原さんは男のコワモテだ」と。「奥さんは女のコワモテ」って。「何それ、先生!」って言ったんだけど、ああ、そういうふうに受け取られるかなあ、とか思って。

——アハハ。でも、梶原先生にはやさしさだけがなかったっていうのも、先生と篤子さんの生活を表わす象徴的な話というか。

高森 そうなの。私はそこばっかりに目をくれて、不服っていうか、幸福感を得られなかったって思ったのね。ほかはもっと素晴らしいのにね。

——そこで気づくワケですね。離婚して初めて。

高森 そう。初めてわかったの。責任感が強いってこととか、知識がどれだけ豊富かとか。

——「そこを右折」とか一般常識的なことはともかくとして(笑)、やっぱり知識は凄かったでしょうしね。

高森 質問すれば必ず答えてくれるから。博識家でしたね。クイズ番組に出たことあったけど、もうホントにいいとこまでいったから。

——ところで篤子さんは、先生が亡くなられたあと、先生の作品をけっこう読み漁ったって書かれてたじゃないですか?

高森 はい。全部は読んでないですけど。

——じゃあ、先生の作品で、どの作品が一番好きかって聞かれても、それはちょっと答えにくいですか?

高森 それはもう、流れてるテーマであり映像で観たりですけど、私は『男の星座』が一番好きですよね。

——いろんな鎧を脱ぎ捨てて、すべてをさらした梶原一騎の物語が。

高森 そうですね。主人が生きてた頃、高橋貞二っていう役者と仲良くなって年中一緒に飲み歩いてたとか、一度も聞いたことがないの。あと、私と結婚するとき「力道山が仲人してくれる」とは言ってたけど、どのぐらい仲良かったかも聞いたことがないの。結婚してから力道山の結婚式の引き出物を見せてもらって、「ああ」とは思いましたけど、そういうこと言わないのね。なんか、ひけらかすように思われると思うの

かしら。

——あまり交友関係を話さないんですか。

——最後に、梶原先生が亡くなられたときのお話をちょっとお聞きしたいんですけども。

ら。そのとき書いてたのが『男の星座』で。

——なるほど。

——父親像を守ろうとしたんですね。

高森 そう、最後まで。ホントはね、

の世界で名を馳せたいと思っていたのに、結局、「純文学作家じゃない、劇画作家」っていう、己の分というも

あなたの作品は多くの人に影響を与えているのよって伝えてあげたい

かしら。

——あまり交友関係を話さないんですか。

高森 うん、有名な人と仲良かったってことを言わない。離婚してるときのことは私もあまり知らないことが多いですよね。だから勝新太郎さんが主人のところにお金を借りに来たりって話とかも全然知らないし、岩城滉一さんが主人の車を売ってくれって言って、スポーツカーを買ったとか、そういう芸能関係とかヤ◯ザの関係とかいっぱいあるんだけど、言わないんですね、そういうことを。

——へえ〜。でも、『男の星座』が一番っていうのは少し意外な気もします。

高森 自分が若い頃を思い出して、私がこれを書いてるみたいに……。

——ああ、そういうことなんですね。

高森 そういうことなのよ。その渦の中にいるときはそれは渦のかたちに見えないけれども、離れて見たときによ〜く観察できて。周りの人間のこともね。講談社を見上げるところで終わってるところがね、すっごいいいですよね。やっぱり神業なのかな。やっぱり死に様ってのは生き様と共通するところがあって、「こうなりたい、こう生きたい」、そういう思いでずっと貫いて生きていくと、死に際っていうのもそういうふうなかたちがあるんじゃないかと思う。

——最後に、梶原先生が亡くなられたときのお話をちょっとお聞きしたいんですけども。

高森 私、主人が亡くなったあと「辞世の句」を見つけたんですよ。書斎の鏡の横に白いのが見えたから、なんだろう？ と思って引き出したら、古くなったカレンダーを破いた裏に「辞世の句」が書いてあったのね。「我が命、珠のごとくに慈しみ、天命尽くば珠と砕けん」という。それを読んだときにね、「ああ、覚悟してたんだ」って。それこそ最後は、何回も入退院を繰り返してましたし、何を食べてもむくみが出てくるし、熱は下がらないし……。そんななのに「先生、今日は仕事だから点滴、左にしてください」って。なんで仕事なんかするんだろうと思ったけど、仕事に対しての熱意って凄かったから。そのとき書いてたのが『男の星座』で。

——なるほど。

高森 本人は「入院したくない」ってことをずっと言っていたんですけど、栄養つけなきゃよくならないから、最後は入院することになって……。亡くなる前の夜、「じゃあ、子どもたちを起こしてきますから」って言ったら、「待て。もうちょっと寝かしといてやれ」って、呼ばせなかった。で、朝になってから子どもたちを整列させて、一人一人の顔を見て「頼んだぞ、行ってくるからな」って。それで私がガレージからベンツを門のところまで出して、主人を車に乗せたんですよ。そしたらもう、さっき子どもたちに見せてた顔と全然違うの。ひっくり返って、苦しそうにしてるのよ。「パパ、大丈夫ですか、救急車を呼びましょうか？」って言ったら、「呼ぶな！」って言うの。私がしばらく車を走らせたあとで、「ここらへんでいいから、救急車を早く呼んでくれ」って。

たかもり・あつこ■梶原一騎の妻。19歳のときに梶原一騎と結婚。その後、一度離婚するが、梶原一騎48歳、篤子夫人40歳のときに二度目の結婚式を挙げる。著書に『スタートは四畳半、卓袱台一つ』『妻の道——梶原一騎と私の二十五年』があり、ともに梶原一騎との壮絶な人生を綴っている。

——父親像を守ろうとしたんですね。

高森 そう、最後まで。ホントはね、寂しがり屋で臆病だったかもしれない。そういう男が誰にもそれを悟らせずに男らしさにこだわって最後まで生きて……。ホントに男らしさで生き抜いた人だよねえ(しみじみと)。あんまりいないよね。いまはかえって「らしさ」って言葉がセクハラみたいに言われるじゃない？ でも、男は男に、女は女に生まれてきちゃったんだから、それを100パーセント生きるには、「らしさ」にこだわって生き抜く以外ないんですよ。どんだけ真剣に「男らしさ」にこだわって生きるかってことに意味があると思うわよ。

——いまの草食系の若者とかに聞かせてやりたいですよね。

高森 ねえ。彼女ができるとさ、自分はこう思って生きていきたいのに、彼女に合わせていくじゃない。それは女が合わせなきゃいけないのよ。なのに、いまは男のほうが「彼女が逃げちゃうかもしれない」と思うからダメなのよ。それは男が弱くなったのか、女が強くなったのかわからないけれど、女に気を使いすぎる。それが女には幸せと思うでしょ？ ところが、じつは女って男らしい男に憧れてるのよ、意外に。かといって、主人みたいのじゃ困るけど(苦笑)。

——極端すぎますもんね。もしも、いま梶原先生が生きてらしたら、いまの先生にかけてあげたい言葉とかあります？

高森 私はね、主人はずっと純文学の世界で名を馳せたいと思っていたのに、結局、「純文学作家じゃない、劇画作家」っていう、己の分というものに最後まで満足していなかったでしょ。だけど、いまでも主人が生きてたらね、「あなたが書いたものは純文学作者の人よりも、多くの人たちに影響を与えているのよ」って、それを伝えてあげたい(涙ぐみながら)。……ごめんなさい。アハハ、そういうふうに、主人が生き返ったら言ってあげたい。

——確かに、先生が亡くなられて25年経っていまだに、今日も大泉学園の駅を出てすぐに『巨人の星』のパチンコのポスターが貼ってあったりとか、昨今の伊達直人運動もそうですし、『あしたのジョー』も映画が公開されたりだとか。またいまちょっと梶原さんブームですし、みんな忘れられないんですよね。

高森 ほしいのよ、やっぱりそういうのが。

——そう思います。今日は貴重なお話をありがとうございました！

【11年2月10日／都内・高森篤子氏のご自宅にて収録】

梶原一騎伝 夕やけを見ていた男 斎藤貴男

取材秘話から
タイガーマスク騒動まで
梶原一騎を最も詳しく
書いた男に直撃!

世間が感じた“梶原一騎”に対して「そんなはずない」と思いながら取材してました

ジャーナリスト
斎藤貴男

これを読めば梶原一騎のすべてがわかる! と言っても過言ではないほど、入念な取材をもとに構成されている斎藤貴男の『梶原一騎伝 夕やけを見ていた男』。本書ではあらゆる関係者の生の声がちりばめられているのだが、この一冊を仕上げるにあたり、どのような取材を行なっていったのか。また、なぜ梶原一騎に着目したのか。自身も大の梶原一騎ファンだという斎藤氏本人に話を聞いてみた。

聞き手／高崎計三

——今号は梶原一騎特集ということで、『梶原一騎伝　夕やけを見ていた男』を書かれた斎藤さんにお話をうかがいたいと思います。

斎藤　よろしくお願いします。

——ほかの著書、たとえば『カルト資本主義』なども読ませていただいているんですが、社会派ルポを中心に活躍されているなかで、この一冊だけ……。

斎藤　これだけ毛色が違いますよね（笑）。単行本としては2冊目なんですよ。1冊目（『国が騙した——NTT株の犯罪』）が93年に出て、『夕やけを見ていた男』が95年。1冊目とほぼ同時進行で進めていたんですけど、93〜94年のあいだにイギリスに留学に行ってて、作業がストップしていた時期があったんです。最後の1章ぐらいだけ残して日本を出て、向こうでも書いたんだけど、何しろデビューして日が浅いから出版社の意向も聞いたりしなきゃいけないじゃないですか。だから戻ってきてからにしましょう、と。

——では、本になるまでにはわりと時間がかかったわけですね。

斎藤　そうですね。もともとは文藝春秋が出していた『マルコポーロ』という雑誌の企画で30枚ぐらい書いたのが基になってて、それが92〜93年ぐらいですね。

——なるほど。一連の社会派の著書とのテーマ的なギャップを感じながら読んでいたんですが、「あとがき」で斎藤さんご自身が梶原一騎の大ファンだと書かれていて、やっと納得がいったというか（笑）。

斎藤　そうそう、ファンだからってだけですよ（笑）。

——でも、ファンだからといって必ずしも評伝を書くわけではないですよね？　そこで梶原一騎を取り上げようと思った理由はなんだったんですか？

斎藤　確かに僕はあくまでファンで、ライターとして取材対象にすることはまったく考えてなかったんですけど、『マルコポーロ』の編集者が勧めてくれてたんですよね。僕は90年いっぱい頃まで同じ文藝春秋の『週刊文春』にいたんですけど、そのしまいの頃には飲むたびに「斎藤さん、やんなよ！」って言ってくれてたんですよ。それで、その気になってね。

——そういう経緯だったんですね。

斎藤　それでほかのと毛色が違うということで話すと、その点、じつは僕にとってはなんにも変わってないんですよね。『機会不平等』とか、ほかで書いてることは、梶原一騎先生から学んだことを僕なりに反映させてるつもりなんですよ。

——そうだったんですか！

斎藤　梶原一騎は右翼チックだとかなんだとか言われて、確かに右か左かっていったら右っぽいけど、いわゆる「右翼」じゃないよね。個人の自由とか尊厳といった価値にもの凄くこだわった人だと思うんです。自由というのは戦後民主主義的な自由とはちょっと違うかもしれないけど、ほかから介入されたり、自分が何者かに何かを強制されたりとかっていうのを極端に嫌った人なんですよ。作品の登場人物たちもみんなそうなんだけど、僕もそうありたいと思ったし、自称ジャーナリストとしては、言ってみれば梶原作品の登場人物みたいな生き方を許さないような社会の圧力が許せないんですよね。

——「思い込んだら試練の道を行くが男のド根性」ってヤツですね。

斎藤　そういうのにしろ、いまの時代に『巨人の星』とか『あしたのジョー』なんかが出てきても、凄く滑稽に見えちゃうと思うんですよ。そもそもそういう生き方はたぶんできないですよね。それはただ単に時代がそうなってるってだけじゃなくて具体的な問題がいろいろあって、たとえば『機会不平等』で批判したような新自由主義的な構造改革だったり、監視社会だったりとか。それが許せないという意味では梶原先生とまったく同じつもりなんですよ。言ってみれば原点みたいなところで、いま考えればもうちょっと経ってから出せばよかったのかもしれないけどね。

——活動の根底にあるのが梶原イズムだ、と。しかし、かなり幅広く関係者を取材さ

『夕やけを見ていた男』はもう この時期にしか出せなかったと思います

もともと梶原一騎作品の大ファンだという斎藤氏。書斎の本棚にはあふれんばかりに梶原一騎作品が。さらに、荘司としおの『夕やけ番長』や川崎のぼるの『巨人の星』などのご本人直筆のサイン画も多数。まさに梶原ワールド全開である。

写真は当時の取材ノートの数々。偶然に開いた篤子夫人への取材では「これは、（梶原一騎の）好きだった食べ物なんかを聞いてますね」と斎藤氏。

れてますよね。取材期間も相当だったんじゃないですか？

斎藤　なんだかんだで1年ぐらいはかかったかな。まだ駆け出しだったからヒマでしたし（笑）、そういう意味ではこのときにしか出せなかったと思うんですよ。関係者も年を取っちゃって、このあいだにもずいぶん亡くなってますからね。

――そうですよね。

斎藤　それに、梶原先生が亡くなったのが87年で、5～6年ぐらい経ってるじゃないですか。トラブルだらけだったから、本人が生きてたり亡くなってすぐとかだったら思い出したくないという人がほとんどだっただろうけど、僕が取材した頃はもうしゃべってもいいかなって頃だったのかな、と。それに関係者たちも年を取って、いま言っておかないとというのもあったんでしょうね。そういうのが多かったので、取材は非常にやりやすかったですよ。

――つのだじろうさんについては文中で「梶原がらみのすべての取材を断っている」と書かれてましたが、どうしても取材できなかったのは、つのださんぐらいですか？

斎藤　つのださんにはハッキリ断られましたね。白冰冰（パイ・ピンピン）は台湾に行って話を聞きたかったけど、お金がなくて行けなかった（笑）。それ以外は、取材を申し込んで話を聞くのにはそれほど苦労はなかったですよ。

――それは少し意外でした。

斎藤　条件が揃ってたんですよ。僕が梶原一騎の大ファンで単行本もほとんど持ってて。これを集めるだけでも大変でしょうしね。それと、実弟の真樹日佐夫先生とはもともと面識があって、僕のスタンスをわかってくれてたんですよ。

――といいますと？

斎藤　真樹さんが梶原一騎のことを書いた『兄貴』という本に、僕がまるで道場破りみたいに出てくるんで、詳しいことはそちらを読んでほしいんですけど（笑）。僕が『週刊文春』にいたときに、真樹さんがペップ出版というところから『大山倍達との日々――さらば、極真カラテ！』という本を出したんですよ。当時はまだ揉めてたから極真を揶揄するような内容で、文春としてはよくあるような、本を紹介しながら記事を作るというかたちにしようとしたんです。それで真樹さんのところに行って、そのあとに極真にも行ったら、極真がうるさくてね（笑）。

青年の頃に極真空手を習っていた経験が活き、真樹先生への取材もスムーズだったという。左下の黒帯のりりしい青年が斎藤氏である。

関係者たちも年を取って「いま言っておかないと」というのもあったでしょう

――うるさかったですか（笑）。

斎藤　大山さんとは会えたんだけど、周りをズラッと取り囲まれて、そのなかにネチネチネチネチ言うヤツがいてさ（笑）。それで編集部に持って帰ったら、「なんかめんどくさいからもうやめようよ」ってことになっちゃったわけなんです。それでまた真樹さんのところに謝りに行って、僕も若かったから相手によく思われたくていろいろ言うわけですよ。実際、学生の頃に極真に行ってたんですけど、「自分も学生時代に極真に通ってまして、押忍」なんて言ったら、ああいう人だから「じゃあ明日から来なさい」と。そう言われたら行かないわけにいかないでしょ？

――確かに（笑）。

斎藤　それで半年ぐらい通ったかな。結局、とても時間がなくて行けなくなっちゃったんだけど、そんな経緯もあったんですよ。あれで僕が口ばっかりで行かなかったら相手にしてもらえなかったんじゃないかなと思うんですけど、まあ続かないなりに通って、それなりに根性見せたから、「少しはしゃべってやってもいいか」ってことじゃないかと思うんだけど。

――やはり真樹さんは幼少の頃から知っているわけで、取材の比率も大きかったんですよね。

斎藤　そうですね。取材した回数は一番多かったんじゃないかな？

――真樹さんへの取材はどうでしたか？

斎藤　楽しかったですよ（笑）。会ってくださいってお願いすると、空手の稽古が21時ぐらいに終わるから真樹ビルの応接室で待ってろって言われるんですよ。それで行って待ってると、21時になんか終わらないんだよね。22時ぐらいにやっと終わるわけ。それで真樹さんが上がってきてシャワーを浴びて、22時30分ぐらいから始まるんだけど、素直な取材なんかさせてくれなくてさあ。すぐ「飲みに行くぞ」って言って連れていかれて（笑）。

――やっぱりですか。

斎藤　でも飲んでるときにいちいちメモ取るのも野暮だから、酔っぱらった頭で忘れないように、忘れないようにって、帰りのタクシーでメモ起こしたりとかね。

――それは大変ですね（笑）。

斎藤　一回は、なんだかオリンピックの柔道の候補になった人がいつの間にか合流してて、なんだかんだチャチャ入れてくるわけですよ。それで梶原一騎の陰の部分みたいな話題になったときに、「斎藤さん、そんなこと書かなくていいじゃないですか」って絡んでくるんだよ。それで真樹さんが「おまえは黙ってろ。斎藤くんはいま、取材ってのをしてるんだ、取材ってのを」ってやりとりがあったりして、緊張感がありましたけどね（笑）。

――イヤな緊張感ですね（笑）。やっぱり取材に酒はつきものでしたか。

斎藤　格闘界の人はメシね。かならず「メシ食いに行こう」って言われて、メシ食いに行っちゃうとあんまり取材にならないから本当は避けたいんだけど、付き合わないと「こんなやつは仲間じゃない」と思わ

れそうだし(笑)。だから、あとの予定が入れられないんだよね。

――飲まされたりもしますしね。

斎藤　16時に戻って次の取材を18時に、なんて予定してもぐちゃぐちゃになっちゃうからね。格闘界の人のところに行くときは、あとは入れないようにしてました。

――取材手配はそんなに困難ではなかったんですね。

斎藤　最初の取材は『マルコポーロ』用だったから、ほかの主な関係者は編集部が段取りをつけてくれましたね。高森篤子さんも大山倍達先生も。篤子さんもよくわかってくれて、梶原一騎のお父さんのところに出入りしてた書生さんみたいな人を紹介してくれたりね。

――文中に出てきますね。

斎藤　ただの取材っていうんじゃなくて、共感してくれた人が多かったですね。僕が梶原一騎に対して抱いてた思いを、「よくわかってくれたね」っていう感じで共感してくれた人がずいぶんいっぱいいました。大山先生も、もちろん覚えてもらえてるはずもないんですけど、やっぱり「昔やってました、押忍」って言ったのが大きかったみたいで(笑)。

――空手の経験がここで活きた、と(笑)。この本の取材では、もう大山総裁の口は重くなかったんですか?

斎藤　うん、まあいろいろあったけどもう梶原一騎は亡くなってるし、ご自身も晩年ですからね。この話を聞いて単行本が出るまでのあいだに亡くなってしまわれた。だから晩年だから、やっぱり話してくれたのだと思います。とくに梶原一騎に対するラブコールみたいなものは凄くあったんじゃないかなあ。梶原先生が亡くなる前の、葉書の話が出てくるでしょ?

――入院中に匿名で届いた励ましの葉書を、梶原一騎が「これは大山館長からだよ。俺にはわかるんだ」と奥さんに言った、というエピソードですね。

斎藤　あれなんかも含めて、話したいことはずいぶんあったみたいですよ。

――題材自体が危ない話もいくつもあるわけですが、取材はどうだったんですか。

斎藤　関心の持ち方次第ではもっと危なくもなっただろうけどね。たとえば映画の利権のこととかはあまり深入りしなかったけど、大日本プロレス(現存のものではなく、梶原一騎が設立を目論んでいた新団体)の旗揚げの話だとか。ただまあ、もう全部過去の話ですからね。死んで何年も経ってからの取材だから、そのへんに深入りしなければ危ないってことはなかったですね。読んでもらえばわかるけど僕は漫画作品だけのファンで、アニメとか映画は興味がなかったんで、どうしてもそっちは取材が浅くなった。

――名作を数々生み出して絶頂の時期もあれば、後年はかなり荒れてきますよね。梶原一騎のそんなジェットコースター的な人生のなかで、書くにあたって関心の比重が大きかったのはどちらですか?

あらゆる取材がスムーズにいったのは「タイミングがよかったから」と話す斎藤氏。病床の梶原一騎に匿名で送った大山倍達の励ましの手紙のエピソード(本書参照)などは、ホントによくぞ語ってくれたと思うばかりだ。

斎藤貴男

斎藤　どっちっていうことはないですけどね。だから僕の当時の思いを一言で言えば、子どものときに凄くいろんな影響を受けた作家さんだったわけですよ。だけどその作家が、僕が高校とか大学の頃には落ち目といったら失礼だけど、凄く荒れてた時期だったんですよね。ちょうどその頃から、僕は凄くイヤだったんだけど、『巨人の星』とかスポ根ものをからかうような調子の論調が流行りだしたんですよ。僕は見たことないけど、そういうアニメを流して笑いものにするテレビ番組だったりとか。スポ根の泥臭さとか汗臭さをからかうような雰囲気というか社会風潮が出てきて、そのときには本人は荒れてるから気に食わないことがあると暴力的に乗り込んでいくみたいなイメージが強まって、よけいにバカにされるわけですよ。

――それ見たことか、と。

斎藤　それで僕が学校を出て新聞社に入ってすぐぐらいの頃に、事件を起こして捕まっちゃうんですよ。幼少期にあれほど影響を受けた作家が、挙げ句のはてはヤ○ザもんかよ、みたいな。凄く残念というか、絶望的な気持ちになったんです。だけど、コイツは暴力団みたいなヤツだからといって切り捨ててしまっては、周りのマスコミと全然変わらないじゃないか、と。とにかく自分が影響を受けた作品は素晴らしかったのは間違いないんだし、ジャーナリストを名乗ってる以上、ノンフィクションライターとしてはこの人の全人生を一度追いかけてみたい、と。

――当時の漫画編集者の方々にもたくさん取材されてますが、その方たちも梶原一騎に対しては複雑な思いを持っていたわけですよね。

斎藤　そうですね、その人たちに話を聞いて、単なる暴力団じゃないというのはよくわかりましたしね。晩年になって落ちていったのを、皆さん、ただイヤだなあと思うだけじゃなくて、本当に心から悲しんでましたね。まあそれも亡くなったから言えることで、生きてるときは本当にたいへんだったと思うんだけど、でも亡くなってからしばらくしてそういう思いを話してくれるということは、やっぱり両方の思いがあったんでしょう。ちばてつやさんなんかもそうでしたけどね。

――ちばさんはよく取材に応じたなと、読んでいて思いました。

斎藤　最近はよく出てるけど、梶原さんについて話してもらったのは僕が初めてじゃないかな?

――梶原一騎の話題がわりとまだタブーだった頃ですよね。

斎藤　タブーからタブーでなくなるギリギリのところというか。この作品のおかげだと言いたいところだけど、そうじゃなくて世の中全体がそうなりかけてた感じだね。これのちょっと前に、燕木和夫さんという人が『劇画王　梶原一騎評伝』というのを出したんですよ。それは取材はなしで、自分の思いと資料だけで書いた本なんだけど。それから高取英さんという漫画評論家が、いろんな人の文章を集めて『梶原一騎をよむ』というのを出したりして(注・どちらも94年刊)、再評価の時期だったんですね。

――そういう流れだったんですね。

斎藤　亡くなって6~7年経ってるから直接怖くはないし、あとはバブルで浮かれた時代から少しいろんなものを考え直そうという気運が高まってたんじゃないで

すかね。

——先ほど、単なる暴力団ではなかったという話がありましたが、斎藤さんにとってもそれは発見だったわけですね。

斎藤　書き始めたときに一番怖かったのは、やっぱり作品は作品、本人は本当にどうしようもない人だった、という結論になっちゃうことだったんですよ。自分自身もイヤだけど、そんなんじゃ、本にしたっておもしろくなんかないじゃないですか。単なる暴力団だけど、なぜか話を作るのだけは上手だったなんて。ただのコワモテだったら人間的魅力もないわけで、だからそういうのを再発見というか……そんなはずはないと思いながら取材をしてましたからね、それが裏づけられたのはうれしかったです。

——梶原作品といえば「男！男！男！」という「男らしさの氾濫」という部分があまりにも大きいわけですが、その源流は結局のところどこにあったと思われますか？

斎藤　源流そのものは何も梶原一騎だけじゃなくて、あの世代の男の子が理想として叩き込まれた生き方みたいなものがあったんでしょうね。だけどなかなかみんなそのとおりになんて生きられやしなくて、身過ぎ世過ぎで負けていくんだけど、梶原一騎はそこに凄くこだわったってことでしょう。ケンカするにしても絶対に群れないとかね。蒲田の愚連隊時代には互いに刃物を持ってないことを確認してからケンカしてたという話が出てくるけど、ケンカなんだから何やったって勝てばいいんだろというのがいまの時代じゃないですか。だけどそこにあえて無理矢理こだわるっていうね。

——そこにプライドを持つ、と。

斎藤　僕は戦前戦中の封建的な男尊女卑が正しかったなんてまったく思わないけど、そういう無理したやせ我慢というのを、この人はずっと持ち続けたんだろうな、と。実際そんなこと誰もしないから、ないものねだりとしての理想像として僕らの世代はあこがれたのかもしれないですけど。

——それにプラスしてコンプレックスがあったということですよね。

斎藤　その点で理想と現実がどんどんずれていったのかもしれないですね。まああえて理屈をつければそういうことになるんだろうけど、でもこういう人は希望どおりにいってようがいなかろうが、結局はこうなっちゃうんじゃない？（笑）。

——あ、やはり（笑）。この取材と執筆を通して、梶原作品の見方や印象が変わる部分はありましたか？

斎藤　いや、まったく変わらなかったですね。取材というのは思い込みを裏切られるのが醍醐味だという僕の持論を照らしたらいいことかどうかわからないんだけど、大筋では自分が思ってたとおりの人だったなあと思いました。

——2冊目で一番影響を受けた作家の評伝を書かれて、達成感は大きかったんじゃないですか。

斎藤　ああ、それは凄くありましたね。まだたいして仕事もない時期だったからこれにかかりっきりになれたし、自分としては凄く幸せな仕事でしたよね。

——最近もまたあちこちで『あしたのジョー』が話題になったりもしていて、連綿と続いてますよね。

斎藤　続いてるというか、この本が出たときも再評価が起きてたけど、梶原一騎ブームというのは、ときどき世の中の「渇き」として現われるんじゃないかと思うんですよ。

——「渇き」ですか。

斎藤　いかにもこういう価値観が消え失せちゃったなあということに対して、それを欲する人たちが一定程度現われる、と。リアルタイムで体験した人が「あの頃はよかった」と言って戻っているだけだったら、こんなにはならないでしょうからね。ただ、僕としてはそれでは不充分で、読むんだったらもっとちゃんと読んでほしいというかね。

——ちゃんと読む、というのは？

斎藤　その「渇き」っていうのは、似たようなことで言うと日の丸・君が代とかともダブるんですよ。本当に伝統とか歴史だとかをみんなが実感しながら生きてるわけじゃなくて、ああいうものはいまの世の中がなんでもアメリカになっていくことへの反発とかがかなり大きいわけですよ。これは僕の最近の仕事の範疇になってくるんだけども、グローバル経済のもとで一人一人の人生がどんどんアトム化されていくというか、バラバラにされていく。共同体的な意識がどんどん解体されていくなかで、ああいうものは統治する側が国民統合の手法として使うわけですよ。

——そうですね。

斎藤　だけど、一人一人の人間の心としては、なんでもアメリカに染まっていく。それは本当の俺たちのアイデンティティとは違うんじゃないかっていう、アイデンティティへの渇きみたいなものがそういう政治的な方便へ引き寄せられる。だからそれが利用されてるっていうのが僕は気に食わないわけだけれども、この梶原一騎人気みたいなものも、一人一人の思いはそうだと思うんですよね。だけど、それが利用されていくかたちっていうのがどうしても強くて、そのときに一人一人がちゃんと抵抗しきれてないというかね。

——流されていってしまっている、と。

斎藤　梶原一騎は右翼的に見えるけども、彼にとって最も大事なのは個人だって言いましたよね。一番大事な個人の部分が侵されているのに、ブームの側がそれに対して明確な反抗ができてないっていうところが非常に不満なんですよね。たとえば「タイガーマスク運動」というのが最近あったでしょ？

——続いてますね。

斎藤　最初はパチスロの宣伝じゃないかとか、映画やるからかとか、いま思えばジョーの映画も引っかからないわけでもないんだけど（笑）、最初のきっかけがなんであれ、ああいうかたちで広がったことは

最近の“伊達直人運動”について斎藤氏は「渇きとして梶原一騎ブームが現われる」と分析しており、こうした個人の行動については穏やかだが、騒動を受けての政府の発言に対しては辛口。ちなみに、このサインも辻なおき氏ご本人に描いてもらったものだ。

斎藤貴男

基本的にいいことだと思うんですよ。だけど、『タイガーマスク』の最初のほうで、伊達直人が「誰もみなしごたちのことを考えないから俺がやるんだ」って言うんですよ。タイガーマスクはそこが一番大事なところじゃないかと思うんです。で、実際にタイガーマスク運動やってた人をいくつかのメディアが取材したりもしてるんだけど、裕福な人が寄付としてやってるわけでは決してないんです。みんな自分自身も派遣労働者だったりしてたいした生活もできてないのが、なけなしの金をはたいている。どうしてそんなことをやったのかっていったら、深いところはわかんないけど、ハッキリ言って自己満足ですよね。

——究極的にはそうなるでしょうね。

斎藤　俺は社会のなかではちっちゃな存在だけど、これぐらいのことはできるんだと。だから俺は偉いと、ささやかに自分をほめてあげるっていう心理。そこには自己満足プラス世の中への怒りとかアンチテーゼとかが含まれてるわけですよ、タイガーと一緒で。新自由主義の構造改革で働くところがなくなっちゃったとか、負け組には冷たい世の中だとか、そういうものに対して怒りとか反発がある。なのにそういうことがちゃんと語られないで、たとえば石原慎太郎・東京都知事が「世の中捨てたもんじゃない」とか言うわけですよ。それは評論家が言うことで、「児童福祉をぶっ潰したオマエがなんでそんなこと言えるんだ」っていうね。

——ごもっともです（笑）。

「赤城忠治だったらどうするだろう」というのが僕のなかの一つの基準ですね

斎藤　まあでもコイツはこんなヤツだから、こう言うだろうなと思ってた想定の範囲内なんだけど、菅直人になると、いくらなんでもこれだけは言わないでほしいなということを言っちゃうんだよね。

——なんですか？

斎藤　「新しい公共」なんだって。ちょうどいま国会で、寄付金控除制度の見直しというのが出てるんですよ。税制改正で。いまでも国が認めた特定の団体に寄付すれば税金が控除されるというのはあるんだけど、上限何十万円というのが決まって て、これがアメリカと違って寄付金文化を育ててこなかったと。だからこの改正で慈善事業がもっと増えるんだという理屈が前からあって、それが国会に出てる。それとくっつけちゃったわけですよ。

——なるほど。

斎藤　タイガーマスク運動みたいに寄付をしたい人たちはいるんだけど、どこにすればいいのかわからない。だから今度の改正で示してあげるんだとね。でも、そうじゃないだろ、と。慈善事業がいけないとは言わないけど、多くは金持ちが新しい節税手段をほしがってるだけなんだから。アメリカの慈善事業は前提としてもの凄い金持ち優遇の社会があって、ついでに彼らの精神的な充足も満たしてあげるという施しのメカニズム。そういう実態を一切抜きにして、またこの野郎は小泉改革を批判して政権を獲ったくせに、同じこと考えてやがるのか、と。そういう利用のされ方をしやすいんですよ。

——ある意味、思うツボなわけですね。

斎藤　ただ石原とか菅とかがやるのはしようがないんだよ、どうせわかりゃしないんだから。でも渇いてファンになった人は、そこをよく理解して、反発もしてほしいわけ。いまのブームは梶原一騎が作品の中に込めた思いとは正反対のところで利用されている気が凄くするんだよね。

——よくわかりました！（笑）。ちょうどタイガーマスク運動のこともお聞きしようと思っていたところでした。

斎藤　ちょうどこの件で取材もいくつか受けたばっかりだったんで。

——それこそ梶原一騎が生きていたら、コメントを求められたりしたのかなと思ってたんですが。

斎藤　怖いから誰も行かないでしょ（笑）。「タイガーはそんなことやんねえよ」って言うかもね（笑）。真樹さんはうまいこと言ってましたね。菅さんは都立小山台高校の後輩らしくて、「菅ちゃんもタイガーマスクになってくれよ」ってね（笑）。

——ハハハハ（笑）。しかし斎藤さんにそこまで梶原イズムが染み込んでいるというのは驚きでした。

斎藤　僕はいろんな本を書くときに、だいたい社会問題を扱っていて、人間の自由だとか平等だとかという理念をぶっ壊そうという動きに凄く反発するんですね。そういうときに自分のなかの感覚としては、「赤城忠治（『夕やけ番長』の主人公）ならどうするだろう」ということで、そういうのが一つの基準になってるんですよ。

——赤城忠治原理主義！

斎藤　まあいちいち頭で考えるんじゃなくて、身についちゃってるところがあって、気分は『夕やけ番長』なんですね。

——ではもちろん、梶原作品で一番好きなキャラクターも赤城忠治、と。

斎藤　こうありたいというのはね。でも僕はケンカの天才ではなかったし、見てくれも全然違ったし、勉強はそこそこできるけど運動はあまり得意じゃないほうだったから、最初のほうに出てくる紅小路弘っていう秀才の空手使いがいて、そっちを目指しました（笑）。

——しかし筋金入りのファンですね！

斎藤　まあでも紅小路弘は、キャラクターとしては秀才の空手使い以上のものではなかったから、やっぱり赤城忠治のようにありたかったのかな。見てくれは紅小路で（笑）。その影響で中学のときに極真に通ったけど、半年で挫折して（笑）。それがずーっとコンプレックスだったんだけど、大学でまた行って、結核になって続けられなくなったけど黄帯までは取ったから、それで一生のコンプレックスにはならなくなったけどね（笑）。

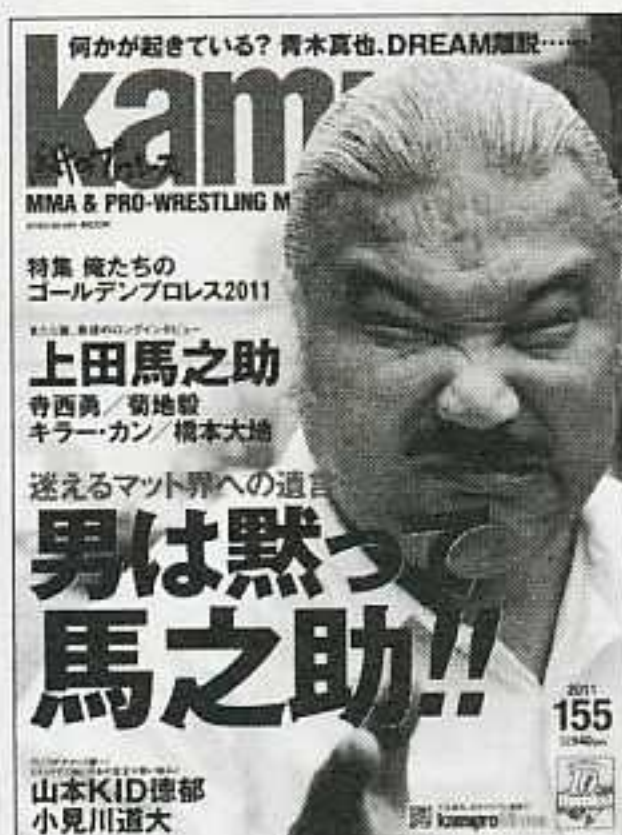
——いろんな意味で梶原作品の影響は大きかったわけですね。今日は長い時間、ありがとうございました！

【11年2月8日／都内・斎藤貴男氏の自宅にて収録】

さいとう・たかお■1958年4月4日、東京都出身。『日本工業新聞』や『週刊文春』の記者を経てフリージャーナリストに。経済や社会の問題をテーマにした著書が多いが、2作目となった『梶原一騎伝 夕やけを見ていた男』は自身が大ファンだったという梶原一騎の人生をつづった一冊となり、梶原一騎を知るうえでのバイブル的な本となっている。

あの日、あの号のインタビューもまだまだハッスルしてます!

kamipro & kamipro Special
バックナンバー絶賛通販中!

kamipro No.155

ジャパニーズMMA復興のヒントは昭和プロレスにあり!

■15年前の交通事故で胸下不随となった元祖・日本人ヒール 上田馬之助「金狼の遺言」■キラー・カン「闘うモンゴリアンが石原都知事に喝!」■ユセフ・トルコ「今年も猪木を殺すまで私は死ねない!」■「1993年の女子プロレス」伊藤薫編 ■全世界のお父さん号泣!? 娘が語る天龍源一郎の素顔 嶋田紋奈 天龍プロジェクト代表 ■3.6 ZERO1両国大会の蝶野正洋戦でデビュー! 橋本大地 ■王道からインディー界の強烈なニューカマーへ! 菊地毅 ほか

kamipro Special 2011 FEBRUARY

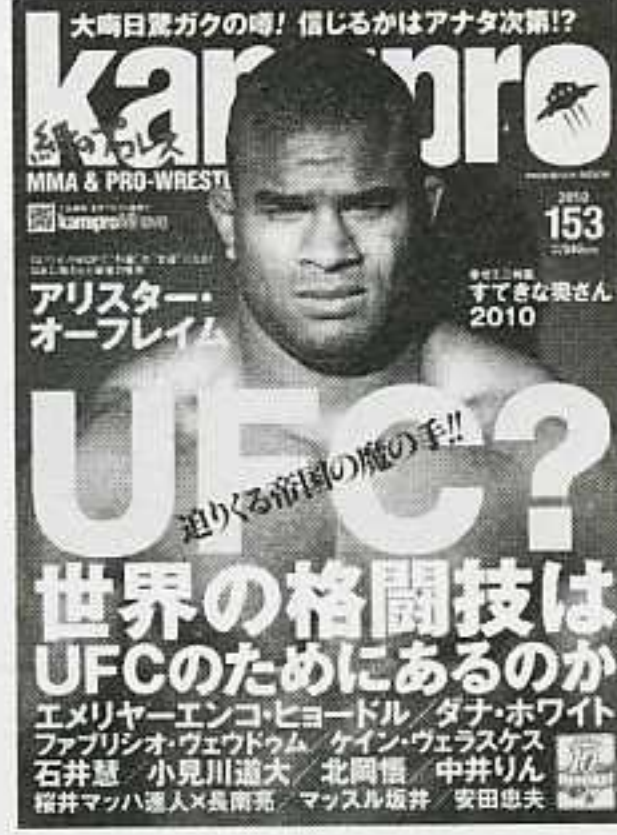
12.30『戦極』 12.31『Dynamite!!』 1.1『UFC125』徹底詳報!!

■青木真也、自演乙に衝撃の失神KO負け ■話題沸騰! 声に出して読みたい魔裟斗&須藤元気 解説完全再録 ■五味隆典、クレイ・グイダに一本負け!「最高峰UFCに見た、次元の違う頂点」■川尻達也インタビュー「まだ暗闇から抜け出してないですよ」■長島☆自演乙☆雄一郎「あそこまでのことはボクにはできないですね」■日沖発 インタビュー「ボクはMMAをスポーツにする」■中井りんインタビュー&特写「今年も私が女子格闘技を盛り上げます」ほか

kamipro No.154

日本格闘技界の存続を懸けた年末大会大特集!!

■山本“KID”徳郁、小見川道大UFC参戦の真実 ■ジョシュ・トムソン戦へ不退転の決意! 川尻達也インタビュー ■物議を醸す“ミックスルール”で闘う理由 青木真也インタビュー ■練マザファッカー「大晦日は300人で乗り込むぜメ〜ン!」■大晦日格闘技興行10年間をイッキに振り返る! 大晦日興行史2001−2009 ■ザ・グレート・サスケ×須藤元気「UFOに会う方法教えます」■さらば突貫小僧、再録インタビュー 追悼・星野勘太郎 ほか

kamipro No.153

マット界を彩るご夫人方が登場!「すてきな奥さん2010」

■本誌認定「すてきな奥さん」ナンバーワン! しなしさとこのしなやかで華麗なる生活 ■専門誌初登場! “マッドネス”の妻! 船木誠勝夫人 ■ルバート・メレンデスのフィアンセはストライクフォースのキックボクサーだった! ■元気ミセスの発掘再録インタビュー ザ・グレート・サスケ夫人 ■独身大物格闘家、北岡悟の結婚観 ■DEEP50回大会大成功&10年目の奇跡を特集 ■この男はなぜ嫌われてしまうのか? 考察! 石井慧座談会 ほか

kamipro No.152

世界最強のバンド、衝撃デビュー!?「特集・闘う音楽」

■狂乱のボーカル&ギター ジェイソン・“メイヘム”・ミラー■バンドマン時代を赤裸裸トーク!! 高阪剛■亀田大毅の「俺がリングで歌うわけ」■スペシャルメタル対談! ヨアキム・ハンセン×マーティ・フリードマン■伝説の『めちゃイケ!』歌へた王座決定戦の真実! 藤波辰爾■マット界一のビートルズマニアが熱く語る! 越中詩郎 ■ザ・グレート・サスケ「私はボン・ジョヴィを超えた」■菊地成孔、音楽とツイッターを語る! ほか

kamipro Special 2010 NOVEMBER

日本の救世主か? 理解不能の怪物か!? 石井慧は必要なのか?

■未完の怪物、“放言”の中に“本音”は見えるか? 石井慧 独占インタビュー■桜庭和志から初の一本勝ちを勝ち取った男ジェイソン・“メイヘム”・ミラー■くそったれ! を超えたイライラが爆発!! 小見川道大インタビュー■DEEP現役王者がついにUFC出陣! 福田力インタビュー■女子プロレス界のキーパーソン・さくらえみが語る奇妙奇天烈なレスラー半生! ■佐伯繁の『男はつらいよ』DEEP50回達成特集! ■立ち技再編成! 各団体の思惑を探れ!! ほか

kamipro No.151

デビュー50周年記念「猪木とは何か? クレイジー編」

■小川直也が猪木、ZERO1、ハッスル、石井慧を語る! ■出会いから巌流島まで、獄門鬼・マサ斎藤が生涯のライバルを語る! ■ユセフ・トルコ「それでも私は猪木を殺すまで死ねない!」■仙波久幸、政治家・猪木を“愛で殺した”葛藤を語る!! ■言うちゃ悪いけど、井上節がここに復活!! I編集長の喫茶店トークラウド再録■この兄にしてこの弟あり! 猪木快守登場! ■アントンの姪・ファニー猪木が語る猪木事務所とジャングルファイトの真実 ほか

kamipro No.150

ゲームで燃えろ! ゲームを通じてプロレス&格闘技に昇竜拳!!

■ゲーム界最強最後の“プロレスラー”の極意 高橋名人インタビュー ■ゲームで萌えろ!! “ツヨカワガール”RENAが、あの春麗に変身!「コスプレは今回が最初で最後ですよ(笑)」■マット界一難解な男・中邑真輔が語る『ファイプロ』の変態的楽しみ方 ■『ファイプロ』開発者・須田剛一が語るプロレスゲーム黄金期■ファイヤー原田が語る「魅惑の恋愛シミュレーションゲーム」■元ひきこもり女子レスラー真琴が語るゲーム更生録 ほか

kamipro No.149

格闘技のロマンは映画として昇華した! 特集・闘う映画

■ブルース・リーは強かったのか? ■ショー・コスギ「撮影で何度死にかけたか、わからない」■宇梶剛士が語る映画『お父さんのバックドロップ』壮絶舞台裏! ■いま最もエッジが効いた映画評論家RHYMESTER 宇多丸が「闘う映画」を熱弁! ■上映中止騒動とはなんだったのか?「一水会」最高顧問・鈴木邦男が語る『ザ・コーヴ』■最強の映画&アクションスターを大槻ケンヂが分析!?「スティーブン・セガール格闘映画最狂列伝」ほか

kamipro Special 2010 AUGUST

ヒョードル敗れる! 世界規模のヘビー級戦国時代に突入!!

■ブロック・レスナー「最強幻想強奪」■ダナ・ホワイト UFC代表 独占インタビュー「よくわかっただろう? これが現実だ」■エメリヤーエンコ・ヒョードル「ファブリシオとのリマッチを実現させてほしい」■ファブリシオ・ヴェウドゥム「いまでも、まだヒョードルが世界最強だ」■スコット・コーカー ストライクフォースCEO「契約更新するかどうかはヒョードル次第」■浅草キッドの玉ちゃんと語る俺たちの皇帝ヒョードル変態座談会、ほか

eb! enterbrain

おかげさまで10周年 エンターブレイン

ANNIVERSARY 10th

発行/株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表)
発売/株式会社角川グループパブリッシング
[エンターブレイン総合サイト] http://www.enterbrain.co.jp/

歌おう！『みなし児のバラード』!!

伊達直人運動便乗企画　浅草キッドの玉ちゃんと語る!

俺たちのタイガーマスク&梶原一騎変態座談会

毎度毎度、ダメな大人たちが夜な夜な居酒屋に集まり、ヨタ話をする変態座談会。
今回はそんな変態メンバーの少年時代、男の子として大事なことを教えてもらった愛すべき『タイガーマスク』とその原作者、
梶原一騎先生を語りまくる！　もちろん現在のプロレス&格闘技の源流、初代タイガーマスクも語ります！

構成／堀江ガンツ

俺たちのタイガーマスク&梶原一騎変態座談会

ガンツ　さて、UFCの話も一通り終わったところで、変態座談会用にテレコを回しますか。
玉袋　おう、始めてくれ。
椎名　じつは座談会を始める前に、すでに30分以上UFCについて語ってるのがいいよね（笑）。
ガンツ　テレコ回してるときにUFCの話題が出たら、本来のテーマをすっとばしてUFC変態座談会になっちゃいますからね（笑）。
椎名　だって話してて楽しいじゃん、UFCは。ストレスなんもないもん。もうUFCのことだけ考えていたい。
玉袋　なんで、あんなに楽しいんだろ。こんなにとりこになるとは思わなかったよ。
椎名　とりあえず俺、アンデウソンの試合を観たあと、近くの公園で木に向かって、何発か前蹴り試してみたからね（笑）。
ガンツ　何してるんですか（笑）。
椎名　足がイテテテだって。
玉袋　おいおい、このままだと、またUFCの話になっちまうよ。で、ガンツ、今日のテーマは？
ガンツ　今回はですね、ちょっと時期を逸した感もありますが、伊達直人・タイガーマスク運動に便乗するかたちで、タイガーマスク&梶原一騎変態座談会を行ないたいと思います！
玉袋　おお～、いいね～！　じゃ、ビールもらっちゃおっかな。生ビール3つ！
ガンツ　皆さん、タイガーマスクは好きですか？
玉袋　そりゃ好きだよ。漫画もアニメも佐山さんもみんないいよ！
ガンツ　ただ、ボクは世代的に佐山タイガーには夢中になっても、漫画の『タイガーマスク』は全然わからないんですよ。
椎名　俺だって漫画じゃなくてアニメだよ。
玉袋　アニメ、怖かったでしょ？
椎名　怖かった。
玉袋　アニメの『タイガーマスク』が血しぶきがすげえんだよ。血の味がしてくるようなね、あれがいいんだよな。
椎名　あとやっぱ、「組織に追われてる」っていうのが怖い。
玉袋　子どもが初めて知った組織って「虎の穴」だもん。
椎名　でも、組織が追ってくるのに、覆面レスラーがプロレスで追ってくるというね。裏で殺っちゃえばいいのに、正々堂々としてるところがいい（笑）。
玉袋　オレなんかちっちゃい頃、おふくろに「観ちゃいけない」って言われてたからな。それでも観るのが楽しいんだよ。オレ、『タイガーマスク』のソノシートも持ってるよ。
ガンツ　『みなし児のバラード』とか。
椎名　『みなし児のバラード』はいいんだよね！
玉袋　それこそ俺は直撃世代だから、人形も持ってたし、それ用のリングもあったよ。
ガンツ　マスクを取ると伊達直人が出て来るタイガーマスクのソフビですね（笑）。
椎名　あれ、マスクがどっかにいっちゃうんだよ。目がキラキラした単なる伊達直人人形になっちゃう（笑）。
玉袋　タツノコプロ特有の顔だよな。
ガンツ　『マッハGoGoGO』と同じ顔ですよね（笑）。
玉袋　やっぱり『タイガーマスク』はいいよな。男のロマンっつうかよ、この哀愁ね。梶原先生も凄いけど、作画の辻なおき先生の筆力もある。アニメもさ、エッジが効いてるんだよな。

『タイガーマスク』には人のやさしさ悲しみとかすべて入ってるからね

椎名　そうなんですよ、同じ梶原作品の『巨人の星』に比べても圧倒的に暗いんですよ。
玉袋　なんつっても、みなし児だからな。
椎名　『みなし児のバラード』って、なんかの番組でフィリピンの人に聞かせたら、歌詞なんかわからないのに、わんわん泣いてたからね。それぐらい心に染みるメロディ。
玉袋　『タイガーマスク』の激しい試合のあとに、エンディングであれが流れるんだもん。♪温かい人の情けもぉ～、胸を打つ熱い涙もぉ～、知らないで育った僕はみなし児さ～、だぜ。
椎名　「強ければそれでいいんだ」ってのがいいですよね。
玉袋　いいね～。深すぎるよな。あれを子どもの頃に見せられてるんだから。いま、ありえねえもん。みなし児のストーリーなんかないよ。『みなしごハッチ』が最後だよ。
椎名　いま「みなしご」は放送禁止用語なんですか？
ガンツ　自主規制してるのかもしれませんね。『みなしごハッチ』も『みつばちハッチ』に変わりましたから。
椎名　『みなしごハッチ』のどこが悪いん

椎名基樹
1968年4月11日、静岡県出身の42歳。本誌の好評長寿連載コラム『サムライ三昧』でもおなじみ、変態座談会癒しの重鎮。構成作家、放送作家。『みなし児のバラード』はカラオケ十八番。

玉袋筋太郎
1967年6月22日、東京都出身の43歳。子どもの頃から蔵前国技館に通った変態プロレスエリート。『タイガーマスク』直撃世代として、アニメはもちろん漫画も熟読している。

堀江ガンツ
1973年9月14日、栃木県出身の37歳。変態座談会主宰者。子どもの頃から変態的プロレスファン&格闘技ファンとしてならし、UWF研究家を自称。初代タイガーマスクの直撃世代。

だって思うけど、嫌な時代だね。
玉袋　そういうもんも含めて、『タイガー
教科書なのかもしんないね。
椎名　『男の星座』もSMばっかりですけ
ついて『東京新聞』の電話取材を受けたんだよ。そのとき「運動はいいことだけど、
ときって、覚えてます？
玉袋　覚えてるよ、観てたよ。

梶原作品は『巨人の星』『ジョー』も含めて主人公がみんな貧乏なんだよ！

だって思うけど、嫌な時代だね。

玉袋 そういうもんも含めて、『タイガーマスク』は、人の悲しみとかすべて入ってるからね。

椎名 考えてみたら、梶原一騎原作の漫画って『巨人の星』『あしたのジョー』『タイガーマスク』と、主人公が全員貧乏なんだよね。

ガンツ そういえば、星飛雄馬以外は親もいないという。

玉袋 そのなかには、ブルジョアの花形満がいたりするわけだよ。その対比、コントラストはやっぱ凄いものがあるよな。昔はジョーや伊達直人、星飛雄馬が主人公になれたんだよ。でも、いまはみんな勝ち馬にしか乗らないような社会になっちまったからさ。

椎名 リスクマネージメントとかね、何言ってんだって！

玉袋 またマスクマンっていうところも味があるよなあ。とにかく小さい頃、一番印象に残ったのは「虎の穴」の特訓だよね。崖のところで吊るされたりさ。それを何日間もやってなきゃいけねえってさ、小向美奈子じゃねえんだから。もしかしたらこれはSM心も教わったのかもしれないよ。

椎名 梶原一騎に重なるSMのね。

玉袋 SMの地獄変的な。

ガンツ 真樹先生監修で『タイガーマスク』とかVシネ化されると、必ずSMシーンが出てくるっていう（笑）。

椎名 先生、好きなんだねえ。

玉袋 『タイガーマスク』はSMの最初の教科書なのかもしんないね。

椎名 『男の星座』もSMばっかりですけどね（笑）。

ガンツ っていうか、少年に何を教え込んでるんだっていう（笑）。

玉袋 いまあらためて言うよ。梶原先生、正しい調教をありがとう！ いやだけどね、この『タイガーマスク』っちゅうのは男の子を勃起させるものがすべて入ってるよ。ウチの相棒（水道橋博士）なんてよ、子どもの頃、伊達直人に憧れて「なんでオレはみなし児じゃないんだ！」って言ったんだから。親にひっぱたかれたらしいけどね、「馬鹿野郎！」って（笑）。

ガンツ タイガーマスクに憧れないで、なぜみなし児に憧れるのか（笑）。

玉袋 でも、孤児院「ちびっこハウス」のケンタはいいぞ。きっとケンタは大人になったら、二代目タイガーマスクになってるよ。

ガンツ 実際の二代目タイガーは三沢だけど、アニメならケンタになってるはずだ、と（笑）。

玉袋 ケンタはクリスマスにプレゼントをいっぱい持ってくる伊達直人に憧れてたからな。最近、児童養護施設にランドセルとか贈ってる「伊達直人運動」ってあるだろ。じつはオレもよ、「伊達直人運動」について『東京新聞』の電話取材を受けたんだよ。そのとき「運動はいいことだけど、いまの子はもらったらもらいっぱで、どんどん次を期待しちゃうんじゃねえか。それを心配してる」って言ったんだ。

ガンツ それはあるかもしれませんね。

玉袋 「ちびっこハウス」のケンタなんかは、「いつかはオレも〝キザ兄ちゃん〟みたいにやるんだ」って気持ちになるじゃない。それがねえんじゃねえかなって。ただモノを与えるだけになって、その気持ちが継承されないと悲しいよね。

椎名 人からもらうものもらったら、慣れてきちゃいますもんね。

玉袋 その裏で伊達直人は命削って死ぬような試合をやってたんだからさ。そこは見せなかったところがまたカッコいいし、それがマスクマンの悲しみだよな。マスクマンっていい響きだねえ！

ガンツ マスクマンってホント神秘的で、いいですよね。

椎名 子どもの頃、マスクマンになりたかったよね。

玉袋 なりてえよお。タイガーマスクは常にマスクを被ってねえといけねえんだもんな。佐山サトルだってよ、さんざんマスク被って車の運転したりとかしてたでしょ。夢を与えるってたいへんだよ。

ガンツ 佐山タイガーは初期、スペイン語をしゃべってましたもんね。

玉袋 偉いよな〜。

ガンツ 最初に佐山タイガーが出てきたときって、覚えてます？

玉袋 覚えてるよ、観てたよ。

椎名 オレ、デビュー戦、観れなかった。裏番組に一瞬浮気してるときだと思う。たぶん『金八』。

玉袋 やっちゃったな〜。

椎名 あの頃『太陽にほえろ！』もあったし、金曜8時は激戦だもん。

玉袋 オレはね、タイガーマスクのデビュー戦を中学の修学旅行のとき、旅先の部屋でみんなで観たんだよ。最初のあのマスク見たときに「なんだこれ」と思ったけど、動いたらみんな熱狂だよ。あのときの俺たちを猪木さん、新間さん、梶原先生に見せたかったね。子どもたちがパジャマ姿でみんな熱狂してるんだから。あれはいい思い出だよ。

ガンツ それは素晴らしい体験ですね。

玉袋 あのデビュー戦のときのさ、佐山さんがいい動きをしたとき、リングサイドの新間さんの顔とか凄くいいんだよね。「ウチのタイガーがやってくれた！」っていうさ。

ガンツ あそこからプロレス界も格闘技界も変わったわけですもんね。

玉袋 そう、すべて変わってんだよ。佐山サトルすげえな。あの頃は、まさかあんなに甘いものが好きだとは思わなかったけどさ。

ガンツ スーパー・タイガーぐらいから体型でわかりはじめましたけどね（笑）。

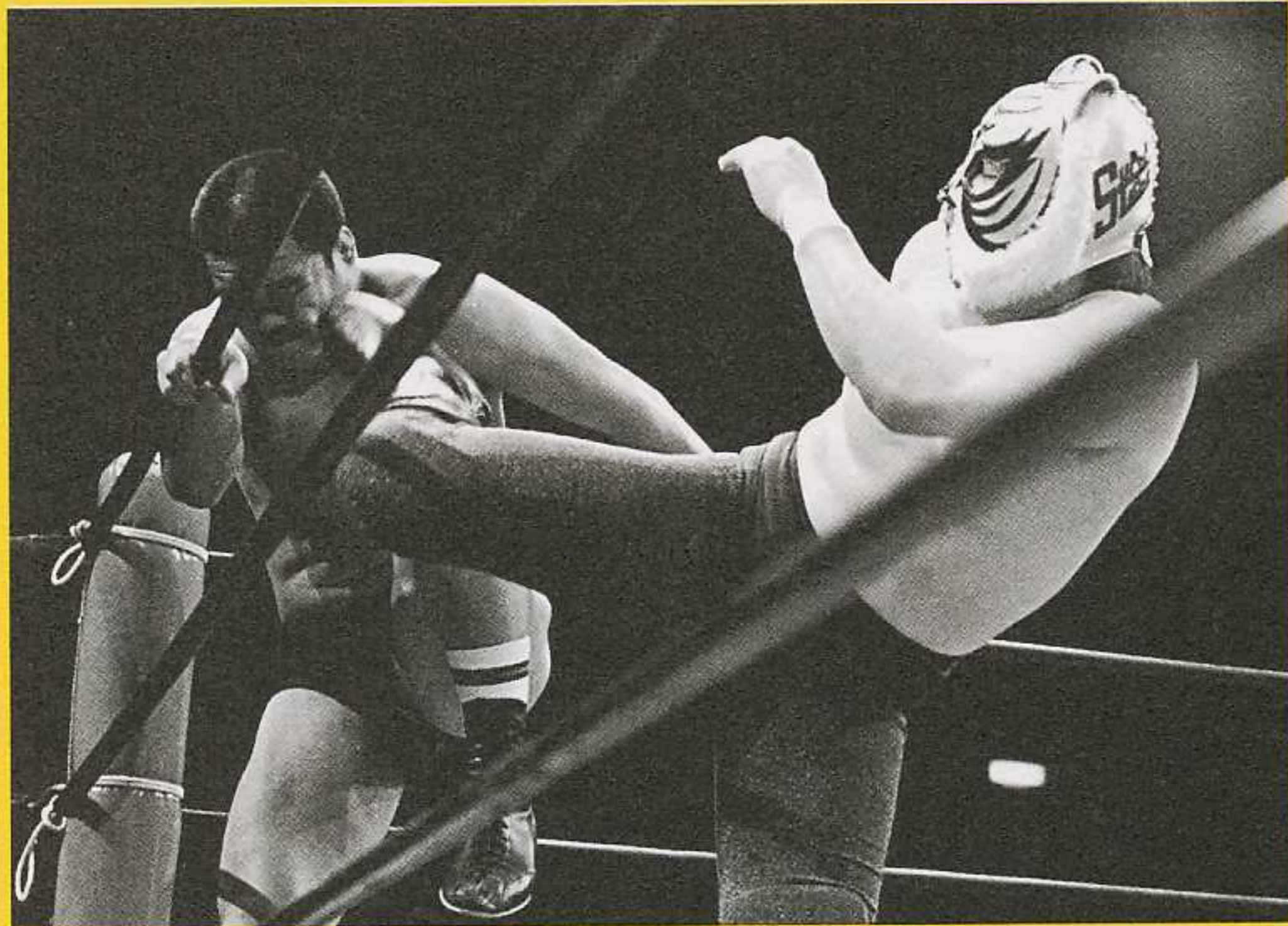
椎名 俺、スーパー・タイガーも大好きだったからね。

玉袋 いいよな！ 紫のタイツがいいよ。スナックの看板も紫は間違いないから。高貴な色だね。

椎名 スーパー・タイガーのマスクが超ほしいんだけど、あれが高いんだよね。

梶原一騎傑作全集
タイガーマスク
第1話
作・梶原一騎　画・辻なおき

梶原一騎原作の内容はもちろんのこと、辻なおき先生の画、タイトルの書体にいたるまでしびれる要素満載の『タイガーマスク』。「梶原一騎傑作全集」という"帯"もまたいい！

玉袋　高い！
椎名　マスクマニア憧れなんだけど、15万円はするもんね。
玉袋　だけどよ、佐山さんがタイガーマスクになったことで、運命が変わり、プロレス界が変わり、格闘技界まで変えたんだから、虎の仮面ってすげえよな。すべてを変える活躍をしながら、プロレス界を去っていくわけだしよ。
ガンツ　タイガーマスクは3年間しかやってないんですよね。
玉袋　アントン・ハイセルさえなかったら、タイガーマスクはもっと続いてたんだろうな。
椎名　やっぱりハイセルの金の流れが原因ですか。
ガンツ　でも、ハイセルによってUWFができたとも言えるんですよね。
玉袋　じゃあ、なんだかわからねえけど、ハイセルに感謝しとくか。これからはビールの一番搾りじゃなくて、サトウキビの搾りカスだよ（笑）。
椎名　結局、俺らってそうやって自分を納得させてきたんだよね。「タイガーマスクが新日本を辞めたから、スーパー・タイガーが観れた」とか、「第二次UWFが崩壊したからこそPRIDEができた」とかさ。
ガンツ　そう思わなきゃ、やってられないという（笑）。
玉袋　妥協点、落としどころだよな。ちょっと話を伊達直人に戻すけど、暗い生い立ちから始まって、子どもたちに夢を与えるために悲しみを背負って生きてる。それを俗世間と隔ててるのが布一枚ってのが素晴らしいよな。いまないもん、布一枚で欺いてるとか、いいことしてるやついないよ。布一枚脱いだら「たけぇ！」っていう世界だから。
椎名　パンツ脱いだらいくらですか（笑）。
玉袋　ホントだよ。
椎名　「トップレス別料金」みたいな（笑）。
玉袋　そのオプション料金も請求しないでね、自分で稼いだファイトマネーを子どもたちに与えるってのは夢があるよなあ。男のロマンと哀愁だなあ。
ガンツ　プロレス自体がそういうものを背負って生きていく業がありますよね。
玉袋　それはそうだよ。自分の出自から何から何まで隠して無国籍でいいんだから。あそこの世界に入れば。それがいいよな。「力さえあればそれでいい」んだもん。あんまり言いたかねえけど、プロレスラーの多くが片親だったりするじゃない。

劇画から飛び出したヒーローとして、子どもたちを熱狂させたタイガーマスクこと佐山サトル。その後、第一次UWFではスーパー・タイガーとして、現在のMMAへと続く格闘技の礎を作ったのだ。

佐山サトルが虎のマスクを被ったことでプロレスが変わり格闘技まで変わった

ガンツ　そうなんですよね。
玉袋　親父がどうしようもねえヤツだったりよ。佐々木健介なんかすげえよ。それで「光をつかむ」んだから。
椎名　佐々木健介の自叙伝読んだけど、あれは怖かったよ。
玉袋　そういうの考えるとさ、やっぱ逃げ場をなくした人間を受け入れるセーフティネットとしてプロレスがあったんだよ。
椎名　プロレスって、マイナスもプラスになりますもんね。
玉袋　そうだよ。ビックリ人間のジャイアント馬場が社長でスターなんだから。
椎名　売れるものはなんでも売っちゃうんですもん。
ガンツ　凄い世界ですよね。女子プロも昔はそんな出自の人が多かったみたいですもんね。アジャ・コングなんて、お父さんがわからないっていうんですからね。在日米兵で本国に帰っちゃって。
玉袋　そうなんだよな。テレビ朝日の『あなたに逢いたい！』って番組、知り合いがプロデューサーをやってたんだけど、いまのこのご時世、どんなことやったって情報なんかつかめるじゃん。でもアジャのお父さんの情報だけはつかめなかったっつうんだから。このご時世でも不可能なんだからよ。だってその番組、橋本真也の親父は見つけたんだから。
ガンツ　橋本真也も若くして天涯孤独の身になるんですよね。
玉袋　それを思春期とか成長期の一番大事なところで味わっちゃった子たちが、大きくなってプロレスラーになるっつうんだから。ストーリーとしちゃあ半端じゃねえよ。そうなったら八百長うんぬんっていう話じゃないよ。生きる人生の尺度でいったら、パワーゲージが恵まれたやつより何倍もあるんだから、プロレスラーってやっぱ凄いよ。
ガンツ　プロレスラーの人生は映画になりますもんね。
玉袋　みんな『レスラー』になるんだよ。映画の『レスラー』もタイガーマスク的なところがあるもんね。そして『タイガーマスク』は子ども向け作品にそのエッセンスが入ってるんだからさ。
ガンツ　知らず知らずのうちに学んでるんですよね。
玉袋　情操教育だよな。だから、いまは漫画でもなんでも「健全であれ」っていうのはいいだけどさ、多少なりとも大事なことを入れとかないと。これは載っけていいかわからないけど、オレ、いまから3年前に付き合ってたオネエチャンがいたの。
ガンツ　あれ、玉ちゃんは妻子が……まあ、いいです（笑）。
玉袋　仮につき合ってた人がいたとしよう。
ガンツ　仮の話ですね（笑）。
玉袋　その相手が大阪の新地のクラブのママなんだよ。そのママと付き合ってたの。
椎名　へえ～。
玉袋　最初は客として連れていってもらったんだけど、そこのママがあんまりきれいだったから、「付き合ってくれ」っつ

て。まあ、妻帯者だけど。あの頃、大阪でレギュラーやってたから週イチで会える
のママで、お客さんのあしらいをやってるのが彼女の"リング"だろ。そのリング
スク
談会
1万円を彼女たちに払えば、彼女たちの給食代がまかなえるってカードだよ。で、
るようになるんだよ。で、メシが食えるようになると、勉強ができるようになるん

成功することが善とされるいまの時代 やっぱり梶原一騎が足りねえよ！

て。まあ、妻帯者だけど。あの頃、大阪でレギュラーやってたから週イチで会えるからよ。遠距離恋愛だったんだよ。

椎名　いいなあ～。

玉袋　新地のクラブのママだから。こっちで言やあ銀座のママみたいなもんだからさ。凄いもんだよ。そして付き合い始めると、あの華々しい夜の世界っつうのが「違うんだな」っていうのを教わるわけよ。

ガンツ　どうなんですか？

玉袋　飲んで話したり、寝てたりすると、彼女がポツリポツリと自分の生い立ちを語りだすわけよ。聞いたら施設出身なんだよな。で、ママはプライベートで飲むときは、イケてねえ女を連れてくるんだけど、その彼女は施設でず～っと一緒だった人なんだよ。しかも、面倒見てるんだぜ。

椎名　タイガーマスクですね！

玉袋　だろ？　彼女は若い頃、お母さんに捨てられたんだって。それで施設で育って。だけど自分が新地のクラブでトップになってから、裏切りもんのお母さんに「面倒見させてくれ」って言って、いま面倒見てんだよ。で、俺が出した『男子のための人生のルール』って本のなかで「親に裏切られた子どもたちは将来成功して、逆に面倒見てやるぐらいの人になれ！」って書いたんだけど、それは彼女の生き様だったんだよね。

ガンツ　そうだったんですか。

玉袋　それ考えると、彼女なんかホントにタイガーマスクだよ。華やかなクラブのママで、お客さんのあしらいをやってるのが彼女の〝リング〟だろ。そのリングを下りると、化粧落としてジャージ着て、自分を捨てた母親の面倒を見てるんだよ。俺は「すげえな」「これはタイガーマスクだ」って言いてえ。「オレは敵わねえな」って思ったもんね。

椎名　そういう人、いるんですね。

玉袋　出自でいったらさ、いまやUFCのスターで、映画にも出てるランペイジだってよ、ひでえもんだったっていうじゃない。ランペイジは〝ホームレス〟みたいな話を聞かれることに、凄くナーバスになってたからね。ランペイジもタイガーマスクであるかもしれねえな。

ガンツ　ブラジルのトップ格闘家でスラム出身の人ってけっこういますもんね。映画『シティ・オブ・ゴッド』に出てきた、あの子どもの一人だったわけですから。

玉袋　そういう人が、格闘技界のトップに上り詰めるって、どんな気持ちなんだろうな。

ガンツ　だからブラジルの格闘家って、慈善事業とかやってる人が凄く多いんですよね。

玉袋　それを言ったら、〝足立区のたけし〟だってタイガーマスクだよ。ウチの師匠だってゾマホン経由でよ、ベナンに学校建てたりしてんだぜ。これだよ（と言って、カードを差し出す）。

ガンツ　なんですか、これ？

玉袋　これは殿が身内だけでやってる運動。カードに女の子が写ってるだろ。月に

俺たちのタイガーマスク&梶原一騎変態座談会

1万円を彼女たちに払えば、彼女たちの給食代がまかなえるってカードだよ。で、ここに写ってるのが、俺がお金送ってる子。アフリカは多くの地域がちびっこハウスみたいなもんだからな。

ガンツ　（カード見ながら）イブラヒム・アミナちゃんですか。

玉袋　そう。殿はこれをやってっから。足立区のタイガーマスクだよ。所（ジョージ）さんと一緒にバスを作って贈ったりとかさ。それを言わねえところがカッコいいじゃねえか。

ガンツ　これみよがしに番組にしたりしないところがいい（笑）。

玉袋　メシも食えねえで死んでいく子が多いなかでよ、これをやるとメシが食えるようになるんだよ。で、メシが食えるようになると、勉強ができるようになるんだ。それは向こうでいえば相当恵まれた環境になるんだけど、そうなったとき「この子たちが成長したらおまえらを訪ねてくるんだぞ」っていう話だよ、将来。

ガンツ　それは感動しますね。

玉袋　それこそオレが言った伊達直人運動でさ、いま日本の子どもたちに何かを与えても、その恩を返すものがあるのかなって話なんだよ。もらいっぱになっちゃうんじゃないかなって。そのイズムを受け継いでほしいんだよな。

椎名　でも、『巨人の星』も『あしたのジョー』も『タイガーマスク』も、主人公は全員貧乏なんだけど、「成り上がってやるぜ！」みたいな人ともちょっと違って。そこがいいよね。

ガンツ　「金持ちになることが善」という成功至上主義じゃないんですよね。

椎名　金持ちになるとか、成功するとか、そんなことより自分の問題。真っ白に燃えつきたいんだから。

玉袋　損得抜きで、みんなリングやマウンドにすべてを懸けるんだよな。

椎名　梶原一騎はそこがいいですよね。

玉袋　そこだよ、梶原一騎先生の素晴らしいところは。飛雄馬だって野球に殉じるってことでしょ。梶原作品はみんな殉死だよ。

ガンツ　単なる成功物語じゃないんですよね。

玉袋　逆に挫折を描いてるもんな。

椎名　求道ですもんね。やっぱりそこに惹かれる。

玉袋　いいねえ！　やっぱりいまの時代は、梶原一騎が足りねえな！

【11年2月9日／都内・「加賀屋」中野坂上店にて収録】

“ファベーラ”と呼ばれるブラジルのスラムは社会問題となっている。しかし、MMAファイターたちの支援を受けて、ここから将来のチャンピオンを目指す子どもたちもいるのだ。

真樹　そうそう、俺がタイガーマス

火山灰とか災害被害への支援をして

一生懸命頑張ってたし、作品も思っ
たよりいい出来映えだったんだけ

真樹　確かに梶原は最初、「冗談じゃ
ねえよ、こんなことやってられる

俺たちは〝自慢の兄〟で〝自慢の弟〟だったんじゃねえかな——

TOILET

実弟が語る劇画王の創作の源とは?

梶原一騎とコンプレックス

劇作家／真樹道場宗師

真樹日佐夫

劇画史上の巨星、梶原一騎の少年時代からその最期までを傍らで見つめ続けてきた実弟、真樹日佐夫。死してなお愛される梶原作品の創造の源が劇画王の持つさまざまなコンプレックスにあったと指摘する向きは多いがはたして真樹先生はどう見ているのだろうか?　マッキーに訊け!

聞き手／鈴木佑

兄貴は小説で名を成す前に劇画でスターになっちゃったんだよ

真樹 今日はお兄ちゃんのこと話せばいいのか?

——はい! タイガーマスク現象はもとより、映画『あしたのジョー』も公開。時代が梶原作品を求めてる風潮とあっては、真樹先生にお話を聞かずにはと思いまして。

真樹 ハハハ。でも、もう世間もタイガーマスクじゃなく、相撲の八百長のほうに興味があるんじゃねえのか?(笑)。まぁ、タイガーマスクに関しては瓢箪から駒でさ、最初はパチンコ業界が機種の宣伝のために仕掛けたって話もあるよな。でも、「世の中にはおもしれえヤツがいるな」で済んだかもしれないことが、そうはならなかった、と。

——あっという間に日本全国まで波及して。

真樹 嫌な話ばっかりのいまどきにしては珍しい美談というか、「まだ日本人も捨てたもんじゃねえ」っていうかさ。それだけ、伊達直人的存在の出現を心待ちにしてた人たちがいたという事実は見逃し難いよな。菅チャンもかわいそうに、ひどい引き合いに出されてたけどさ(笑)。

——「子どもたちにランドセルを背負わせたいのが伊達直人、子どもたちに借金を背負わせたいのが菅直人」ですね(笑)。一部では真樹先生がやらせてるんじゃないかっていうような話もあったみたいですけど。

真樹 そうそう、俺がタイガーマスクの5代目をデビューさせたから、「それにあやかってんじゃねえか」とかな。まあ、アレをデビューさせたのも、俺が今年、『タイガーマスク』の映画を作るつもりだったっていうのもあるんだよ。今回も佐山(聡)クンとかいろんなレスラーにも出てもらうんだけどさ。

——佐山さんとは今回の騒動に関してお話しされましたか?

真樹 来週、チャリティやるだろ?(2・18『プロレス・ジャパン・エイド2011』)。そうやって彼は彼でプロレスを通して募金活動なり施設回りをやって、俺のほうでも「伊達直人基金」を設立して、霧島連山の火山灰とか災害被害への支援をしていく、と。こういう運動を通してみんなを励ましていければいいんじゃねえかな。

——今回は梶原作品にまつわる、いろんなタイミングが合わさったといいますか。

真樹 ホント、偶然なんだよ。去年から映画のことを考えてたら念力が通じたっていうかさ。『あしたのジョー』も『タイガーマスク』へのいい露払いになればいいよな。もう一つは『愛と誠』の映画化も考えてるんだよ。だからいま、梶原作品に非常にいい追い風が吹いてる。まあ、あとは『あしたのジョー』の客の入りがどう転ぶかだな、フフフ。

——主演の山下智久さんは役作りで相当身体を鍛え込んでたみたいですね。

真樹 うん、俺もロケ現場に山Pを励ましに行ってきたんだよ。山Pも一生懸命頑張ってたし、作品も思ったよりいい出来映えだったんだけど、ジャニーズファンの女の子たちがはたして映画館へわざわざ足を運ぶかどうか。運んだら運んだで、原作のファンが引いちゃわないかとかさ。

——確かにジャニーズファンと梶原作品ファンだと気質が異なるかもしれません(笑)。

真樹 だろ?(笑)。そのへんは難しいバランスだよな。なんにしろ、こうして時代時代の節目で兄貴の作品が注目されるのは、弟ながら感心するよ。たいしたもんだし、運も強いよ。

——そういった国民的作品を生み出してきた梶原先生の創作の源として、文芸に対するコンプレックスがよく挙げられますけど、真樹先生はどう思われますか?

真樹 まあ、俺なんかは一概にコンプレックスと言われると「ちょっと違うかな」って思うんだよ。というのは、彼は物書きデビューしてから何年かは小説を書いて、大きな脚光は浴びないまでも賞レースの候補みたいなところまではいってたんだよ。でも、文学修行の過程のなかで、生活だってしてかなきゃいけない。そんなときに当時、梶原を語るときには欠かせない『少年マガジン』の初代編集長の牧野(武朗)さんが、『東京中日新聞』に力道山の小説(スポーツ実録読み物『力道山光浩』)を書いてた彼に目をつけたわけだ。

——そこで『チャンピオン太』の原作を担当してから、梶原先生と『少年マガジン』との蜜月期が始まって。

真樹 確かに梶原は最初、「冗談じゃねえよ、こんなことやってられるか!」って嫌で嫌でしょうがなかった。牧野さんが「ここちょっと直してください」って電話で頼むと、「わかったわかった」と言いながら、何も直さないでそのまま持ち帰らせたりして、抵抗してた時代がずーっとあるんだよね。でも、そういう流れでしぶしぶやっていくうちに、『巨人の星』『あしたのジョー』と、あのとおり大ヒットして。きっと彼は書きながら「まあいいか、劇画原作でも」と、折り合いをつけたんだと思うんだよ。だから小説で名を成す前に、劇画でスターになっちゃったんだよな。「小説はあとでいいか」と。

——梶原先生ご自身も『男の星座』を最後の作品にして、それからは小説家転向を考えてたんですよね。

真樹 そうそう。だから彼は小説を書く時間がなくなったってだけで、それを単純にコンプレックスにしてたわけじゃないと思う。昔、石原裕次郎が「俳優は男子一生の仕事じゃない」なんてほざいたこともあったけど、結局は彼も俳優のままだっただろ? それと同じように、梶原も劇画原作という大きな流れの中に生き甲斐見つけたんだと思うよな。そういう意味でも『あしたのジョー』っていう作品は大きいよ。あれはもう小説もおよばないくらいの出来映えになってるよな。

——なるほど。

真樹 まぁ、でもコンプレックスってことでいえば、そもそも物書きなんてコンプレックスがなきゃやっていけない世界なんだから。有名な話

昨年7月の梶原一騎氏の24回忌追悼記念大会において、初代タイガーとのコンビでデビューした5代目タイガー。真樹先生が某興行で闘っているレスラーを見た瞬間、「これだ!」とプロデュースを思いついたとか。

だけど、トルストイも悪妻を持っちゃって、どうにもなんない家庭の苦労を瞬間でも忘れようとして、『戦争と平和』っていう大長編を書いた。ドストエフスキーだってそうだよ。書かなきゃ生活できないから、書き飛ばして書き飛ばして『罪と罰』とか、ああいう名作を生んだんだから。

――「物書きは物を書かないと救われない人種」っていう言葉もありますね。

真樹　うん、業だよ、業。そんな業を背負いながら、当時は地位の低かった漫画、劇画の地位を高める重要な役割をはたしたのが梶原一騎であってさ。そういう面での功績は名作を作ったのと同じくらい、認められてしかるべきだよね。

――あと、梶原先生は真樹先生にもコンプレックスを抱いてたと見る向きもありますよね。ルポライターの斎藤貴男さんも著書のなかで指摘されてましたが。

真樹　ハッハッハ！　まぁ、俺は物事は深く考えたってしょうがないっていうタチだけど、兄貴は意外と神経質なんだよな。それを周りに悟られまいとして、ああいう虚勢を張ってさ。高森朝樹が梶原一騎を演じてたというか。お兄ちゃんは世間が自分に、「人を人とも思わない無頼派の生き様を求めてる」と思ったんだろうな。彼はつい気負って肩に力が入っちゃってた。逆に俺は肩の力が抜けてるから、それを見て梶原はうらやましい面もあったんだと思うよ。でも、俺らの前ではほんとにいいお兄ちゃんだった。俺が文藝春秋の新人賞を獲ったときなんか、もの凄く喜んでくれたのを覚えてるよ。

――そのときのやりとりもお二人の違いをよく表わしてたと思うんですよね。梶原先生が喜んでるのに対して、真樹先生は「どうってことない」という返答をして、梶原先生が「おまえはドライなんだよ」って言ったっていう（笑）。

真樹　まあ、確かに俺はドライで、梶原はどっちかっていうとウエットだよな（笑）。だからこそ逆に仲よかったんだよ。それとたぶん、少年時代に一緒にいた時間が少ないから、へんな骨肉の争いもしなくて済んだんだと思うな。

――梶原先生は少年時代に感化院（いわゆる不良の自立を支援する児童福祉施設）に入ってたんですよね。

真樹　小学校も何度か退学になってるしな（笑）。俺がガキの頃、兄貴は悪さばっかりして、九州とかいろんなところに預けられてたから、それがいい距離感になって、いがみ合ったりすることもなく済んだんだよ。大人の付き合いができるようになったっていうかさ。それに気づいたら、今度は俺がいなくなってたしな。少年院に入っちゃって（笑）。

――ハハハハ。

真樹　まぁ、それぞれの場所でそれぞれの個性を磨けたんだよ。同じ場所にいると、よくも悪くも上に影響されちゃうだろ？　兄貴と別行動だったから、俺は俺なりの考え方でいろんなことを吸収して、ものの考え方が培われていった。そして、彼にも彼の世界があった、と。

――真樹先生はお父さんに凄くかわいがられたのに対して、梶原先生は感化院に送られたことをはじめ、そんなにほめられたことがなかったそうですね。

真樹　あのな、兄弟で俺だけが親父と同じO型なんだよ。だから、親父がものを言わなくても何考えてるかわかっちゃうんだよ。血液型なんて古いと思うかもしれないけど、実際にそういうのはありだからな。親父が俺ばっかりをかわいがってるのを見て、兄貴はA型のデリケートすぎるところが助長されちゃって、非常にうらやましかったり悔しかったり、いろいろあったとは思うな。

真樹先生が梶原一騎の素顔と波瀾万丈な生涯について執筆した『兄貴 梶原一騎の夢の残骸』。その少年時代をはじめ、梶原とスポーツ界や芸能界とのかかわりがときに生々しく、そしてどこか優しげな筆致で描かれている。

――後年、梶原先生とそういうことについて話されたことは？

真樹　そんなしゃらくせえことは一言も話し合ったことねえよ。女の話ばっかだよ（笑）。

――それこそクラブのママをめぐって兄弟で争ったときに、梶原先生が「おまえは女に苦労しなくていい幸せ者で、俺は常に努力しなきゃいけないんだ」と言われたそうですけど、これなんかは典型的なコンプレックスというか（笑）。

俺がドライで梶原がウエットだからこそ逆に仲がよかった

真樹　ハッハッハッ！　それはさあ、俺は性体験が早かったから。中学のときからエッチしてたからね。そのときすでに女ってのがはっきりわかっちゃってさ。本質がね。

――中学生にして！　ちなみに女の本質というのは？

真樹　それはリアリズム、現実主義者ってことだよ。男ってのはロマンチストだから、女性のリアルな面に引きずられちゃうんだよ。それを俺はガキの頃から無意識にわかってた。「よしわかった。こっちも対抗してリアリズムだ。女はおまえだけじゃねえ。日本全国の女はみんな俺のもんだけど、回ってるヒマがねえから2～3人で抑えるしかねえんだ」ってな（笑）。

――ハハハハ。

真樹　そうすると女だってきりきり舞いする。でも梶原は奥手だったから、必要以上に女を過大評価しちゃうんだよ。そうするとモテないんだよな。女って敏感だから、「あ、この人はほっといてもいい。私についてくる」って思うとつらく当たったりして、男を試そうとなんかしてね。ところが「この男は若いのにずいぶん女遊びしてる」ってなると、嫌いになるか深入りするかのどっちかだから。まぁ、要するに女ってのは早く知ったほうがいいんだよ（ニヤリ）。

――そのあたり、梶原先生にすると真樹先生がうまく立ち回ってるように見えたんですかね。

真樹　そうそう。梶原は25～26でブレイクするまでは、非常にまじめだったんだよ。ところがあるときを境に女から寄ってくるようになったから、とんでもねえ遊びをするようになったの。10代の頃にナチュラルに女と遊べなかったことで、鬱屈したもののタガが外れて暴走するっていうかな。

――なるほど。

真樹　まあ、そんなわけで俺はませてた、と。高3のときに初めて練カン（練馬少年鑑別所）に入ったんだけど、退屈だからそれまでに関係あった女を紙に書いて勘定したんだよ。そうしたら90人以上になってな。

――え～！　10代にしてほぼ百人斬りを達成（笑）。

真樹　それが名前も聞いてなかったりするから、「赤いハイヒールの女」とか「黒いパンツの女」とかさ（笑）。

――もはや真樹先生ご自身が梶原作品に出てくる劇画キャラみたいです

もう一緒に酒を飲めないことが切ないな。いまでも夢に見るよ

真樹日佐夫

ね（笑）。

真樹 フフフ。よく、俺ら兄弟のファンなんかは、梶原作品には俺のキャラがけっこう人物造形に投影されてるっていうよな。花形満や矢吹丈とか。俺は花形満みたいな生き方はべつに好きじゃないけどさ（笑）。

——逆に、真樹先生が梶原先生に対して抱かれたコンプレックスというのは？

真樹 そりゃもう『あしたのジョー』なんかさ、俺は100年頑張っても書けやしない。「こりゃ勝てねえな」と思ったよ。ただね、俺は自分のおよばないところはしょうがねえと思うタチだから。

——そのへんは女性経験で培ったリアリズムというか（笑）。

真樹 そうそう（笑）。勝てねえケンカはしないほうがいいっていうかな。だからとくに意識したわけじゃねえけど、だんだん彼の多情多感な作風に比べて、俺のそれはドライになっていった。それもお互いによかったんだよ。俺、去年の11月に物書き生活50周年パーティをやってもらったんだけど、考えてみたら50年って梶原一騎の全人生なんだよな。

——梶原先生が亡くなられた歳より、真樹先生は20年も年輪を重ねたわけですね。

真樹 兄貴に一つ言えるのはさ、いくら人の倍仕事して人の倍酒飲んで多くの女性と愛を語り合ったとしても、50歳じゃまだ人生にはわからない部分があるんだよな。だから、彼が70まで生きてたら、また全然別な作品が新たに花開いたと思うんだけどね。

——梶原先生はさまざまなスキャンダルで社会的な評価が一時期下がったものの、また再評価を受けている場面を見ることができなかったのも残念というか。

真樹 そう。本人はそれをわかってねえんだから。俺は梶原が死んでから24年生き延びてるから、その光景を見届けることができた。あらゆる梶原作品が絶版になって全部消えた瞬間から、現在手のひらを返したようになってるのは「くそやろう！」って思いながらも、ある部分では痛快だよ。

——「『男の星座』の続編をぜひ真樹先生に」という声はいまもなお根強いですよね。

真樹 浅草キッドなんかも「自分たちで発表の舞台を探してきますから」ってコラムかなんかで書いてくれてたな。でも、ただ一つ言えるのは、どんな不自然な終わり方でも、作家が死んだらそれで完結なんだよ。俺が書き続けて梶原一騎が喜ぶとはかぎらない。「勝手なことしやがって」ってなるかもしれない。ほら、友だちが病気になって見舞いに行くだろ？ 行ったヤツは「いいことした」って思う。ところが来られたやつは「元気なところ見せに来やがって！ たまったもんじゃない」と感じるかもしれない。

——物事は一面からははかれない、と。

まき・ひさお■本名・高森真土。1940年6月16日、東京都出身。劇作家、映画プロデューサー、真樹道場宗師などの肩書きを持つ故・梶原一騎の実弟。おもな著者に『実録 地上最強のカラテ』、『無比人』、劇画原作では『ワル』が有名。今日も四角いジャングルに目をこらす、格闘技界のご意見番でもある。

真樹 だいたい、俺が死んだら自分の作品を誰かに引き継いでもらいたいなんて思わねえよ。あの世にいてもまだ連載が続いてるなんて、ソワソワして落ち着かねえじゃねえか！

——ハハハハ。梶原先生が亡くなられてずいぶん経ちましたが、真樹先生自身に心境の変化とかありますか？

真樹 変化っていうか、いまは兄貴もあの世で見守ってくれてるって思うと、なんとも言えない安心感があるよな。もう、いがみ合わなくても済むし。ただ、一緒に酒飲むことが二度とできねえってのが切ないな。いまでも夢を見るよ。一緒に飲んでる夢を。

真樹 そういう意味でポッカリ穴が開いたっていうか、死なれた直後はあんなにショックを受けるとは思わなかったな……（しみじみと）。それだけ俺んなかで占めてた梶原一騎の比重が大きかったんだろうよな。

——梶原先生とすごした日々で一番思い出深い時期というと？

真樹 そうねえ、やっぱりスターになってからじゃなく、もっと売れねえ頃のほうがずっとすてきだったよ。ブーム前夜の頃は充実してたよな。毎日なけなしの金で焼酎買って、「石原兄弟目指そうや」って言ってた頃は華だった。俺たちは自慢の兄であり、自慢の弟だったんじゃねえのかな。

——お二人のエピソードで個人的に好きなのが、梶原先生が逮捕されて真樹先生が接見に行ったときの話なんです。梶原先生が「石原兄弟に追いつけ追い越せが、俺のせいで夢と帰しちまった」って謝ったら、真樹先生が「また別な目標を見つけるさ、なあ兄貴」って返した場面が凄くカッコいいなって。

真樹 おお、そうかい。あのくだりは映画にもなってるんだよな（『すてごろ～梶原三兄弟激動昭和史』）。あれは奥田瑛二が梶原一騎、哀川翔が俺を演じたんだけど、奥田の演技がうまいもんだから、俺も昔のことを思い出してなんとも言えない気分になってなあ（笑）。まあ、だから梶原のコンプレックスって話だけど、確かに梶原が弟の俺にコンプレックスを持ってたって書いてるヤツもいるが、それはお兄ちゃんからすればコンプレックスじゃなかったと思う。端から見てそう思うだけで、彼は俺に対する愛情深さゆえに、一喜一憂したんだという考え方もできる。

——その根底には必ず愛情があった、と。

真樹 そうよ。まあ、最後にキザなこと言わせてもらうと、いまはお兄ちゃんも天上の星になって俺をずっと照らしててくれる。だから怖いもんなんかねえっていうところかな。

——それこそ〝男の星座〟ですね。

真樹 フフフ。こんな感じでいいか？ これから弟子の練習見なきゃいけねえからよ。

——押忍！ 今日は貴重なお話をありがとうございました！

【11年2月10日／都内・真樹先生の仕事場にて収録】

梶原作品の金字塔

タイガーマスクに
なれなかった男

ザ・コブラの真実

×ドン荒川

梶原作品から飛び出し、日本全国に
一大ブームを巻き起こしたタイガーマスク。
そんなヒーローとは対照的に、
悲劇のマスクマンとして知られるのがザ・コブラだ。
今回はその正体であるジョージ高野と、
昭和新日本の生き証人であるドン荒川が、
このコブラについて語りつくす!

聞き手／ひのとしお　構成／鈴木佑　試合写真／平工幸雄

追悼・田中八郎
SWS分裂騒動
についても激白！

昭和新日最強トンパチ師弟対談

ジョージ高野×

ジョージ 今日はザ・コブラのことを話すんですよね？ それならこの方に来ていただかないわけにはいかないので、特別にお呼び立てしました！

荒川 いやあ、どうもどうも！ 私、ジョージ高野の保護者です（笑）。

—まさか、飛び入りゲストで荒川さんがいらっしゃるとは思いませんでした（笑）。

荒川 はい、呼ばれて飛び出てきました！ ジョーちゃんのことは新人時代から知ってるので、なんでもドンドン聞いてください。

—ありがとうございます！ 今回は「タイガーマスクになれなかった男」がテーマなんですが……。

ジョージ （さえぎるように）ちょっと待った！ 私はタイガーマスクに〝なれなかった〟んじゃないよ。〝ならなかった〟んですよ。

—ほう、あえてタイガーマスクにならなかった、と？

ジョージ そう！（キッパリ）。実際、佐山（聡）さんと「どっちがタイガーマスクをやるか?」って話し合ったんですから。

—あ、人気面でコブラがタイガーマスクみたいになれなかったという話ではなく、ジョージさんもタイガーマスクの候補だったという話ですね？

ジョージ まあ、今日はタイガーマスクとザ・コブラの真実を語りますから（ニヤリ）。

—そもそも佐山さんとジョージさんは、入門が1カ月違いのほぼ同期なんですよね。

ジョージ あくまで佐山さんが先輩ですけどね。でも彼は先輩風を吹かすようなことは一切なかったですよ。当時、佐山さんが17歳で私が16歳。佐山さんはもの凄く純粋な人で、後輩の私が言うのもおかしいですが好青年という感じでしたね。目がキラキラしてて、まさしくヒーロー漫画の主人公のような。

荒川 あれは真っすぐだからね。だけど、私は佐山にだまされたんですよ、「甘党で酒は一滴も飲まない」っちゅうから。ところがあれ、ムチャクチャ飲むんですよ！ もう、酒は強いわ（笑）。

—でも、荒川さんの酒豪伝説も有名ですよね。日本酒を一升飲んだりとか。

荒川 私？ 私は一升を19秒！

—19秒！

ジョージ こうやって（酒瓶を）回しながら飲むの。

荒川 山本（小鉄）さんがストップウォッチ持って計ってて、「おお！ 荒川、凄いな！」って。それを藤原（喜明）が横で「ニタ〜ッ」て笑って見てるの。

ジョージ 練習でも酒でも、荒川さんと藤原さんが東西の虎ですからね。我々はよく鍛えられましたよ。

—ちなみに荒川さんは入門当初のジョージさんにはどんな印象を持ってますか?

荒川 彼が相撲（大鵬部屋）から来たって知らなくて、入りたての頃に道場で相撲取ったんですね。それで私が勝つには勝ったんですけど、彼の足腰が強いから「アンタ、プロレスよりも相撲へ行きなさい」って言ったんですよ。そしたらあとになって、「じつは僕、相撲を辞めたばっかりなんです」って（笑）。

ジョージ 猪木さんが相撲取りは嫌いだということを聞いていたんで、その場ですぐに言えなかったんですよ（笑）。ほら、僕にはあとがないというか、ほかにはヤ●ザぐらいしか道がなかったしね。だから、新人の頃はとにかくなんとしても男を上げるまで故郷には帰らないという思いで必死でしたね。で、本当は私には会津若松出身の相棒がいて、「二人で一緒に入門して頑張ろう」って言ってたんですよ。でも、そいつは荒川さんに「パンツ一丁で（野毛の道場から）等々力まで走っていったら入門させてやる」って言われて、「はい！」って走っていったんだけど、帰ってきたら「バカヤロー！ そんな格好で走りやがって、おまえはクビだ！」って言われて（笑）。

荒川 ……そんなことあったっけ？（ケロリと）。

—当の本人は覚えてない、と（笑）。佐山さんもジョージさんも逸材だったと思うんですけど、荒川さんの目にはどう映ってましたか？

荒川 いやもう、この二人はモノが違いますよ。体格の違いはありますけど、バネは一緒でしたね。ここまでバネがあるのは佐山とジョージ以外にいないです。

—それは武藤敬司選手などと比べても？

荒川 いやあ、二人に比べたら落ちますよ。もちろん、武藤は武藤なりにいいけど、それぐらい二人は別格だったってことです。昔、二人が若手だった頃、宮崎のグラウンドで400メートルを走らせたことがあるんですよ。で、私がタイムを計ったら二人とも1分弱だったの！ もう「コイツらバカか!?」と思いましたから（笑）。ジョーちゃんはホント、ムッチャクチャ足が速かった。昔は細かったから。いまは130キロぐらいあるけど（笑）。

—貫録がついたといいますか（笑）。さて、先ほどのジョージさんが佐山さんと「どっちがタイガーマスクをやるか」と話し合ったという件ですけど……。

ジョージ 海外から帰ってきた佐山さんと道場で話し合ったんですよ。佐山さんから「どっちがやる?」って提案してくれたんで。でも、私はハーフだから。ほら、肌の色がね。で、「伊達直人は日本人なんだから、佐山さんがやったほうがいいでしょう」って。

—定説ではタイガーマスクのデビューに合わせて佐山さんが遠征中のイギリスから急きょ帰国した、と。

荒川 タイガーマスクの案は新間さんが持ってきて、最初から佐山に決まってたのよ。でも、佐山は嫌であんまりやりたがってなかった。ホントは格闘技みたいのをやりたかったからね。それでジョージに「やらないか?」って持ちかけたんでしょう。でも、タイガーマスクに一番ピッタリだったのは佐山でしたね。もう、佐山しかいなかったですよ。

—なるほど。あの、タイガーマスクのスペースフライング・タイガードロップはジョージさんが考案した技だっていう話は本当ですか？

ジョージ うん、教えたよ。側転し

プロレス界に残るベストセラーとなったタイガーだが、ジョージは「確かにタイガーマスクは凄かったですが、私はそんなキャラクターよりも人間・佐山さんを押し出したほうがもっと大ブームを起こしてたと思いますよ」と語る。

ジョージ高野×ドン荒川!!

私はタイガーになれなかったじゃなく、ならなかった（ジョージ）

ていく、あれやろ？（身振り手振りをしながら）。

——身体が大きいのによくああいう技を考えますね〜。

荒川　あのね、彼は宇宙人とか言われてるけど、実際の頭の中はもの凄いんですよ。東大出ぐらい頭いい！（キッパリ）。

——東大出！（笑）。

ジョージ　いや、インスピレーションがいろいろ湧くんですよ。たとえば、山田（恵一）にはシューティングスタープレス、武藤にはムーンサルト、橋本には重たいからキック、みんな私が「やれ」って言いましたからね！（自信満々に）。まぁ、蝶野のケンカキックは自分でやってましたけど（笑）。

——数々の必殺技の陰にジョージさんのアドバイスあり、と。で、初代タイガーマスクの退団後に、ザ・コブラが後釜に座るように新日本のマットに登場しましたが、コブラは日本より前にカルガリーでデビューしていたんですよね？

ジョージ　そうです。コブラというマスクマンに変身したのは、私が自分で考えて決めたことですから。当時はメキシコ遠征中で、アンドレ（・ザ・ジャイアント）や長州さんが来ても、私は2年連続で最優秀外国人選手賞を獲るくらい活躍してたんだけど、新日本から帰国命令も何も来ないから、勝手にカナダに行ったんですよ。そのときにおもいきってマスクマンに変身したんです。

——せっかくの男前なのにマスクを被ることに抵抗は？

ジョージ　いや、最初はありましたよ。だけど、海外で成功するためには周りと差別化しないと。カルガリーは安達さん（ミスター・ヒト）が現場を仕切っていたから日本人も珍しくなかったしね。だから、マスクマンとして得意の空中殺法を使ってメキシコの経験を活かせば、これは絶対に天下が獲れると思った。マスクやコスチュームのデザインも全部自分で考えてね。

——ザ・コブラというリングネームの由来は何かあるんですか？

ジョージ　当時、グスタボって選手がメキシコにいたんですよ。佐山さんはそのグスタボから、速い動きや技を教わったらしいんですね。彼はタイガーマスクと田園コロシアムで闘ったでしょ？　そのときは腰を痛めてたらしくて、いい試合ができなかったけど。その彼のリングネームがコブラだったから、私はさらに定冠詞の「ザ」をつけたんですよ。

——？・？・？　ええと、初代タイガーと田園コロシアムで闘ったのはエル・ソラールですよね？　それで、来日時に腰を痛めていて満足なファイトができなかったのはマスクド・ハリケーンこと、ボビー・リーだったと思うんですけど……。

ジョージ　……うん？（記憶がゴッチャになってる様子）。まぁ、なんにしろ佐山さんが「先生」って言ってたのが、そのグスタボだったんですよ。佐山さんが「素晴らしい優秀なレスラーだ」って言ってるから、「そのコブラに『ザ』をつけたらもっとよくなりそうだな」って、単純な発想だったんですけどね。

——は、はぁ……。

ジョージ　で、コブラは最初、悪のヒーローとしてカルガリーで誕生したんですよ。そうしたらそれがウケちゃって、それこそ向こうでタイガーマスクみたいなブームになっちゃった。それでベビーターンしたらもっとウケちゃって（笑）。もう、アナウンサーも興奮しちゃって、古舘さんばりに絶叫してましたよ。

昭和新日本の凄まじさを早口でまくしたてる荒川。写真はアントンの瓶ビール一気飲みがいかに速かったか、アゴに闘魂を宿しながら力説するところ。その横でどんどんグラスを空けていくジョージ。やっぱレスラーはこうでなくっちゃ！

荒川　そのとき、ジョージはカルガリーで最高に稼いでいたから、こっちに「帰ってこい」って言われても戻ってきたがらなかったんですよ。

ジョージ　あっちに骨を埋めるつもりでいたからね。だから、山本さんから「ジョージ、帰ってこい」って電話もらっても、もう遅いという気持ちで「帰りたくないです」って断ったんですよ。そしたら、「バカヤロー！　いま、社長（猪木）に代わるから」って。で、猪木さんが電話口で「高野さん、帰ってきてください」って言うわけですよ！

——あの猪木さんが！

ジョージ　もう、そんなふうに猪木さんに敬語を使われたら、「はいっ、わかりました！」で一発ですよ（笑）。猪木さんに敬語を使われた新日本のレスラーなんて、荒川さんをはじめ、何人かしかいないんですから。

荒川　いやいや、私は敬語なんて言われたことないよ、フフフ。

ジョージ　そんな、荒川さんこそが新日本の功労者じゃないですか。だから、「ドン」ですよ。

——陰のドンだった、と。

ジョージ　はい。ドンパチのドンじゃないですよ（笑）。

——ハハハハ！　さて、デイビーボーイ・スミスと闘ったコブラの日本デビュー戦（83年11月3日）についてもお聞きしたいんですけど……。

ジョージ　（さえぎるように）あれはね、私はあの落下したシーン（トップロープ越えのノータッチ・プランチャを自爆！）はテレビでカットしないでほしかった！　あの衝撃の映像を「なんでカットしたの!?」って。あのあと、私は普通に闘ったでしょ、化け物のデイビーボーイ・スミスと。あれ、めちゃくちゃ力が強いんだから。

——タイガーマスクと比べて、そのデビュー戦からザ・コブラの悲劇が始まっていたというか。

ジョージ　いや、よく悲劇とか言われるけど……、この取材のテーマも「タイガーマスクになれなかった男」だっけ？　そういう意識はべつに私にはないんだけどなあ。だって凱旋のときも、帰国便のドアが開く瞬間、テレビカメラが機内に入ってきたんですから。あとで聞いたら、「国際線でそんなのは史上初だ」って言われましたからね！

——ああ、コブラ登場の予告で流れてましたね。機内にマスクを被ったスーツ姿のコブラが立っているっていう（笑）。

ジョージ　そうそう。一応、正体不明だったから、適当な英語をしゃべってさ（笑）。

——しかし、コブラ時代、周りからタイガーマスクの後釜と見られてやりにくさはなかったですか？

ジョージ　いや、僕にとっては、佐山さんは佐山さん、私は私だから。人格も身体のサイズも違うし。あ

のね、我々のモチベーションとしては、リングでいかにいい試合を見せられるかということがすべてなんですよ。いい試合をやって輝くことがファンのニーズを満たすことであって。そういう意味ではコブラの時代は私にとって財産、宝物なんですよ。

――コブラのジュニア王者時代、荒川さんもタイトルマッチで闘っていますよね。

荒川 はい、2回やりました（85年8月1日・両国国技館＝NWA世界ジュニアヘビー級戦、同年10月31日・東京体育館＝WWFジュニアヘビー戦。いずれもコブラが勝って王座防衛）。でも、てっきりテレビに映ると思ってたのに放送されなかった。新聞にも「コブラvs荒川」って載ってるんですよ？ だからあのときはいっぱい苦情が来ましたよ。

ジョージ あの試合がきっかけで荒川さんもジュニア戦線に参加してきて、「これからやっていくんだな」って思ってたから、「あれ、なんだ!?」みたいな肩すかしを食いましたね。

荒川 コブラはその両国で終わりましたよ。僕もあの2試合で終わった。あれでお互いガックリきちゃって、そのあとはいい試合やってないもん。

ジョージ ホント、ガックリきましたね。あの試合は二度とできないですよ。荒川さんも一世一代のチャンスだと思って集中してきてくれたのに。

荒川 あれが最後のチャンスだと思ってたから、「もう、やってられるか」っていうね……。

――つまり、それだけの試合をした自負があったわけですね。

ジョージ そうですよ！ お客さんが総立ちになってましたもん。あの試合が放映されれば、荒川さんはスターになっていたんですよ。

荒川 あれでもう、「あ、俺は……」ってわかった。

――よく言われるのが、強敵が次々に出現したタイガーマスクに比べて、コブラは対戦相手の駒が足りなかった、と。

ジョージ だからこそ、荒川さんが入ってくるのかと思ったわけですよ。ホント、トーンダウンもいいところだよ。

荒川 まぁ、とにかくタイガーマスクの人気は異様なほど爆発的だったから、それをコブラの比較の対象にしてもね。

――タイガー人気は猪木人気を凌ぐほどと言われていましたものね。実際、当時の猪木さんは欠場がちでしたが、タイガーマスクが出ていれば興行成績はさほど落ちなかったみたいで。

ジョージ でも、そこまで爆発的な人気を呼んだ佐山さんは、結局どうなった？ 新日本をあゝいうかたちで辞めたでしょう。私に言わせれば、コブラよりもタイガーマスクのほうが悲劇のマスクマンですよ。

――それから時が流れて、Uインターの神宮球場大会（96年9月11日）でコブラvsタイガーマスクは実現しましたけど、感慨深かったんじゃないですか？

ジョージ あれは髙田のほうから要請があったんだよね。でも、本当は行きたくなかったんだよ。練習してなかったからコンディションも悪いし、恥ずかしいでしょ。死にたかったもん……（しみじみと）。

見よ！ コブラに見舞う荒川の見事なゴッチ式ジャーマンを！ 普段ひょうきんプロレスでは見せない底力を見せた荒川。二人はこの試合がコブラの絶頂期と語るが、写真からもその気迫が伝わってくるってもんだ。

コブラは僕とやった両国で終わったんですよ（荒川）

――コブラは筋骨隆々な身体がトレードマークでしたからねえ。そのコブラが新日から消えたときは、唐突な感じでしたよね。で、その次のシリーズに、ジョージさんがヘビー級として〝凱旋帰国〟するという、強引な流れで。

ジョージ 唐突だったよね。あれは会社の判断だったと思うけど。人生、すべて終わりは唐突よ。

――コブラをやめることに心残りはありませんでしたか？

ジョージ いや、それはあったよ。マスクを脱いで素顔を公表したほうがよかったかなって。だけどそうしてしまうと、「せっかくコブラを応援してくれた子どもたちの夢を裏切ってしまうな」みたいな思いもあったし。だから、ジョージ高野はザ・コブラと同じ技をやっちゃいけないという部分で葛藤しているうちに、出番が第5試合とかになっちゃったから、「あ、これはイカンな」と。

――でも、素顔に戻ってからスーパー・ストロング・マシン選手との「烈風隊」でIWGPタッグも獲りましたよね。

ジョージ うん。でも、三日天下でしょ。明智光秀じゃあるまいし、使い捨てじゃないんだから。コブラと荒川さんの試合だって使い捨てでしょ？ 継続しないと意味がないじゃん！

――言い方は悪いですけど、便利屋のような扱いに感じていた、と。

ジョージ ちょうどそんなときに若松さん（将軍KYワカマツ）からメガネスーパー（SWS）の話が来て。「このままここにいても俺は天下獲れないな、このまま若手の肥やしになるぐらいだったら」という判断が働くよね。

――ジョージさんの退団があきらかになる直前、ザ・コブラvsSSマシンというカードが、これまた唐突に組まれましたよね。

ジョージ それは、新日本がオファーとか条件を提示するのが遅いのよ。私がメガネスーパーに移動するとなって、初めてギャラからそういうマッチメイクの提示にしろ……。もう遅いよ！（キッパリ）。一回気持ちを決めたら、私は突き進むほうだから。悪いけど、タイガーマスクがいなくなったあとに、私がコブラで日本に帰って観客を呼び返したよねえ？ それなのに「功労賞も何もないのかよ？」って。プロレスはほかのプロスポーツに比べて、すべて契約の面とかで遅れてるじゃん。

――荒川さんは、そのジョージさんの1年前に新日本を退団していますよね。そのときに印象的だったのが「あくまでも退団であって、

引退ではない」と強調していたことなんですけど。

ジョージ 荒川さんが一声かければ何人も動きますから。

るよね。そこで企業の巨大マネーが活かされて、プロレス界を統括する

吸うぐらいだし。それでなのか、急に動脈が破裂して。

荒川 あのう、3つの道場があったと思いますか？

ジョージ高野×ドン荒川

田中八郎氏と3つの道場の主が一枚に収まった、いまとなっては貴重な写真。夢のような潤沢な資金、かえすがえすももったいなかったというか……ターザンの野郎め！

引退ではない」と強調していたことなんですけど。

荒川　そうです。退団だと言ったのが一部では〝引退〟と発表されてしまいましたけど。

ジョージ　FA宣言ですよ。

——ただ、なぜ引退というように受け取られてしまったのかといえば、当時のリング事情として、荒川さんが全日本や新生UWFに移籍するとは考えにくかったですし。

荒川　まあ、あの頃は（新日本に）選手が多すぎたんです。だから僕はこのままだったら会社に負担がかかるから、「いずれ新しいリングが必要になるな」と思ってたんですよ。

ジョージ　荒川さんが一声かければ何人も動きますから。

荒川　私が辞めたあと、新日本の選手たちは会社から「荒川と会うな」と言われてたって聞きましたね（笑）。

——それはSWSの動きとは無関係だったんですか？

荒川　その当時から、私には個人的なスポンサーの方たちがいましたから、その方たちに力を貸してもらおうと。だから、ジョーちゃんに誘われるまでは、田中八郎さん（メガネスーパー代表）とはお会いしてないですし。

ジョージ　さっきも言ったように若松さんから話が来たわけ。だけど、私はこの話を活かすには荒川さん抜きには考えられんなと思った。「新日本とパイプを作らなきゃいかんな」と。そのためには「荒川さんがいなきゃ絶対にダメだな」と。

荒川　でも、私は橋本も武藤も蝶野も、誰一人声をかけてないですよ。

ジョージ　要するに天下獲ったときよ。そうすれば提携とかいうかたちもとれて、新日本とも共存共栄できるよね。そこで企業の巨大マネーが活かされて、プロレス界を統括する組織が作れるという構想だったんですよ。

——先ほども話に出たプロレス界の遅れている面を、SWSは進めることになるはずだった、と。

ジョージ　そうだよ。企業が参入して、プロレス界が大きく飛躍するところだったのに……。それを叩いたのは誰だったかって？　知ってるでしょ。

——まあ、その方も因果応報か、いまは大変そうですけどね（笑）。そういえば、田中八郎元社長が昨年の12月に亡くなって、おととい（2月2日）メガネスーパーによる社葬が営まれたそうですね。

荒川　どうしても外せない所用と重なって私は行けなかったけど、ジョーちゃんに行ってもらって。

ジョージ　悲しかったねえ（しみじみと）。長嶋（茂雄）さんが来てたよ。レスラーでは維新力とか桜田さん（ケンドー・ナガサキ）とか若松さん、鶴見（五郎）さん、リングアナウンサーの渡辺（鳴海）剛クンとか。いいものを一緒に作りたかったし、あの人が愛情を持って会社を守ってるのもわかってたから、私も本当に残念でならないね。あの人とはケンカなんかしたくなかったんだけど……。

荒川　田中さんは偉大な方ですよ。素晴らしい方です。でも、超ワンマンでしたから、ストレスが溜まってたんでしょうね。酒を飲まない方で、タバコをチョコチョコっと吸うぐらいだし。それでなのか、急に動脈が破裂して。

ジョージ　都内で打ち合わせがあって、それに向かっている途中に倒れられたらしいですよ。最後までビジネスマンだった、ホントにサムライですよ。

——荒川さんは団体崩壊後もずっとSWS所属を名乗ってましたよね。

荒川　でも、7年前に完全に辞めてたんですよ。

——それまではメガネスーパーの社員というかたちで？

荒川　いや、そういうのじゃないです。田中さんと二人の約束だから。私はSWSがなくなるときに「何もしなくていいから残ってくれ」って言われたんです。だから、二人でお茶飲みに行くだけですよ。アポも何も取らずに「来ました」って言えば、じゃあ「行きましょうか」って（笑）。それが仕事でした。そのかわり、長嶋さんをはじめ、いろいろな人を田中さんの周りに集めてましたから。

——そのSWSを7年前に辞めた理由というのは？

荒川　そりゃありますよ、理由がなきゃ辞めないんだから。でも、それはお互いの中でのことであって、一方が天国へ行かれたんだから、もうどうこう言うことでもないですし。たしか、3年前にホテルでメシを食ったんですよ、二人で。それが最後になってしまいましたね。

——あらためて、SWSが崩壊した最大の原因というのはどこにあったと思いますか？

荒川　あのう、3つの道場があったでしょ？　どこがどうとは言わないけど、Aはお金を使いまくる、Bはまあまあ、Cはあまり使わない。AがBとCのぶんまでお金を使っていた。これは紛れもない事実。でも道場にはいっつもCのメンバーばかりが来てましたね。

ジョージ　我々がまじめだということは田中さんも理解してくれてたよ。やっぱり天龍さんが社長になって、その派閥で一元化しようとしていた動きが我々に圧力になったからね。で、5年契約でやるってところが2年で終わっちゃったでしょ？

——そのことで「契約違反じゃないか！」と、ジョージさんと弟の俊二（拳磁）さんが『週刊文春』で田中さんを告発したこともありましたね。

荒川　田中さんも（ジョージを）もの凄いかわいがってたんだから。それがちょっとしたかけ違いで、『週刊文春』にしゃべっちゃったのがね……。

ジョージ　あれがもう大失敗でした。まだ若くてリングしか知らないバカだったから。あの記事の内容は私の本意じゃなかったんだけど……。

荒川　だからもう、「本意じゃなかった」とか言うなって！　俺はそういう言い訳は大嫌いだから（キッパリ）。自分が悪かったら「悪かったです」って、それが男ですよ。

——その後、田中元社長とジョー

ジョージ高野×ドン荒川

ジさんは和解されたんですか？

ジョージ　いや、生前にお会いできなかったんで、仏前にお詫びしてきたんです……（ため息まじりに）。

――10年ぐらい前、天龍さんがあるインタビューでSWSが崩壊した原因として、高野兄弟と荒川さんの名前を挙げてましたけど。

ジョージ　「いいかげんなこと言うんじゃない」って感じですね。「一番いい思いをしといて、ふざけんじゃないよ！」って。

荒川　いやもう、どっちが悪いいいとか、言った言わないとかということは、私は言いたくないですね。まぁ、これは天龍さんのいないところで言ってもしょうがないことだから。私は言うんだったら面と向かって堂々と言いますよ。天龍さんも天龍さんで侠気のある人だし。

ジョージ　でも、天龍さんに高野兄弟がどうだとか言われる筋合いないですよ！　そもそも、あの人のためにSWSに入ったんじゃないんだから。

――3つの道場が同等の権限を持つということでSWSは始まったわけですよね。それが、社長は天龍さん、マッチメイカーはカブキさん、WWFの担当窓口に佐藤昭雄さんと、完全に全日本派閥で固められていって。

ジョージ　天龍さんは周りを自分の側近で固めて、我々を切るつもりだったんでしょう。一元化するってなって、「はい、そうですか」って賛成の手が挙がる？　粛清でしょうが！

荒川　（憤慨するジョージを制するように）だから、もう済んだことを言うなって！　それよりアンタが週刊誌で（批判を）言ったのが一番悪いの！

ジョージ　……それは、お詫びします（沈痛な面持ちで）。

Sは失敗でよかったかもしれない。あれ以上、田中さんがお金使わなくて

荒川　いや、お詫びしてもしきれないよ、本当に俺は。でも、失敗してよかったかもしれない。あれ以上、田中さんがお金を使わなくて。あれ以上使っていたら、メガネスーパー自体が危なかったかもしれないから。

――そもそもSWSは田中元社長の社長の息子さん（邦興氏）がプロレスファンで、その息子さんのために団体を作ったという話もありますよね。

荒川　息子さんはね、あのアンドレと（スタン・）ハンセンがやった田園コロシアムの試合をお父さんと観に来てて、それから新日本の大ファンになったらしいですよ。

――ということは、あの〝9・23田コロ〟を田中元社長も生観戦してたんですね。

『週刊文春』に告発したのはいま思うと本当に大失敗でした

じょーじ・たかの■本名・高野攘治。1958年6月23日、福岡県出身。大相撲廃業後、1977年にvs佐山聡戦でデビュー。初代タイガーマスクの引退後、ザ・コブラとして日本に登場。89年、素顔でSSマシンとのコンビでIWGPタッグ王座を獲得。新日退団後はSWS、NOW、PWC、FSRで活動。185cm、115kg（?）。

どん・あらかわ■本名・荒川真。1945年3月6日、鹿児島県出身。1972年9月、vsリトル（現グラン）浜田戦でデビュー。新日時代は"前座の力道山"の異名をとり、ひょうきんプロレスで人気を博す。新日を退社後、SWSに合流。S崩壊後もただ一人、メガネスーパーに残った男。170cm、97kg。

荒川　いやもう、しょっちゅう来てたんだって。それで息子が「団体作れ」っちゅうもんだから（笑）。

ジョージ　小田原の豪邸に招かれたとき、まだ学生だった息子さんのことを、周りの人たちが「邦興様」「邦興様」って言ってるわけよ。若いのに、あんまりゴマすられたらよくないから、社長（田中氏）の前で「邦興！」って言ったら、社長が目を丸くしてましたね（笑）。

――ハハハハ。あの、SWS時代に酔っぱらったジョージさんが荒川さんと新横浜の道場で、ゲロまみれになってスパーリングをしたって聞いたんですけど？（笑）。

荒川　ああ、ありましたね！　彼も相当いろいろなストレスが溜まっていたんでしょう。それで怒りの矛先がなかったのか、酔いに任せて私に向かってきたんですよ、「コラー！」って。だから、あれはスパーリングじゃなくてケンカですよ。こっちは「誰に向かって言ってるんだ、こい！」って（笑）。

ジョージ　もう返り討ち、荒川さんに一方的にやられました（笑）。

荒川　そこには北原（光騎）選手たちもいたんですよ。でも、誰も止めやしないの、シーンとして（笑）。

ジョージ　「あいつら、キ●●イだ」って思ったでしょうね。きっとそのときの我々は彼らにそういう姿、怒りを見せつけたかったんでしょうね。さすがに彼ら自身に向かっていったらイカンからね。

――シャレにならないエピソードだったんですね。ところで話は変わりますが、俊二さんはいまどうしているんですか？　ジョージさんとは絶縁してるというは噂も聞きましたけど。

ジョージ　いまはアメリカで財団法人の会長をしてますね。5年ぐらい前に向こうから電話がかかってきて。

荒川　もともと、仲が悪いですから、彼ら兄弟は（笑）。でも、仲が悪いったって兄弟ですから、本当は仲がいい。

――そのあと、ジョージさんは俊二さんと再会したんですか？

ジョージ　そうですね、私がアメリカとメキシコに行ったときに。弟は中南米まで手を広げて事業をやってますからね。

――いまはつながりが復活してるんですね。ジョージさんと荒川さんはずっと連絡をとり合ってきたんですか？

ジョージ　はい。じつは私、荒川さんの紹介で、とあるIT関連企業で一緒に働いてるんですよ。そこは資金も豊富な会社で、プロレスにもおおいに理解があって（ニヤリ）。

――お！　では第二のメガネスーパーのようなことも？

荒川　悪い意味じゃないかたちでね（笑）。まあ、いまに大きなことを起こしますから、『kamipro』さんも我々の動向から目を離さないほうがいいですよ！

――了解しました、SWSの頃の『週刊プロレス』にならないように注目してます（笑）。

【11年2月4日／都内・新宿にて収録】

島田十九八事務所

映画という幻想増幅装置!!

『地上最強のカラテ』『四角いジャングル』

三協映画を撮った男

映画プロデューサー

島田十九八

格闘家の超人追求をする姿を追ったドキュメンタリーフィルム制作で80年代の格闘技ブームを
後押しした三協映画。格闘技関連だけではなく文芸作品を取り扱った
このレーベルとは何か? 当時のプロデューサーを直撃! 押忍!!

聞き手／ジャン斉藤

——島田さんは梶原先生が作った三協映画のプロデューサーであり、あの北尾光司の後見人を務めた時期もあったりしてマット界との関わり合いは深いですよね。

島田　古くはユセフ・トルコさんから始まってるんだよ。ボクは日活の技術屋だったんだけど……。

——もしかして〝俳優〟ユセフ・トルコとお仕事されてたんですか？（笑）。

島田　そうそう。『海の野郎ども』っていう裕次郎さん（石原裕次郎）の映画なんだけどさ。

——ああ、トルコさんは水夫長役で出たそうですね（笑）。

島田　あ、キミは観たことあるの？

——いや、さすがにないんですけど、お噂だけは……。編集部によくトルコさんから電話がかかってくるんですよ。「猪木を殺すから会わせろっ!!」って（笑）。

島田　いまだに仲いいですよ、ボク。後楽園ホールとかで会うと「監督！　監督！」って言われるんだよ。

——北尾さんといい、個性の強い方と仕事をしてるんですね（笑）。

島田　北尾選手の場合は、彼の知り合いに、ある代議士がいたんですよ。で、その人の師匠をボクがよく知ってて、そんな縁で映像制作の仕事を紹介してくれたわけですよ。そのときに北尾選手は空拳道ってところに所属してたんです。

——新日本やSWSをクビになって武道家に転身していた時期の北尾さんが所属していた道場ですね。

島田　そのとき（UWFインターで）山崎一夫選手との試合が決まって。で、次に高田（延彦）選手とやることになって。ボクは仕事として彼の試合映像を撮ってたんだけど、負けちゃってね。その夜に寂しくしてる北尾選手を誘ってスタッフたちと一緒に酒を飲んで「一緒になんかやろうか」って話になった。それでボクが真樹（日佐夫）先生や士道館の添野（義二）さんと話して北尾道場というのを作ったんだけど、最初は生徒がいないじゃない。それで真樹先生と添野さんに相談して所属したのが望月（成晃）、TARU、岡村（隆志）なんですよ。

——島田さんがいなかったらドラゲーもなかったかもしれないですね。ヘタしたら（笑）。

島田　その頃、北尾道場とかほかの小さな団体がまとまってやろうかって話が出たわけですよ。それでインディー連合ができてボクも協力することになったんだけど……。

三協映画にプロデューサーとして参加した島田氏は、日活人脈を活かして格闘技のみならず文芸作品にも着手。島田氏は極真を追って世界中を走り回ったのだ。

北尾選手と一緒にやることになって PRIDEやUFCに進んでいったんです

——「プロレス連合會」ですね。バイク便会社のオーナーが資金元になったFFFに対抗して作られたインディー同盟。

島田　そうそう。そのときWARの大将（天龍源一郎）と知り合いになって、そこから大将を通して北尾選手の新日本復帰につながったりしたんだ。あのときは大将にはお世話になりました。

——猪木さんとタッグを組んで長州力と禁断の対決ですね。

島田　それから北尾選手はUFCやPRIDEにも進んでいったわけですよ。

——PRIDE出場も島田さんのプロデュースだったんですね。のちにゼロワンやWWEで活躍するネイサン・ジョーンズが相手になって。

島田　『PRIDE・4』のときは東京ドームで引退式もやったでしょ。普通はあんなところできるもんじゃないですよ。

——あのときのPRIDEはKRSが主催していて、小室哲哉のスーパーバイザーだった喜多村（豊）さんがプロデュースされてたんですよね。

島田　そうそう。喜多村さんは音楽が専門だったけど。

——そういったラインから藤谷美和子がPRIDEでミニライブをやって北尾さんを呼び込んだり、小室哲哉がプロデュースをした台湾のアイドル『Ring』のライブもあったりしたんですね。

島田　喜多村さんとは北尾選手が出たUFCにも一緒に行ったよ。北尾選手とオクタゴンまで歩いていくときに野次られた（笑）。

——一緒に入場されたんですか（笑）。PRIDEのときは榊原（信行）さんともお話しされたりしたんですか？

島田　話なんてもんじゃない。よく知っていますよ。彼がまだ東海テレビ事業の営業やってるときから。あと谷川さんにしたって、彼らが離れたサムライTVの面倒を見たのはボクだからね。

——そんな島田さんがこうしてマット界に関わるきっかけになったのは、梶原先生なんですよね。

島田　そうだけど、話せることと話せないことがあるからね。

——了解しました！　まずは梶原先生との出会いから教えてください。

島田　あのね、それは『愛と誠』のドラマ化がきっかけなんだよね。映画のほうじゃないよ。

——池上季実子さんが早乙女愛を演じたテレビドラマ版のほうですね。

島田　そのドラマ化のスタッフは『地上最強のカラテ』のスタッフと同じなんです。

——三協映画で制作された極真のドキュメンタリー映画。監督は野村孝さんでもともとは日活にいらした方なんですよね。

島田　そう。さっきも言ったけど、僕も日活で技術のほうをやってて、野村監督やそれこそ鈴木清順さんとも仕事をしていたんです。

梶原先生の武勇伝？ ボクは見たことない。……いや、あるかもしれないなあ（笑）

—それで『殺しの烙印』で日活から干されていた鈴木清順監督は、三協映画の『悲哀物語』で復帰することになるんですか。
島田　そういうこと。三協映画ってのは誰と誰が作ったってのがわかるでしょう？
—東京ムービーの藤岡（豊）さんと石原プロにいた川野（泰彦）さんですよね。
島田　そう。それで三協映画にプロデューサーとしても参加したわけです。その三協映画の事務所ってホテルニュージャパンにあったんだけど、あそこは火事で焼けちゃったじゃない。
—横井英樹がオーナーの。
島田　その9日ぐらい前に、ボクらはニュージャパンから引っ越したんだけど、冗談だけどオレたちがなんかやったんじゃないかと思われたりして（笑）。
—そんな噂がありましたか（笑）。
島田　で、『悲哀物語』の中で外車を使うシーンがあったんだけど、当時は外車を借りたりするのはけっこう高いわけ。そこで梶原先生の車がベンツのオープンカーだったから、劇用に借りたんだけども、スタントマンがぶつけちゃったんだよね……。
—うわ〜！
島田　これが運の悪いことにね、撮影後すぐに先生が乗ることになっていたんですよ。それで急いで直そうとしたら、ベンツの修理できるところって当時は限られていて。そこへ持っていったらさ、先生にすぐに連絡を入れちゃった。「先生の車、ウチに修理に来てますよ」ってなもんで。
—事故ったことがあっさりバレちゃったわけですね（笑）。
島田　それでボクは先生と面識はあったけど、強烈な性格だと思わないから。現場に来るときはやっぱり威風堂々としてるし。
—制作総指揮としてドーンと構えていて。
島田　でも、車を返しに行ったらね、「キミね、この車ね、なんかあったんじゃないの？」ってドスを効かせて聞くわけよぉ。
—ワハハハ！　島田さんはどう対応したんですか？
島田　黙ってたわけだよ。そうしたら怒ったねえ！　もう「こりゃあスゲエな!!」と思ったんですよ。
—感心するくらい（笑）。
島田　しかもさ、僕は知らなかったんだけど、うしろのトランクに壊れたパーツが入ってたりしたからさ（笑）。先生からすれば「いい度胸してる」と思ったんだろうね。そこから急に親密になっていったよね。
—梶原先生って、当時からかなりコワモテだったんですよね。
島田　ああ、もう凄かったね。身体もデカいしね。で、肩で風を切って歩くじゃない。威風堂々としてるんだけど、周囲は怖がっちゃうんですよね。
—でも、かなり繊細な方とも言われてますよね。
島田　気は遣う人だけど、気は小さくないよ。だって、いざとなったらやることやるんだから……。
—やることはやる（笑）。武勇伝には事欠かないわけですからねぇ。そういう現場に遭遇したこともあったりするんですか？
島田　ボクは一度も見たことないけどさ。……いや、あるかもしんない（笑）。
—ワハハハ！　そのへんは話せないわけですね。映画の話に戻りますが、『地上最強のカラテ』シリーズや『四角いジャングル』シリーズはそうとう儲かられたんですよね。
島田　うん。格闘技関連はね……。
—ああ、文芸作品はそんなに入らなかったようですね。
島田　そうなんです。でもね、格闘技関連以外の作品は、いまでいう映画の「制作委員会」みたいなもんなんです。たとえば、あなたが1億円を出してボクが1億円出したとする。格闘技のほうは梶原先生が制作費を出してましたけど。
—でも、映画の売り上げが原因で大山倍達先生とのあいだに亀裂が入ったみたいに言われてますよね。梶原先生の『反逆世代への遺言』でもそのへんは踏み込んで書かれていて……。
島田　亀裂というよりは、要するに○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○という話でしょ。
—あ、そうなんですか!?
島田　そうだよ。それで○○○○○○○○○○○○○○○○されたわけよ。で、また大山先生のほうが「○○○○○○○○」とか言ったんじゃないの？
—そういうことだったんですね（笑）。
島田　そんな話ですよ（笑）。
—当時は契約とかをちゃんと結んでるわけじゃないから、そこらへんは曖昧なんですかね。
島田　そこらへんは凄いんだよね、昔は。ボク、契約書っていうのをいろいろ見てるよ。それこそ北尾vs高田戦なんかの契約書も持ってるからさ。
—国宝級ですよ、その契約書！
島田　まあ梶原先生の当時ももちろん契約やなんかはしてるんだけど、梶原先生や関係者が集まったら「じゃあアイツとアイツ、どっちが強いだろうな」って話になる

極真幻想を煽りに煽った映画『地上最強のカラテ』のチケット！　これを片手に当時のプロ格者は"最強列車"に乗車したのだ。シュポー!!

わけだから。

——どんどんその場でエキサイトして現実も動かすという。猪木vsウィリー・ウィリアムスも『プレイボーイ』での論争で火がついたところはありますし。ウィリーがクマと闘ったのもそんな感じで話は進んでいったんですか？

島田 だからさ、そういう話はすぐできあがるわけですよ。「クマとウィリーはどっちが強いんだろう」みたいになるじゃないですか。

——『四角いジャングル』で長岡時代の朝潮が取り上げられていたのも何か計画があったんですか？　高見山や千代の富士を起用したプロレス団体設立みたいな計画は実際にあったようですけど。

島田 ああ、あれは朝潮のアニメ映画を撮りたかったんですよ。

——あ、その伏線でしたか（笑）。しかし、思いついたことをちゃんと実現させるところは大山先生や梶原先生の凄さですよね。

島田 そうそう、普通じゃあ実現できないじゃない。『最強最後のカラテ』の真樹先生なんて熱した砂に直突きしたけど、あれ何百度もあるんですよ。

——畳の手刀ブチ抜きなんかも普通じゃ考えないですよねぇ。クマも車飛びもそうですけど、ある程度、安全対策はしてたんですか？

島田 そりゃ、いざとなったら危ないからね、鉄砲を持った人をちゃんと呼んだりしてるよ。

——クマの牙や爪はなかったという話ですけど。

『四角いジャングル』で一躍ブレイクしたベニー・ユキーデ。原作となった漫画はフィクションとノンフィクションが入り交じるかたちで進行するが、映画のほうは当時のプロ格闘技シーンをチャンポンにして映像化。三本目まで制作され、最終作品では「うでっぷし日本一」というアマチュア大会が催され、路上の喧嘩に触発されて格闘技に目覚めた森田茂という予備校生が主役級の扱いで登場！ 早すぎたジ・アウトサイダーとも言えるからやっぱり三協映画は偉大だ！ ちなみに破壊王のコスチュームはユキーデに憧れて。

梶原先生が逮捕されたとき心配で一番最初に電話をしてきたのが芦原英幸先生です

島田 全然ないことはないですよ。それでも危ないよ、デッカイし。

——いくら牙がなくても、あんまり近寄りたくはないですよね（笑）。

島田 ホントにそうよ。あと大山茂さんの真剣白刃取りなんてもたいしたもんだよね。我々スタッフってどんなときでも最初は心配するんだけど、どんどんエキサイトしてっちゃうわけ。「あれができるんだったら、あれもできるんじゃねえかな」って（笑）。

——そんな中でも一番危なかった撮影ってなんですか？

島田 やっぱり試し割りだよね。実際どうなるかわかんないんだもん。士道舘の添野先生もさ、水瓶割りでヒジをバックリ切っちゃったんだよ……。

——添野先生の水瓶割りというと、『地上最強のカラテ』のオープニングシーンの……。

島田 あの傷はいまだに残ってるでしょ。やっぱり瓶は危ないね。極真の人たちは瓶割りはやらない。とくに手では絶対に。

——危ないからですか？　ビール瓶切りは大山先生の代名詞ではありますけど。

島田 危ないし、大山館長がやればいいんですよ。弟子のやることじゃないんですよ。それはボクらが言う以前にみんなやらないし、そこまで極真の幻想を高めたのは『空手バカ一代』と、僕らが作った映画だと思います。

——それが『地上最強のカラテ』と『四角いジャングル』。

島田 どっちも凄い人気だったからね。もう亡くなられたけどケンカ十段の芦原英幸さんだって、先生が逮捕されたときに一番最初に電話をかけてきましたからね。

——『空手バカ一代』では主役級の扱いでしたね。

島田 映画関係では鈴木清順さんです。

——二人とも梶原先生に恩に着てるんですね……。あのときは島田さんもかなり大変だったと思うんですけども。

島田 大変なんてもんじゃないですよ。こんなのもう、言えないことがいっぱいあるよ（苦笑）。

——「島田さんは墓場まで持っていくつもりだ」とよく言われてるようですね（笑）。たとえば、梶原先生が猪木さんをホテルの部屋に監禁した騒動なんかはどうご覧になってたんですか？

島田 まあ、いろいろあったんでしょうね。

——猪木さんは事件発覚当初、「梶原先生とは多少面識はあるが、よくは知らない」とか、ありえないことを言ってましたけど（笑）。部屋にも新間さんを置き去りにしてきたし。

島田 でも、猪木さんはいまでもちゃんといろいろと協力してくれるからね。13回忌のときの興行のときもレフェリーをやってくれたし。逮捕にしても、梶原先生だけでもって逮捕されたわけじゃないからね。その前にショーケン（萩原健一）が大麻所持で逮捕されたわけですよ。

――三協映画が制作した『もどり川』の主演だったショーケンが、映画公開前に逮捕されたんですよね。それで梶原先生も大麻をやってるんじゃないかと疑われて。

島田　そういう噂が凄く出たんですよ。で、映画のポスターが問題になってしまった。「制作総指揮　梶原一騎」を外してくれって映画会社から言われたわけ。

――主演は大丈夫だったんですか？（笑）。

島田　さすがにショーケンは消せないんで、梶原先生の名前をタイトルから外して上映したんです。だから本命は大麻で、ほかの容疑で警察で引っぱったんですね。だって、ケンカやったりなんかするのはさあ、そんな珍しいことじゃないじゃないですか。

――当時はそうですよね（笑）。いまだったらちょっとアレですけど。

島田　そうそう。それもさあ、普通の人をイジメたとかじゃないからね。

――『月刊少年マガジン』の副編集長、猪木さん、赤坂のホステス、あとはブッチャー本のゴーストライターをやったゴジン・カーンとか（笑）。

島田　当時だったらよくあるよ、そんな話は。

――まあ、なかなか猪木さんは脅せないですけど（笑）。

島田　猪木さんは脅かせないわな。でも、梶原先生が逮捕される2～3日ぐらい前かなあ。先生と赤坂で飲んでたら「真樹を呼んでくれねえかなあ」って言い出して、それで真樹先生が来てね、そのときにだいたい数日のうちに逮捕されるっていうのをボクらわかってたからね。先生のとこにそういう情報が入ってたか、そういう気配だったんじゃない？　店を出たら週刊誌に写真を撮られちゃったりして、それこそ真樹先生なんかはカメラマンを捕まえてさ、「フィルムを出せ！」ってなもんですよ。

――さすが真樹先生ですね（笑）。で、先生の保釈金を島田さんが持っていったとか。

島田　そうそう。3000万。

――3000万円って当時でいったらとんでもない額なんじゃないですか。

島田　それぐらい逃げたりされたりなんかしたら困る重要な人なんですよ。

――そんな大金は三協映画のほうで工面したんですか？

島田　それはいろいろとあるんだよぉ（苦笑）。とにかく先生は（拘置所から）早く出たがってたね。それでカバンに現金で3000万を入れてね。

『地上最強のカラテ』といえば、ウィリーの"クマ殺し"！ アンデウソンの"セガールキック"のようにケチをつけられがちだが、何があろうとクマと対峙はしたくないよ〜。

――凄いなあ。

島田　結局、先生は大麻の罪は問われなかった。それから先生はパレロワイヤルっていう赤坂のマンションで執筆活動してたんだよ。

――その後は映画のほうには……。

島田　だって映画やるったってさ、もうそんなにお金がないもんね。お金は先生のことだからどっかに言えばさ、作ってくれるんだろうけどね。とにかくあの人の凄いのはね、我々が海外ロケやるじゃない。絶対にお金に困らせないんですよ。

――なんとでもするって感じですか？

島田　なんとかしてくれるんだよ。『リトルチャンピオン』なんて先生はあまり好んでなかったんだけど、ちゃんと資金を用意してくれるし。

――ゴーマン美智子の自伝が原作ですし（笑）。

島田　あのときなんかでもハリウッドで撮影したわけだからお金がいるわけよ。で、こっちは「お金が足りない」って電話すると「よし、わかった！」って言ってくれる。それだって100万や200万の話じゃないからね。もの凄く頼りになる方でしたよ。『地上最強のカラテ』シリーズだって撮影日数もかかるし、お金もかかる。イギリスから南アフリカのケープタウンまでずっと撮影しながらアフリカ大陸を下りて、そこからオーストラリアに飛ぶ。オーストラリアからハワイ、ハワイからカナダ、カナダからチリやアルゼンチンまで行って。

――とんでもないスケールですね（笑）。

島田　凄いでしょ。ボクはそのままプロレスとかに関わったのもこうした梶原先生の影響だよねぇ。マッチメイクしたりさ、おもしろいじゃない。

――あと映像と格闘技の結びつき、いわゆるメディアミックス化が進んでいったのは梶原先生の力によるところは大きいですよね。「三協映画が独占スクープ！」みたいに煽られるといやがおうにも興味を持つし、予告編だけで幻想がどんどん膨らんでいく感じで。スクープ映像を映画スパンでやってたのは凄いですし。

島田　先生はテレビだから映画だからって、バカにしてないですよね。それぞれのメディアの特長を理解してたよ。だからボクは思うんだけどね、おそらく活字では表現できないものが映像だと思ったんじゃないかな。

――だからこそ三協映画も作ったりして。

島田　梶原先生が言っていたのは「生の迫力、音」なんだよね。昔やった『あしたのジョー』なんかでも、殴る音はぶら下がった肉を叩いたりしたんだけど（笑）。そこは活字と違って直接、伝わるからね。活字には活字のよさはあるけど、映像は梶原先生の考えにも、そして格闘技にもマッチしていたし、また梶原先生の使い方がうまかったと思うんだよね。

――力道山の昔からテレビとプロレスの相性の良さはうたわれてきましたけど、梶原先生の登場ではまた次のステージに進みましたよね。

島田　そうだね。それでボクもしばらく関わってきたし、また『あしたのジョー』の実写化がされたでしょ。梶原先生は映像の中で息づいてるんですよ。

――なるほど。いろんな意味で話せないことが多いようですが（笑）、今後も梶原先生の魅力を伝えてください！

【11年2月某日／都内・某所にて収録】

梶原一騎と極真

運命の破局

『BUDO-RA BOOKS』編集長

山田英司

マスコミ畑で梶原一騎について聞くならこの人!
『フルコンタクトKARATE』の元編集長、ザンス山田こと山田英司氏が登場だ!
自らも極真出身のザンス山田が、梶原作品と極真の結びつきについて語るザンス!

聞き手／ジャン斉藤

—今回は梶原一騎と極真空手の結びつきが格闘技界にどのような影響を与えたのかをお聞きします。

山田　俺、もともと福昌堂で空手の雑誌を作っていたけど、社長が寸止め空手の人だったわけですね。で、当時の空手界が極真や大山倍達をどういう目で見てたかというと、もう悪口しか言わない。

—まあ、そうでしょうね（苦笑）。

山田　まず聞いたのは「大山倍達は朝鮮人だ」と。そのときは「朝鮮人の何が悪いんだろう？」と思ったんだけど、俺がこの業界に入る前の16歳のときくらいかな。もうすでにマニアだったから、いろんな情報を聞いてたわけです。で、大山倍達に「韓国人なのにどうして日本名を名乗るんですか？」という手紙を出したら、大山倍達から丁寧な手紙が来て「日本国籍を取ったので、私は日本人だと名乗っています」と。

—そんなやりとりがあったんですか。

山田　その手紙、『月刊空手道』に載ったことありますよ。まあでも大の大人がそんなことで差別するのはどうかとは思ったよね。

—とにかく、メディア等を使ったハデな売り出し方に、従来の空手家たちは冷淡な態度をとっていたんですね。

山田　もの凄い反発があったわけですよ。「牛を殺したのもウソだ」とか、そういうことはずいぶん聞かされましたね。俺が極真を好きだから、いろいろ吹き込むわけよ（笑）。要するに「ハデなパフォーマンスをやってマスコミに載って商売上手な悪いヤツだ」っていうのが空手界の見方だったんです。

—その宣伝の旗を振っていた一人が梶原一騎だったわけですよね。

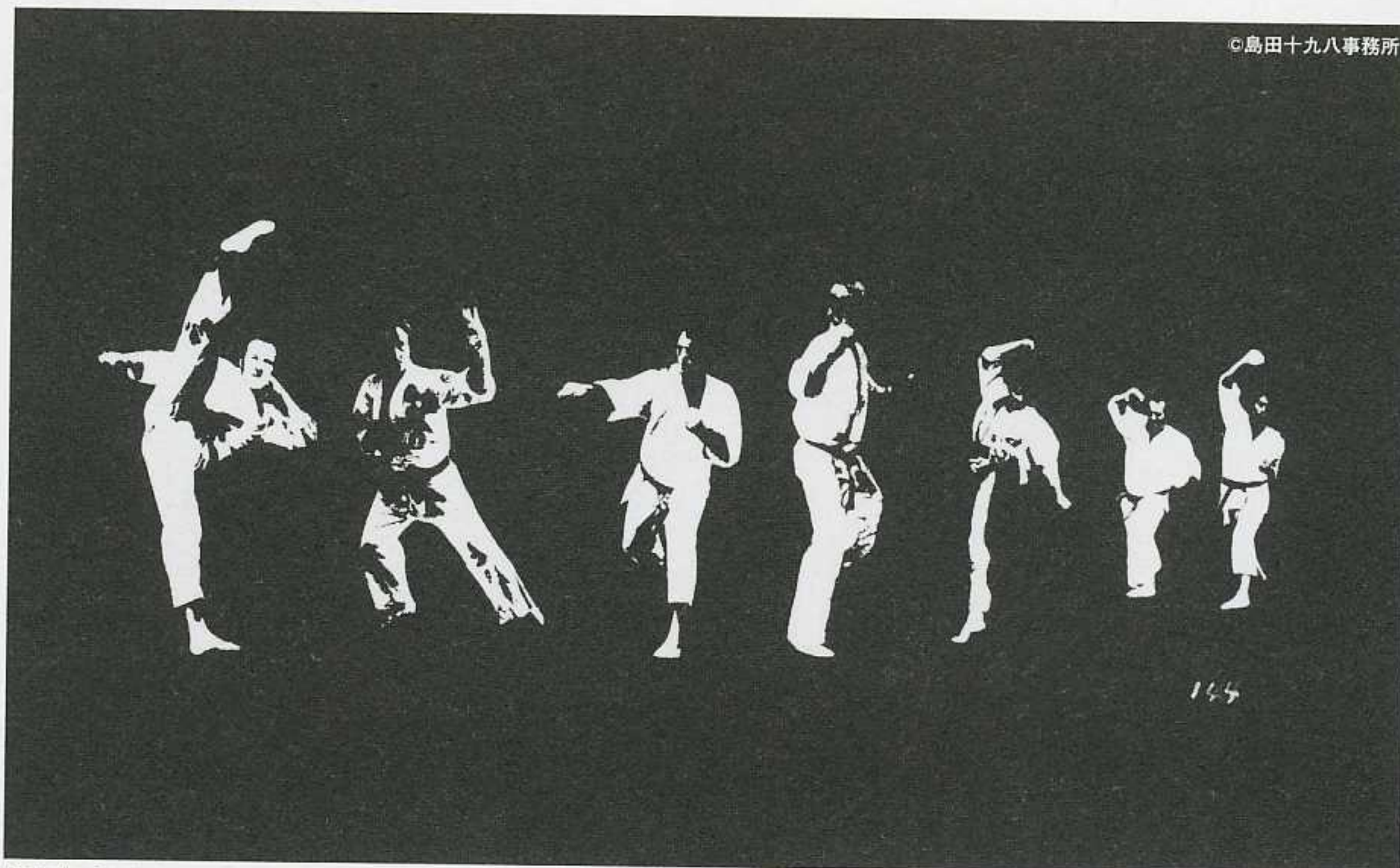
山田　そうですね。ほかはあんまり仲良くなかったんじゃないかなあ。梶原一騎も当時は大山倍達以外を取り上げなかったもんね。

—梶原一騎は『虹を呼ぶ拳』で感触を得て『空手バカ一代』に向かったということなんですか。

山田　でしょうね。まあ、梶原一騎は隙あらば、あらゆるところに大山倍達を出してましたね。

—隙あらば大山倍達（笑）。

山田　俺、全部チェックしてたから。で、柔道vs空手というと、『姿三四郎』でもかならず空手が悪役だったわけじゃないですか。だけど梶原一騎の空手家はみんな朴訥としてて、自らの強さを隠す人格者として出てくるんですよね。

©島田十九八事務所

極真空手は大山倍達と梶原一騎が関係性を強めることで、その地上最強幻想を高めていった。あの二人なくしては、打撃格闘技ファンを熱狂させたダイナミズムは生まれなかったのだ！

—つまり、梶原一騎の描写から空手のイメージが変わっていったんですね。

山田　で、71～77年のあいだに『空手バカ一代』が連載されるわけですけども、73年が『燃えよドラゴン』の日本公開だったんですね。で、極真の大会も69年からだから、70年代っていうのはいわゆる極真をはじめとする打撃格闘技の黄金時代だったんですよ。キックボクシングもその頃から始まって、地上波の視聴率が30パーセントも獲っていたわけ。だから70年の頃に思春期を迎えた人たちは、極真空手の魅力が凄くインプリンティングされてるわけですよ。

—そりゃあ感化されちゃいますよねぇ。

山田　うん。だいたいその世代の人たちは極真の悪口を言われると感覚的にピクッとするという世代ですよ（笑）。

—もちろん、あの70年代がいまの格闘技文化の礎を築いてるところもあるわけですよね。

山田　70年代から高度経済成長に入って、91年にバブルが崩壊するわけですけども、その時期の日本経済はとにかく上昇志向でイケイケだったわけですよ。それで格闘技なんかも歴史を見ればわかるとおり、ルールをいかに過激化していくかっていう時代でね、もうまさに上昇志向そのものだったわけです。その先鞭をつけたのが極真。実際に拳を肉体に当てることで「殺人空手だ！」と批判されたわけですね。実際には当てても死なかったけれども、当時の選手たちはみんな遺書を書いて大会に出たという世界だったんです。ところがいまは同じルールでやっても「最良の空手」と言ってるわけ。

—大人から子どもまで学べる最良の空手という。

山田　まあ、そんなに危険じゃないってことがわかってきたわけだけども、となると、極真育ちの人たちも「このルールで最強は決められないんじゃないか」と考え始めた。

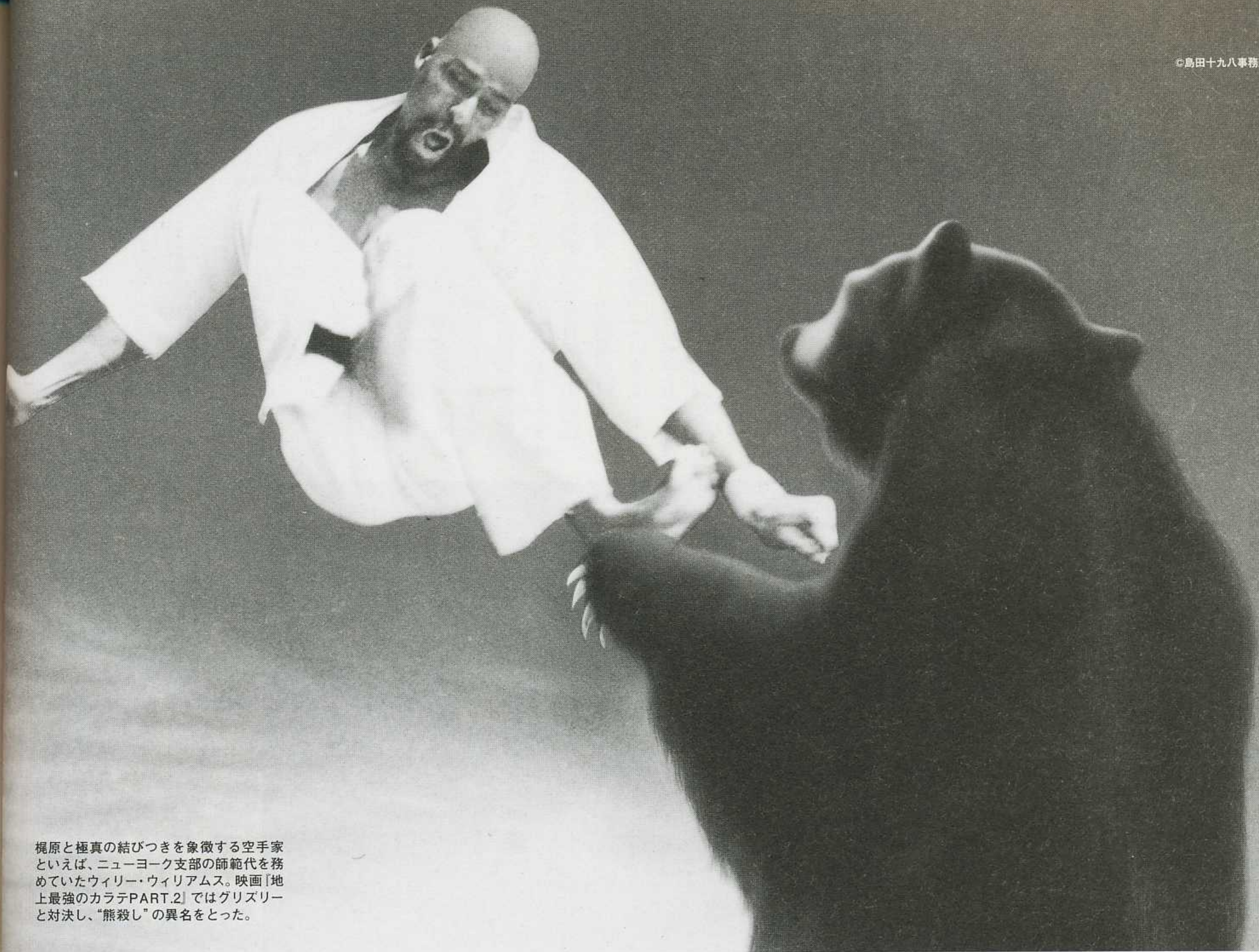
—さらに過激なほうに進んで、それがK-1までたどり着いちゃうわけですね。

山田　そうそう。その前に「投げを入れないといけないんじゃないか」ってことで大道塾があったり。ぶっちゃけ、どんどん過激路線にいくわけですよ。92年にトーワ杯が始まって、大道塾が『ザ・ウォーズ』をやって、正道会館が『格闘技オリンピック』をやって。そしてバーリ・トゥードジャパンが94年だった。

—90年代になって再び革命が起こった、と。

山田　そうするとどうなるかっていうと、バブルと一緒で破裂しちゃうわけですね。だって、それ以上は過激にならないでしょ。過激にならないのと同時に、最強っていう概念が「ルールを改革していけば決められるもんじゃない」ということに誰もが気づき始めるわけですね。これが格闘技

梶原一騎は隙あらば、あらゆるところに大山倍達を出してましたね

©島田十九八事務所

梶原と極真の結びつきを象徴する空手家といえば、ニューヨーク支部の師範代を務めていたウィリー・ウィリアムス。映画『地上最強のカラテPART.2』ではグリズリーと対決し、"熊殺し"の異名をとった。

あの二人はロマンの構造 ロマンの実態を理解してたんです

バブルの崩壊で、そのあとは測定不能な武術の時代が来るって昔から言ってますけどね。実際、今後は武道とかが見直されてるでしょう。

——昔はルールを過激にするだけで、非常に求心力があったわけですね。もちろん大山倍達にも魅力があったんでしょうけど、梶原先生は極真という過激なルールに惹かれたんでしょうか?

山田　もちろん過激なところに惹かれたんでしょうけども、大山倍達と梶原一騎の二人はもっと頭が良くて、いまの格闘技のルールの過激化によって、その先がないなということを当初から理解していたんです。

——それはどういう見立てなんですか?

山田　簡単に言うにはどうしたらいいのかな? 要するにですね、一番わかりやすい例が宮本武蔵なわけですね。みんな宮本武蔵が一番強いと思ってるじゃないですか。じゃあ宮本武蔵がいまの剣道の大会に出たら、まず遅刻していくわけですよね。

——まあ、そうですね(笑)。

山田　その時点でエントリーできないですよね。で、試合が始まったらいきなり長い木刀を振りかざして反則負けになる。そうすると優勝できない。ということは、武蔵は強くないじゃないですか。

——いわゆる競技としての試合と、実戦は違うものだっていうことですよね。

山田　そうです。で、大山倍達が初めに設定したのは極真ルールじゃないんですよ。対戦相手は牛なんです。

——ああ、競技じゃなくて牛ですね(笑)。

山田　対戦相手が自然石、対戦相手が十円玉、ドラム缶。こんな設定で考えた人はいないでしょ。

——いないですねぇ(笑)。

山田　大山倍達は屠殺場に行ってね、牛をどうやれば倒せるのかを考えたわけですよ。それは批判がいっぱいあるにしろ、実際にそれをやってのけたわけですね。もし「牛殺し選手権」があったら、大山倍達は相当強いわけですよ。

——なるほど(笑)。

山田　同じように「自然石割り選手権」「十円玉曲げ選手権」「ドラム缶穴開け選手権」とか競技じゃない設定を作って、そのなかで神話性を作ってきたんですよね。

——そこには競技性からは感じられない幻想がありますもんね。

山田　でしょ? じつは宮本武蔵の神話性と一番ダブるわけですよ。で、大山倍達はおそらく極真ルールなんかできないと思うんだけども。

——始祖なのに(笑)。

山田　そんなに優勝はできないと思うんですよ。だけど、それはそれでべつにいいじゃんって思うんだよ。

——梶原一騎の膨らませ方も大山先生と同じく「牛殺し選手権」のほうですね。

山田　そう。梶原一騎も設定は劇画ということだけじゃなくて、映画とか興行とかね、いろんな設定をもってくるわけですよ。で、そこにボクシングやプロレス、空

手を持ってくるわけですよ。つまり大山
ちゃったところかな。あそこらへんが境
——梶原一騎の局面切り的な要素で膨ら
みたいな物書きがいまの時代にまた出て

手を持ってくるわけですよ。つまり大山倍達も梶原一騎も両者とも立体的に物事を作っていく設定が極真をはじめとする格闘技ルールだとしたら、一つの物事を局面で切っていく。

――ジャンルを横断させることによって、より極真のイメージが膨らんできましたもんね。

山田　だから、ある意味で極真の歴史というのはそういう局面切りが一つずつ消えていくっていうものなんですよ。それは多局面の武道から単一のスポーツルールへの移行の歴史です。極真の幻想性も同時に消えていくっていう。でも、それを放棄するのはもちろんしょうがないんですよ。

――「これ以上、プロレスとかクマとかはいいんじゃねえの？」っていう。

山田　だから必然的にね、梶原一騎と大山倍達が離別するのも歴史の必然なわけですけども。もちろんそりゃあお金が絡んでケンカになったりとか、いろんなことがあったんでしょうけど。

――そういう見方ができるということですね。

山田　極真と梶原一騎が組んで膨らませた幻想っていうのはそういうものなんですよ。だけど、それじゃあ極真も月謝を取って生徒を増やして、地道な経営をしていくときには邪魔になってくるんですよね。それはしょうがないんですよ。ルールも確立させて、そこに向かって日々練習させていかないと回転していかないんですから。で、現実の極真のほうを確立してくるにつれ、そういった余分なものっていうのは……。

――ジャマになりますねぇ、まったく（笑）。

山田　その分岐点になったのは、ウィリー（・ウィリアムス）が三瓶啓二とやって暴れちゃったところかな。あそこらへんが境目でしょうね。俺もウィリーがあそこで暴れだして「とんでもねえヤツだな」と怒る側にいたわけですよ。だけどウィリーとしては梶原一騎に言われてやったわけですけども……。

――猪木さんと異種格闘技戦をやるためにはあそこで勝ち上がるわけには……ってことですよね。

山田　そう、あのあと猪木戦があったわけですよね。おそらくあそこでみんなの反発が予想外に大きかったんじゃないですかね。確かにあの場に梶原一騎的な世界観が入ってくると、非常に違和感があった。聖なるものを汚されたみたいな怒りがあったわけだよ、観てる人たちには。

やまだ・えいじ■元『フルコンタクト空手』編集長、現『BUDO-RA BOOKS』編集長。格闘技興行の花がまだ咲き乱れる前の80年代後半から、「やる側」の視点で格闘技の編集などを手がける。プロレスファンからは本気で嫌われた大ヒールだが、非常に熱くておもしろかった時代を結果的に演出してくれた。口癖は「ザンス」らしいけど、一度も発しなかった。なぜだ!?

――梶原一騎の局面切り的な要素で膨らんでいった極真自体が、それを逆に汚れたものとして排除するとは皮肉なものですね。

山田　そうですよ。皮肉だけど、しょうがないですね。極真側からしたら、それを排除していかないと。

――でも、これはどこの世界にもあるようなことかもしれないですね。ピエロが排除されていくっていうのは。

山田　そうですね。どこでもあることですけど、ちょうどそういう境目があの大会だったですね。だからいまの極真はそういう意味でもう幻想もなくなって、「最良の空手だ」って言い出しちゃったわけだから、梶原一騎的な夢はないんですけども、いまの極真に「また最強だって言ってくれ」とか言うのも酷でしょうけど、歴史のなかで一時期そういう時代があったということですね。

――ドラム缶を引くといまの極真になるという。

山田　そうですね。大山倍達個人のなかでは非常に梶原一騎的な、まあプロレス的なって言うとまた誤解が生じますけども。そういう多局面で対応するような宮本武蔵的な強さを持ってたし、そういうところに極真のロマンがあったんですね。で、実際に大山倍達は強かったと思いますよ。どんな場でケンカしても強かった人だと思います。

――普通の競技者とは違う発想ですもんね。

山田　ドラム缶に穴を開けるとか、そういう発想でやらないですから。競技には必要ないし、過剰な力なわけですよね。だから離れることは必然だったわけだよなあ。まあ、悲しいっちゃあ悲しいし、梶原一騎みたいな物書きがいまの時代にまた出てよといってもなかなか難しいですしね。

――グレーな世界だったら成立しますけどね。

山田　俺が言うのもなんだけども、その可能性がわずかに残されてるとしたらプロレスですね。で、ちょっと話は逸れるけどいちおう続きを言うとですね、総合格闘技っていうのは結局一つのルールなんですね。そこで追求される最強っていうのも、結局、ルールのなかの最強だ、と。そういうふうになってくると、簡単に言えばですね、そもそも最強っていうのは順位をつけることだから、スポーツ化しないと1位、2位が出ないんですね。「じゃあ大山倍達は何番目に強い？」って言われたとき、出ないですよね。

――出ないですね。

山田　大山倍達とかはそういう枠に入らないことによって強さの幻想があったわけですけどね。

――確かに競技っていう目で見ると、ウィリーは競技者としての成績はふるわないですけど、存在としていまだに覚えてるのはウィリーですもんね。

山田　幻想があったからね。だから梶原一騎も大山倍達もロマンの実態っていうのを理解してましたよね。ロマンの構造っていうかね。

――その二人が組んだんだから、あんなブームが起きますよね。

山田　起きますね。多局面っていうのは、ある意味、測定不能なんですよ。測定不可能だからあそこまでの幻想が膨らんだと思うね。でも、いまは測定可能な時代。あんな幻想はもう生まれないでしょうね……。

【11年2月某日／都内・某所にて収録】

『男の星座』の最後の原稿には梶原先生の血痕がポツンとついていました

『プロレススーパースター列伝』『男の星座』の漫画家が語る梶原一騎との感動創作秘話!

梶原一騎原作漫画傑作選
男の星座
原作　梶原一騎
漫画　原田久仁信
監修　高森篤子

漫画家
原田久仁信

梶原一騎の作品の中で、とくにプロレスファンが愛読してきた漫画といえば『プロレススーパースター列伝』！ 今回は、梶原一騎とコンビを組み、その漫画を描いていた原田久仁信氏に、梶原一騎の印象や思い出を語っていただいた。また同じく代表作である梶原一騎の人生を描いた『男の星座』制作時のエピソードも満載。身近に接していた原田先生とっておきの思い出を読め!

聞き手／小松伸太郎（THE PEHLWANS）

――原田先生が最初に梶原先生とお仕事をされたのが『プロレススーパースター

――言葉は厳しくても。
原田　そうですね。だから、ボクの叔父さ

――どんなアピールをされたんですか？
原田　その当時、梶原さんは『漫画ゴラ

――へえ！　長州さんにはなんとお答えしたんですか？

――原田先生が最初に梶原先生とお仕事をされたのが『プロレススーパースター列伝』（以下、『列伝』）なんですよね？

原田　そうですね。ボクはまだデビューして1年の新人だったんですけど、梶原さんの作品が大好きだったので凄くうれしかったですよ。しかも名指しでしたからね。

――えぇ!?　梶原先生からのご指名だったんですか!?

原田　そうなんですよ。だけど、その当時のボクの実力と見合ってなかったんで、凄いプレッシャーでしたね。

――先生が梶原先生から指名されたのはどんな経緯があったんですかね？

原田　あるとき、『少年サンデー』の別冊でボクシングのチャンピオンの似顔絵を4人ぐらい描いたことがあったんですけど、それを梶原さんが気に入ってくれましてね。それで指名してくれたみたいです。

――なるほど。ところで、初めて梶原先生とお会いしたときはどんな印象を受けられたんですか？

原田　新人の僕なんか近寄りがたい人かな？　と思っていたんですよ。でも、自分は九州生まれで叔父さんも熊本出身なんですけど、梶原さんはその叔父さんと意外と似たような感じの人でしたね。

――先生の叔父さんですか？

原田　はい。なんていうかね、声がでかい、言葉がストレートっていうのがわかるんですよね。腹に一物ないというか。

――言葉は厳しくても。

原田　そうですね。だから、ボクの叔父さんと同じ感じの人だなって思ったんですよ。だって、最初に会ったときから「梶原さん」って呼んでましたから。

――その「梶原先生」ではなく「梶原さん」という呼び方は漫画業界的にはどうなんですか？

原田　なしでしょう（笑）。だって、ほかの編集さんがボクのほうを「おいおい！」って感じで、ガッと見ましたからね（笑）。

――ガッハハハ！

原田　でも、梶原さんはニコニコしているの（笑）。だから、あの強面のイメージは周りが作ったんだと思うんですよね。本当はもの凄くシャイな人ですよ。まあ、見た目がね。身体はでかいし、薄い（色の）サングラスをかけて、角刈りだったでしょ？　だから、最初に会うときはもの凄く緊張しましたよ。でも、梶原さんのことが大好きだっていうことはアピールしましたけどね（笑）。

原田久仁信の代表作といえば『プロレススーパースター列伝』。しかし、作品に関して原田氏は「自分も読者だった」と話す。プロレスファンが真実として夢を抱いたその内容には、梶原一騎の原作を手にとって読んでいた原田氏自身も毎回ワクワクしていたというのだ。

長州さんに「梶原さんってどんな人？」って聞かれたときに、ボクは……

――どんなアピールをされたんですか？

原田　その当時、梶原さんは『漫画ゴラク』で宮本武蔵を題材にした『斬殺者』っていう漫画を連載していたんですよ。ボクは『斬殺者』の武蔵観が大好きで、梶原さんに「本物よりも『斬殺者』の武蔵のほうが本物だと思います」って話をしたんですよ。そうしたら、「そうか！」って喜んでくれましてね。だから、ストレートにいけば大丈夫なんだなって思いましたね。遠回しに言おうとすると、じれったくてガーンとやられるっていうか。

――構えているとダメというか。

原田　そうだと思います。だって、おもいっきり甘えようと思えば甘えられそうな気がしましたもん。編集さんでも、甘え上手な人は凄くかわいがられていましたからね。でも、構えている人に対しては、梶原さんも構えちゃうんでしょう。周りが作っている強面のイメージを自分で演じている部分もあったんじゃないですか？　そうじゃなきゃ、あんなに女性にモテないでしょう（笑）。

――やっぱりおモテになりましたか（笑）。

原田　凄くモテてたみたいです（笑）。やっぱり、男っぽいほうがモテるんだな、と。格闘家とかもモテるじゃないですか？　文化系よりも体育会系なんでしょうね。

――仕事は文化系だけども人間は体育会系だったわけですね。

原田　そうそう。それがちゃんと共存しているから凄いなと思って。そういえば、『列伝』が終わってから、自分だけでレスラーを取材してプロレスの漫画を描けって言われたことがあるんですよ。それで長州力の取材をしたときに、長州さんから「梶原さんってどんな人？」って聞かれたんですよね。

――へえ！　長州さんにはなんとお答えしたんですか？

原田　「子どもがでっかくなったような人」って。

――ダッハハハ！

原田　で、梶原さんにもその話をしたんですよ。「長州さんに『梶原さんはどんな人？』って聞かれたんで、『子どもがでっかくなったような人だ』って言いました」って。そうしたら、梶原さんの奥さんが「本当にそのとおり！」って言うんですよ（笑）。

――奥さんも同意してくれましたか（笑）。

原田　うん。梶原さんも、「おまえ、若いのによくわかるな！」ってね。だから、そういうところでもボクは得点稼げてたんだなと思いますし、かわいがられたほうだと思いますよ。

――梶原先生の懐に飛び込んでますね。

原田　いや、もっと入り込んでみたかったですけどね。でも、男として尊敬しますよ。人間、どうしても自分を曲げて生きるでしょ？

――まあ、妥協しまくりますね。

原田　そう。でも、梶原さんは妥協しないですよ。もう、見ていて気持ちいい！　男ってヤ○ザ者に憧れるじゃないですか？

――そ、そうですね（笑）。

原田　ヤ○ザ者じゃないんですよ、梶原さんは。でも、六本木だって赤坂だって人を避けずに歩きますからね。強面が向こうから歩いてきたら、ボクらなんかはどうしてもスッと端に寄っちゃいますもんね。

――普通はそうしますよね。

原田　避けるでしょ？　そういうところが全然ないんですよ。本当にカッコいいですよ。だって、梶原さんと一緒にいると、なんかスターと一緒にいる気分になれるんですもん。

――スター！
原田　はい。お宅にお邪魔するじゃないですか？　ボクはしゃべらずに梶原さんとほかの人のやりとりを見ているだけなんですけど、何時間でもいたくなっちゃう。帰るときには、「嘘じゃないよな？　俺、さっきまで梶原一騎と一緒にいたんだよなぁ……」って気分になれるんですよね。

――先生、ベタ惚れですね（笑）。

原田　うん（笑）。コンサートの帰りみたいに、寒いけど寒くないっていうか。

――テンションが上がってしまうんですね。梶原先生のオーラというかカリスマ性はそんなに凄いモノだったんですか？

原田　ボクは男親がいないんで、そのせいかもしれないけど、頼りたくなるんですよね。だから、指導者というか師匠というか、そういうカリスマ的なモノはありましたよ。まあ、何か相談したりするわけじゃないんだけど、ずっとやっていることを見ていたいというか……。ああ、奥さんたちがハンカチ王子の佑ちゃんがただ歩いているだけなのに「キャーキャー」言ってるでしょ？　あんな感じですよ。

――完全にとりこじゃないですか（笑）。

原田　でも、ほかの漫画家さんなんて友だちみたいな会話してましたよ。お酒が入ると、「おまえなぁ！」って言っちゃう人もいましたからね。

――ええ!?　そんなことを言う人がいたんですか！

原田　『紅の挑戦者（チャレンジャー）』を描いた中城健さん。

――おお、『四角いジャングル』の！

原田　そうそう！　あの人も豪快な人でしたね。だから、雰囲気が重くなるのは武道家が来たときだけですね。若い空手家なんかはやっぱりビシッとなっちゃいますからね。そうじゃないときは気のいいおじさんですよ。

原田氏いわく晩年の梶原一騎は「一番かっこよかった」とのこと。『男の星座』は梶原一騎の病死によって未完で終わってしまったが、こうした回想シーンに晩年の梶原一騎が登場することもあった。

お宅にお邪魔するじゃないですか。もう何時間でもいたくなるんですよ

――空手界やプロレス界でフィクサー的な存在だった方ですから、漫画家さんたちとは接し方も違うんでしょうね。

原田　まったく違いましたね。やっぱり、格闘家には厳しかったんでしょうね。この前、NHKの大河ドラマの『江』を観ていたら、織田信長が梶原さんみたいだなと思いましたよ。

――え、豊川悦司がですか？

原田　うん、トヨエツが千宗易にはニコニコしながら怒られて、明智光秀にはガンガン叱っていたでしょ？　なんか梶原さんみたいでしたね。だから、ちゃんと顔を使い分けていましたよね。

――なるほど。ところで、梶原先生の作品は原作の内容を「一字一句変えてはいけない」という不文律があったという噂も聞くんですけど、実際のところはどうだったんですか？

原田　いや、それはなかったですね。でも、ボクは一回セリフを間違えたことがあるんですよ。

――それは大変じゃないですか！

原田　編集さんから電話がかかってきて、「このセリフはこいつのじゃなくて、あいつのセリフだよ！　梶原先生はハワイにいるから電話しろ！」って言われたんですよ。そうしたら、梶原さんのほうから国際電話がかかってきたんですよ。

――おお、それはおおごとですね！

原田　で、ボクはすぐに「すいません！」って謝ったんですけど、「いや、こっちのほうが合ってるわ」って言ってくれて。

――それは意外な反応ですね。

原田　凄く軽かったですね。最初はビビりましたけど、ホッとしましたよ。でも、そのあいだ、編集さんたちが泡食ってバタバタしていたかと思うとおかしかったですけどね（笑）。

――じゃあ、梶原先生はあまり仕上がった原稿に関してはうるさくなかったんですね。

原田　ボクにはまったくなかったですよ。できあがった原稿を見ても、「そのまま続けろよ」って言うぐらいで。ただ、『列伝』は描き上げていくのが楽しかったですね。自分が最初の読者みたいな感じで、読みながら描いていましたよ。「わ！　梶原さん、こうやって話をもっていくんだ！」って。

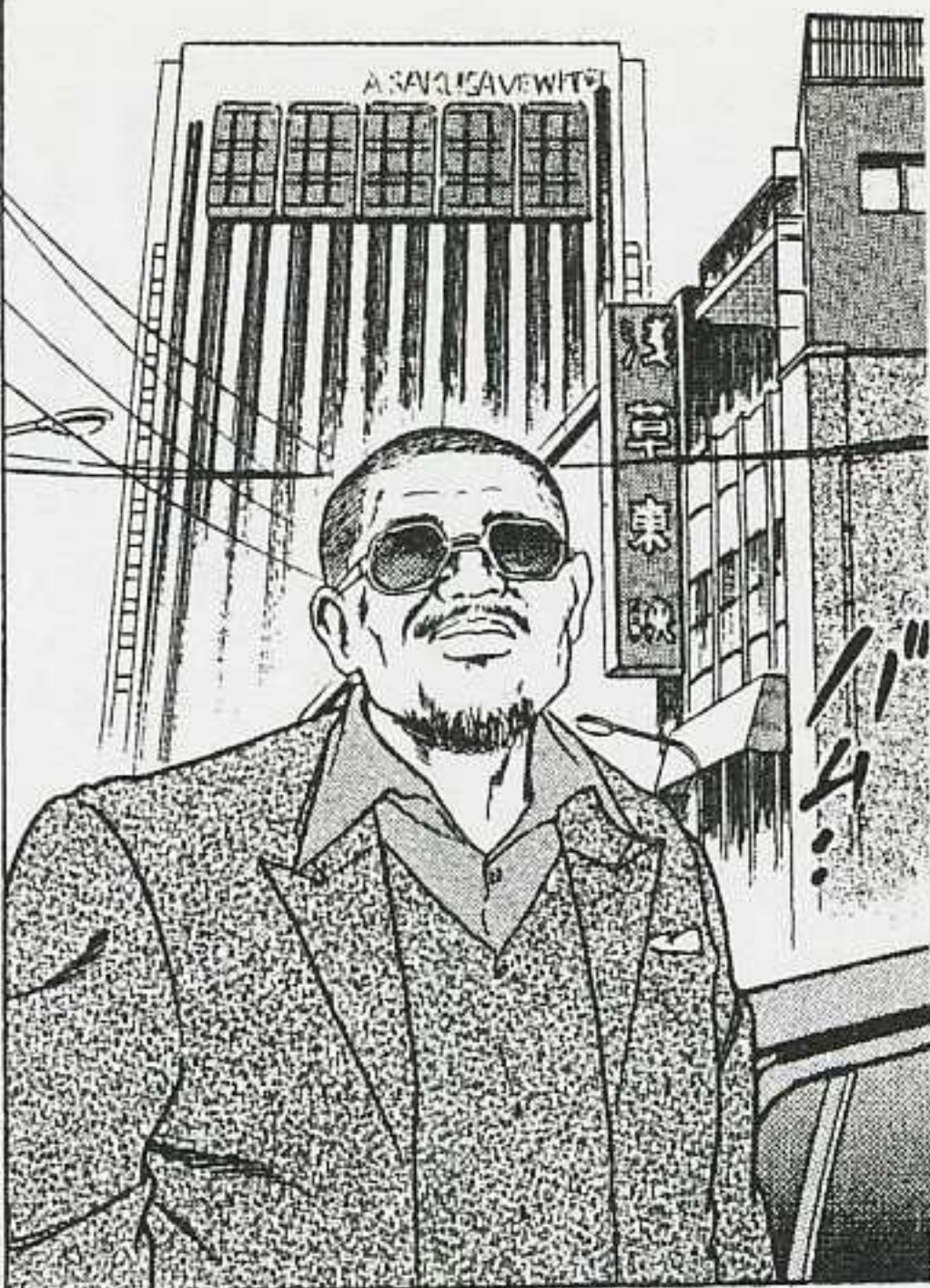
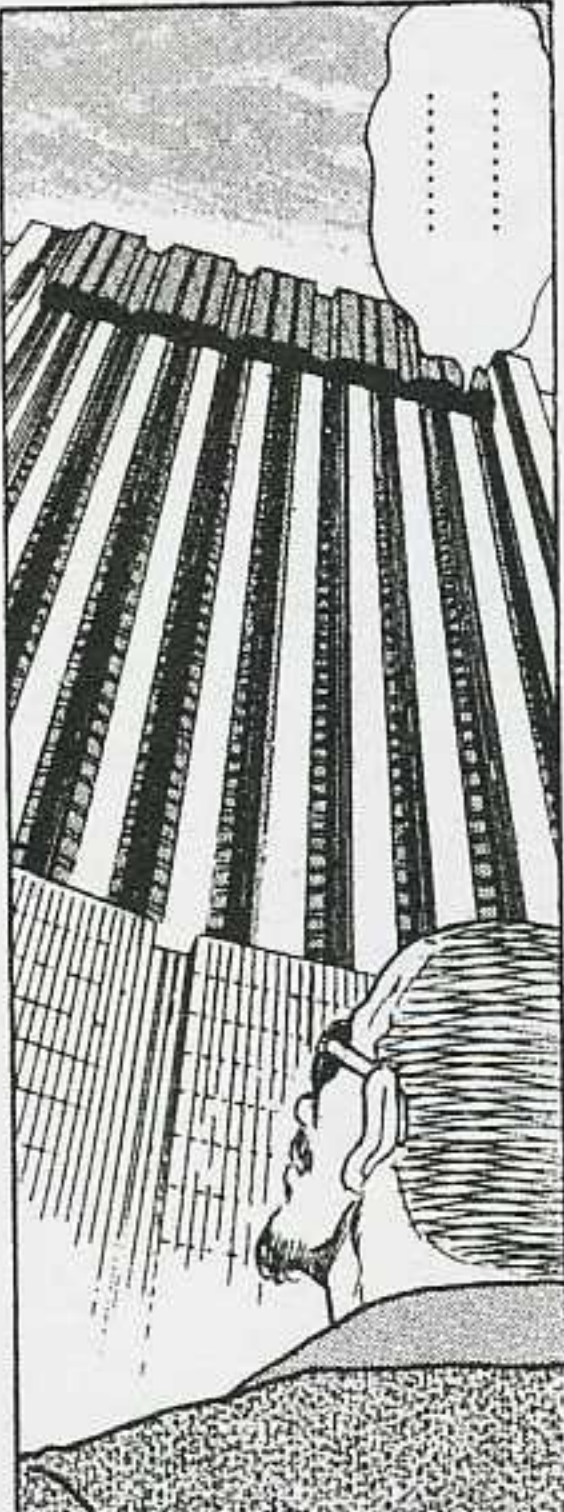
――では、原作が来るのが楽しみでした？

原田　いや、怖かったです。締め切りの2～3日前に来ますからね（笑）。

――梶原先生はけっこう遅筆だったと聞きますけど。

原田　でもね、ボクのは破格的に速かったらしいです。1日前っていう人もいたらしいですからね（笑）。

――それはつらすぎますね（笑）。

原田　うん。でも、それを描き上げるヤツも凄いですよね。どんだけ手を抜くんだよって（笑）。だから、漫画って本人次第なんですよね。手を抜こうと思えばいくらでも抜けるんですよ。でも、イメージど

原田久仁信

ボクは力道山に頭をなでてもらって10ドル札をもらったんですよ

おりに描き上げると凄く気持ちがいいんですよね。『列伝』のときは梶原さんの原作を読んで、浮かんだイメージをそのまま写しているっていう感じでしたけど、それがよかったみたいですね。とにかく原作がおもしろいんですよ、読んでいて。

―やっぱり違うもんですか？

原田　違いますね。梶原さんの原稿は「なんでこうなるんだろう？」ってドキドキしましたからね。でも、いま思うと、あの頃は凄く元気があったんだなって思いますね。いまじゃ描けないですよ、あんな絵。ありえない構図でも無理矢理描いてましたからね。資料も少ないですし、想像力で補うしかないんですよ。

―外国人選手の話が多かったし、アブドーラ・ザ・ブッチャーがシンガポールで空手の修行をするシーンなんか、それこそ想像力がなきゃ描けませんよね（笑）。

原田　空想でよく描けましたよ（笑）。

―ガッハハハハ！

原田　いや、本当にそうですよ。でも、プロレスが好きだったんだなってあとで気づきましたね。ボク、アントニオ猪木vsモハメド・アリ戦ぐらいからプロレスは観ていませんでしたからね。力道山が死んでしまって終わったなと思ってましたから。

―プロレスは子どもの頃からご覧になっていたんですか？

原田　観てましたよ。ボク、子どもの頃に力道山に会ったことがあるんですよ。米軍仕様の10ドル札をもらいましたからね

―ええ⁉　本当ですか！

原田　熱海に大洋別館っていう旅館があったんですけど、ボクの叔父さんがそこの支配人だったんですよ。そこに力道山がお忍びで来ていましてね。ボクは寝ていたんですけど、夜中に起こされて連れていかれたんですよ。そうしたら、大広間に芸者衆と一緒に力道山がいまして。

―凄いシチュエーションですね（笑）。

原田　「ああ、力道山だ！」って。それで頭をなでてもらって、10ドル札をもらったんですよ。

―貴重な体験ですね。しかし、そのあと、力道山の死を描くことになろうとは……。

原田　思わなかったですね。だから、力道山の出てくるシーンで描いた旅館はその太洋別館ですからね。しかも、うちの叔父さんは猪木のお兄さんと同級生なんですよ、拓大で。

―空手をやっていたというお兄さんですか？

原田　はい。叔父さんも空手部と応援団にいましたからね。で、大学時代は同じ三軒茶屋近くの三宿っていうところで同じアパートに住んでいたんですよ。よくブラジルからパイナップルを送ってきてくれましたからね。

―それは貴重な話じゃないですか！

原田　「ブラジルに行った同級生からパイナップル送ってきた」って（笑）。『列伝』の連載の終わり頃になって、「よくパイナップルを送ってきたのは猪木のお兄さんだよ」って教えてくれたんですけど、もっと早く言ってくれよって（笑）。その話で猪木さんとしゃべれたのにって。

―奇縁ですねぇ（笑）。

原田　本当に不思議なもんでね。でも、そう考えると、プロレスの話を描いているのも偶然じゃねえなって思いましたけどね。「あ、俺はプロレスを描いていくしかないな」って思うようになりましたもん。

―確かにプロレスとは不思議な縁がありますもんね。ところで、作品に対するプロレスラーからの反応はどうだったんですか？

原田　クレームとかもなかったですし、むしろ「描いてくれ」って要望がありましたよね。ジャンボ鶴田なんか直訴してきたんですから。

―ええ⁉　そうなんですか？

原田　はい。「ジャンボが『俺はいつだ』って催促するから、次はジャンボ描くぞ」って、梶原さんから直接聞きましたからね。でも、それを描いている最中に連載が終わっちゃったんですけど。

―幻のジャンボ編！　それは読みたかったですね！

原田　梶原さんはジャンボが大好きなんですから。「でかいのが一番強い」っていうのが持論でしたからね。ことあるごとにそう言ってましたよ。

―確かにアンドレ・ザ・ジャイアントの話も、アンドレがただでかいだけの怪物として描かれてはいませんもんね。ちゃんとバーン・ガニアからレスリングを習ったっていう。

原田　そうですねぇ。まあ、本当に取材していなかったのかもしれないですけどね（笑）。

―ダッハハハ！

原田　だって、猪木談も本当に聞いていると思っていましたもん。

―猪木さんに（笑）。

原田　ええ、電話かなんかでね（笑）。本当にあとからですよ、わかったのは。

―でも、読んでると本当に猪木さんが語っているように思えちゃいましたよ。

原田　そうなんですよ。だから、本当に人をよく見ているんでしょうね。完全に書き分けているっていうのが凄い。

―まあ、結局『列伝』は3年連載されて、梶原先生の逮捕によって終了となってしまいましたけど、そのときはどんなお気持ちだったんですか？

原田　いや、ビックリですよ。なんで終わるのって思いましたもん。中で書けばいいじゃんって（笑）。

―ガッハハハハ！　拘置所の中で（笑）。

原田　でも、監禁の話はそんなに事件性のある話だとは思わなかったですけどね。

そしてさらに二階の大衆席には高校生（都立芝商）の作者・梶一太がいた！

「梶原先生を描くときが一番緊張した」という原田氏。こちらは「かわいく描きすぎた」という初登場の梶一太（梶原一騎）の姿。しかし、自分の姿も含め、梶原一騎は画には一切口出しをしなかったという。

梶原作品では"男像"とともに、"強さ"が常に追求されているが、原田氏いわく梶原一騎自身が「どちらが強いか」といった類の話に夢中になっていたという。ちなみに、主人公である梶一太のうしろにいるのは、弟の真樹先生である。

原田久仁信

――ああ、猪木さんのですね。

原田　うん。梶原さんの家に年末だかお正月に行ったときにその話題になったんですよ。「役者だよね、猪木も」みたいな感じで和やかに話をしていたんですから。

――和やかに（笑）。実際、逮捕されたのは『月刊少年マガジン』の副編集長への暴行事件ですよね。

原田　ああ、そうだ。あの人とも一緒に仕事をしたことがあるんですけど、ごっつい人ですよ。たしか剣道の有段者だったんじゃないかな？　梶原さんは武道家としての側面もありましたから、男に対して独特の美学があるんですよ。

――ああ。

原田　要するに「おまえは文化人として会いに来たのか？　武道家として会いに来たのか？」っていうね。そのへんが原因なんじゃないですかね？　ボクも空手と柔道をやっていましたけど、やっているなんて言いませんでしたからね。

――なんで隠すんですか（笑）。

原田　怖いのを知っているから（笑）。

――なるほど（笑）。でも、梶原先生が逮捕されて、マスコミからバッシングを受けていましたけど、そのときは先生はどんな心境だったんですか？

原田　あのとき、自分の仕事が全部バッと終わったんですよ。それで家がラーメン屋だったんで、ラーメン漫画を描いていたんですけど、それがもの足りなくてね（笑）。

――ご自分で言いますか（笑）。

原田　だから、梶原さんみたいな原作の漫画を描きたいなって思っていたんですよ。そうしたら梶原さんの快気祝いか何かのときに、自伝を書くっていう話を聞いたんですよ。でも、事件の余波で快く引き受けてくれる出版社や漫画家さんがいなかったみたいなんですよね。

梶原先生はボクと川島なお美を結婚させようと思ってたみたいで

――逆風ですね。

原田　そうなんですよ。で、ボクにその話が来たので、即答で「よろしくお願いします」って引き受けさせてもらいました。

――それが『男の星座』ですね。

原田　はい。士道館の添野義二さんが「原田くんがいい」って推薦してくれてたらしいんですよ。まあ、あとから聞いたら、即答したのはボクと『漫画ゴラク』の編集長だけだったみたいですけどね。

――『ゴラク』だけは事件後も連載打ち切りみたいなことはしなかったみたいですね。

原田　そうですよね。ボクが即答したのはアラームが鳴ったからなんですけどね。「え？　大丈夫なんですか？」なんて言ったら、怒られるじゃないですか（笑）。

――防衛本能が働いたわけですね（笑）。

原田　そうそう（笑）。でも、一回やっちゃいましたけどね。

――梶原先生を怒らせたんですか？

原田　スキャンダルのときに週刊誌とかに女性遍歴がたくさん出ましたよね？

――はい（笑）。

原田　まあ、『男の星座』は自伝だから当然、女性遍歴も出てくるだろう、と。それであらかじめ噂の出た人が載っている写真週刊誌を買い集めたんですよ。

――用意周到ですね（笑）。

原田　それで梶原さんに、「買い集めてきました！」って報告したら、「出てこねえよ！」って怒られましたね（笑）。

――ガッハハハ！　ちょっと用意周到すぎましたね（笑）。

原田　いろいろ名前が出たじゃないですか？　松坂慶子とか池上季実子とか。

――原田先生は実際にそのへんの事情もご存知なんですか？

原田　いや、全然知らないですね。そういえば、あの川島なお美が梶原先生のプロダクションにいたことがあるんですよ。

――へえ！

原田　あるとき、「原田くん、結婚してんのか？」って聞かれて、「はい、結婚してますよ」って言ったんですよ。「なんだ、川島なお美っていうのがいるから結婚させようと思ったんだけど」って。

――ええ！　本当ですか！　惜しいと言ったら先生の奥さまに怒られるんでしょうが……。でも、タイガーマスク編で「タイガーマスクが川島なお美とお見合い……というのはジョークで」みたいなことを描かれていましたよね？

原田　ああ、描きましたよ。だから、川島なお美を売り出すためにいろいろやっていたんでしょう。まあ、そのときはよけいなことして怒られちゃいましたけどね。おまえの興味はそっちだけかって（笑）。

――そりゃ興味はあるでしょう（笑）。でも、肝心の梶原先生が亡くなられてしまったので『男の星座』は未完で終わってしまいましたね。

原田　未完でよかったですよね。こっから先は事件だらけですから。ちょっとし

たひと騒動になるところでしたよ。ボクも描くときはある程度覚悟して描かないとダメだなって思いましたもん。

――梶原先生は、この頃はご病気されていたんですよね？

原田　痩せて、禅の修行僧みたいでしたよ。カッコよかったですよ！　あの頃が一番カッコよかったんじゃないですかね？　全然しゃべんないんだけど、筆圧はあるし。「みなぎってんな」って感じでしたね。眼光も鋭いし。

――死ぬ直前まで原稿を執筆されていたっていう話ですけど。

原田　そうですね。最後の原稿に点滴の血がポツンとついていたんですよ。

――ええ!?

原田　いつもはコピーが来るのに、そのときは生原稿が来ちゃったんですよ。だから、点滴の跡がついている。点滴したまま書いていたんだなって思いましたね。

――壮絶ですね……。亡くなられたって聞いたときはどんな心境でした？

原田　ボクは死に関してはクールなんですよ。自分のこれまでの人生のなかで、好きな人ってみんな死んでいくんですよ。だから、どっかで死ぬのがあたりまえだと思っているし、親が死んだときは泣けなかったんですよ。でもね、梶原さんの葬式で棺桶の蓋を開けたときでしたね。なんだか涙が出てきちゃってね。「本当に死んでら」って思って……。ボクは涙を流さない冷たい人間だと思っていたんですけど、そのときは止まらなかったですね。

親が死んだときは泣けなかったけど なんだか涙が出てきちゃってね

――やっぱり、それぐらい大きな存在だったということですか？

原田　でしょうね。仕事をしているときは気づかなかったんですよ。身体があんなに反応するとは思わなかったですから。あれだけ涙を流したのはあとにも先にも梶原さんのときだけですね。

――梶原先生から受けた影響はその後の漫画家人生でも大きいですか？

原田　もう梶原さんだったら、こういうふうに描くのかなっていう感じで描きますね。梶原さんの視点から見て描くっていうか。だから、悩んだときは頼りますね。梶原さんだったら、どうやって描くかなって。それに最後の弟子だっていう感覚があるんですよ。梶原さんと仕事をしていた人たちってみんな偉大でしょ？

――ちばてつや先生とか。

原田　ながやす巧さんとかね。自分が憧れていた人たちばっかりですから。でも、最後の最後をボクが描いちゃったんだからっていう気持ちはありますね。みっともないことはできねえなって。

――なるほど。

原田　だから、佐山聡がタイガーマスクを一時期嫌ったように、ボクもプロレスを描かされるのはいやな時期があったんですよ。でも、読者が気に入ってくれているならいいじゃないかって。しばらく経ってから思うようになりましたね。

――当然、漫画家としては違うジャンルも描いてみたいっていう欲求もあるわけですよね？

原田　あります、あります。でも、描けなくてもいいんですよ。自分が梶原プロレスみたいな感じでもっていくしかないなっていうか、凄い財産をもらったんだなって思いますよ。

――『列伝』から何十年も経って、また『別冊宝島』で同じようなマンガを描いて話題になったのも、やっぱり梶原先生からもらった財産ですよね。

原田　おもしろいですよね（笑）。

――最近のタイガーマスク騒動も梶原先生のキャラクターから生まれたものですし。

原田　梶原さんも何回もよみがえるよね（笑）。でも、凄いよね。知らない人がいないもんな。漫画でこんなに多くの人に影響を与えている人はいないんじゃないですか？

――プロレス界だけじゃないですもんね。ボクシング、野球、空手と影響を受けた人はいっぱいいますよ。

原田　だから、夢の見方を教えてくれましたよね。梶原さんの漫画を見て、選手になった人も多いでしょ？　梶原さんが描いた作品でノウハウを覚えたというか。俺も夢を見ていたんだなって思いますよ。本当に『あしたのジョー』を見て漫画家になろうと思ったんですからね。夢をもの凄く身近にしてくれましたし、自分もやらなきゃいけないって気持ちにさせてくれましたからね。たぶん、梶原さんの生き様そのまんまなんですよ。

――作品がですか？

原田　うん。だって、自分でほしいものは全部つかんできちゃったからね。ポルシェを買ったときなんてうれしそうにしゃべっていましたけど、もう花形満そのまんまですよ（笑）。

――ダッハハハ！

原田　「ああ、花形だ」って思いましたもん（笑）。ああいうところを見ていると、無理して大人にならなくてもいいんだなって気がしますよね。無邪気っていうのかな、あれは女の人が見たらたまらないでしょう。もう、会うとドンドン好きになる！　だから、凄い魅力があるんですよ。本当にもうなんかあったら煎じて飲みたいぐらい。真似したい！　うらやましい！

――先生、愛が深すぎます（笑）。

原田　本当に困っちゃうんだよな（笑）。いままで男を好きになったことってめったにないけど、梶原さんはナンバーワンだね。学校の先輩で憧れの先輩がいたんですけど、その人を抜いちゃいました！

――わかりました（笑）。では、今後も梶原プロレスを後世に伝えていってください！

【11年2月2日／埼玉県・川越の喫茶店にて収録】

はらだ・くにちか■1951年11月3日、福岡県出身。漫画家。自身が大の梶原一騎ファンであり、梶原一騎とのコンビで執筆した作品は『プロレススーパースター列伝』『男の星座』がある。最近でも『別冊宝島』等でプロレスの漫画を執筆し、話題を呼んでいる。

長与千種の後継者が
師への複雑な胸中を激白！

スーパースターの
帝王学と呪縛

センダイガールズプロレスリング
里村明衣子

かつて“驚異の新人”と呼ばれたガイア・ジャパン一期生の中でもデビュー時から長与千種の後継者として大きな注目を集め、90年代中盤から今日に至るまで、第一線で活躍を続けてきた里村明衣子。いまや女子プロ界で確固たる地位を築いた里村が、師匠への偽らざる思いを語ってくれた。

聞き手／柳澤健　試合写真／平工幸雄　構成／鈴木佑

1995年以降、里村明衣子ほど重い荷物を背負ってきた女子プロレスラーはほかにはいないのではないか、と私は思います。

その6年前、天才・長与千種が全女を引退したその日から、女子プロレスは第二の長与千種を求め続けることになります。

しかし、結局のところ、長与千種の代わりを務めることのできるレスラーなど、一人もいませんでした。

ブル中野とアジャ・コングの二人が女子プロレスを危険な方向に変え、その流れの中で、北斗晶は団体対抗戦時代の最大のヒロインとして光り輝きました。

1995年に長与千種が旗揚げしたガイア・ジャパンは、時計の針を戻し、プロレスの本質に立ち戻ろうする団体でした。

観客のサディスティックな感情に危険な技の連発で応じ続けるのではなく、観客と一体となって喜び、怒り、悲しもうとしたのです。

長与は入門してきた若いレスラーたちに、それぞれ違う色の水着を着せました。

植松寿絵には緑、永島千佳世には黄、シュガー佐藤には白。

加藤園子には青を。

そして里村明衣子には赤を。

長与千種は、里村と加藤の二人を、新たなるクラッシュギャルズにしようとしていたのです。

デビュー直後から長与千種の後継者であることを宿命づけられた15歳の少女。それが里村明衣子でした。

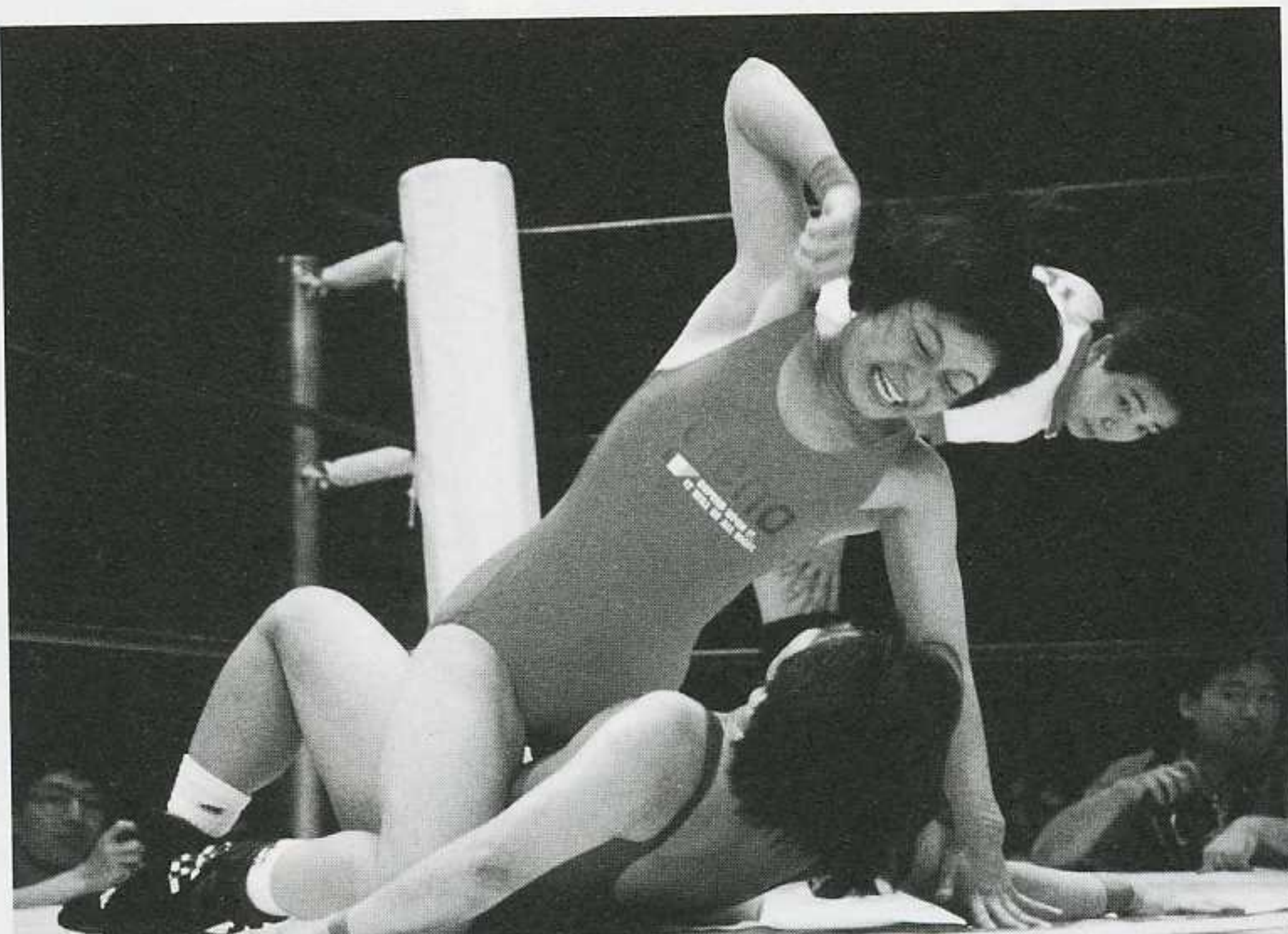
重い荷物を背負い続けた彼女は、2005年のガイア・ジャパン解散後まもなく、みちのくプロレスの新崎人生に誘われて、宮城県仙台市でセンダイガールズプロレスリングを旗揚げします。

そしていま、31歳の里村明衣子は妥協のないアスリートでありつつも、きわめて聡明で魅力的な女性です。

日本一の女子プロレスラーに話を聞きました。

（柳澤健）

――新潟県黒崎中学1年のときに女子柔道部を始めたというのは本当ですか？

里村　はい。私は3歳のときから北部柔道クラブというところで柔道をやっていたので、1年の11月に先生にお願いして作ってもらいました。大会に出場するために、当時同級生だったテニス部と水泳部の子を呼んで、3人で始めたんです。小さな大会だったんですけど、優勝することができて、先生に認めてもらえました。翌年の

里村はデビュー戦当時から、その闘志全開の気迫あふれるファイト、最年少レスラーである15歳という年齢、そして赤い水着の継承者として、同期のほかの誰よりも注目を集めた。

スーパースターの帝王学と呪縛

4月には凄くいい先生がたまたま赴任してきて、より強くなったんです。いまでは全国大会で必ず上位に入ってます。

――凄いですね。強豪柔道部の祖じゃないですか。

里村　そんなことはないです。女子はそうかもしれないですけど。

――プロレスラーになってから、柔道部には顔を出しました？

里村　毎年行ってます。

――そうですか。みんな里村さんを尊敬しているでしょう。

里村　でも、その子たちはプロレスを知らないんですよね。

――なるほど。

里村　私の存在は知ってますけど、プロレスのことは全然知らない。「プロレスやらない？」って聞いても、「いやー、怖ーい」っていうイメージなんですよね（笑）。

――いまの女子プロレスラーよりはるかにゴツい奴らが？（笑）。

里村　ホントそうですよね。

――プロレスはどこで最初に観たんですか？

里村　姉が新日本プロレスを好きだったんですよ。それで新潟市体育館に無理矢理連れていかれたんです。それまで私はプロレスは殴り合いのケンカだと思って大っ嫌いだったんです。ところが会場の雰囲気にまずびっくりしてしまって。「プロレスラーって凄いなあ。これだけ人が熱くなって集まってくるんだ」って思いました。ルールもわからないし、試合を見る目もないから、誰が光っているとかもピンとこないんですけど。その後、姉に馳浩さんのトークショーも連れてってもらったんです。

――ええ。

里村　正直言って、私はプロレスラーのことを「頭がよくない人たちの集まり」だと思ってたんですよ。それを馳さんの話を聞いたときに全部覆されたんです。学校の先生やってたって聞いて。

――あの人のアタマのよさは例外中の例外ですよ。高校の先生だし、国会議員だし。

里村　教育の話やプロレスラーの話、猪木さんの話とかを聞いたときに、「この世界は本当に素晴らしいな」と。

――大きな勘違いをしたんですね。

里村　はい。勘違いでした（笑）。そこでホントに考えが変わりまして、「高校に3年間行くよりも、プロレス界で修行したほうが自分のためになるな」と思って、中学卒業したらプロレス入りすることを決めたんです。

――ご両親には反対されたでしょう。

里村　はい。とにかく自分で試さなきゃ、実証しなきゃいけないと思いまして、そこから「プロレスラーはどんな練習するのかな」って本とか映像で調べて、スクワットと腕立て伏せを毎日やるようになって。親の前で必ず毎夜練習していたので。

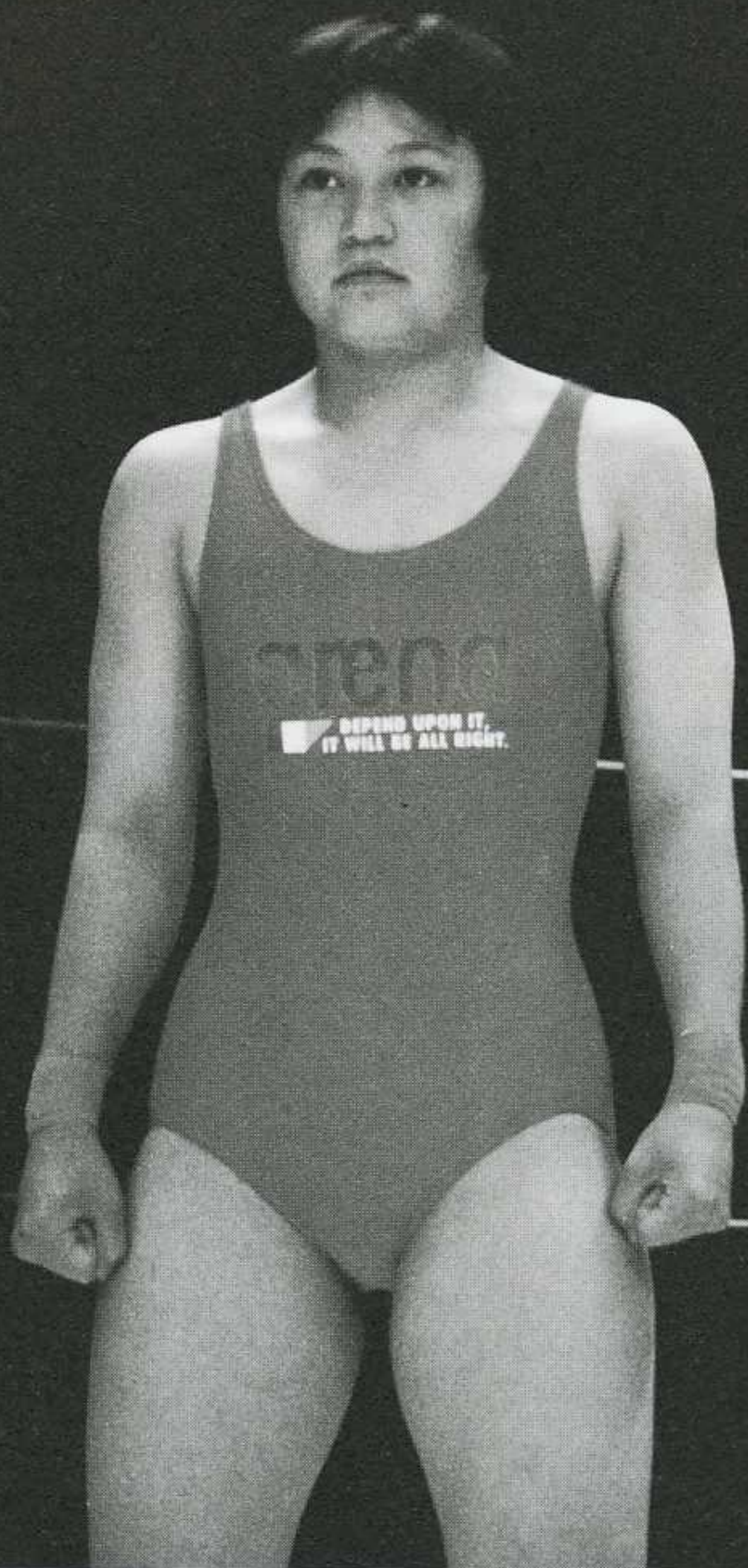
――アピールしてたんだ（笑）。プロレスの練習ですか？

里村　いえ、スクワット、ブリッジ、腹筋、腕立て伏せです。柔道から帰ったあとに、毎日やってましたね。

――スクワットは何回くらいやってたんですか？

里村　最初は50回もできなかったんですけど、半年経ったら1000回できるようになりまして、1000回からは「今日は10回多く」って、限界まで増やしていって、最終的には最高1500回までしかできませんでした。

――中学3年で！

最初は女子プロがあることを知らなくて「この世で初めて作ろう」って思ったんです

次期エース候補として、若手時代から長与と組む機会があった里村。05年4月10日のガイア解散大会では、長与の二度目の引退試合の相手として、最初で最後のシングルマッチに臨んだ（里村の勝利）。

里村　雑誌の（獣神サンダー・）ライガーさんのインタビューを読んだんですけど「自分は背が低いから、中学生のときには3000回やった」と書いてあったので「私は女だから半分ぐらいかな」っていう頭があったんですよね。最初、新日を観に行ったときは女子プロレスがあるって知らなくて、「この世で初めて女子プロレスを作ろう」って思ったんです。

――ははは！　かわいいなあ。

里村　そしたら、いきなり北斗晶さんの存在を知ったわけです。テレビで北斗晶さんのドキュメントをやっていて。

――馳浩の次はいきなり北斗！

里村　横浜アリーナで神取さんとシングルやったときです。北斗さんの存在を知って、凄い衝撃を受けました。

――どういう衝撃だったんですか？

里村　試合の凄さよりも、人としての凄さを感じてしまって。「こんなに潔い、頭のいい女の人がいるのか」と思って、ホントそこで女子プロレスに魅かれてしまったんですよね。

――特別な人たちから特別な誤解を受けたんですね。ハハハ！

里村　そうですね、この世界はホントに凄いと思いまして。あとは大仁田厚さんにもハマりましたし。

――北斗の次は大仁田！　幅広いなあ。電流爆破デスマッチとか観た？

里村　観ました観ました。

――生で？

里村　ビデオとか、新潟市体育館に来て「急きょ、有刺鉄線になります」ってなった試合とか。大仁田さんのカリスマ性と観客の熱狂が好きで、大仁田さんのCDとか本とかビデオもいっぱい。

――大仁田のCD！

里村　音声だけのCDなんですよ。最初、大仁田さんのテーマ曲が入って、そのあとずっと言葉の語りで、最後は大仁田さんの歌で終わるんです（笑）。

――ハハハ！　おかしい。

里村　それをずっと聴いてたりとか。

――じゃあ短期間に深く学習してしまったんですね。プロレスというものを。

里村　ホント、プロレスの世界って凄いなと思いましたね。

――でも、柔道家の里村選手だったら「あんな投げが決まるわけがないじゃん」と思ったでしょ？

里村　はい、それはありました。女子の新人の選手の試合を観たときには、「あ、これ私でも勝てるな」って思ったし。

――そりゃそうでしょうね。

里村　はい。正直言うと嘘っぽいところもあったんですよね。「キックが弱いのになんで倒れるんだ」とか、そういうところがあって。でもそういうのは自分自身で置いといて、とりあえず。で、自分がレスラーになったらそういうのは変えようと思ってました（笑）。

――変えようと（笑）。要するに里村選手にとっては、「プロレスというものはお客さんと闘うものだ」と、最初からわかってたんですね。

里村　わかってました。

――じゃあ、北斗さんの試合も、「ここまで自分を犠牲にして流血するんだ」とか、そういう部分に心を打たれた、と？

里村　はい。

――なるほど。おもしろいです。

里村　はい。いまから考えると凄くもったいないなと思うんですけど、私はクラッシュを生で観てないので、長与さんの凄さを知らないままガイアに入門してしまっ

たんです。

——入門時は15歳。最年少ですよね？ 周りの一期生は3つ4つ上の人たちが多かった？

里村 もっと上でした。高校卒業する18歳の世代とか多くて、大学生もいましたし。22歳とか24歳の人もいて、全部で13人だったんですけど。

——ダントツで小さい。子ども扱いされてたでしょ？

里村 はい。もう、〝おこちゃま〟って言われてました。

——ハハハ。でも、3歳から12年の格闘キャリアを持ってプロレスに入ってきた人なんてほかに誰もいなかったでしょ？

里村 少なかったですね。オーディションのときに、体力メニューで何をやるか、行ってみないとわからなかったんで、「もしスクワット2000回って出されたらどうしよう」と思って、凄く不安だったんですよ。

——ハハハ。

里村 そしたらスクワット200回だったんですよ！「楽勝だな」って。案の定、全部のテスト項目が楽勝だったんですよ。ところが、たった200回をほとんどの人ができなくて、凄く頭にきたことを覚えてます。「おまえらプロレスラーになりたいのになんでそこまでやらないんだ」って。

——同期13人全員できなかった？

里村 加藤園子が200回できたんですけど、あとはみんなできなかったんです。100回くらいでバテてしまって。

——ほかの同期生とは歳も違うし、意識も違うし、一人だけ浮いてたでしょ？

里村 浮いてましたね。ほとんどが長与さんのファンだったので。道場に長与さんが来ると「あっ！ 今日はチコさんに会える！」って、ただのファンなんですよ。「おまえらレスラーになりたいのに、なんでそんなファン心持ってんだよ」って、それも頭にきてました。

——「冗談じゃねえや」とひたすら練習をやってた、と。入門すると、初めてプロレスというものの仕組みや構造を、一つ一つ学んでいくわけですよね。「左にしか回っちゃいけない」とか「ボディスラムをやられるときは重心移動しなさい」とか。

里村 私にはちょっと違和感があったんですよ、理解するまでには。想像していたものと実際にやるもののあいだに違いが生じたんですけど、それでも、「いまプロレスをやってる大先輩たちが乗り越えてきた以上、自分も消化しよう」って思って、実際すぐに消化できました。でも、それを理解できなくて辞めた人もいました。

"ネクストクラッシュ"として期待の集まった里村と加藤。両者はガイア旗揚げ大会でデビュー戦同士として対戦、里村が腕ひしぎで新人らしからぬ秒殺勝利を収め、衝撃を呼んだ。現在、加藤はOZアカデミーを主戦場としている。

私が新クラッシュ構想に反発したことで長与さんも嫌な思いをされたと思います

——プロレスがある部分、お互いの協力によって成り立っていると知って、絶望して辞めていった人もいた。

里村 はい。いました。

——長与さんの凄さはどんなところで感じるんですか？

里村 オーディションで初めて道場行ったとき、初めて長与さん見たときに、もう一瞬で「うわっ！ 凄い」と思ってしまって。

——見ただけで凄い。

里村 ちょうどミットを蹴っていたんですけど、もう一瞬で「この人は凄い人だ」って思ってしまって。「この人に最初に出会ってよかった、絶対この人に教わろう」と思ったんです。エルボー一発の殴り方にしても、全女系の選手って女の子っぽい、こういう殴り方をするのを、長与さんはしっかりエルボーの一発の重みから教えてくれて。

——ああ、男子の力感というか、迫力というか。プロレスマニアですもんね、長与さんは。クラッシュの頃のビデオを観る機会はありました？

里村 みんな観てたんで、観ましたね。

——どうでした？ 初めて観て。

里村 「こんな凄い時代を作った人だったんだ！」と思って。

——あの、女の子たちをギャアギャア泣かせる力はとんでもないですものね。「私もギャアギャア泣かせてみせる」みたいな決意を固めたりするんですか？

里村 それは無理だと思いました。

——「私には無理」だと思ったんだ！

里村 はい。長与さんの持ってるものというのは、いまだになんかもう、ホントにプロレス界の神というか。ただ、長与さんは最初からそれを持ってらっしゃるわけじゃなくて、常日頃考えて、いろんな情報を得て努力された方だということは、付き人を7年やらせていただいて、よくわかります。「いまの自分には絶対できないな」と思うんですけど、朝の8時に道場に来て、夜の12時とか1時までずっといるんですけど、そのあいだずっと後輩たちの練習を見て、合間にも面倒見て。誰かにちょっかい出しつつも、その人の心理を読んでいたりとか、プロレスの雑誌をずっと読んでいて、読みながらも自分を横につけて「この選手の表情見てみ。この目線がいいんだよ」とか、ずっと解説してるんですよ。「手だけで伝わってくるだろ？ このロープをつかんだ手の表情見てみろ。ここなんだよ」って

——ああ～。

里村 そういうディテールをずーっと解説してるんですよ。みんなに話をするときに全員並ばせて、2～3時間話をしてるっていうのは、もうしょっちゅうでしたね。

——ロープのつかみ方の話で？

里村 それもそうですけど、怒るときと

か。誰かが失敗して怒るときも全員並ばせて、10分で済む話を2～3時間に広げるんですよ。練習時間も潰して、ずっと。怒られるというか、最初は怒るんですけど、結局、語りに変わってくるんですよ。

――語りに変わる。

里村　理解させるまでやる。「理解できてるか？」って。

――洗脳してるんですね。

里村　はい、ほんとに。それが多かったですね。

――なるほどね。話が終わったあと、「わけわかんない」とか「話が長すぎるよ」という人もいるでしょう。

里村　当然います（笑）。でも長与さんは自分では思ってないんですよ。研究心なのか、自分で模索しながら話してる。私も「長与さんは人に対して向き合いすぎる、人に深く入りすぎる」と思いました。長与さんは自分で自分を追い詰めるというか入り込むというか。その傾向が強すぎて、逆に心配になるくらいです。

――「できないやつは放っておく」じゃなくて「できるまでやる」と。

里村　そうです、わかるまで話す。どうして自分たちが長く続けられたかっていえば、全部長与さんが、行き詰まったところや足りないところをコロッとスタイルチェンジさせたりしたからなんです。マジックにかかったようにカチッとハマる選手もいたし。KAORUさんがベビーフェイスがダメでヒールに転向したりとか、植松がヒール転向したりとか。

――24時間プロレスのことを考えているからそういうことになるんですね。

里村　たぶん、「考えすぎて死ぬ」って感じというか（笑）。

――アハハハ！　凄いね、それ。聞いたことない（笑）。

時代を逆行させてなるものかとばかりに、対抗戦全盛時代に活躍したアジャや北斗、豊田真奈美、関西らに、けっして大きくない身体で立ち向かっていった里村。

スーパースターの帝王学と呪縛

里村　すべての情報をプロレスにつなげるってことをする方なんで。道場に夜中の2時、3時までいたときは、正直「なんで!?」と理解できなかったです。こっちもずっと起きてなきゃいけないし、朝は早くから練習があるし。「長与さんはなんでこんな人なんだろう？」って、ずっと思った時期はありました。

――ヘンな人？

里村　はい。

――長与さんは何を伝えたかったんですか？

里村　長与さんって、絶対一人が嫌な人だったんですよね。常に誰かをつかせてる。

――「俺と同じ方向を向け」ということなんですかね？

里村　それも感じましたし、自分の意識というか、団体の人間ならば、一つは同じ方向を向いている。でも、「十人十色でみんなそれぞれ違うんだ」っていうことも言ってましたし。でも意識統一だけは、常に自分の近くに置いて固めてたというか。

――監督してということなんですね？

里村　はい。誰か一人が離れようとしたら、もの凄く「なんでだ！」って、問い詰めるような。だからガイアは凄く隔離された団体ではあったんです。よくも悪くも。

――里村さんは赤い水着を着て、加藤園子さんが青。その二人を新たなるクラッシュとして育てれば、当然周りの子が嫉妬する。ヒールのいないガイアをそういう嫉妬のエネルギーを使って引っぱっていこうという構想が、長与さんの頭の中にあったと思いますか？

里村　はい。

――加藤さんのケガによって、その構想が狂ったということですか？

里村　うーん、加藤のケガによって……どうでしょう。

――里村明衣子と加藤園子の新クラッシュ構想は、どうしてうまくいかなかったんですか？

里村　それは、私が強烈に嫌がったからです。

――ほう。

里村　絶対に無理。

――なるほど。

里村　無理だと思います。

――プレッシャーを背負うのがつらかったんですか？

里村　赤青になった時点で、クラッシュ二世と言われたとしても、「私はそっちのほうには行けません」ってなったんですよね。私はシングルプレイヤーだと思ってたんで。頑固ですし。

――長与さんからすると「頑固なヤツ」だったんですね？

里村　嫌な思いもされたと思います。

――加藤さんも反発されてたんですか？　クラッシュ構想に。

里村　私自身、加藤ともその時期は仲が悪かったです。

――なるほど。

里村　はい、ホントに嫌でしたね。

――一期生の中で一人浮いてた？

里村　浮いてたと思います。

――なるほど。驚異の新人といわれた一期生のあと、ガイアには若くていい新人が出てきませんでした。なぜですか？

里村　練習生は年に10人とかは入ってきてましたよ。でも、全員辞めましたね。私も20人くらいは夜逃げしたところを見てるんで。自分たちがやってきた厳しさをそのままやろうとしても、それが難しかったりとか、隔離された環境が、よくも悪く

も合わなかった。
――新横浜の道場が。
里村　はい。あと、いまにして思えば私たちは私たちで、育てる環境がうまく整えられなかったと思います。私たちにはまったく自由がなかったので、心の余裕が持てなかった。心の余裕がないまま、下の子が入ってきて、何か一つミスをすると長与さんから怒られるので。
――下の子がミスしたら里村さんが叱られるんですか？
里村　長与さんやKAORUさんから、「監視してないから悪い」とか、「どうして見てなかったんだ」とか、そういう責任を追求されるんです。たとえば一人の子が逃げたとしたら、「逃げる前の心境はどうだったんだ？」とか、「何について怒ったからその子は逃げたんだ？」とか、そういうことを追求されるんです。
――そうなんだ。
里村　ただでさえ自由がなく、リラックスできないなか、そういうことで問い詰められると、心の余裕がまったく失なわれてしまう。
――マインドコントロールしようという長与さんの考えもあったんでしょうね。
里村　凄くありました。それは団体としては絶対必要だ、と。
――なるほどね。
里村　だから結束力は強かったです。というか、心を外に向ける余裕が全然なかった。
――全女イズムがあるように、ガイアにも何か一つの思想がないと団体をまとめることはできない、と。
里村　そうですね。
――なるほど。里村さんは一期生の代表として全女のおばさんたち、外敵と闘うわけじゃないですか。対抗戦時代の全女の選手たちには長与千種と違う匂いを感じました？
里村　長与さんがいるからこその、プロレスラーだと思いました。それぞれ凄いんですけど。
――長与チルドレンだ、と？
里村　はい。ただ、アジャ・コング、北斗晶、長与千種、この3人は何か違う。うまく言えないんですけど「人としてできあがっている」という感じがします。
――でも、長与さんは円満な人格者ではないでしょう。かなりいびつな人じゃないですか。
里村　付き人させていただいて、師弟だから、ずっと私は近くで勉強させていただきましたけど、これがたとえば友だちとかだったら、私は友だちにはなれないなと思います。
――無理？
里村　無理です、はい。
――尊敬はしてるし、凄い人だけれども、友だちとして付き合うのは無理？
里村　近所でもたぶん。近所付き合いもできない。
――ハハハ。おもしろいなあ。北斗やアジャだったら付き合える？
里村　はい。
――結局、里村明衣子と加藤園子の新クラッシュ計画は頓挫して、ライオネス飛鳥さんがガイアに来てクラッシュ2000が結成されると、若手は脇役に下がって、ガイア・ジャパンは結局クラッシュの団体で終わってしまった。その最大の理由はなんだと思います？　営業上、クラッシュを再結成せざるをえなかったのか、それとも長与千種のレスラーとしてのエゴイズムなのか。
里村　全部ひっくるめてだと思いますね。自分たちが、正直存在としてはチビだったし、イメージどおりのチビってとこから抜け出せなかったことでしょうね。長与さんの教育のもとで育ってしまったことが大きかったと思います。3～4年目まではそれでよかったと思うんですよ。
――うん。
里村　クラッシュ再結成の前に、デビル（雅美）さん、（ダイナマイト）関西さん、アジャさんが定期参戦するようになってしまって、ウチの団体にベテラン選手が半数を占めた状態のとき、ちょうどその頃、私はその選手たちに勝ってベルトを獲ったりする時期だったんですけど、「とにかくベテラン選手に勝たなきゃいけない」っていう頭が、いつしか自分のプロレスをつまらなくしてしまったんですよね。
――ほう。
里村　たとえばアジャ・コングに何回も何回も潰されて潰されて、やっと6年目にして初めてシングル戦で勝ってチャンピオンになったときに、初めてむなしい思いになったんですよ。自分で自分の首を絞めるような試合をし続けてしまって。
――それはどういうことですか？
里村　余裕がなかったんですね。自己プロデュースとか、それを突出させる余裕もなくて、それぐらいないんかこう、いろんなものが、なんでしょう……。とにかく、気づいたら「チャンピオンになった時点で私は先がなくなる」みたいな予感がしてしま

ガイア時代の里村は"ライバル"アジャとの対戦を重ねることで、その存在感を大きくしていった。そして、いまや同じコーナーで並んでもひけをとらないオーラを身につけている。

里村率いるセンダイガールズの面々。左から里村を囲むように悲恋（ひれん）、仙台幸子（せんだい・さちこ）、花月（かげつ）、水波綾（みずなみ・りょう）、DASH・チサコ（だっしゅ・ちさこ）。

クラッシュが再結成したときは
これも自分の責任だと感じてました

ったんですよね。

――アジャ・コングに勝つという命題をクリアする、AAAWのチャンピオンになるという与えられた課題を必死にこなすことに精一杯で、お客さんに対してどのような里村明衣子を魅せるかっていうことまで頭が回らなかったってことですか?

里村　人としてつまらないってことですね。レスラーとしては強さも追求して実績も積み上げてってときだったのに。ベルトを獲ったあとに杉山（由果）社長から「お祝いの食事会をしましょう」と言われて、私一人がある会社の方との会食に連れていってもらったときがあったんです。ところが私は、その席でまったく話ができなかったんですよ。会話というものができなかったんです。

――へえ。

里村　門限20時だったりとか、外の人とは交流禁止とか、そういったものがずっとあったので、人と交流することがまったくできなかった。

――ガイア内部の人とはしゃべれても、外の人とコミュニケーションとることができなかった?

里村　できなかったですね。できたとしても、どこまでしゃべっていいのかとか。たとえば団体のこと聞かれたときに「これはしゃべっていいのかな?」とずっと考えてしまって言葉が出なかったりとか。それくらい隔離されてたところがあったんです。

――ああ。

里村　食事会が終わって家に帰って、私は凄く泣いたんですよ。「こんなのチャンピオンじゃない」。チャンピオンはちゃんと人間としても確立してて、人としてもちゃんとコミュニケーションがとれないといけないのに。団体をまとめることもできないし、長与さんの付き人だったし、そのときまだ門限20時だったし。「この状態で団体一の選手とは絶対言えない」と自分で自分を追い詰めてしまったときが、初めての挫折だったかなと思います。で、7年目にして初めて意見を言わせていただいたのが「門限20時をやめさせてください」って。それくらい（笑）。

さとむら・めいこ■1979年11月17日、新潟県出身。中学卒業前だったが特例で早期卒業し、ガイア・ジャパンに入門。1995年4月15日、加藤園子戦でデビュー。01年、アジャ・コングからAAAWシングル王座を奪取。05年4月のガイア解散後、同年7月に新崎人生とともにセンダイガールズプロレスリングを設立。157㎝、68kg。

――全女のおばさんたちが入ってきてクラッシュ再結成して、「どんどん時代が戻っちゃう」と感じました?

里村　感じました。これも自分の責任だと思いましたね。自分が突出できないからだと思いました。

――そういうことも含めて自分を追い詰めちゃったんですね。

里村　自分の意思がきちんと伝えられないってこともあったし、周りが見えないってことも感じてたし。でも長与さんの言うことはちゃんと聞かなきゃいけないし。いろんなことがあって、全部ひっくるめて。

――「私がドカーンと客を呼べる選手だったら、こんなことにはならなかったのに」って?

里村　私が客を呼べないっていうのはわかってたんで。

――一人で責任負っちゃったんですか。

里村　それもいまとなっては経験できてよかったなと思います。

お気の毒でしたね。

――2005年にガイアが解散してこれからどうしようってときに、新崎人生さんから話がきたんですよね。

里村　これも長与さんのおかげなんですよ。解散の2週間前に『That'sエンプロ』があったんですね。

――長与千種プロデュースの大会ですね。

里村　そのときに人生社長とタッグを組ませてくれたんですよ。そこで社長から名刺をもらったのがきっかけなんです。その大会の二日後に、みちのくの新潟大会のオファーが来た。それで打ち合わせに行った先で、「今後どうするの?」って聞かれたときに「まったく決めてないです。プロレス界でしか生活してなかったので、海外へ留学に行くつもりです」という話をして。で、その後日またお会いしたときに、団体の話をされたんです。

――難しい決断だったでしょう。

里村　長与さんが引退したとき、その遺志を継ぐのは私だと思っていたので、いろんな世界を見た3年後とかには、もう一回団体をやりたいとは思っていたんです。でも、人生社長に話をされたときには「まだ早いな」と思ったんですね。団体解散のすべてを見てきたので、「いま団体を始めるのは絶対よくない」と。でも、社長に「女子の団体を作るとしたら協力してくれるか?」って言われて「メンバーは誰ですか?」って聞いたら、「里村一人」って言われたんです。

――なるほど（笑）。

里村　「あとは新人をデビューさせる」って言われたときに社長の本気度が伝わってきて、1分くらいで「わかりました」と返事をしてしまったんです。

――でも、いまの若い子たちには里村さんのようなモチベーションはないでしょう?

里村　まったくないです。全員、私のことはまったく知らない。男子プロレス、ドラゲーのファンとかの子たちばっかりなので。仙台で募集をしたときに、全国から応募は6通（笑）。東京で欽ちゃん劇場を借りてオーディションをやったんですけど、実際に来たのは3人です。ドタキャンされて（笑）。マスコミは20人くらいいたので、凄く恥ずかしくて。で、その3人が全然できなくて、スポーツ歴もソフトテニスを部活で1年やってましたとか（笑）、とりあえず気持ちを汲むということで3人とも合格にしたんですけど。

――それから5年が経ちました。

里村　たった5人の後輩ですけど、いまこの時代に、小さいながらも団体をやってるという自信は凄くついてるんです。この先、家庭も子どもも持ちたいという気持ちはありますけど、でもプロレスにはずっと関わっていたいとは思っています。

【11年1月25日／都内・某所にて収録】

いぶし銀一代記 後編

日本マット界を渡り歩いた名バイプレイヤーとジャイアント馬場との確執とは――？

〝和製カーペンティア〟寺西勇

前号で大好評だった〝いぶし銀の中のいぶし銀〟寺西勇インタビュー、待望の後編！前回は東京プロレスでのデビューから、はぐれ国際軍団を結成して新日本に殴り込んだ時期までを語ってもらったが、今回は維新軍加入から現在に至るまでの半生を振り返ってもらった。全日本退団の裏にはいったい何があったのか？マット界きっての職人がその真相を明かしてくれた。

聞き手／地伏丈　試合写真／平工幸雄　構成／鈴木佑

ジャパンは結果的にバラバラになったけど 俺は本当はあのまま続けたかったんだよ

――初代タイガーマスクの引退後、寺西さんは小林邦昭さんと一緒に長州力を中心とした維新軍団に加入しましたよね（ラッシャー木村が腰の負傷で戦線離脱し、83年秋に新国際軍団は自然消滅。それ以前から寺西と小林は、タイガー打倒を誓ってジュニア戦線で共闘していた）。

寺西　小林とは最初、彼がまだ若手の頃に当たっているんだよね、国際のリングで。そのときは「スピードがあっていいレスラーだな、これは伸びる」と思ったよ。

――寺西さんにとっても、初めて当たった新日本の選手だったわけですね。寺西さんは国際時代の経験から、全日本よりガンガンくる新日本のほうがむしろ「やりやすい」と思ったそうですが、最初に小林さんと対戦して感じたイキのよさが、新日本への好印象につながったのでは？

寺西　それはあっただろうね。で、組んでみたら、これがツーカーでさ。何も言わなくたって、目と目でわかり合える感じだったよ。お互いにどう動いてほしいか理解できたからやりやすかったね。

――確かに、最初から絶妙のコンビネーションを発揮していましたね。維新軍団に加入した翌年（84年）の9月には、メンバー5人（長州力、アニマル浜口、谷津嘉章、寺西、小林）が一斉に新日本を離脱して、ジャパンプロレス結成に動くわけですが、そこまで1年足らずという急な展開でした。

寺西　うん。長州たちとも、もとから独立の話はしていたしね。維新軍団で新しく団体を作るっていうから、俺は「よし、じゃあ」とついていっただけで。そこに迷いはまったくなかったよ。

――寺西さんとしては、もともと新日本の選手でもないので、ここに骨を埋めるというようなつもりも……？

寺西　うん、そういう気もなかったしさ。

――あまり試合スタイルが好きでなかった全日本のリングが主戦場となることについては、とくに抵抗は感じなかったですか？

寺西　だってさあ、興行的なことを考えたら、そういうふうにするしか方法がないわけだから。ガイジンを呼んで、自分たちだけでやるってわけにもいかなかっただろうし。

――とにかく維新軍の仲間たちと一緒にやっていこうという気持ちが強かった、と。

80年代中盤の日本マット界で一大勢力となったジャパンプロレス。長州、浜口、谷津、寺西、小林に加え、マサ斎藤、キラー・カン、栗栖正伸、永源遥、保永昇男らが合流。いわゆるハイスパートレスリングで、全日本の選手たちに大きな影響を与えた。

寺西　そうだね。それなのにまた長州たちは新日本へ戻ることになって、俺以外には谷津だけだもんね、（旧維新軍メンバーで）全日本に残ったのは。結果的にバラバラになっちゃったけど、俺としては本当はあのままジャパンプロレスでやりたかったんだよ。若い連中も多くて「これは最高だな」って思ってた。だから、まさか戻るとは思わなかったよね。突然、長州がみんなを集めて「俺は新日本に戻るよ」って言うから……。あのとき、「じゃあ、俺も新日本に戻るよ」って、一度は長州に言ったんだけど、よくよく考えれば「なんのために出てきてジャパンプロレスを作ったのかな？」って思ったし、もういろいろ悩んじゃってさ。それで新日本へ戻ったところで、契約問題でなかなか試合には出られないし、「どうしようもないな」と思って、全日本に残ることにしたわけ。

――なるほど。そのときは長州さんに対して「なんだよ!?」という気持ちでしたか？

寺西　いや、そういう気持ちもないけど……まぁ、がっかりだったね。

――ジャパン時代の思い出となると、やっぱり浜口さんとアジアタッグを獲ったことは大きかったんじゃないですか？（85年7月18日、後楽園ホールで石川隆士&佐藤昭雄を破って王座奪取）。

寺西　そうだよね。浜口とは国際からずっと、一緒にやってきた期間も長かったしさ。浜口やマイティ（井上）は安心できるパートナーだったな。

――アジアタッグを獲る前に、その年の2月から5月まで、寺西さんはヒザの負傷で3か月ほど欠場してます。それなりに長い欠場らしい欠場は、そのときが初めてだったと思うんですけど？

寺西　そうだよねえ。そんなに長く休んだことはなかったね。なんせ、国際の（15年間の）全部のシリーズに出たってぐらいだから。たしか、あのときは半月板をやったんだよ。

――その負傷した試合（85年2月21日、大阪城ホール＝ジャパン主催）でも、寺西さんは浜口さんと組んでいたんですよ。対戦チームもラッシャー木村さんと鶴見五郎さんで、4人全員が元国際のメンバーというカードで（笑）。

寺西　どういうめぐり合わせなのかなあ（笑）。あの欠場をしたときには、谷津が何かと心配して世話を焼いてくれたのを覚えてるね。で、大阪の病院で診てもらって「東京へ戻って手術したほうがいい」ということで、帰って手術したんだよ。向こうで入院でもすることになったら大変だからさあ。

――寺西さんが復帰して間もなくアジアタッグを奪取。しかし、今度は10月に浜口さんが頸椎を負傷したので、寺西さんのパートナーは保永昇男さんに変更を余儀なくされています。

寺西　そうだった。浜口とは防衛戦をやってないんだよね。

――その浜口さんは、ジャパン分裂の犠牲になるかたちで引退しましたよね。

引退発表は勝手に馬場さんが決めたことで「なんだ、この人!?」ってアッタマきたよ

寺西　うん。浜口の浅草の店（浜口夫妻が自宅で開いていたスナック『Animal香寿美』）まで行って、「全日本で一緒にやろう」って声かけたこともあるんだけどね。でも、浜口は意志が固かったし、OKしてくれなかったな。

――寺西さんは全日本マットに残留する道を選び、その年（87年）の秋にはジャパンが吸収されて全日本の所属になったわけですが、それ以降で強く印象に残っている試合は？

寺西　う～ん……あんまりないねえ（苦笑）。

――でも、百田光雄さんの王者時代に一度、世界ジュニアヘビー王座に挑戦していますよね（89年6月5日、日本武道館）。

寺西　あの試合はねぇ、百田がトペでリング下に飛んできたでしょ？　そのときに俺の足の指の骨が折れちゃったの。すぐにわかったよ、「あ、折れた！」って。試合終わったあと（14分27秒、寺西が首固めで敗戦）、歩けなかったもんね。ケンケンで控室に帰ったんだけど、病院に行ったらやっぱり「指が折れてますね」って。

――でも、そのときはそんなに長く欠場していないですよね？

寺西　うん。馬場さんから「試合に出てくれ」って言われたからさ（苦笑）。「えっ!?」と思ったけど、「じゃあ、出てやるよ」って。あのときは試合で投げられても、足がマットにつかないようにやって大変だったねえ。

――全日本時代に若手の練習を見たりということは？

寺西　いや、とくにないね。与えられた自分の仕事をやるだけって感じだったね。

――その後、寺西さんは頸椎ヘルニアのために92年春から欠場に入り、翌93年7月2日の後楽園ホール大会の試合前に馬場さん同席のもと、引退が発表されました。ちょっと唐突な感じもしたんですけど？

寺西　……あれは馬場さんが勝手に決めたことだから（憮然として）。

――と、いいますと？

寺西　あのときは首を手術して試合を1年以上休んでたんだけど、馬場さんに「おかげさまでよくなったんで、次のシリーズからまた試合お願いします」って挨拶に行ったら、馬場さんも「おお、よくなったか。そりゃよかったよ」って。だからその時点ではまた試合に出るはずだったんだよ。だからその日だって、俺は復帰のリングに上がるつもりで後楽園に行ったんだから！

――そうだったんですか……。そこで馬場さんに直接、「引退してくれ」と言われたんですか？

寺西　そう。控室にみんながいるところで「寺西、ちょっと来い」って呼ばれて、「おまえ、引退することになってるから」って急に言われて。で、そのまま記者会見だもん。報道陣がバーッと来ちゃってさ、アッタマきたもんな。「なんだ、この人!?」って思ったよ。

――いきなり引退を言い渡されて、即座にマスコミに発表されてしまった、と。

寺西　うん。それであとから、元子さんが（引退させるように）馬場さんに言ったって聞いたんだけどね。

――それは誰から聞いたんですか？

寺西　それは言わない。言わないよ。

――……。ただ、その馬場さんの判断も、やはり寺西さんのケガをおもんばかってでしょうかね？

寺西　どうなんだろうね。まぁ、首だからね。

――ちなみに、それまでの馬場さんとの人間関係は？

寺西　いや、馬場さんが大腿骨を折ったとき（90年11月30日、帯広）だって、俺が真っ先に駆け寄って「ああ、これは折れてますよ。すぐに病院へ向かいましょう。明日になったら、もっと痛くなりますよ」って言ったぐらいだもん。俺は馬場さんを救急車に乗せるのを手伝って、病院から戻ってきた馬場さんをホテルの部屋までの階段を担架で運んだんだから。そのときは元子さんが感謝して挨拶に来たもんだよ。

――なるほど。

寺西　国際時代に全日本の興行で井上とシングルやったときだって、その頃は馬場さんには気に入られてたみたいで、「おう、動いてくれよ」「はい、任せてください！」「遠慮するなよ」ってさ。

――寺西さんが全日本の所属になってからも、井上さんと対戦したりタッグを組んだりする機会は多かったですものね。通好みの鉄板カードという感じで。

寺西　だからこそ、（突然の引退通告は）「ガーン！」と頭を金槌で叩かれた思いだったよ……。

――寺西さんは引退発表後、とくにセレモニーもなく全日本を辞めていますね（記者会見では馬場の口から「今後は全日本の社員

記事中にあるように、寺西が全日本で活躍していた時期に獲得したタイトルといえばアジアタッグ王座。はぐれ国際軍団からの盟友である浜口とともに君臨した。

寺西勇 年表

としてパンフレット販売を担当する」ことが発表され、引退試合はできるときがきたら行なう方向と説明された)。

寺西　「会社の事務をやってもらう」って言うから、急に頼まれたらしょうがないと思って。しばらくやっとこうってさ。でも、少しのあいだだけ残って、すぐに辞めたよ。

――退社したのは寺西さん自身の意思だったんですか?

寺西　そう。全日本の社員として長くやる気はなかった。まだ契約が残ってるからってことだったんだけど……そんなの冗談じゃないって！　勝手にこっちを引退させといてさ。

――しかし、その3年前(90年)に天龍さんたちがSWSに移籍する大量離脱があって、全日本は残った選手全員と5年契約を結んでいたんじゃないですか?　だとしたら契約を満了する前の退社になりますが……。

寺西　全日本と5年契約?　俺が全日本と?　いや……それ、馬場さんが言ったの?(笑)。

――一応、そういうことになってましたけど(苦笑)。

寺西　いや、それはないよ。あの人も都合のいいこと言うから。

――その事実はなかった、と。で、全日本を辞めてから復帰することになります。

寺西　だいたい引退する気なんてなかったからね。新聞には再起不能って出たけど、そもそも担当医は「(復帰して)いいよ」って言ってたんだから(笑)。「首の運動もダンベルとか下げてやるんですけど、いいですか?」って聞いたら「問題ないです」ってさ。

――さて、その復帰戦の舞台となったのは、鶴見さんが主宰するIWA格闘志塾のリングでした(94年10月2日、横浜市鶴見区・無国籍屋台ヨンドン)。国際の後輩である鶴見さんにしろ、あるいは谷津さんにしろ、昔の仲間たちが自分でプロモーションを興してることですし、試合のチャンスはあると思われてたんじゃないですか?

寺西　そうだね。鶴見がやっているのは知ってたよ。鶴見に「出してくれ」って頼んだわけではないけど、いいきっかけを作ってくれたよね。鶴見のほうから「寺西さん、出てくれないかな?」ってさ。

――寺西さんが復帰する意思があることを、鶴見さんはどうして知ったんですかね?

ジャパン解散後にはすっかり全日本の一員となった寺西は、90年代初頭は前座から中盤の試合を担当。決して目立つ活躍こそなかったが、渋いベテランとして存分にテクニックを披露していた。

寺西　う〜ん。ただ、俺もマイティだけには全部、事情を話してたけどね。「馬場さんにこういうふうに急に言われて……」ってさ。

――その情報を鶴見さんは独特の嗅覚でかぎつけていたのかもしれませんね(笑)。ところで、いわゆるインディーに上がっても試合収入だけで生計を立てるのは難しく、副業を持っている選手も少なくないという実情は把握してましたか?

寺西　そうだね。ただ、とにかく俺はプロレスをしたかったから、上がるリングはどこでもいいと思ってたよ。リングに上がって絶対試合ができると自分で思ってたから。まぁ、その頃はまだ貯えもあったし。

――ちなみに全日本から退職金は出たんですか?

寺西　そんなの出やしないよ(苦笑)。馬場さんはそういうのは一切、出さないから。ジョー(樋口)さんが辞めたときだってそうだったらしいじゃない?　リングで渡した金一封がただの紙きれだったって。昔の東京プロレスのほうがよっぽどいいよ!

――東京プロレスは新人だった寺西さんにも、当時のお金で5万円の退職金を払ったんですよね。寺西さんはカムバック当時、試合以外に何かお仕事は?

寺西　現役中は何もしてないよ。ほかの仕事を始めたのは、谷津のところ(SPWF)を辞めてからだね。

――復帰後、すぐにSPWFにレギュラー参戦するようになりましたが、その経緯は?

寺西　俺が世話になってる社長が福山(広島県)にいるんだけど、その人が谷津とも知り合いで、鶴見のところに出たら「谷津

寺西勇 年表

年	日付	出来事
1966	5月	大相撲廃業(四股名は「寺西」。最高位は三段目1枚目)。
	10月21日	アントニオ猪木率いる東京プロレスの旗揚げ戦で、プロレスデビュー(vs竹下民夫)。
67	4月	東京プロレス崩壊により、国際プロレスへ移籍。
75	3月13日	IWAミッドヘビー級王座獲得(vs稲妻二郎。3度防衛のあと、同王座は自然消滅)。
77	1月4日	「1976年度プロレス大賞・技能賞」を受賞。
81	10月8日	国際プロレスの崩壊により、「はぐれ国際軍」として新日本プロレスに参戦。初戦で藤波と一騎打ちし、惜敗。
83	8月4日	初代タイガーマスクとの5度目の一騎打ちに完敗。タイガーはこの直後に新日本を退団しており、寺西は全盛期のタイガーの最後の対戦者となった。
	11月1日	維新軍入りを表明。
84	4月19日	「新日本vs維新軍・5vs5勝ち抜き戦」に次鋒として出場。藤波のサソリ固めに敗れる。
	9月25日	長州、浜口らとともに新日本を離脱。ジャパンプロレス所属として闘いの場を全日本へ。
85	7月18日	石川隆士&佐藤昭雄組との決定戦を制し、第40代アジアタッグ王者に(パートナーは浜口)。
	10月14日	浜口の負傷のため、パートナーを保永昇男に代え、石川隆士&渕正信組を下して第41代アジアタッグ王者となる。
93	7月2日	全日本プロレスより「引退」が発表される。
94		フリーとしてSPWFに上がり始める。
95	5月17日	昭和維新軍として平成維震軍興行に参戦。5vs5綱引きマッチで小林邦昭に惜敗。
	7月18日	平成維震軍興行の「平成維震軍vs昭和維震軍6大シングルマッチ」で後藤達俊に惜敗。
98	4月19日	自身の「30周年記念興行」を開催(愛知県一宮市萩原町商店街中央駐車場)。
2002	5月2日	「新日本プロレス30周年記念興行」(東京ドーム)に来賓としてリング上から挨拶。

寺西も参列した02年5月に行なわれた新日本30周年セレモニー。ほかには山本小鉄、木戸修、マサ斎藤、小林邦昭、永源遙、ドン荒川、グラン浜田、若松市政、ストロング・マシーン1号、浜口、鈴木みのる、船木誠勝、藤原喜明らが出席。ちなみにこのときにはサプライズゲストとして倍賞美津子も登場、アントンを驚かせた。

昭和維新軍vs平成維震軍……？ アレ、そんなことあったっけ？

が『寺西さん、ウチにも出てくれないかな?』って言ってたよ」って聞かされて。それで（谷津に）連絡したら「じゃあ、会おう」ってことになって、一緒にやっていくことになったんだけどさ。

――復帰の翌年（95年）には、谷津さんたちと昭和維新軍として、新日本のリングにもひさびさに上がりましたよね。

寺西　……アレ、そんなことあったっけ?

――ありましたよ!（笑）。越中詩郎さんたちの平成維震軍に対抗して、かつてのメンバーで昭和維新軍が再結成されたんですよ。平成維震軍にいた小林さんに、寺西さんが「こっちへ戻ってこい!」って呼びかけて……。

寺西　あ～、あったねぇ！　そうだ、言われて思い出したよ（笑）。

――昭和維新軍は自然消滅してしまいましたが、その後も寺西さんはSPWFを主戦場に活動を続け、若手のコーチ役なども務めていたんですよね。『リングの魂』で女子高生レスラーとして千春選手が取り上げられたとき、寺西さんがコーチとして出演したシーンを観た記憶があります。

寺西　あったねえ（笑）。まぁ、谷津のところは、途中から所属というかたちだったからね。高田馬場（SPWF早稲田道場）にリングがあって、そこで週一回若手の練習を見て。あの覆面してたヤツ、なんていったかな?　なかなか筋がよかったんだけど。

――アジアン・クーガー選手（空牙）ですかね?

寺西　う～ん、そんな名前だったかな。素顔は覚えてるんだけど（笑）。あとは高智（政光）クンとかね。俺の最後の試合（99年8月22日）は高智クンとだったんだよな。昔からの知り合いのプロモーターが高岡（富山県）で興行をやってさ。そのときは1年ちょっとリングを離れてたんだけど、出てくれと言われてね。

――リングに上がらなくなってからは、どのようなお仕事を?

寺西　ある人に仕事の相談したら、大成建設の下請けの会社を紹介されてね。それで電話したら「明日から来てください」って。「どういう仕事をするんですか?」って聞いたら、「オフィスの天井や壁を壊したりするから」って言われてさ。要するに解体業だよね。それで現場に行ったら、監督たちみんなに喜ばれたね。俺のこと知ってんだもん（笑）。

――「あのプロレスラーの寺西勇が来てくれた」と（笑）。

寺西　そうそう。で、職長みたいなの任されてさ。あるとき、仕事先でジーッと顔を見られて、「寺西さんですよね?」って聞かれたこともあったよ。気恥ずかしかったから「違います」って言ったんだけど、周りの同僚から「寺西さん、営業、営業!」って言われてさあ。あれはカンベンしてほしかったね（笑）。

――お仕事はいまもずっと続けているんですか?

寺西　いまは息子が務めてる会社で一緒に働いていて、そこでは建物の土台を作る基

礎工事や溶接の仕事をやってるの。俺は昔、相撲に入る前に田舎で半年ぐらい溶接やってたことがあったんだけど、技術的なこともけっこう覚えてたからよかったね。

――寺西さんが最後に出場した試合から10年以上経ちますが、そのあいだに公の場に出たのは、02年5月に東京ドームで開かれた新日本の創立30周年記念大会にOBとして招かれたときくらいですか？

寺西　そうだね。あのときはケロちゃん（田中秀和リングアナ）から「出てください」って電話がかかってきてね。いやぁ、懐かしかったよ。

――そこでOBとして紹介されたことが事実上の引退発表になったような感じで、正式な引退試合やセレモニーはないままですよね。それももったいないというか……。

寺西　いや、べつにもういいやと思ってね（笑）。でも、最後の試合の前の年に、やっぱり国際時代から知っているプロモーターが愛知の尾張一宮で俺の30周年興行を開いてくれたんだよ（98年4月19日）。結果的に、そのことで谷津と揉めて（SPWFを）辞めることになったんだけどさ。

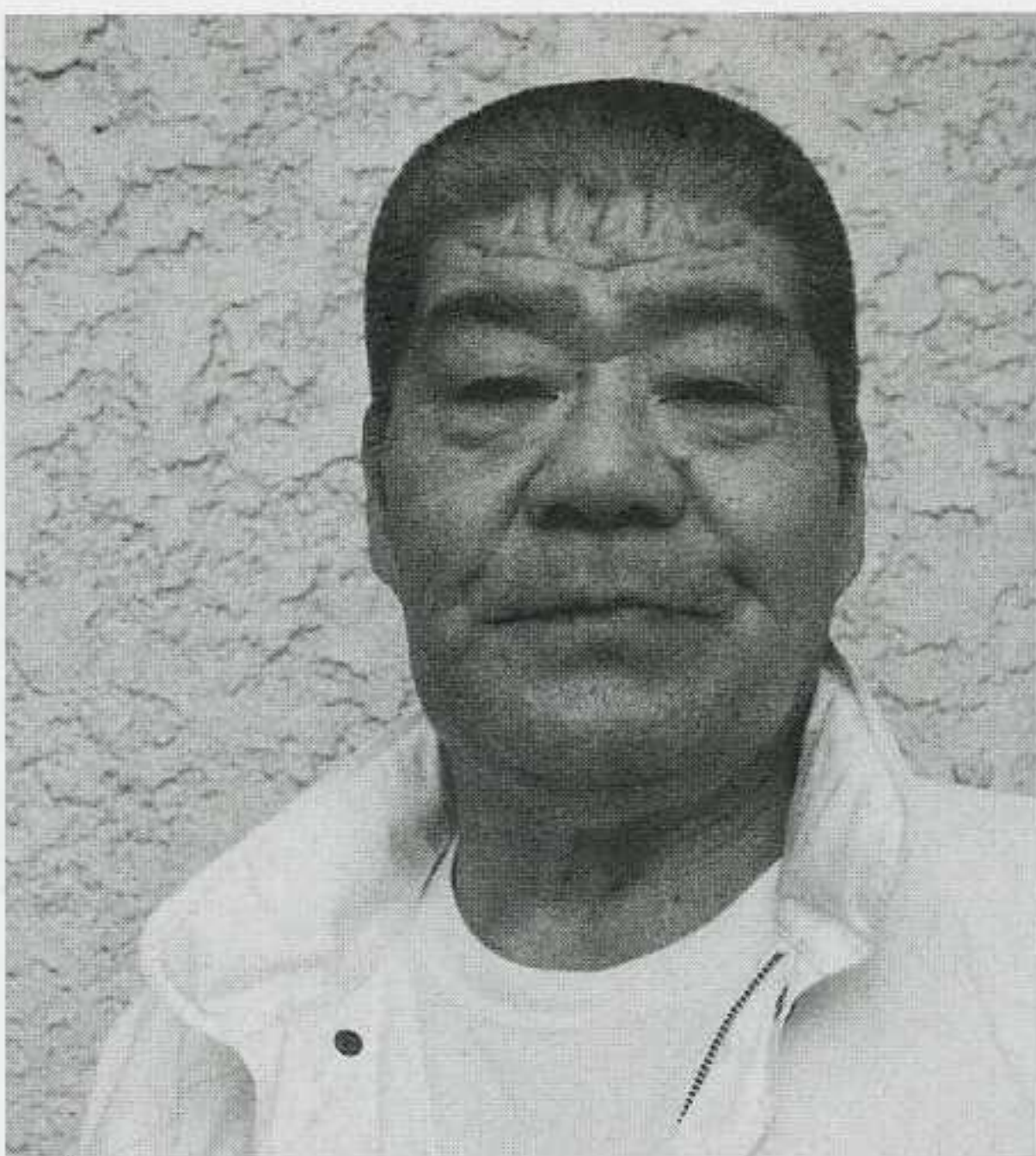
――そうだったんですね。その谷津さんも昨年11月に引退し、同時にSPWFも解散となりました。

寺西　そうだってね。矢口（壹琅）クンから「来てもらえませんか？」って連絡あったけど、俺は（仕事の）現場で足をケガしたばかりだったから行けなくてね。バンに乗り込もうとして、助手席に片足をかけたところで運転者が発進しちゃってさあ、足が「バリバリ」って。

――それは災難でしたね。

寺西　谷津の引退試合は後楽園でやったんだっけ？

――いえ、新宿です。歌舞伎町に新宿FACEという会場がありまして。

寺西　へぇ、いまはそういうのがあるんだ。いや、矢口クンには悪いことしちゃったな。いまでも矢口クンだけはときどき電話をくれるんだよ。最高にハートのいい男でねぇ。まぁ、最近は「誰それが亡くなりました」って連絡が多いんだけど（苦笑）。

――ここ2～3年はとくに、昭和時代のプロレス界に生きた方たちが多く亡くなりましたからね。そういえば、矢口選手から寺西さんのおもしろいエピソードを聞いたことがありますよ。SPWF時代のことなんですけど、寺西さんが打ち上げの席で外国人選手に「首が悪いから腕に電流が走るときがあるんだ」って伝えようとして。

寺西　ああ、エレキの話？

――そうです、寺西さんが外国人選手に「ハンド、エレキ！　エレキ！」って言っても通じなくて、矢口選手に通訳を頼んだという（笑）。

寺西　通じるわけがないよね（笑）。言われたほうはポカーンとしてたから。矢口クンはアメリカの音楽大学に留学してた経験もあるぐらいで（バークリー音大卒）、英語が達者だから通訳してもらったんだよ。まぁ、俺はそうやって、あちこち悪くしても試合を続けていたからね。とにかく、プロレスが好きだったから。

――いまでもプロレス界の動向に目を向けていますか？

寺西　たまに夜中にやってるテレビを観ることもあるよ。いやぁ、フィニッシュ技が凄いねえ。でも、いくら大技出しても決まらないのね、なかなか（苦笑）。まぁ、何事も時代の流れで変わっていくものだから、それもしょうがないんだろうけどさ。

――かつての寺西さんの仲間のなかには、いまでも現役でリングに上がってる方もいますが、そのことについてはどう思いますか？

寺西　（グレート）草津さんの通夜のとき（08年6月）、鶴見に会ったら「まだやってますよ」って言うから驚いたんだよ（笑）。高杉（正彦＝ウルトラセブン）もやってんだってね。長州や藤波だって、もう60近いでしょ？　まぁ、よくやるよねえ（苦笑）。もう俺なんか、思うように運動できないからさ。足をケガしたし、肩も悪いし。うらやましいなあ。

――体調さえよかったら、いまでもリングに上がりたいという気持ちは？

寺西　いや、もうやろうとは思わないけどさ、トレーニングはしたいんだよ。医者には「このまま仕事を続けてたら人工関節になる」って言われててさ。やっぱり、いままでにリング下に身体ごと落っこちて腰打とうがヒザ打とうが、そのままやってたからね。半月板を手術したとき（85年）に医者がびっくりしてたもん。「よく、これでいままで試合してきましたね」って。もう骨が擦り減ってるって。でも、試合するのが楽しみだったから、怖いものがなかったね。そのツケがきたのかなあ……。もう、いまは自分の身体が自分のじゃないみたいでさ。

――ただ、それはけっして大きくない身体を張り続けてきた証といいますか……。

寺西　うん、そうなんだよね。本当にプロレスが好きだったから。でも、おかしなもので、身体に染みついた身のこなしはいまでもとっさに出るみたいなんだよ。基礎工事の仕事中、人一人すっぽり埋まるぐらい深い溝を掘って、その上に橋を渡して作業することがあるんだけど、あるときバランスを崩して溝の中に落っこちちゃったんだよ。でも、自然に空中で受け身の体勢に入っていて、クッとアゴを引いてたから頭一つ打たなくてさ。むっくり起き上がったら、「あの高さから落ちて無傷なんて、さすがプロレスラーですね！」って、みんなが感心してたけど（笑）。

――和製エドワード・カーペンティアと呼ばれたマットの魔術師ぶりはリングを降りても健在だ、と（笑）。

寺西　そんなんじゃないけどさぁ（笑）。まぁ、でも30年以上続けてきたプロレスラーの日々は、俺にとっての青春だよ。

【11年1月8日／都内・某所にて収録】

長州や藤波なんかまだ試合してるでしょ？俺は思うように動けないからうらやましいよ

てらにし・いさむ■1946年1月30日、富山県出身。大相撲を経て、66年に東京プロレス旗揚げ戦でデビュー。同団体の崩壊後は国際プロレスへ移籍。そのテクニシャンぶりから"和製カーペンティア"と呼ばれる。その後はジャパン、全日本、SPWFとさまざまな団体で活躍した。175cm、100kg。

ボーイズ&ガールズよ、ユーたちはあのアンデウソンの前蹴りをちゃんと観たかい? オレは興奮しすぎて、ミラーの前で何度もマネをしてたら、小指をぶつけてうずくまっちまったぜ。まったく、世の中どうなってんだい? そんなことより、気になるのはスティーブン・セガールだ。アイツはタダモノじゃないぜ……。

FEBRUARY号へのお便り紹介

「魔裟斗&須藤元気 with サダハルンバ解説完全再録!」がおもしろかった。青木vs自演乙の試合の結末が衝撃的だったのと、テレビで観ていたときに、魔裟斗と元気のコメントが解説ではなくて感想というしかない状況で、なんかへんなこと言ってるな~と思っていたのですが、その全内容が文章で出ていて凄くおもしろかったです。
【東京都・野島直樹さん・会社員・34歳】

Dまったく、ユーたちはいったいどうなってるんだい? この記事はテレビ解説を単に文字にしただけなのに、とんでもない反響じゃないか。ただ、オレが読んでも、マサト&ゲンキは飛ばしてるぜ。マサトには、ずっとシンヤ・アオキの試合の解説をやってほしいよな!

長島vs青木の記事がおもしろかった。私はテレビで観ていたのですが、まさしくスタンディングオベーションでした。青木選手は立ち技での1ラウンドはふざけるなと思っていたので。今回の結果は、なるべくしてなったと思います。長島選手も調子にのらず、精進してやってほしいです。立ち技大好きです。これからも見続けていきます。
【埼玉県・稲葉耕三さん・会社員・35歳】

Dやっぱりユーたちはシンヤ・アオキのファイトぶりにイライラきてたのかい? しかし、ジエンオツというボーイに100パーセント乗れたというボーイズ&ガールズもなかなか……。つまり、勘のいいオレが観ても、ベリー・ディフィカルトな試合だったってことだぜ。

日沖発選手のインタビューがおもしろかったです。日沖選手の考え方がかっこよかったし、強かったです。
【茨城県・岸野紘樹さん・学生・16歳】

Dハツ・ヒオキの試合は本当に素晴らしかったぜ! 聞くところによると、あの日は30試合ぐらいあったらしいが、そのメインを飾るにふさわしい試合だったよな。ジャパニーズMMAに元気がないと言ってるヤツもいるみたいだが、ハツの試合を見たら、急に黙りこくるだろうよ!

福田力インタビューがよかった。とてもよい練習ができているのか、とてもいい顔、身体をしていますね。最も厳しい階級ですが、切り開いていってほしいです。
【神奈川県・大内和彦さん・会社員・33歳】

Dしかし、『kami-pro』でKIDと対談したときは、まさか自分より師匠のKIDが先にUFCに上がるとは思わなかっただろうなあ。人生、何が起こるかわからないってことだぜ。ってことは、オレがUFCに上がる可能性も……クックックック。

練マザファッカーのD.O.さんはおもしろい。「1つのセリフが最高。とくに「死神とダンス」は私も使わせてもらっている。
【山口県・松江巧さん・自衛官・32歳】

D練マザファッカーのことは、どうやらダナ・ホワイトも気にしてたらしいじゃないか。「こいつらもファイターなのか?」って……。まあ、ある意味ベストフレンドのシンイチ・スズカワよりもファイティング・スピリットは満々だぜ。

佐伯さん、川村選手の社長対談を読んで、坂本運営本部長の幻想がふくらみました。一度お会いしてみたいです。仕事は一緒にしたくはないなあ。
【神奈川県・廣木和宣さん・会社員・45歳】

Dまったく、マット界という場所はホントにいろんなヤツがいるもんだぜ。しかし、最近はオレの心のアニキであるシゲル・サエキが落ち込んでるらしいじゃないか。いったい何があったんだい?

FEBRUARY号 おもしろかった記事 RANKING

NO.1 魔裟斗&須藤元気解説再録
NO.2 長島☆自演乙☆雄一郎vs青木真也
NO.3 福田力
NO.4 中井りん
NO.5 佐伯繁×川村亮

やっぱりユーたちはマサト&ゲンキの解説に反応しすぎだぜ。しかし、興奮しまくってるボーイってのはホントにおもしろいよな。クックックック。オレが一番笑ったのはサダハルンバの「魔裟斗くんが立った!」だぜ。クララか! って話だからよお。アッハッハッハ! え? ツッコミがつまらない!?

オレを スティーブン・セガールに 会わせてくれ!

静岡県・浩二さん/素晴らしくソックリなカオル・ウノを描いてくれたのはコウジだな! しかし、これはもしかして『ゴン格』を見て描いたんじゃないのかい? クックックック。

衝撃ショット!!

ひさびさの投稿!! S波氏と馬之助のツーショット写真!

な、な、なんと、あのミスター・S波がひさびさに貴重な写真を送ってくれたんだってえ!? まったく、ドキドキさせてくれるじゃないか。ミスターによると、これはミスターが高校生のときの写真で、「1976年8月2日、上田馬之助が猪木に挑戦状を渡しに来た蔵前国技館裏の駐車場で撮ったものと思われます(笑)」とのことだ。しかし、なんて写真管理がうまいんだ。しかも、オレに勝るとも劣らない男前だぜ! ミスターよぉ。

ファンキーでクレイジーなアイツが
読者のメッセージを
Check it out!!

“読者ペイジ”
ジャクソン

155号へのお便り紹介

上田馬之助のインタビューがよかった。“プロレスラー”として仕事をしてきたことのプライドと覚悟が見えたと同時に、現在のプロレスのあり方まで考えさせられたから。
【山口県・小川哲史さん・学生・22歳】

Dおいおい、ウマノスケってヤツのインタビューはとんでもない評判らしいじゃないか。ウマノスケの現役時代を知らないファンもいると思うが、あまりの含蓄あるワードにビビってたじろいだんじゃないのかい？ ハッキリいってオレもたじろいだからな。クックックック。

小見川道大のインタビューがおもしろかったです。いまは自信に満ちあふれ、負ける姿が考えられない小見川ミッチー。70キロ級での悔しさもあるので、ぜひともその悔しさをバネにTOP中のTOPとして活躍してほしいです。
【神奈川県・大内和彦さん・会社員・32歳】

Dオレもちょっとはいつの日か節穴だってことを、クソッタレ・スピリットで証明してくれよな！ ……と、試合前にココまで原稿を書いてたんだが。まだまだ頑張れよ、ミッチー！

「青木に何が起きたのか？」がおもしろかった。青木選手が上京してきたときにPRIDEの社員の人が青木選手のためにアパートを探した話と、長谷川さんの「青木をルンペンにさせる気はない」という発言は泣きました。と同時になぜ青木選手が日本で闘うことにこだわってきたのかよくわかりました。青木選手は絶対このままで終わってほしくないです。
【北海道・安部正典さん・フリーター・38歳】

D人の人生を決めるのはいろんな要素があるってことだな。シンヤ・アオキもやっぱり同じだってことだよな。え？ オマエなんかにそんなことがわかるのかって？ おいおい、オレがどんだけつらい人生を送ってきたと思ってるんだい？ それも、ユーたちのおかげでな（涙）。

ストライクフォース・ヘビー級GPの記事がおもしろかった。ひさしぶりに「考えるだけでゾクゾクする」ようなGPが始まるのがうれしいから。
【埼玉県・星喜幸さん・会社員・24歳】

Dしかも、その一部がなんとジャパンで行なわれるって噂じゃないか。これは飢えたMMAファンにはたまらないインフォメーションだよな。オレも絶対に観に行くぜい！ え？ やっぱりナシ!? おいおい、どっちなのかハッキリしろって話だぜ。

北岡悟のインタビューがおもしろかったです。北岡選手はいろいろ語ってくれるし、青木を信頼しているんだなあって思ったから。
【大分県・酒見真由さん・中学2年生・14歳】

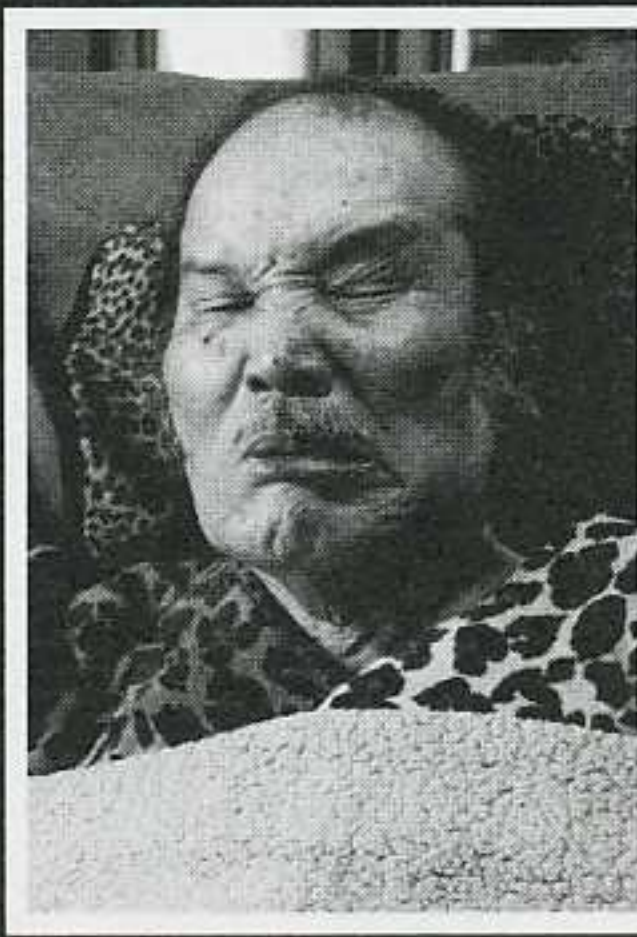
Dサトル・キタオカもいったいどうなってしまうのか、オレは心配でたまらないぜ。しかし、年末はシンヤ・アオキが大変だったみたいだが、二人のフレンドシップは永遠だな。ユーたちも今年のサトルを応援してくれよな！

中井りん選手への50の質問がおもしろかったです。物心がついてからずっと女子プロファンをしてますが、最近、中井選手のことを知り、とても興味を持ったからです。ただ、質問のなかでプロレスにはまだ心が向いてないのが残念です。
【愛知県・水野克さん・団体職員・47歳】

Dリン・ナカイの50のクエスチョンはいろいろ妄想をかき立てられる内容らしいじゃないか。え？ キスをしたことない！！？？ おいおい、これはショウワのアイドル登場ってヤツじゃないのかい？

155号
おもしろかった記事
RANKING

NO.1 上田馬之助
NO.2 小見川道大
NO.3 北岡悟
NO.4 菊地毅
NO.5 嶋田紋奈

今回はダントツでウマノスケが1位だったみたいだな。まったく、読者も関係者も大評判になってるぜ。大分まで行った編集部のミスター・ガンツはグッジョブだぜ！ しかし、今回はけっこう渋めのランキングじゃないか。こんなときこそ読者ペイジを選んだっていいんだぜ。クックックック。

おハガキ募集!!

おハガキ、どんどん送ってくれよ!
ケータイからでもOKだぜ!!
どんな意見、感想、苦情、抗議、
お悩み、ダメだしでも、ぜーんぜんキャッチするから安心しろって！ 待ってるぜ!

こんな情報も24時間どんとこい!
ってヤツだ。
- 譲ってほしいもの
- タレコミ情報
- 選手に対するコメント、試合の感想
- その他、オールOKだ!!

以上、すべてのお便り・
イラストのあて先は

〒162-0805
東京都新宿区矢来町41-1
ザ・フタガミハウスNo.1
kamipro編集部「デビュー」
係まで。

携帯サイト『kamipro Move』
からの投稿もできます。

静岡県・浩二さん／おお、マッハもそっくりじゃないか。ユーはジーニアスなんじゃないのかい？ ちなみに、載せられなかったが、DEEPのハットリさんの追悼イラストもありがとな！

団体オフィシャルおよび関係者のツイッターアカウント

※オフィシャルや代表者のアカウントを集めたんだが、載ってないものがあったらぜひ教えてくれよな！

谷川貞治 FEG代表「K1_Tany」
FEG宣伝熊「K1_Kuma」
DREAM「dreamPR」
笹原圭一 DREAM EP「sasaharakeiichi」
SRC「SRC_mobile」
DEEP「deep_official」
佐伯繁 DEEP代表「sigeru_saeki」
ダナ・ホワイト「danawhite」
WWE「WWE」
新日本プロレス「njpw1972」
菅林直樹 新日本プロレス代表「NJPWSUGABAYASHI」
武藤敬司「muto_keiji」
DDT「ddtpro」
高木三四郎「t346fire」
天龍プロジェクト「tenryuproject」
ゼロワン「Zero1_Fos」
山口日昇「noboru_yama」
SMASH「SMASH_2010」
酒井正和 SMASH代表「SMASH_Sakai」
アイスリボン「ice_ribbon」
さくらえみ「sakuraemi」
19時女子プロレス「19pro」
アントニオ猪木「Inoki_Kanji」

『炎の体育会TV』での激闘で
視聴率16パーセント超え達成!

ホンマですか!?

今田さん
強かったですよ!

RENA 今田耕司 "戦友"対談

今年1月11日に放送された『炎の体育会TV～2011』をご覧になっただろうか。
女子格最強RENAと芸人軍団が対戦し、RENAが見事勝利を収めたのだが、
その試合の激しさはバラエティ番組とは思えないほどの凄まじさ!
そこで今回はその番組の舞台裏を語ってもらうべく、
RENAと対戦し、好試合を繰り広げたお笑い芸人の今田耕司氏にご登場いただいた。
二人の"戦友"対談を読め!

聞き手／松下ミワ　撮影／浜田智則

最初は「キーラ・グレイシーとどうですか?」って言われたんです

今田耕司

——今日は、なんとRENA選手と今田耕司さんのスペシャル対談を収録させていただこうと思い、大阪までやってまいりました!

今田　はい、どうぞお願いします!

RENA　お願いします!

——そもそも、この対談のきっかけになったのは、お正月に放送されたTBS系特別番組『炎の体育会TV』でお二人が対戦されたことだったんですが、RENA選手と今田さんは、もう戦友といってもいいんじゃないかと思うんですよ。

RENA　アハハハハ! そうですねえ。

——ひさびさにお会いになって、いかがですか?

RENA　いやあ、緊張しちゃいます(笑)。

今田　ボクは今日のほうがリラックスしてますね。前の緊張感はもうハンパじゃなかったんで。でも、一緒に番組、盛り上げた仲間ですから。おかげで凄い反響でしたよ。

——格闘技界でも、年末の『Dynamite!!』よりも視聴率を獲ったということで凄く話題になったんですよ。

今田　ホンマですか!? あ、でもそれ誰かに聞いたなあ。

——『炎の体育会TV』の平均視聴率が11・8パーセントで、RENA選手が試合をしているときはなんと瞬間最高で16・8パーセントということで。

今田　おお～。凄いなあ。

——そもそもこの対決についてはお二人にはどんなふうにオファーがいったんでしょうか?

今田　ボクは最初は「『体育会TV』の司会で」って言われてたんですよ。

RENA　え、司会でやったんですか。

今田　でも、番組スタッフも吉本の人間もボクが前から総合格闘技の練習をしているというのは知ってたんですよね。で、『体育会TV』って、何年か前にも一度放送されてるんですけど、そのときにキーラ・グレイシーと宮迫(博之・雨上がり決死隊)が対戦したみたいな流れがあったんです。ほんで「今田さんも格闘技やってんのやったらキーラ・グレイシーとどうですか?」って言われたんですよね。

——最初はキーラが候補だった、と。

今田　けど、たぶんテレビ的に寝技対決だとわかりにくいなあと思ったんですよ。もっと体格差があったらやられてもおもしろいと思ったんで、「それやったら八木(真澄・サバンナ)のほうが身体がデカいし、いいんちゃうか?」ってことでキーラとは八木が対戦することになったんです。でも「今田さんもなんかないですか?」って言うから、「逆に、打撃のほうがわかりやすくていいんちゃう?」って言うて。

——ということは、今田さんのほうから打撃戦を提案したわけですね。

今田　で、ボク、RENAちゃんのことも知ってたんでね。

RENA　そうなんや! うれしいです!

今田　女子高生でチャンピオンになってる女の子っていうことでね。で、RENAちゃんやったら「美人アスリートvs芸人」というお題ならもう、うってつけやなと思って、「RENAちゃんがオッケーやったら、ちょっと考えるわ」って。

——考えるわ、ですか?

今田　一度、保険は打っておかんと(笑)。

RENA　アハハハハ!

——一方、RENA選手にはどんな感じでオファーがきたんですか?

RENA　いや、普通に「『体育会TV』があって、芸人さんと闘ったら景品がもらえるよ」って(笑)。

今田　ダハハハ! かわいい理由やなあ。

——その時点で誰と闘うかっていうのは決まってたんですか?

RENA　「たぶん、この芸人さんと……」みたいな感じで名前が挙がってて。今田さんと柴田(英嗣・アンタッチャブル)さんと品川(祐・品川庄司)さんという、その名前もたぶん聞いてたと思います。だから、正直「大丈夫かなあ?」と思って。

今田　あ、それはボクらを心配してくれてるのよね?

RENA　いえ、自分の心配ですよ(笑)。

今田　いやいや、何を言うてはるんですか。ただ、ボクも柴田の復帰第一弾やって聞いたんで、「まあ、RENAちゃんぐらいに殴られたら世間様も許してくれるかな」とはちょっと思いましたけどね。

——復帰戦としてはバツグンですね。でも、今田さんは心配されてたといえども、8年間、総合格闘技のトレーニングをされてるんですよね。

今田　でも、ほぼフィットネス感覚ですよ。

RENA　それまで試合をやるとかいう発想はなかったんですか?

今田　ない、ない。スパーリングぐらいしかしたことないんで。

——じゃあ、キャリア初の試合となるRENA戦に向けては、ビデオ研究なんかも入念にされたんでしょうか?

今田　ええ。観ましたよ。「こんなんアカンよ、無理やん」って言いながら何回も観

ましたもん。
RENA　ハハハハ！　観てくれたんですね。ありがとうございます（笑）。
――でもRENA選手の試合ってかなりバチバチ系ですよね……。
今田　もう、もちろんそういうのを観たわけですよ。でも、RENAちゃんはもう女性とはいえ、プロのアスリートなんで、筋肉が我々アマチュアとは違うじゃないですか。もうその時点で圧倒されますよね。
――その点、RENA選手は「今田さんが一番強敵だと思う」って言ってましたよね。
RENA　もう煽りV的に（笑）。だって8年経験があって、「ついに今田耕司が来た！」みたいな感じだったじゃないですか。
今田　いやいや、もうボク44歳ですよ。
――それに、逆にRENA選手としては今田さんを研究しようとしても、ビデオとかまったくないわけですからね。
RENA　そうですよお。
今田　あ、それ嫌やねえ。8年っていうたら、そこそこやってるみたいやもんね。
――そこで、実際の試合ですが、一番手は柴田さん、二番手は品川さん、そしてトリが今田さんという順番でした。でも、前のお二人が闘ってるのを観ながら、どんどん今田さんの顔色が変わってくという（笑）。
今田　そうなんですよ！　どちらかといったら品川のせいですよ！　柴田まではまだ大丈夫やったんですけど、品川がやっぱりガツンと倒れたじゃないですか。
――RENA選手のハイキックを食らって、かなり衝撃的なダウンをしました。
今田　もう、あれがダメでしたわ。だから最初は柴田と品川と3人だけで集まって話をしてたんですよ。「番組的にも中途半端なんやったらアカンから。いうてもRENAちゃんはプロで、絶対こっちがかなうわけないから、もう全力でいこう」と。
RENA　アハハハハ！
今田　それで柴田がガーっといって、一人目がいい感じに終わったんですよね。
――RENA選手のフロントチョークで一本勝ちだったんですよね。
今田　そっしたら二人目の品川が、ヘンにパワーがあるもんやからガーッといったら、たぶんRENAちゃんは身体が反応してハイキックでカウンター取ってもうたんやろうね。
RENA　本当に自分でもビックリしたんですけど、きれいに入ってダウンさせちゃいました。
今田　もう、あのカウンターは衝撃的でしたよ。あそこから品川の顔つきが変わって、ホンマ"狛江の狂犬"の顔になって。

柴田さん、品川さんと比べると今田さんが一番強敵だと思いました

RENA

――隠されていたワル顔が出現しましたか（笑）。実際、品川さんと対戦したぐらいからやっぱり本気になってきたんですか？
RENA　いやー、そんなにおもいっきりやってるつもりはなかったですけどね。いうても7割ぐらいです。
今田　7割！　そんなに出してくれたんや。うれしいなあ。でも、あれはタイミングがよすぎたよね。
RENA　そうですね、タイミングがもうピッタリだったんです。でも、あの瞬間、今田さんのビックリした顔がテレビに映ってましたよね（笑）。
今田　そうなんよ。ボクは、もうアゴが砕けたと思ったんですもん。だからいままでバラエティの世界でいろいろ格闘技を扱った番組があったと思うんですけど、芸人であんなきれいなカウンターを決められたんはいないですよ。
RENA　アハハハハ！
今田　いや、ホントに。あれは奇跡的にガチ感が出ましたね。でも、RENAちゃんも「あっ」っていう顔してたよね？
RENA　「あ！　入っちゃった！」　みたいな。でも、あそこで品川さんが立ったじゃないですか。あれがビックリしましたよ。「え、まだやるの⁉」って。
今田　全然、あこで止めてもおかしくないんですけど、レフェリーの平（直之）さんも試合モードになったんですかね。立ってきたから、「やれるか？」みたいな感じで瞳孔を確認してましたから（笑）。
――平さんにもスイッチが入っちゃった、と（笑）。じゃあ、あの試合が番組の流れを決定づけたという感じなんですね。
RENA　でもですね……これ言うていいのかわからないんですけど、試合する前、私わからなかったんですよ。
今田　何がですか？
RENA　いや、皆さんけっこう本気だったじゃないですか。そこまでとは聞いてなくて、軽くお笑いのノリでと思ってたので、めっちゃビックリして（笑）。
今田　ガハハハ！　そうなんや。それ、ボクらが本気やってどこで気づいたん？
RENA　柴田さん終わったぐらいに「あれ、ちょっとこれおかしいなあ？」って。
今田　ほなもう品川で確信したんや（笑）。
RENA　「あ、これはガチや」って。
今田　そうなんや！　こっちは完全に「ガチでいこう」って言うてて「絶対そんなん、RENAちゃんはオレらが打ったぐらいで大丈夫やから」言うて気合い入りまくっ

てたんやけどね。

RENA　なんかな、裏で用意してるときも3人ともすっごい緊張してるから、「なんで緊張してんねやろ」と思って（笑）。

今田　でも、そうはいうてもRENAちゃんもトレーナーさんに太ももをパンパン叩かれてたんですよ（笑）。そやから「これアカンアカン、ガチや、ガチや」いうて、こっちはこっちでRENAちゃんの様子を見ながら感じ取ったやけどね。

——しかし、ある意味RENAさんにとっても、ちょっとしたドッキリだったんですね。

RENA　凄いドッキリですよ。品川さんのときなんかもう、「なんやこれ！」って思いましたから。

今田　ダハハハハ！

——そういう雰囲気のなかで、ラストのお二人の対戦はどうでした？

今田　これが、番組的にもずっとアスリートがらみの企画が好評だったんですよ。もう、全部盛り上がってね。で、最後の最後がボクらのとこやったんで、いうたら第1試合からずっといい試合が続いてるのに、メインイベントでしょうもないことしたらもうイベント自体が台なしになるじゃないですか。

——メインが締まればいい大会になりますもんね。

今田　だからちょっとメインイベンターの気持ちがわかる感じやったんですよ。ほんなら品川が「うまい仕事したな～！」思うて。

RENA　でも、今田さん、強かったですよ。

今田　へへへへ。言うてくれてるなあ。

RENA　いや、ホンマにうまかったです。

今田　これね、フォームだけはけっこうほめられるんですよ。

RENA　でも、煽りVで言うてはった必殺技ってなんだったんですか？

——確かに、今田さんは秘策を用意されてると言ってましたよね。

今田　あれはですねえ、バックステップから半歩タイミングをずらしてミサイルパンチだったんですよ。そういうのを教えてもらったんですけど、まったく出せませんでした。

RENA　はー、そうやったんですね。

今田　まずね、半歩下がる余裕がなかったですよ。RENAちゃん、すぐ詰めてくるし、やっぱりミットとは違うなあって思い知らされましたからね。いや～……、でもスタミナつけてまたやりたいなあ。2分ちょいで、きれ～いにガソリン切れましたからね。

——今田さん的にはどのくらい「やれたな」という感じがあったんですか？

今田　いや、やっぱりスタミナの上がり方が、ああやって周りにお客さんがおってリングに上がると全然違うねんなというのと、「人がおったほうがちょっと気持ちええな」っていうのがありましたね。緊張感プラス「楽しいな」って。やっぱりテンション上がりましたもんね。

本番に向けてビデオでRENAを研究したという今田耕司。入手したビデオがもし壮絶な死闘を繰り広げた2010年『Girls S-cup』のものだったとしたら……試合前はおおいにビビってたじろいだに違いない!?

私、軽くお笑いのノリでと思ってたので、めっちゃビックリして（笑）

RENA　でも、今田さんが言うてるその感覚はすっごいわかります。あれはやめられないですね。そこで勝ったらまたたまらないんですよ。

今田　そこで優勝してるわけやからね。

RENA　も～う、世界の中心ですよ！

今田　ハハハハ！　そらそやろねえ。

——ここでちょっと今田さんの格闘技歴についておうかがいしたいんですけど、煽りVでは8年前からグラバカで練習されてるという紹介がありましたよね。

今田　でもパンクラスも入れると、ボクもう10年ぐらい通ってるんですよ。始めたのが32ぐらいのときで、初めは運動不足の解消が目的だったんですよね。

——あ、そうだったんですか。

今田　これはもう何度か言わしてもろうてるんですけど、バラエティ番組でホッケーをやる企画があったんですけど、それが凄いセットでコート自体がシーソーみたいな感じに動くというのがあったんですよ。そのときボク、体力がなさすぎて、そのセットをうまく活かしきれなかったんですよ。それが凄く悔しくて、「何をするにもスタミナをつけなアカンな」って。

——芸人の方もスタミナが必要なんじゃないか、と。

今田　で、ボクはもともとプロレスが大好きやったし、パンクラス、とくに船木（誠勝）さんの大ファンやったんで、パンクラスの道場に一般会員として通うようになったんですよ。休みの日に雑誌を見てたらたまたま募集の記事が載ってたんで、その足で行って入りましたね。

——凄い行動力ですね。

今田　で、パンクラスの打撃は顔面禁止だったんで、レスリングと寝技と、顔面より下の打撃の授業を受けてました。

——それを10年以上通われてるということは、相当楽しかったんですか？

今田　もともと好きやったんでね。ボクらの世代はブルース・リー直撃世代やし、「いつかやりたいなあ」と思ってたんですけど、当時は町のジムに通うという発想もなかったじゃないですか。だから、高校時代に少林寺拳法部でやってたのぐらいで、本格的に技術を教えてもらうようになったのはパンクラスからですね。ただ、最初の授業とか前後左右のステップだけで、何人もやめていきましたけどね。

——前後左右のステップですか。

今田　もう、一時間ぐらいずーっと前に行ったりうしろ行ったり横行ったりしてて、退屈やったんですよ（笑）。たぶんパンクラスさん自体も一般の人に教えたことないんで、選手もみんなプロレスラーなんで、「オレ、よくわかんねえんだよ」って言うてはりました（笑）。

——ハハハハ！　一般会員のジムってそんな練習とかするものなんですか？

RENA　ステップだけですか？　フットワークの練習はしますけど……（笑）。

今田　だから、「あれ、いつシュッシュッっていうの教えてくれんねやろ」とか思いながら行ってたんで。で、そのなかでも菊田（早苗）さんの授業の日が寝技とか凄いわかりやすかったんですよね。だから菊田さんがグラバカ立ち上げるってなった

今田耕司

残ってたガソリンなくなりましたわ（笑）。

——では、せっかくなので、実践を。

わかりやすかったんですよね。だから菊田さんがグラバカ立ち上げるってなったときに、ボクも一緒にグラバカのほうにお世話になってるんですよ。

――ちなみに、どのぐらいの頻度で通われてるんでしょう？

今田　週に一回行けたらいいほうですし、いまは何ヵ月かに一回とかしか行けないですね。やっぱり授業の時間が決まってるんで、仕事がかぶっちゃうとなかなか行けないんですよ。

――今田さんって基本的には東京在住なんですか？

今田　はい、ずっといます。で、今日みたいに仕事のときに大阪に来て、また戻るっていう感じですね。

RENA　もし大阪で身体動かしたくなったら、ぜひシュートボクシングしに及川道場に来てくださいよ。

今田　行っていいの？

RENA　もちろんです！

――それはいいですね。それに、せっかくですからRENA選手から秘技を伝授してもらうというのはいかがですか？

今田　お！　なんか、いい技ないですか？

RENA　技ですか？（笑）。

今田　最近は打撃の練習ばっかりやってるから、打撃技の凄いのを教えてもらいたいなあ。

RENA　そうですねえ。じゃあ、ボディ打ちとかはどうですか？

今田　ボディ！　あ、ボクもボディ一発、ええのいただきましたよ。あれで一気に残ってたガソリンなくなりましたわ（笑）。

――では、せっかくなので、実践を。

RENA　（立ち上がって）ええっと、相手が亀になったときに打つのがポイントなんですけど……。そのときに、ココをバコン！　と打つんですよ。

今田　あ、ホンマや！　ココや、ココや。まさにこれですよ！　亀になったときにココをドーンってされました。

RENA　右胸の下らへんですね。これが、けっこういくんですよ（といって軽く打ち込む）。

今田　あ、痛ッ！　なんかガツンとくるわ。なるほど！　いいですね、RENAスペシャル！　これは誰にも教えてもろうたことないです。

RENA　よかったら使ってみてください（笑）。

今田　今度、グラバカに行ったときにやります。亀になった人、右のここを見ますよ、空いてたら。いただきー！　って。

――いいですねえ。いま今田さんに格闘技のことをうかがいましたが、逆にRENAさんはお笑いのほうはどうですか？

今田　ホンマや、観たりするんですか？

RENA　よく観てますよ。

今田　土壌が関西やからね。

RENA　もうだってテレビつけたら絶対に今田さん映ってるじゃないですか。

今田　いやいやいや、そんなことないんですよ。必死ですよ。もう「出れるときに出とかな」みたいな。

RENA　ハハハハハ！

RENA

ボクはもともとプロレスが好きで船木さんの大ファンだったんです

RENA × 今田耕司

——RENAさんはどんなお笑いがお好きなんですか?

RENA　そうですねえ。いろいろ観てますよ。でも、最近お笑いの番組ってだんだん潰れていってますねえ。

今田　そうなんです! 若手とかも昔はねえ、『エンタの神様』や『爆笑レッドカーペット』やなんかいっぱいあって出る機会が多かったんですけどね。

RENA　あ、でも『レッドカーペット』は毎週観てましたよ。

今田　ああ、ありがとう、うれしいわ。芸人、誰がお気に入りでした?

RENA　なんかね、いろいろいてるんですよ。COWCOWも好きだったし、この前はギャロップのライブを観に行きました。

今田　え? ライブも観てるの!?

RENA　はい。京橋花月とかにも観に行ってます。

今田　えー! 言ってよお。そんなんオレに言ってもらったらタダ、タダ。そんなん招待やから。

RENA　ホンマですか?(笑)。

今田　ホンマよお。でも、実際に観に来てくれるというのはうれしいわ。ボクも新喜劇で、いまでも新宿やとルミネでやったりとかしてるんでね。

RENA　え? 新宿やと今田さんのライブも観れるんですか!?

今田　やってる、やってる。たまに大阪で公演もやらしてもらったりするんで。そのときにタイミングが合ったら、ぜひ来てもらいたいですよ。吉本新喜劇の東京版みたいな感じのかな。出演者がちょっと違うぐらいで。やっぱ大阪のほうが濃いけどね。山崎邦正とかボクとか、サバンナとかいてるで。

RENA　おもしろそうですね! もし時間あったらね。ルミネとか行ったことないっでしょ?

今田　東京に来るときにも、もし時間あったらね。

RENA　行ったことないです。

今田　ほなぜひ。ボクが出てなくても行くとき言うてよ。会社にでもいいから。

——強くてカワイイ女の子は何かとトクですねえ。

RENA　アハハハハ!

——でも、対戦した二人はよく「ベストフレンドになれる」と聞きますけど、お二人は心が通じ合った部分というのはありますか?

今田　ああ、でもね、試合をしたらRENAちゃんの性格がわかりました。もうね、もの凄くやさしい。ヒザを刺さずにちゃんとガードの上からやってくれてますよ。「ええ子やな」と思いました。

——でも、試合とはいえTVショーだったわけじゃないですか。お互いに、その道のプロで、そのなかで真剣に試合をしつつも魅せる部分を意識されたと思うんですが、そのあたりはいかがでした?

今田　たぶんお互いに場数は踏んでますし、お客さんがいて盛り上げないとというのはどっか頭にはありますよね。だからやっぱり二人というか、みんなで一つのイベントを盛り上げてる感じはありましたね。

——なるほど。しかし、この対決は一度だけというにはもったいない気がします。

今田　いやもう、毎回いうたらRENAちゃんに申し訳ないんで。ただ、やるとなったらやっぱりちょっと芸人に有利なルールにさしてもらわなあかんな。

今田耕司といえば、やはり連想されるのが松本晃市郎が所属している今田道場だ。所属は松本とジャリズムの山下しげのりで、松本の試合の際は主宰の今田耕司もリングサイドでじっくり観戦していたりする。

——コミッションに働きかけますか! 逆に〝今田軍〟ということで、いろんな芸人さんがいるのもおもしろいと思うんですが、RENA選手、闘ってみたい芸人さんとかいますか?

RENA　ええ〜〜!? 闘ってみたい芸人さんですか?(笑)。

今田　でも、ボクシングジムに通ってる芸人はめっちゃ多いですよ。ナイナイの岡村(隆史)も行ってましたし、千原ジュニアはいまも行ってますし、インパルスの堤下(敦)……じゃないほうも……。

RENA　じゃないほう(笑)。

今田　あ、板倉(俊之)、板倉。板倉もボクシングジムに行ってたりとか、けっこう多いですよ。

——続々と強敵の名が挙がってますよ。

RENA　ホンマですねえ(笑)。

今田　あとね、オードリーの春日(俊彰)はホントにK-1トライアウトをやらされたらしいですから。

RENA　うわあ、でも春日さんはキツイなあ。デカイし。

今田　若林(正恭)くんもグラバカにちょっと来てて、最近はキックのジムに行ってるって噂を聞いたんで。

RENA　若林さんやったら、たぶん……大丈夫かな?

今田　そうなんや(笑)。でも、若林くんも春日と一緒にアメフトもやってたんやで。だからね、コミッショナーにはぜひいい感じのマッチメイクをしてほしいですよ。

——じゃあ、1年後に備えて……。

今田　いや、1年どころか、早めに動いてるかもわかりませんよ(意味深に)。

——と、いいますと?

今田　ま、一応ふぁ〜っとはもう言われてるんですけどね。

——えー! そうなんですか!!

今田　ふぁ〜っとね、「またどうですか、4月、5月ぐらいに」って。「いやちょっと、こないだやったばっかりやから」って言いつつ、また保険をかけようかとしてるんですけど。

RENA　あ、でもそれやったらまた今田さんと対戦したいですね。

今田　うわ〜、そうかあ〜。ちょっとぐらいは成長できてたらいいんですけど……。

RENA　ククククク。

——ここにきて、また今田さんの顔が青くなってますけど、ぜひ我々は観たいと思ってますので第二弾、期待をしたいと思います!

今田　そうですか……。ほな考えときますわ、一応。

RENA　アハハハハ! 保険かけないでください(笑)。

【11年2月13日/大阪・某所にて収録】

第二弾？　ま、一応ふぁ〜っとはもう言われてるんですけどね

オードリーの春日さんはキツイなあ。若林さんやったら、たぶん大丈夫かな？

れーな■1991年6月29日、大阪府出身。小学6年生のときに及川道場へ入門。グローブ空手の大会で実績を積み、07年に『クボチューン・レーナM15』のリングネームでJ-GIRLSでプロデビュー。09年に『Girls S-cup』で優勝。そして10年同イベントでもベルトをさらい、見事2連覇達成。SBのガールズのベルトも含め、女子のあらゆるタイトルを狙う女子立ち技最強の格闘家。160cm、52kg。

いまだ・こうじ■1966年3月13日、大阪府出身。ご存知、数々のレギュラー番組を抱える人気お笑い芸人。格闘技界とのつながりも強く、自身は運動不足と体力強化を理由にパンクラスの道場に一般会員として通い、現在もグラバカに籍を置く。さらに今田道場を主宰し、松本晃市郎やジャリズム山下しげのりの試合では応援に駆けつけている。自身の試合（?）は『炎の体育会TV』でのRENA戦が初となった。

新連載
掟ポルシェの
突撃！俺の晩ごはん

7杯目

松永光弘『ミスターデンジャー』

Mr.DANGER

またくる　ゆるさん（定休日である水曜にステーキハウス『ミスターデンジャー』本店にうっかり来てしまい、ドアの前に貼り紙して）。伊勢崎を悪の街にするために、顔面に悪そうなペイントを施して市議選に立候補を考える関川・F・哲夫こと掟ポルシェの『突撃！　俺の晩ごはん』。今回は、ついに来た！　プロレスラー経営飲食店の本丸・一線を越えたステーキハウスこと『ミスターデンジャー』に突撃！　デスマッチLEGEND松永光弘さんが繰り出す肉と素敵なお話で、おまえも満腹にさせてやろうか！　食べたらうまくて思わずバルコニーダイブ!!

構成&撮影／堀江ガンツ

掟　松永さんはお店を初めてもう長
と自分のmixi日記に書いて反撃
松永　ありましたね（笑）。
掟　後藤さんみたいな相手の光を消
さを見せるのに、ちゃんと相手の見

掟　松永さんはお店を初めてもう長いですよね。

松永　4月で14年ですね。

掟　お店を始めたきっかけは、プロレスを続けるなかで「このままでいいんだろうか」という気持ちが芽生えたからだとか。

松永　「これでいいんだろうか」って気持ちと、プロレスが一時期好きじゃなくなったってことですね。

掟　それはFMWではいろいろ制限があって試合がやりづらかったということもあったんですか？

松永　ありますね。いま詳しいことはmixiによく書いてますけど。

掟　松永さんのmixi日記、毎日更新ですし、コメントもほとんど返すして、えらい力が入ってますよね。

松永　mixi日記にはなるべく自慢話を書かないように、自分のボロを赤裸々に書いてるんですけどね。ウソを書かないことでアクセス数があると思うんですよ。だいたいみんな、本を出しても自分のいいことしか書かないじゃないですか。

掟　それはポーゴさんのことでしょうか（笑）。

松永　ハハハハ！　あの人、自己否定なんて一つもないですからね。自分もあれ読んで「この人はこんないい人じゃねえぞ」と思いましたもん。それで対抗するように、"真の姿"をmixiにどんどん書いて（笑）。

掟　それにポーゴさんが激昂して、「あの野郎、マイミク切ってやる！」

ポーゴさんは人間性むき出しですね。自分だけよければそれでいいっていう

と自分のmixi日記に書いて反撃したという、なんともほほえましい事件も起きて（笑）。

松永　あれは非常にポーゴさんらしくて、ちょっとカワイイなと思います。こっちは（ビッグファイヤーで）身体を焼かれて死ぬ目にも遭ってるわけですから、あれぐらい書かれてもどうってことないだろうって思うんですけど。

掟　松永さんが著書やmixiで書くポーゴさんの話って、最終的にかわいげがあふれてて大好きなんですよ。FMW時代にポーゴさんが一時、試合後のホテルでコックリさんばかりやってたって話も最高で（笑）。しかも「霊が憑いた！」といって大騒ぎしたとか。

松永　ありましたね（笑）。

掟　小学生の休み時間とやってることが同じで度肝抜かれましたよ（笑）。あの歳にしてまったく大人の部分がないのが、レスラーとしては逆に魅力だと思うんですよ。

松永　人間の本性むき出しですよね。自分さえよければ他人なんかどうなってもいいとか、全部あからさまに出してしまってますからね。でもポーゴさんのことは、いまは全然嫌ってないんですよ。昔話を書いても、読んでる人はいまの感情でヒートアップしてきますし。たとえばターザン後藤さんなんかは、顔見てしゃべるときは普通にいい人なんですよね。だけど試合だと、それこそ自分のことしか考えない試合じゃないですか。ポーゴさんはそうじゃないから。会ったときもいい人じゃないから。だから逆に裏表がないっていう意味では嫌いになれないですよね。

都内の個人店としては異例ともいえる、駐車スペース６台分完備の『ミスターデンジャー』。車のお客さんを呼び込むとともに、ノンアルコールビールのポスターを貼って、飲酒運転厳禁を呼びかけることも忘れない。リング外では反則なし！

掟　後藤さんみたいな相手の光を消すプロレスって、試合内容もおもしろくなりづらいですよね。

松永　あれほどつまらないプロレスはないですよ。逆に先日、『YouTube』でアンドレ・ザ・ジャイアントvsアブドーラ・ザ・ブッチャーの試合映像を観て、感動したんですよ。アンドレとブッチャーって、どちらも石頭が売りだったので、アンドレがブッチャーのヘッドバッドを食らったとき、どんな展開になるのか、興味があったんですよ。これって裏を知ってても興味ありますよね？　まず大巨人アンドレのヘッドバッドを食らったら、石頭のブッチャーも倒れるんですよ。でも、ブッチャーは反撃するとき、アンドレの頭頂部じゃなくて、側頭部にヘッドバッドをしたんです。その"急所"を狙われたってことで、今度はアンドレもちゃんと倒れるんですよ。

掟　アンドレの怪物性をアピールしたうえで、急所を狙われればさすがの怪物も倒れると、逃げ場を用意しているんですね。

松永　ちゃんと考えてあるプロレスなんですよね。そうやって急所を狙われて弱ったあとは、アンドレもブッチャーの地獄突きを受けて倒れたりするんですよ。……で、後藤さんのプロレスってそれがないじゃないですか。

掟　何をやられても効かない（笑）。

松永　後藤さん、アンドレ・ザ・ジャイアントより強いですからね（笑）。

掟　技も受けず倒れもしなければそうなりますよね。

松永　でも、アンドレは怪物的な強さを見せるのに、ちゃんと相手の見せ場を作るんですよ。その最たるものが田園コロシアムのスタン・ハンセン戦ですよね。あれはアンドレが試合を全部作ってるから、いま観てもおもしろいですよ。

掟　プロレスって人間力、人間味がまんまリングに出る競技だと思うんですよ。ただ、いまは持てる人間力を全部出してもおもしろくないぐらい普通の人ばかりがプロレスをやってる状態じゃないですか。それに比べればポーゴさんは、破綻した人間性がそのままリングに出ているので、我々にとってじつは凄く魅力的なレスラーなんですよ。

松永　なるほど。まるで映画の『レスラー』みたいな感じですよね。

掟　完全に破綻した人がメインを張ってたっていうのが、20世紀のプロレスの凄いところだと思います。

柔らかくて有名な『ミスターデンジャー』のステーキ。ほかにない味わいだ。店内にはなぜか、W★INGのポスターとともに、ミスター・ポーゴの選挙ポスターが！

松永　ポーゴさんは試合になったら怖い部分も見せてましたからね。
掟　いかがわしさと怖さが同居しているのが、自分が好きだったプロレスラーというものなんですよ。そういう意味でもポーゴさんは理想のプロなんですよね。
松永　「こんなヤツになら勝てる」と思わせないのもプロですよね。ザ・シークなんて晩年、あきらかにおじいさんなのに刃渡り40センチのナイフ持って威嚇しながら入場してきたから、あれには向かっていけませんよ。自分なんかも控室に総合格闘技の経験がある人間が来て、ケンカになったことがあるんですよ。でも、向こうがホントに向かってきたら指を噛み切るつもりでした。そうすれば絶対に勝てると思って。
掟　それはプロレスラー的にはありですよね。
松永　そうなんですよ。総合格闘技やってるやつにはやられるかもしれない。でも、指を噛み切れば勝てますからね。それがプロレスなんですよ。昔のプロレスラーはいろんな伝説がありますよ。シークがカール・ゴッチとちょっと揉めたとき、「試合中、極められるもんなら極めてみろ。そのときは、おまえの首をこれで斬る」って、ギミック用のカミソリを見せたっていいますからね。そしたら、あのゴッチがビビったっていうんだから。
掟　「あいつならホントにやりかねない」っていう。それも本当の勝負ですよね。逆に、プロレスでしかありえないいかがわしさ方面に針を振りきったものも、いまのプロレスに必要なものなんじゃないかと。

ね(笑)。
松永　まあ、最初にやんなきゃダメ

松永　年末にmixiで、「いままで書いた日記で何が一番おもしろいか」っていう投票をやったんですよね。そしたら意外にもプロレス部門で1位になったのが、ブルータス・ブッシュワーカーのことで。役者でもやってたのか、入場までは最高だったんですけど、もう試合に入ったら凄いしょっぱい。
掟　まだ情報に乏しい時代だから、未知のままでいてほしい未知の強豪がうっかり来ちゃうんですよね(笑)。
松永　打ち上げのときに名刺をもらったんですよ。で、英語が読めないから、とりあえずしまったんですよ。そしたら次の日、プロモーターから怒って電話がかかってきて、「あいつプロレスラーじゃねえよ。テニスのインストラクターだ」って(笑)。史上初の異種格闘技戦、空手vsテニスだったっていう。プロレスラーじゃなかったんですよ。いまだから告白しますけど、ウォーリー山口さんが連れてきたんですよ。
掟　ウォーリーさん、おもしろがってくれると思ったんですかね(笑)。
松永　パワーボムが持ち上がらなくて、前にそっと下ろすんですよね。それを『格闘チャンプフォーラム』で「フェイスクラッシャーですね」とか言ってて(笑)。解説者が必死でフォローしてるんですよ。そりゃあテニスのインストラクターじゃパワーボムできないだろうなっていう。
掟　そういう巨大な「?」が漂ってくる感じのズンドコプロレスは、ほかのジャンルじゃ替えがきかないんですよね。
松永　いまのレスラーって作りじゃないですか。演技でやってるのがわかるんですね。ウルトラマン・ロビンとかあれ、マジメですからね。
掟　ギャグのつもりであれが作れたら天才だと思います(笑)。
松永　mixiで全部バラしちゃいましたけど、大日本プロレスのファイヤーデスマッチの舞台裏とかを。ポーゴさんにさんざんひどい目に遭わされて、何回も大やけどさせられたから、もうそのときは絶対に復讐するつもりで「テメエ、火吹くのはいいけど吹かれるなよ。おまえ焼き豚にしてやる。今日こそは復讐してやる」って言ってやったんですよ。そしたらその後、控室で罵倒されたポーゴさんが涙を流してたっていう。

松永を一気に有名にし、屋号でもある“ミスター・デンジャーの称号を得たバルコニーダイブ。プロレスラー時代も、引退してステーキ店経営者となってからも他人がやらないことをやる主義を貫いている。

出身。89
ビュー。そ
年に引退。

いまのレスラーは作りじゃないですか。ウルトラマン・ロビンはマジですから

掟　効果ありすぎですね(笑)。でも本気でビビらせちゃうといい試合にはならなそうですけど。いや、そんなところまで含めてポーゴさんのことが好きです。いい話ですよ!
松永　そうですね、レスラーですね、やっぱり。
掟　そういう規格外の人がやってるのがプロレスであってほしいですね。話は変わるんですけど、松永さんといえばバルコニーダイブ。あれは、やるほうも勇気がいりますけど、受ける下のほうも相当大変だと思うんですよ。あのときはヘッドハンターズが受けてましたけど、松永さんがバルコニーから飛ぶかもしれないと話したとき、どんなリアクションだったんですか?
松永　最初は軽く考えてたんじゃないですか。「まあ、いいよ」ってぐらいですよねえ。
掟　まさか本当にやるとはと。試合後、「もう二度とやりたくない」とヘッドハンターズが言ってたという。
松永　ああいう人がいなきゃ飛べないですしね。やたらに下にいる人数が増えていくダイブってあるじゃないですか。
掟　タッグマッチのはずなのに、セコンドまで入って4~5名くらいになってるときが。
松永　敵も味方も全員で下で受けてるとかあるんですよ。そうじゃなかったところが、ハンターズの凄かったところでしたね。そういう意味で、最初のバルコニーダイブはよかったんですよね。二人以上になるとちょっと……。
掟　共同作業って感じがしますもんね。
松永　共同作業になりますね。あの二人だったら、たまたま二人で乱入しに出てきたっていうのがなんとなく納得できるんだけど。あれがレフェリーとかがやってると不愉快じゃないですか。あとからはそんなんばっかりになってきて。
掟　最初はプエルトリカンたちがバルコニーに脚立をかけて飛ぼうとしたんですよね。
松永　アイスマンがそうですね。
掟　脚立からちょっと落ちるぐらいを想定してやってたんですかね。
松永　「アイスマンの人気がパッとしないから、バルコニーから落ちたらおもしろいんじゃないか」ってアイデアを出した人がいて。アイスマンが「やらない」って言ったから自分が決断したって感じでしたね。
掟　で、その後スキャフォードマッチ(高所作業車デスマッチ)でミゲル・ペレス・ジュニアが落ちて。
松永　でも、対戦相手のアイスマンも悔しかったみたいで、地方のバスケットゴールの上から一回飛びましたね。「やってやる」って。
掟　地方で手を抜かないのはいいことですけど、この場合は無意味です

たいな人がああいうふうになってい
くんだけど、自分としてはそういう
ないですか、覚えてきた動きが。ま、
逆にそれがよかったんでしょうけど

永光弘

ね（笑）。

松永　まあ、最初にやんなきゃダメですね。

掟　松永さんには危険を顧みないところがありますが、以前所属していた寛水流の水谷館長の影響とかってあります？

松永　ある程度はあるでしょうね。

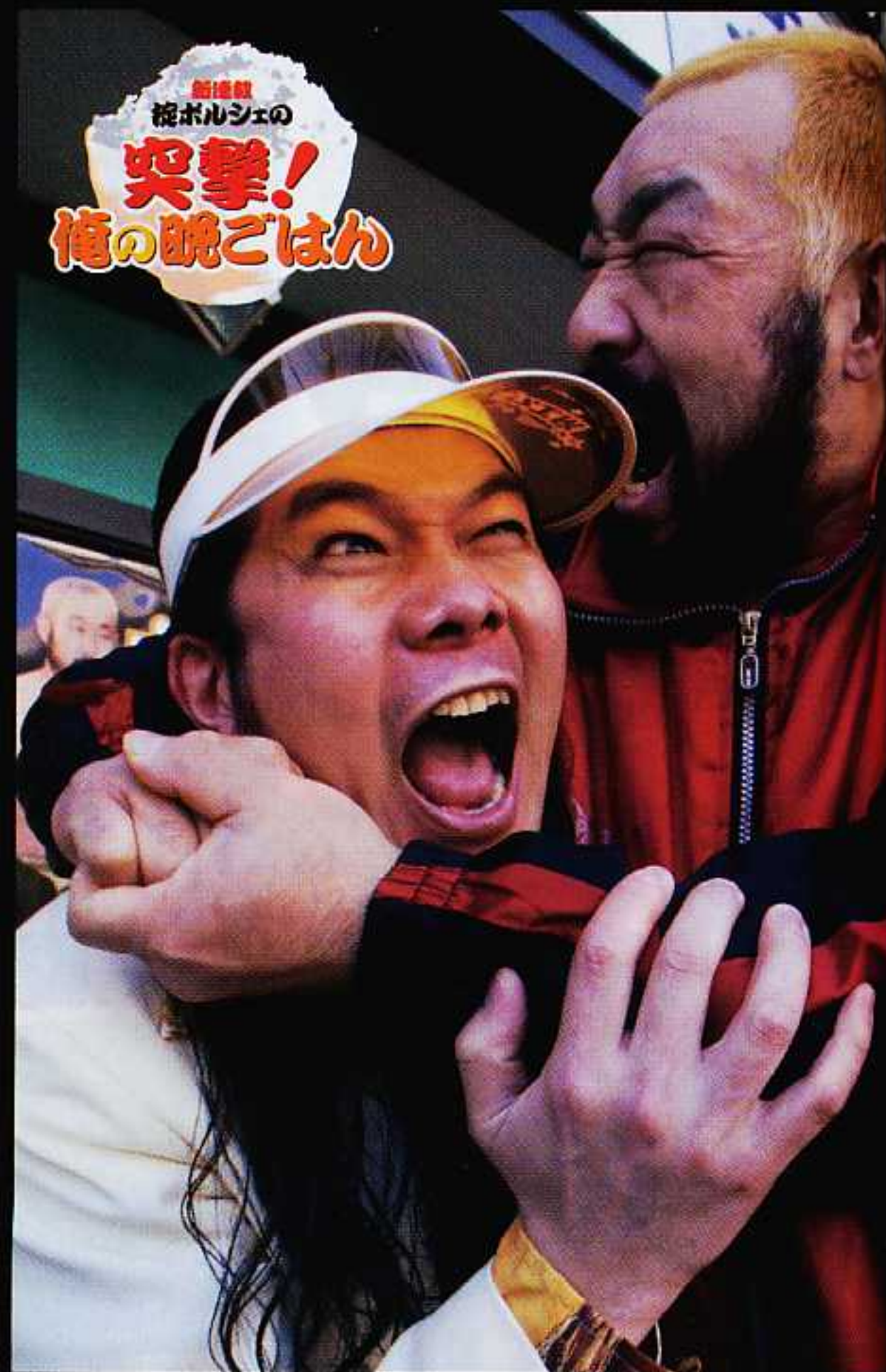
掟　プロレスを脅かす得体の知れない怖さを水谷さんは持ってたと思うんですけど。

松永　いい時代でしたね。いまはある意味、総合格闘技みたいなのが出てきちゃって、現実的すぎるっていう部分はありますよね。何が一番強いかハッキリしちゃったというか。寛水流なんてね、何するかわかんないみたいな。

掟　鎖鎌使いますからね。殺人術ではあるけども、格闘技かっていうと、またちょっと違ってくるっていう。話にならない感じが底知れぬ威圧感と恐怖感を与えるんですよね。

松永　いまこうやってステーキ屋をやって、普通の人になっちゃってる自分はどうなのかなあ……と思わないでもないですけど。

掟　昔は暴れたい人がプロレスラーになるって時代でしたもんね。ずっとケンカに明け暮れてた人が進路を考えたとき、「じゃあプロレスラーになろうか」っていうような。

松永　そうでしたねえ。我々は高校のときに「プロレスラーを襲撃しよう」って言ってましたからね。愛知県体育館に若手が来たとき「襲撃しよう」ってよく話してたぐらいケンカが好きでしたね。

掟　齋藤彰俊さんと一緒に暴れられてたんですよね。

松永　そうですね、齋藤もそうだし、柔道部にもそんなのがいたし。若手のレスラーとケンカしたいとか思ってましたね。

掟　それは自分の腕を試したい的な。

松永　ですね。負けるとも思ってなかったっていうか、怖いもの知らずだったっていうのはありますね。いまだったら、そんなことしたら警察に捕まっちゃうし、店はどうなんの、っていう世界で。

掟　そういうプロレスラーに対する憧れもあって、『元気が出るテレビ!!』にタイガーマスクを被って出られたりしたわけですね。

松永　そうですね、あらゆるチャンスをなんとかものにしようと思って。身長は180センチないですし、新日本プロレスや全日本プロレスは受けても受からない。ジャパンプロレスにも書類で落とされるし。そういう時代で、『天才・たけしの元気が出るテレビ!!』のプロレス予備校ですよね、申し込んで、受かったんですけどね、企画自体が流れてなくなったっていう。思ったほどいい素材が集まらなかったから、馬場さんが嫌になったんだと思います。予想として、それしか考えられないですね。

掟　馬場さんは基本的に大きい人が好きですもんね。

松永　一人、188センチっていうのがいましたね。3人残ったなかで。あと一人も180を割ってましたからね。それを見て馬場さんは嫌になったんじゃないですか。188センチの人もちょっと体型がぶよっとした感じだったかなあ。

掟　番組の趣旨自体が最初から全日本プロレスと合ってない感じでしたもんね。

松永　いやあ、懐かしいですね、そういう暴れてた時代が。でも、丸くなっていかなきゃいけない歳になったし。それでも丸くならずにポーゴさんみたいな人がああいうふうになっていくんだけど、自分としてはそういう人生はちょっと。

掟　まあ、いくらなりたくても無理ですよね。以前著書で、お父さんのことも書かれてましたけど、お父さんが反面教師になっているところもあるんですか？

松永　ありますね。

掟　原野商法の会社を経営していたのが倒産して。お父さんはギャンブルもお好きだったとか。

松永　一日で200万円とか使ったことがあるみたいですよ。10代とか20代前半の頃は、「父親に（兄弟の中で）一番似てる」って言って、母親が心配してましたね。

掟　同じ道をたどるんじゃないかと。

松永　気質がそっくりだったんですよね。

掟　中にいる人の人格はかなりお父さん似ですか？

松永　似てますね。バルコニーから飛ぶっていうメチャクチャな発想が、そもそも似てる。プロレスラーとして合宿所に入って厳しい練習を積んだことがあるわけでもないし、受け身を基礎からやったわけでもなければ、付き人をやって苦労したわけでもなんでもなくて。なんにも叩き上げないで、一発勝負でブレイクしちゃうっていうね。基礎を教わる前にファン投票でスターになっちゃって、そのあと困ったたっていう。

掟　それは対戦するプエルトリカンレスラーたちも気分よくなかったでしょうね。

松永　シリーズになったら何を見せるんだっていう。なんにもないじゃないですか、覚えてきた動きが。ま、逆にそれがよかったんでしょうけどね。プロレスの動きができない、と。ロープワークも受け身もしょっぱいし、そのできないなかで何をお客さんに見せるんだっていうところでいろんなものが生まれていったわけですよね。これは商売にも共通してるんですよね。人がやらないことをやってるんですよ。駐車場を作るとか。都内の飲食店の概念でいうと、個人店が駐車場を持つなんてありえないですよ。

掟　ましてや都内は駐車場料金は高いですもんね。

松永　高いです。駐車場代金だけで20万かかってますけど、それでも作んなきゃ残れないです。だから個人店なんかでも、よく「繁盛してないんだけど」みたいな相談を受けて、「駐車場を作りなさい」って言うけど、「苦しいから無理」って。本来は苦しくなる前にそういう勝負をかけていかなきゃいけないんですけどね。

【11年1月28日／都内・『ミスターデンジャー』立花店にて収録】

プロレスも商売も他人がやらないことをやらなきゃダメなんですよ

劇場版 掟ポルシェの 突撃！俺の腕ごはん

まつなが・みつひろ■1966年3月24日、愛知県出身。89年に誠心会館所属の空手家としてＦＭＷでデビュー。その後、W★INGのエースとして人気を博す。09年に引退。現在は実業家として活躍中。

牢獄ステーキハウス ミスターデンジャー

営業時間
PM5:00～AM0:30
（ラストオーダーAM 0:00）

定休日
水曜日

TEL
03-3614-8929

住所
東京都墨田区立花3-2-12
田中ビル1F

アクセス
東武亀戸線 東あずま駅下車徒歩3分

京葉道路
至亀戸
酒屋
ミスターデンジャー
デニーズ
丸八通り
東武亀戸線
明治通り
至平井
至小村井
東あずま駅

――今日は小佐野ティーチャーに
〝プロレス界の池上彰〟になってもら

きく変わったんでしょうか？
小佐野　変わりましたね。たとえば、

ものが主流になったということで、
ストロングスタイルの呪縛が解けた

ういう感じはないんです。新日本の
ファンも「あの選手が観られるんだ」

と思います。また、棚橋のファイトス
タイルって、意外とオールドスクー

そうだったのか！

熱血プロレスティーチャー
小佐野景浩の学べるニュース（プロレス）

ちょっとプロレスから離れているうちに
ついていけなくなったあなたへ！

現在のプロレスがよくわかる！

- いまの新日本のエースは誰？
- なぜノアにはお客が入らない？
- 大日本のデスマッチとは？
- DDTはなぜ躍進したの？

ここ数年で知らぬ間に大きな隔たりができた感がある
プロレスと格闘技。かつては両方を観るファンがたくさん存在したが
いまやそれも少数派となってしまった。本誌読者でも
「いまのプロレスわかんねえ！」という人が多いのではないだろうか。
というわけで、そんなついていけなくなった方に向けて
小佐野先生にいまのプロレスをわかりやすく解説してもらいました！

聞き手／堀江ガンツ　試合写真／平工幸雄

新日本がストロングスタイルの呪縛から解き放たれてすべてが変わった

——今日は小佐野ティーチャーに“プロレス界の池上彰”になってもらって、いまのプロレスの勉強をさせてもらいたいんですよ（笑）。

小佐野　なんで急にお勉強したくなったんですか？（笑）。

——いや、『kamipro』はプロレス雑誌なんですけど、総合格闘技が中心になってひさしくて、ちょっと目を離してる隙にいまのプロレスがわからなくなってきてるんですよ。僕がモロにそうなので、きっと読者もそうなんじゃないかな、と。

小佐野　いまのうちにプロレスを勉強しておかないと、いよいよついていけなくなるんじゃないかってことですね。わかりました。お手柔らかにお願いします。

——まず、凄く大雑把な聞き方になっちゃうんですけど、プロレス界って、ここ数年で凄く変わりました？

小佐野　変わりましたね。それは新日本プロレスが大きく変わった影響があると思います。猪木さんの「ストロングスタイル」でずっとやってきましたけど、いまはどちらかと言うとエンターテインメント性が強くて、東京ドーム大会もバラエティに富んだラインナップだったし。先日はメキシコのCMLLと組んで、ルチャとのコラボイベントを成功させたり、ずいぶんイメージが変わりました。

——新日本が変わったことで、他団体もその影響を少なからず受けた部分がある、と。新日本はファン層も大きく変わったんでしょうか？

小佐野　変わりましたね。たとえば、今年の1・4ドーム大会でもDDT所属の飯伏幸太とプリンス・デヴィットのジュニアタイトルマッチが「一番いい試合だ」とか「これぞプロレスだ」と言われるわけです。でも、あの試合を昭和のプロレスファンが観たら「あれはプロレスじゃないだろう」と言うかもしれない。でも、いまはそっちが主流なんですよね。

——運動能力が高くてアクロバチックな攻防が主流。

小佐野　そうですね。運動能力や試合展開の速さ＝いい選手的な考えのファンも増えていますね。そういうものが主流になったということで、ストロングスタイルの呪縛が解けたところから新日本が変わり、新日本がエンターテインメント性を増すことで、他団体はどう差別化、区別化していくかということが迫られたんじゃないか、と。

DDTのジュニア戦士と、上野毛道場育ちの蒼い目の新日戦士の試合がドームで最もファンの心をつかんでいるとは……。その進化したジュニアの闘いは注目に値する！

——新日本が変わったことで、いま「プロレスファン」と呼ばれる人は、かつての「プロレスファン」と気質が全然違いますか？

小佐野　違うと思います。たとえば、新日本と同じように、DDTの両国も同じように超満員になる。昔だとちょっと信じられない。しかも去年の両国のメインは関本大介vsHARASHIMAというカードですからね。

——ボクらからすると、「そのカードで両国ができるの？」と思っちゃいますね。

小佐野　だから、カード目当てというより、「DDTの両国大会」ということに対して、「何か楽しいことがあるはずだ」ということで、お客さんが集まってるんです。

——そういった、団体のパッケージで選ぶというのは、新日本が変わり始めてから顕著になってきた、と。

小佐野　そうですね。だから昔だったら他団体の選手が新日本に出たら、その団体のファンはドキドキしてましたよね。「ヘタしたら潰されちゃうんじゃないか」とか。でも、いまはそういう感じはないんです。新日本のファンも「あの選手が観られるんだ」って歓迎してくれるし、「お互いに持ち味を発揮して、いい試合をしましょう」っていうムードになってきてますから。

——昔の新日本は「インディーなんか認めない」みたいな感じがありましたけど、いまは「インディーのいい選手は、新日本に登用しよう」という雰囲気ですか。

小佐野　だって新日本で男色ディーノだって大人気ですからね。亡くなった山本小鉄さんは、本気で怒ってましたけど（笑）。でも、そういう小鉄さんのような人がいることでストロングスタイルの根っこが残っていて、昔からの新日本ファンも安心できる部分があると思うんですよ。

——新日本ではいま、誰が一番人気があるんですか？

小佐野　いまのファンが好きなのは、棚橋弘至や内藤哲也みたいなタイプで、その一方で昔の新日本の殺気立った匂いを持つ中邑真輔もいるというバランスですね。あとは会場人気が凄いのは真壁刀義です。

——棚橋選手が一番人気というのも、昔の新日ファンからすると驚きです。

小佐野　やっぱり、ここ何年間かの新日本を観てきた人は、数年前のどん底の時代に棚橋が踏んばってくれたおかげでいまがあるって意識があるんですよ。

——ホントの意味で団体を支えたエースだ、と。

小佐野　たぶん新日本のフロントの人たちも「棚橋がエース」と考えてると思います。また、棚橋のファイトスタイルって、意外とオールドスクールなんですよ。だから昔のプロレスが好きな人も、表面上のちゃらい、派手な雰囲気に惑わされずに観れば、響く部分があると思いますよ。

——そういう強みも持っていますか。

小佐野　だってフィニッシュのハイフライフローって、昔の呼び方で言えば、ダイビング・ボディプレスじゃないですか。

——単なるダイビング・ボディプレス（笑）。

小佐野　それをいまの時代、フィニッシュにできるというのは、それだけみんなが納得する試合の組み立てを彼ができているということだから。

——そういった本物の技術があるわけですね。

小佐野　そうそう。だからエースなんだと思いますよ。

——じゃあ、昔のファンも色眼鏡で見ないで、棚橋の試合を観てみろってことですね。次はドラゴンゲートについて教えてもらいたいのですが、ドラゲーっていまのプロレス界で特殊な立ち位置にありますよね？

小佐野　特殊ですね。ボクも後楽園ホールぐらいしか足を運べないんですけども、やっぱファン層は普通のプロレス団体とは違うなあ、と。やっぱり女の子が多いしね。

——ドラゲーはお客さん入ってるのに、他団体のファンで「今週はドラゲーを観に行こう」っていう人もあまりいないイメージがあるんですけど。

小佐野　ドラゲーは基本的に鎖国ですからね。自分たちの価値観のなか

でやってるから、ドラゲーを好きな人はドラゲーだけを観る人が多いんでしょう。それであの観客動員力は立派ですよね。両国国技館も大阪府立体育会館も満員にするんだから。

——あんなにちゃんと盛り上がってるのに、『東スポ』のプロレス大賞とかには、ほとんど取りあげられないのも不思議なんですよ。それはドラゲーに「一見さんお断り」的な部分があるんですか？

小佐野　いや、ドラゲーは一見さんでもおもしろいと思いますよ。マイクアピールを使って、これまでの流れを説明してくれますし、誰が来ても楽しめるものを提供していると思います。ただ、出発点としてマスコミに相手にされなかったから「マスコミに頼らない団体として生きていこう」という戦略だったので、自然と賞レースとは無縁になったんじゃないかな。

——なるほど。プロレス週刊誌やスポーツ紙を必要としない生き方をいち早く実戦した団体だ、と。

小佐野　ドラゲーは月一回の後楽園がありますけど、その興行で必ず次回の後楽園用の展開を煽るんですよ。そうやって「来月もまた行こう」と思わせる。そうやって、全体の流れとは別に、毎月の後楽園だけに来るお客さんというのをガッチリつかんでるんですよね。

——そうやって「ドラゲーだけのファン」を作り出してるわけですね。

小佐野　また選手のキャラクター確立度も感心しますよ。どのレスラーも「この人、無理矢理やらされてるな」という感じがまったくないですからね。みんながそのキャラクターを自分のものにしてるので、ストーリーも自然に展開してますしね。

——だからか、ドラゲーにはここ数年浮き沈みがない感じがします。

小佐野　ただ、メインイベンターがCIMAたち第一世代から、鷹木信悟、B×Bハルク、YAMATOたちの世代に替わる過渡期は、ちょっとお客さんが減ったり辛抱の時期だったんですよ。

——いまは前身である闘龍門JAPANを知らない世代がメインを張ってるわけですね。

小佐野　僕が以前『ドラゴンゲート・オフィシャルブック』を作ったとき、YAMATOにインタビューすることになって、彼のデビューからDVDを観て研究したんですよ。そしたら彼はデビューして3年8カ月で頂点に立つんです。それは史上最年少、デビューから最短の頂点だったんですけども、それがまったく不自然じゃない。一方でYAMATOと同期ぐらいにデビューした選手でも、まだまだ若手のイメージがある人もいるし、生存競争が厳しい反面、才能があり努力する人は一気にトップに立てる世界を作り上げてるんですよね。

——だから、ちょっとストーリー展開が速すぎて、ついていけない人も多いと思うんですけど。

小佐野　僕なんかもちょっと目を離すと、誰と誰が同じユニットかわからなくなりますけどね（笑）。でも、それでいいんですよ。一見さんにもわかりやすくしてるから、すぐに現在進行形の流れにとけ込めるから。

——ドラゴンゲートは敷居が高いようで、じつは低い団体ということですね。あとは大日本プロレス。ここも評価が高いですよね？

小佐野　大日本はデスマッチをずっとやってきて、究極と思われた蛍光灯デスマッチを3年ぐらいやってるじゃないですか。「これ、いつか飽きられちゃうんじゃないかな」って思ったけど、飽きられないですよね。そこが凄いと思う。

——かつては国際プロレスが金網デスマッチの連続で飽きられ、大仁田厚のデスマッチも途中で飽きがきてましたけど、なぜ、大日本のデスマッチは飽きられないんですか？

小佐野　それは選手のアイテムを使う技術や、試合の組み立てがうまいんだろうと思います。ただ単にアイテムのインパクトに頼るんじゃなくて、それによって試合内容が向上している。プラス、いま〝ストロングBJ〟と言われる関本大介とか岡林裕二のストロング路線。その二本立てが受けてるんじゃないかな。

——では、蛍光灯を使っているというだけで、意味合い的には試合内容をどんどん高めていく、かつての全日本、四天王プロレスみたいな感じもあるわけですか。

小佐野　そうですね。宮本裕向と佐々木貴が後楽園でやった、工事現場の足場を組んだデスマッチが究極と言われたんですよ。「これ以上はまずないだろう」みたいな。四天王プロレスには、これ以上やったら危険だ、みたいな時期がありましたよね。

——ありましたね。

小佐野　デスマッチもそうなんですよ。危険なことをやっても、大ケガしたり、腹が切れて肉が見えたりしたら、お客さんは引いちゃうわけだから。そこで大日本は危険なことをやるのとは、違ったベクトルでデスマッチを進化させたから、いまも高い評価を得てるんだと思います。

——試合内容で魅せる蛍光灯デスマッチみたいなものが、すでに展開されてるんですね。

小佐野　それがいまの本流なんですけど、それに対して「爽やかなデスマッチじゃダメだ！」という葛西純みたいな人もいるから、またそこに刺激が生まれて。デスマッチのイデオロギー闘争みたいなことも起こってるんですよ。

——なるほど。では新日本、DDT、大日本あたりが、いまっぽい団体という感じですかね。

小佐野　そうですね。ドラゲーなんかも含めて、〝いまのプロレス〟と言えると思います。

——それに対してメジャーのノアなんかは、「杉浦が頑張ってる」という評判は聞くんですけど、「お客さんが入ってない」という話も聞きます。いま、ノアはどんな状態なんですか？

小佐野　ノアは一昨年、三沢光晴という象徴が亡くなってしまったあと、もう小橋や秋山の時代はすぎて、杉浦時代が来てるんですよ。杉浦がチャンピオンであり、元気がいいのは潮崎や森嶋。ジュニアでは丸藤、KENTA、金丸、青木、人材はいくらでもいる。ただ、なにぶん誰が味方で誰が敵かわかりにくくて、感情移入しにくくなってるんじゃないかな、と。

——対立構造がうまくできてないわけですか。

小佐野　一般のファンは知らないか

熱血プロレスティーチャー
小佐野景浩の学べるニュース（プロレス）

上はドラゴンゲートのYAMATOと鷹木信吾。去年の両国大会の写真なので、もう古い写真になってる可能性あり！　そして写真下は進化したデスマッチを続ける大日本プロレス。蛍光灯のインパクトは何度観ても衰えない。

ノアが一般ファンに響かないのは「盛り上げるため」の闘いだから

もしれないけど、いま潮崎軍団とディスオベイっていうヒール集団が軍団抗争をやってるんですけど、いまいちなんだかわからない状況なんです。

——何を争っているのかわからない（笑）。

小佐野　軍団抗争なのに、それぞれの目的はなんなのかが見えない。だからファンに届きにくい。で、杉浦のチャンピオンも頑張ってるってイメージがあるのは、たとえば挑戦した人たち、去年だと新日本の人たちは抜きにして、高山がいって、秋山がいって、潮崎がいって、森嶋がいって、いずれもいい試合だったんですよ。でも、みんな闘いのテーマが結局「団体のため」「いい試合をするため」「いいものを提供するため」、そのためにタイトルマッチをやっていますというイメージが強すぎて、いまいち勝負論になってないんです。

——相手を倒すんじゃなくて、「いい試合をする」というのが前面に出すぎてしまってるわけですね。

小佐野　本来なら杉浦を否定する人間がいてもいいと思うし、杉浦がマイクで「客が入ってない」と言うなら「それはおまえがチャンピオンだからだよ」「おまえがチャンピオンじゃダメだから、オレがチャンピオンになってやるよ」という人間が出てきてもいいと思うんです。ジュニアには「友だちもいない」って公言している前衛的なKENTAがいるんで、ピリピリしたムードを作り出してる。でも、ヘビー級は「みんなで頑張ろう」みたいな雰囲気になっちゃってるところが、一般ファンになかなか響かない原因なんじゃないかな。

——「いい試合をして、お客に入ってもらいたい」っていうのは、団体の内部事情ですからね。そうなると、コアなノアファン以外には響かないんでしょうね。

小佐野　だからGHCヘビー級のタイトルマッチも凄い試合なんだけど、いまのままだと「どっちも頑張れ」っていう四天王プロレスの末期と同じだから。そこを超えないと本当の新時代じゃないんです。

——やっぱり対立構造、対戦相手同士が憎しみ合う意味みたいなものを伝えるのって、プロレスの興行に重要ですもんね。

小佐野　たとえば軍団にしても、天龍同盟や超世代軍には確固たる目的があって、その志にファンが乗ってたわけじゃないですか。それが団体を作って「目的はなんですか？」「おもしろくするため」って言われても……っていうのはありますよね。

——確かに。

小佐野　ノアは試合内容は凄いんだから、わかりやすい、ファンに響く対立の構図がほしいところですね。いま、KENTAが動きだして、秋山も復帰したから、ここからのノアは注目です。おそらく、この二人によって大きく動きだすと思いますよ。

——わかりました。では最後に、この春オススメの大会を教えていただけますか？

小佐野　たくさんあるんですよ。3月にはZERO1の両国で橋本大地のデビュー戦もあるし、全日本の両国、ノアの有明コロシアムもある。ただ、どれもニュースとして広く届いているとは言い難いところが問題だと思うんですよね。

GHCヘビー級チャンピオンとして、孤軍奮闘を続ける杉浦貴。そのファイト内容はファン、関係者から高い評価を得ているが、この杉浦の存在を脅かすライバルの出現が待たれる。

——確かにそうですね。

小佐野　本来だったら、橋本大地のデビュー戦の相手を蝶野が務めて、武藤が来場するなんて、もっと知られていいはずなんですよ。でも、いまは団体の数が多いし、いろんな団体がニュースを発信しすぎてしまって、逆にファンに届かなくなってるんですよね。

——とくにインターネットが中心になると、情報量が多すぎますよね。

小佐野　それが各団体の悩みでもあると思う。記者会見を乱発したところで、小さな記事が載るだけなら、あまりやる意味もないしね。

——プロレス全体のファンじゃなくて、各団体にファンがつくっていうのも「全部見てらんないから、この団体の情報だけ」ってファンが選んでる部分もあるんでしょうね。

小佐野　昔は毎週放送されていたプロレスのテレビ中継を追っていればそれでよかったんだけど、いまは違いますからね。

——だからいま、マスコミを通じてじゃなくて、インターネットを通じて団体が独自に情報を発信するのが主流になってきてますよね。新日本プロレスもそっち方面には力を入れているようですし。

小佐野　極端にいうと「マスコミいらないでしょう」っていうところまできてると思う。結局、マスコミが全部追いきれない、全部追ってくれないなら自分たちで発信するしか。いろんなシステムが昔とはずいぶん変わっちゃったなあ、と。

——じゃあ、まずはお気に入りの団体を見つけて、そこを追うところから始めたらいいかもしれないですね。

小佐野　まさにそう。あとは、ニュースを追うのはあきらめて、日程だけを見て、自分の家の近場にプロレスが来たときに予備知識なしで行ってみる。そこでハマる団体が一番合ってるんだと思う。いまはいろんな団体があって、各団体が凄く工夫してるから、プロレスに少しでも興味があれば、きっとハマる団体があると思う。

——では、結論から言うと、予備知識なしでとにかく一度プロレス会場に足を運んでみろ、と。

小佐野　だから最後の最後にこのページを否定することになっちゃうけど、いまのプロレスを楽しむのに、勉強する必要はないってことです（笑）。

——講義の結論は「プロレスの勉強はするな」と（笑）。

小佐野　何も知らない人でも、気軽に楽しめるのがプロレスなんだから。というわけで、今日の授業はここまで！

——先生さよーなら、皆さんさよーなら！

【11年1月27日／都内・某ファミレスにて収録】

おさの・かげひろ■1961年9月5日、神奈川県出身。中央大学入学と同時に『月刊ゴング』スタッフとなり、83年に大学中退し、日本スポーツ出版社に正式入社。94年に『週刊ゴング』編集長に就任。現在はフリーのプロレス評論家として活躍中。ハワイ通としても有名。

ベストバウトも
意外な結果が続出!!

ファンが選ぶ
ネット・プロレス大賞
2010年度MVPは
関本大介!!

いまのプロレスファンの嗜好はどうなってるの?

「ネット・プロレス大賞2010」主宰
プロレスBLOG『ブラックアイ2』管理人

杉さんに聞く!

プロレス専門の人気ブログ『ブラックアイ2』が、ネット上でファンの投票を募集して発表する「ネット・プロレス大賞」。プロレスファンの生の声ということで、興味深く結果を見てみると、意外な結果の連続に驚愕! 「プロレス変態」を自称しながら、いまのプロレスファンの声がわからなくなった堀江ガンツが、主宰の杉さんに話を聞いてきた!

聞き手/堀江ガンツ　試合写真/平工幸雄

2010年はMVP本命がいなかった。その中で一番頑張ってた人が関本選手

——今日はご自身のブログでファンが選ぶ「ネット・プロレス大賞」を主宰されたブログ『ブラックアイ2』の杉さんに、集計結果についていていろいろうかがっていこうと思うんですよ。

杉　恐縮です（笑）。

——で、なぜうかがおうと思ったかというと、集計結果があまりに意外というか、ぶっちゃけ僕の知らない名前がたくさんあったんです（笑）。

杉　アハハハハ！　でも、ちょっと目を離してると、そうかもしれないですね。今回、155人が参加してくれたんですけど、投票者の年齢層ってそんなに高くないと思うんです。だから、ホントにいまのプロレスを観ていて、かつネットをよく見ているファンの意見が集まったんじゃないかと思います。

——僕は子どもの頃からプロレスのことはなんでも知ってるつもりだったんですけど、「こんなにいまのプロレスを知らないのか」と愕然としましたよ（笑）。というわけで、いろいろ聞いていきますけど、まず驚いたのは2010年のMVP。

杉　関本大介選手です（笑）。

——いいレスラーだと思いますし、評価が高いのも聞いてましたけど、まさかMVPとはちょっと驚きましたね。

杉　確かにブログの読者でも「意外だ」っていう声は多かったです。

——やっぱり多いんですか。関本選手って2010年はどんな活躍ぶりだったんですか？

杉　所属は大日本なんですけど、上半期はDDTのKO−D無差別級チャンピオン。下半期はZERO1の世界ヘビー級チャンピオンに君臨してましたね。

——世界ヘビー級って、あのニック・ボックウィンクルが巻いたのと同じデザインのベルトですよね？

杉　そうです。ZERO1でも当初はAWA世界ヘビー級と呼んでたんですけど、いつの間にか「AWA」が消えていたという（笑）。

——どこの認定かわからない（笑）。

杉　だから関本選手は二つの団体のトップのベルトを外敵として巻いて活躍してたってことですね。

——でも、大日本というと「蛍光灯デスマッチ」というぼんやりとしたイメージなんですけど、関本選手はそういう路線じゃないんですか？

杉　関本選手はデスマッチは基本的にはやらないです。デスマッチがメインで行なわれる大会のセミあたりで、地道に〝BJWストロングスタイル〟をやってます。でも、レベルは凄く高いですよ。

——でも、大日本、DDT、ZERO1という、いわゆるインディーで活躍した関本選手が、プロレス界全体のトップとして支持された理由はなんだと思いますか？

杉　一つの理由は、2010年は本命がいなかったんですよ。

——確かに『東スポ』のプロレス大賞MVPはノアの杉浦貴選手でしたけど、杉浦選手が「2010年の顔」だったかというと、ちょっと違う気はしますね。

杉　「ネット・プロレス大賞」はファンやマニアの投票なんで、『東スポ』のMVPに選ばれた人は避けるっていう意識も働いてると思いますし（笑）。

——なるほど。

杉　あと、関本選手が1位になったのは、「ネット・プロレス大賞」の投票方式も関係してると思うんですよ。一人が各項目で1位から3位まで順位をつけて投票できて、1位が10点で、2位が6点、3位が3点という計算をしてるんです。だから関本選手を1位に選んでる人が圧倒的に多いわけではないのですが、2位や3位に入れてる人がたくさんいるんです。

——なるほど。2位、3位票の積み重ねによって、全体で1位になってしまった、と。

杉　みんな「今年の顔は関本だった」とまでは言わなくても、「今年一番頑張ってた人だから、3位以内には名前入れなきゃ」という人がかなりいたんだと思います。

——だからか、投票結果を見ると1位関本、2位杉浦、3位真壁。みんな飛び抜けたインパクトというより、1年を通して頑張った人という感じがありますね。ちなみにカミプロ・アワードで「プロレス大賞」に選んだ諏訪魔選手は7位。

杉　諏訪魔選手については、全日本自体がちょっと元気がないので票が伸びてないのもあると思うんですけど、上位3人と対照的に当たりはずれが激しいんですよ。だからベストマッチ部門では諏訪魔選手の試合がベスト5に2試合入ってるんです。

——鈴木みのる戦が3位、船木誠勝戦が5位に入ってますね。

杉　全日本絡みだと船木vs鈴木戦も10位に入ってるんで、ベスト10に3試合入ってる。でも、いま一番お客さんを入れてて、勢いもある新日本のシングルは中邑vs棚橋が8位に入ってるだけですからね。

——全日本は観客動員力はもう一つながら、飛び抜けたベストバウトは残している。

杉　だから、新日本は当たったときの凄さが大きいという特徴があると思いますね。

——でも、いまの時代にヘビー級のシングルで年間最高試合級の試合を残す諏訪魔選手は貴重ですね。

杉　そう思います。僕自身、諏訪魔vs船木誠勝戦をベストマッチ1位に選びましたから。

——あ、そうなんですか。

杉　とにかく凄い試合でしたね。船木の凄まじい打撃を諏訪魔が耐えきって、それを越えていくという。総合格闘技とはまた違うリアルな〝闘い〟で、あれは興奮しました。あの試合は、ちょっといまのプロレスから離れてる人もなんとかして映像を観てほしいですね。

——総合格闘技が確立して以来、プロレスで「強い、弱い」があまり語られなくなりましたけど、諏訪魔vs船木戦にはそれがあった、と。

杉　ありましたね。試合が終わったあと、外は雨が降ってたんですけど、みんな傘さしながらうつむき加減で「諏訪魔強かったな〜」とか口々に言い合ってましたから。

——「おもしろかった」「いい興行だった」じゃなくて、「強かった」という感想が一番にくるというのは貴重

ネット・プロレス大賞 最優秀選手賞

順位	選手	得点
1位	関本大介（大日本プロレス）	383点
2位	杉浦貴（ノア）	261点
3位	真壁刀義（新日本プロレス）	254点
4位	佐藤光留（パンクラスMISSION）	244点
5位	飯伏幸太（DDT）	145点
6位	プリンス・デヴィット（新日本プロレス）	128点
7位	諏訪魔（全日本プロレス）	101点
8位	小島聡（フリー）	92点
9位	ザ・グレート・サスケ（みちのくプロレス）	77点
9位	さくらえみ（アイスリボン）	77点

関本、杉浦、真壁というゴツくてシブい男たちがトップ3を独占。ここまでファンに関本が高く評価されているとは……。大日本関係が『東スポ』プロレス大賞にランクインするのは、すべて内館牧子さんの強権発動だと思ってた僕が間違ってました！

ですね。そういう伝統的なシングルのベストマッチが諏訪魔の試合だとすると、いまのプロレスファンにブッチギリで支持されたのが、1位のプリンス・デヴィット&田口隆祐vs飯伏幸太&ケニー・オメガ戦。

杉 そうですね。この試合は『東スポ』と『週プロ』でも年間最高試合賞に選ばれてたんで、「ネット・プロレス大賞」と合わせて3冠達成ですね（笑）。

──では、マニアからライトなファンまで文句なしの受賞ですか。

杉 ただ、東スポ大賞を獲ったのは意外だという声もあったんですよ。この試合は10・11新日本両国大会の休憩前にやった試合なんで。

──え〜っ⁉ 休憩前の試合が年間最高試合賞獲得ですか！

杉 やる前から「凄い試合になるだろう」とは言われてたんですけど、実際に凄くて。テレビ朝日の『ワールドプロレスリング』でも、大きく取り上げられて、さらに評価が高まっていきましたね。

──口コミで「凄い試合だった」と噂だった試合が、後日テレビ放送されてさらに火がつく。おっさんプロレスファンにわかりやすく言うと、89年のキッド&スミスvsマレンコ兄弟のときのようなことが起こったわけですね（笑）。

杉 ま、そのたとえが正しいのかはわかりませんけど（笑）、プロレスをあまり知らない人でも「凄い」「おもしろい」と思ってもらえるような試合でしたね。今年の1・4東京ドーム大会の特番でも一発目に飯伏幸太vsプリンス・デヴィットのIWGPジュニアヘビー級タイトルマッチでしたけど、それくらい信頼されているんですよね。

──それにしても、いつの間にここまでの存在になったんですか？ 飯伏&ケニー・オメガってベスト・タッグチーム賞も獲ってますよね。

杉 「ネット・プロレス大賞」では飯伏&ケニーは2年連続で1位です。

──僕が知らないだけで、2009年の時点でとっくにブレイクしてたんですね（笑）。いつ頃から頭角を現わしてきたんですか？

杉 3年ぐらい前だったと思います。まず飯伏幸太って路上でプロレスでするのが凄い好きなんですよ。

──路上プロレス！

杉 本屋の中とか、公園でリングもなしにプロレスをやるのが話題になってて。

──『元気が出るテレビ!!』みたいなことやってますね（笑）。

杉 そうしたら、カナダから「俺も路上でやってるから、飯伏、オレとやれ！」っていう『YouTube』のアドレスが貼られたメールがDDTに来て、それを見たら山の中とか、湖で試合をやってるやつがいて、それがケニー・オメガ。

──カナダにも馬鹿がいた、と（笑）。

杉 「こんなやつがいるんだ、じゃあ呼んでみよう」ってDDTで呼んでみて、〝日本の路上王vsカナダの路上王〟ということで、飯伏幸太vsケニー・オメガを新木場1stRINGでやったんですよ。そのとき飯伏幸太が会場外の自動販売機の上からフェニックス・スプラッシュをやったという伝説があって。

──自販機の上からフェニックス・スプラッシュ！（笑）。

杉 その試合が「ネット・プロレス大賞」でもベストバウトになったんですよ。

──新木場1stRINGの試合がベストバウトですか！

杉 まあ、サムライとかでけっこう流れてましたから。その試合から二人に友情が芽生えて、お互いにゲームが大好きってわかって、大親友になって。それからタッグを組むようになったんです。

鈴木みのる、船木誠勝という元パンクラスの二大エースを相手に、強さを見せつける三冠ヘビー級防衛戦をやってのけた諏訪魔。3.21両国では妙なブレイクの仕方をしているKENSOの挑戦を受ける。

総合でベストマッチ50位以内は11位の青木vs自演乙だけでしたね

──その路上プロレスのコンビが、いまや新日本プロレスのなかでも一番人気のチームになったわけですか。まあ、とりあえず、〝いまのプロレス〟というものを観たかったら、押さえておかなきゃいけないチームなわけですね。

杉 そうですね。

──あと意外なのはパンクラスMISSONの佐藤光留もベスト10に2試合入ってますね。

杉 これは『kamipro』読者には信じられないかもしれないけど、佐藤光留はいまプロレスで頑張ってて、凄く人気があるんですよ。前にマッスルの会場で師匠である鈴木みのると佐藤光留が売店で並んで立ってたら、佐藤光留のほうに列ができてましたから。

──〝変態〟が人気で鈴木みのる超えですか！（笑）。

杉 鈴木みのる自身がびっくりしてましたね。でも、佐藤光留は実際にいい試合をやっていて、自分でUSTREAMの番組を持って、ファンに訴えかけたりしてたこともあって、人気が上がったんですよ。

──いまっぽい人気の出方ですね。ちなみになんていう番組なですか？

杉 番組名は『愛LOVE寂聴クリニック』です（笑）。

──くっだらねえ（笑）。

杉 いつも夜中にやってるんですけど、けっこうな人数が観てるんですよね。

──やっぱり今年は『19時女子プロレス』なんかもありましたけど、USTとか新しいネットメディアと絡ませる動きが目立ったということなんですかね。

杉 そうですね。2010年はUSTの番組が山のように出ましたけど、佐藤光留はそのなかでも個人では一番有効活用してるんじゃないですかね。DDTでのし上がる手段として使ってましたから。

──あとは「最優秀興行」部門ですけど、マッスル最終回の10・6「マッスルハウス10」がぶっちぎりですね。で、2位はDDTの両国大会。

杉 まあ、このへんでだいたい気がついたと思いますけど、「ネット・プロレス大賞」はDDTのランクインが多いんですよ（笑）。

──なんか、全部門でDDTが席巻してますよね。これはなぜなんですか？

杉 やっぱりDDTはネットでホントに強いんですよ。ツイッターとかで情報発信して、そこでストーリーが始まることもあるんで。ネットを見ないとついていけないと言ったら言いすぎかもしれないですけど、ファンはかなりの人がチェックしてますね。逆にノアとかは、あまりネットを使っていないので、ネット上の投票は弱いですよね。

──では、ネットと一番相性がいい

団体がDDTだ、と。

杉 そうですね。DDTはツイッターとか、ネットなり煽りVを通して、ちゃんと試合の意味合いなんかをファンに伝えることを一生懸命やってますよね。しかも、ネットだけを追っていてもダメでちゃんとそれを受けて会場に来ないと、最大の満足にいたりませんよ、というところは守ってると思います。

——昔は『週刊プロレス』で流れを追って、会場に行く感じでしたけど、いまはネットがかつての『週プロ』の役割をはたしているというか。

杉 そうですね。そして、そういう楽しみ方をしている人たちが投票してるんで、「ネット・プロレス大賞」はとくにDDTが上位に来るんじゃないかと思います。そのほか新日本プロレス、アイスリボンなどネットをうまく使っている団体は強いですね。

いまやすっかり、プロレス界最高のタッグチームと呼び声高い、飯伏幸太&ケニー・オメガのゴールデン☆ラヴァーズ。最もいまのプロレスを体現している二人と言っていいのかもしれない。

——DDTっていうのは、そういう意味でとてもいまっぽい団体だと思いますけど、もう一ついまっぽい団体であるドラゴンゲートは、あまりランクインしてませんよね? これはなぜだと思いますか?

杉 ドラゴンゲートが好きな人はドラゴンゲートだけを観るというのが圧倒的に多いんです。

——プロレスファンというよりドラゲーファン。

杉 それにドラゲーはそんなにネットは活用してませんから。ネットでいろいろ問題もありましたしね(笑)。

——ありましたね(笑)。では、ある種、孤高の存在なんですね、ドラゴンゲートは。

杉 だからドラゲーの試合や選手を投票する人は、1位から3位まで、どの部門もドラゴンゲート絡みみたいな人が多いんですよ。

——なるほど。ドラゲーが好きな人は、プロレス・アワード＝ドラゴンゲート・アワードになるわけですね。

杉 それはドラゲーだけじゃなくて、いまのプロレスは団体にファンがつくんで、プロレス界全体を観て投票するような人は凄く少なくなりましたね。だから、自分で否定するようなことになっちゃいますけど、ファン投票でプロレス大賞みたいなのを決めるのって難しい時代なんですよ。

——なるほど。どの団体のファンが一番多いかの人気投票になりがちというか。

杉 プロレス団体自体もそういうファンをどれだけ作れるかで勝負していると思うんで。僕なんかはなるべくいろんな団体を観てやろうって思ってるんですけど、僕みたいなファンは少数派ですね。

——90年代のプロレスファンは、UWF系からインディー、女子プロまでなんでも観てましたけど、いまは違うんですね。

杉 ちょっと前までは総合格闘技も観るプロレスファンってけっこういましたけど、いまは少なくなりましたね。今回のベストマッチ部門でも、50位以内に入った総合の試合って11位の青木真也vs長島☆自演乙☆雄一郎だけですからね。

——プロレスファンに唯一届いた総合の試合が青木vs自演乙(笑)。

杉 １００位以内まで広げてもブロック・レスナーの試合が二つ入るだけですから。

——なるほど〜、いまのプロレスファンが『kamipro』を読まないわけですね(笑)。

杉 僕は読んでますけどね(笑)。

——これからも「ネット・プロレス大賞」は続けていく予定ですか?

杉 はい、体力の続くかぎり(笑)。でも、ホントはほかのブログとかに持ち回りでやってもらうといいと思ってるんですよ。そのほうが広まるし。今回も「『ブラックアイ2』がやってるからDDTが強い」って言われちゃいますけど、持ち回りでやればそういうのがだんだん薄れると思うんで。いろんな人にやってもらいたいんですけど、まあ集計はたいへんですからね。これ以上、投票が増えると手動では計りきれない状態になっちゃうんで。

——では体力が続くかぎり、頑張ってください(笑)。

【11年1月23日/都内・ルノアール新宿西口店にて収録】

年間最高試合賞(ベストマッチ)

順位	試合	得点
1位	10.11 両国国技館 IWGPJrタッグ選手権 **プリンス・デヴィット&田口隆祐vs飯伏幸太&ケニーオメガ**	342点
2位	4.4 新宿FACE KO-D無差別級選手権 **関本大介vsマサ高梨**	161点
3位	8.29 両国国技館 三冠ヘビー級選手権 **鈴木みのるvs諏訪魔**	92点
4位	11.28 後楽園ホール KO-D無差別級選手権 **佐藤光留vsディック東郷**	91点
5位	10.24 横浜文化体育館 三冠ヘビー級選手権 **諏訪魔vs船木誠勝**	81点
6位	3.28 米国アリゾナ州グレンデール **ジ・アンダーテイカーvsショーン・マイケルズ**	80点
7位	11.14 大阪府立体育会館第2競技場 KO-D無差別級選手権 **HARASIMAvs佐藤光留**	73点
8位	5.3 福岡国際センター IWGPヘビー級選手権 **中邑真輔vs真壁刀義**	57点
8位	10.17 後楽園ホール BJWデスマッチヘビー級選手権 蛍光灯&ガラスボード&画鋲3万個3大アイテムデスマッチ **伊東竜二vs石川修司**	57点
10位	3.21 両国国技館 金網マッチ **船木誠勝vs鈴木みのる**	50点

最優秀タッグチーム

順位	チーム	得点
1位	**ゴールデン☆ラヴァーズ＝飯伏幸太&ケニー・オメガ**(DDT)	819点
2位	**チーム変態大社長＝高木三四郎&澤宗紀**(DDT)	297点
3位	**佐藤兄弟/バラモン兄弟**(みちのくプロレス)	152点
4位	**小鹿軍団**(FREEDOMS)	111点
5位	**バッド・インテンションズ＝ジャイアント・バーナード&カール・アンダーソン**(新日本プロレス)	109点

最優秀興行

順位	興行	得点
1位	**10.6 マッスルハウス10** 後楽園ホール	453点
2位	**7.25 DDT** 両国国技館	245点
3位	**6.19 新日本プロレス** 大阪府立体育会館	89点
4位	**10.11 新日本プロレス** 両国国技館	86点
5位	**11.14 DDT** 大阪府立体育会館第2競技場	75点

ベストマッチも意外な結果が続出。私、堀江ガンツは失礼ながら2位のマサ高梨選手のことはまったく存じ上げてませんでした！　なお、この関本vs高梨はサムライTVで放送中の『インディーのお仕事』内「日本インディー大賞」ベストバウトを受賞したそうです。また、新日本プロレスのG1クライマックス決勝がベスト10に入ってないというのも意外。最優秀興行ではマッスル最終興行のあまりの評価の高さにも驚かされた。

国技とは何か？

あるいは全取組ガチンコ後の大相撲

日本武道傳骨法創始師範
堀辺正史

力士の携帯メールでの発覚後、八百長問題に揺れる相撲界。
いまテレビ、新聞、週刊誌等で怒濤のようにこの問題が追求され、
国技・相撲の存亡の危機とも言われている。
はたして、大相撲はこれからどうなってしまうのか？
本誌は日本文化や相撲にも詳しい、おなじみ骨法の堀辺師範に
今回の八百長問題の本質。そして相撲の今後についてうかがった。

聞き手／堀江ガンツ

——先生！　大相撲が八百長問題で大変
なことになってますね。

と呼ばれるようになったんですよね。
——じゃあ、「国技」という発想自体が輸

くおもしろく興味を引くっていうことが
何よりも求められていたわけですね。

相撲は江戸時代まで国技ではなかった。国技という概念は西洋からの輸入なんです

──先生！　大相撲が八百長問題で大変なことになってますね。

堀辺　新聞からテレビから週刊誌から、あまりにも大量に発信してるから、ちょっと異常な感じがしますね。

──そこで今日は先生に八百長問題の本質についてうかがいたいと思ったんですよ。

堀辺　わかりました。そもそも相撲の八百長問題というのは、日本という国が近代社会になった時点で抱え込んだ矛盾そのものなんですよ。

──日本の古い慣習が関わってるということか。

堀辺　これは江戸から明治となり、新しい時代が開かれたときに生まれた矛盾なんです。今回の問題は「国技」である相撲が、八百長をやっているということで、大問題になっているわけですよね。でも、もともと明治以前は相撲が「国技」だなんて、言われたことはなかったんですよ。

──相撲は太古の昔からあっても、国技ではなかった。

堀辺　というか「国技」という概念すらなかった。もともと「国技」というのは、自由民権運動で有名な板垣退助などが「どうやら先進各国には〝ナショナルスポーツ〟というものが存在する。我が日本にもそれがないと近代国家として恥ずかしいんじゃないか」という論議をして、その〝ナショナルスポーツ〟を「国技」と訳したんですよ。そこで日本の国技とはなんだろうとなったとき、相撲の常設会場が「国技館」と命名されたのをきっかけに「国技・相撲」

浮世絵でも描かれているように、相撲は江戸時代から大観衆を集める興行であった。「スポーツ」ではなく、大衆娯楽として栄えていたのだ。

と呼ばれるようになったんですよね。

──じゃあ、「国技」という発想自体が輸入品なんですか。

堀辺　そういうことです。それをみんな、あたかも太古の昔から相撲が国技と定められ、そのまま発展してきたように感じてる気がするんですよ。本当はそうではなく、明治に入ってから日本が近代国家の仲間入りをはたすために、国旗、国歌の制定など、一連の流れのなかで生まれた副産物だということを知らなきゃいけないね。

──そもそもは明治に入ったとき、相撲に「国技」という西洋の価値観をあてはめたことで起こった矛盾である、と。

堀辺　ほかの西洋諸国と違って、日本には明治に入るまでナショナルスポーツどころか「スポーツ」すらなかったわけですから。

──スポーツがない！

堀辺　なかったんです。スポーツというのは、ルールに基づいた自由競争、競技ですよね。でも、江戸時代にはその「スポーツ」という概念がなかったんです。たとえば柔術や剣術というのは、戦のための鍛錬であり、試合に勝つためにやるものではなかった。

──相撲はどういったものだったんですか？

堀辺　相撲は柔術や剣術と違って、江戸時代から大衆に愛された興行だったんですよ。だから、当時の相撲を現代の人にわかりやすく、西洋の言葉に置き換えると「エンターテインメント」なんです。

──んあ～！　「スポーツ」とは真逆ですね（笑）。

堀辺　江戸時代の相撲というのは、もちろん勝負を見せてるんだけど、本質は「見世物」「エンターテインメント」なんですよ。だから大衆が相撲を観戦したときに、楽しくおもしろく興味を引くっていうことが何よりも求められていたわけですね。

──勝負至上主義ではなく、観客至上主義ですか。

堀辺　だから、おもしろい逸話があるんですよ。当時、谷風という強い横綱がいたんですけども、これが決して強くない力士に敗れたんですね。で、周りの人は「谷風があんなのに敗れるわけがない」って、みんなわかったわけ。で、江戸の人たちのあいだで「あれは何か裏があるはずだ」という噂が広まった。そしたら、じつはその力士のお母さんか誰かが病気で、ここ一番で勝って賞金がもらえないと、助けられないと。それを知った谷風がわざと負けてやったことがわかったんですね。でも、それを「八百長」と呼ぶ人は江戸時代にはいなかった。「人情相撲」とか「情け相撲」と呼んで、逆に谷風は拍手喝采を浴びたわけ。

──「人情相撲でした」とは言わなくても、それを察してたたえた、と。

堀辺　そうなんです。「さすが立派な横綱だ」と、その意味を汲み取ったんですね。この話は当時の文献に書いてあるんですが、史実として正しいかはわかりません。でも、江戸時代の人たちの考えはわかりますよね。これでもわかるように、江戸時代の相撲は、観客が何を望んでいるかということを察知して相撲を取るということはあたりまえだったんです。観客が喜ぶことが、勝負より優先される世界なんです。

──価値観が完全にプロレスと一緒ですよね（笑）。

堀辺　だから競技じゃないんですね。木戸銭を取ってる以上、観客が喜ぶことが一番大事という考えです。

──英語にすると、まさにプロフェッショナル・レスリングというか（笑）。

すかね（笑）。
堀辺　それが得意な人もいるけど、基本的

ことが不可能になるわけです。
——競技としてアスレチック・コミッショ

れない。本来相撲が持っている、あのなんとなくのんびりした感覚。あれは日本人が持ってるおっとり、のんびり、平和志向

時間以上立ち合いを見守っていたこともあるんですよ。
——酒飲んだり、お茶飲んだりしながら。

堀辺　そういう世界だったんですよ。しかも、相撲のエンターテインメント性というのは、はるか古代から行なわれていたものですから。たとえば朝廷が主催していた節会の相撲という、地方の相撲取りを集めて相撲を取らせる行事も、必ずしもガチンコではなかった。たとえば、どこかの地方で凶作が続いていて、その地方の相撲取りが負けたら、よけい凶作が続くと信じられていた。

——縁起が悪いというか、神事みたいなもんですね。

堀辺　だから凶作が続いてる地方の相撲取りは勝たせてあげたりとかはあったんですよ。共同体の思いやりですよね。そして見世物になってからは、演劇性が強まり、それが江戸時代で花開いていたわけだから。ところが明治になって、「国技」となってからは西洋の価値観である競技としてやらなきゃいけなくなった。だから現在の相撲は、本場所は完全な競技を求められているわけです。それを求めているのが、放送しているNHK。だから地方巡業ではやるのに本場所で相撲甚句とか、初っ切りはやらないでしょ？　それはスポーツに必要ないからです。

——スポーツに花相撲はいりませんもんね（笑）。では、地方巡業こそ、伝統的な相撲興行に近いわけですね。

堀辺　そうなんです。でも、いまは近代社会ですから、スポーツという概念で相撲をとらえていく。日本にとって近代化は西洋化なんですよ。スポーツがいいもので、それ以外の価値観は従属的に見られるという風潮が、この21世紀の日本を支配してるわけですから、もう出来レースを「人情相撲」とは呼べないわけです。

——たとえばプロ野球で「記録がかかってるから、空振りしてやろう」なんてやったら、これは問題になりますもんね。

堀辺　問題ですよね。ただ、相撲というのは明治になってからも、相撲界がハッキリと「これからはヨーロッパでやってるスポーツに基づいた競技を我々はやります」と宣言したわけでもないし、そういう啓蒙運動が行なわれたこともないんですよ。なし崩し的に、なんとなく欧米のスポーツ的な方向に走っていった。

——国技となってからもハッキリとスポーツとして再出発したわけではなかった、と。

堀辺　そこのところを曖昧にしたまま、ここまできたということですね。だから、こうなってしまった以上、二つしかないんですよ。本当に近代化を図って、「これはスポーツなんですよ」と宣言する。そうしたら競技形態、興行形態もすべて変えなきゃならなくなると思いますけど、そこをしっかり明確にしないとダメですね。あるいは近代化、西洋化、スポーツ化というものに対して、真っ向から日本相撲業界が反対するかどうかですよ。

国技とは何か？

全取組がガチンコになったとき相撲は究極の打撃系格闘技になる！

——スポーツじゃない、相撲は相撲だ、と。

堀辺　そう。相撲がスポーツじゃなくてもいいじゃないか、たまには八百長もありますよ、と。「昔はこれを人情相撲と言ったんだよ」「それを見抜けるかどうかもお客さんの楽しみじゃないの」という意見も含めて居直るというかね。

——なんか、プロレスから総合格闘技に変わっていったときと凄く似てますね。

堀辺　似てるんですよ。

——なんか、いまの相撲界はシュートとワークが混在する、かつてのUWF系を見るようですもんね（笑）。そしていま、PRIDEやUFCのようなガチンコ競技にするか、WWEのようにエンタメ宣言をするか、岐路に立たされている、と。

堀辺　そういう状態に置かれてるということですね。ただ、私なんかは近代化して、徹底的にガチンコ競技として発展した先に、相撲本来のおもしろさが残るかどうかも心配なんですよ。

——プロレスと総合のおもしろさが違うように、異なったおもしろさになるかもしれないですね。また完全にガチンコになったら、新しいかたちで発展するかもしれないし。

堀辺　先ほども少し言ったとおり、全取組が完全にガチンコになったとき、相撲は競技形態から興行形態まですべて変わると思っているんですよ。

——どう変わりますかね？

堀辺　すべてがガチンコ、勝利至上主義になったとき、相撲は打撃系格闘技になる可能性がある。

——相撲が打撃系格闘技！

堀辺　もしルール変更なしに全取組ガチンコになったら、そうなります。一時、相撲でも張り手でKOされる力士が続出したときがありましたよね。100キロを優に超える鍛えた人間の顔面攻撃っていうのは、それだけの破壊力があるんですよ。でも、これまでの相撲は四つに組んでの相撲こそ本道であり、張り手で倒すのは邪道だみたいな意識があったと思うんですよ。

——暗黙の了解で、なるべく使わないようにしていたというか。

堀辺　ところが「勝つことが最高の価値」となったとき、張り手で勝負する力士が続出すると思う。

——琴錦なんかのガチンコ相撲だと、ガンガン張り手で倒してますもんね。となると、総合格闘技が完全にガチンコになったときボクシング化したように、相撲もボクシング化する可能性がある、と（笑）。

堀辺　そう、がっぷり四つに組むより、張り手でKOを狙うほうが手っ取り早いし、確実なんですよ。

——四つ相撲はMMAでいうところのテイクダウン、寝技みたいなものになるんで

UWFを経て総合格闘技となっていった我が国のプロレス。相撲も同じようにガチンコの格闘技となるのか、それともエンターテインメント宣言をして伝統を守っていくのか？

スポーツ化したとたん、相撲は競技形態興行形態両方がガラリと変わりますよ

すかね（笑）。

堀辺　それが得意な人もいるけど、基本的には打撃で始まるというね。しかも、相撲がガチンコになったら、〝KO率〟はボクシングやK−1、総合格闘技と比べ物にならないくらい高くなると思う。まず相撲っていうのは、みんなヘビー級なんだから。

――ヘビー級（笑）。確かにK−1なんか見ても、重量級のほうがKO率は高くなりますよね。

堀辺　また土俵というのは、リングやオクタゴンと比べて極端に狭いじゃないですか。うしろに下がる比率っていうのは、かなり少ないんですよね。

――バックステップとか、足を使ってサークリングみたいなものはないわけですね（笑）。

堀辺　立ち合いでぶつかって、両者ともに前に出るわけだから。もの凄く〝カウンター〟を入れやすい。

――確かに（笑）。

堀辺　だからガチンコ化した相撲は、ヘビー級ファイターが、カウンターが取りやすい土俵という狭い空間で、素手での顔面攻撃、さらに頭突きまで許された究極のルールで闘うという、凄まじい究極格闘技になる可能性があるんです（笑）。

――それは観たいですけど、もはや相撲とはちょっと違いますね。

堀辺　会場もあののんびりとした雰囲気じゃなくなると思うんですよね。また、KOが続出するような危険なルールですから、負けた力士は15日間連続で闘うなんてことが不可能になるわけです。

――競技としてアスレチック・コミッションの規定に従うと、KO負けした力士には90日間の休場が義務づけられますね（笑）。

堀辺　そう。スポーツ化したとたん、15連戦というのがまず問題視されるんです。となると、興行形態もガラリと変えなきゃいけなくなる。

――プロレスが年間200試合やってたのに、総合格闘技になったら年間6試合が限度になったように、相撲も極端に試合数が減るかもしれませんね（笑）。

堀辺　勝負第一となると、そういう劇的な変化が起きてくる可能性があるんですよ。そうなると相撲は一変しちゃいますね。

――へたしたら、そのうち「素手は危険だからグローブを着けよう」なんて意見が出るかもしれない（笑）。

堀辺　そうなったとき、大衆が抱いているような相撲とは違うんじゃないかっていう、違和感みたいなものが出てくるかもしれない。本来相撲が持っている、あのなんとなくのんびりした感覚。あれは日本人が持ってるおっとり、のんびり、平和志向の部分なんですよ。相撲という勝負はあるんだけども、その勝負のなかに農耕民族ならではののどかな世界というものが本場所のなかにもあるわけですよね。ところが、全取組ガチンコが義務づけられると、それがなくなると思うんです。もう、おじいちゃんやおばあちゃんが枡席でゆったりと酒を飲んだり団子を食ったりして観るような雰囲気じゃなくなって。

――血しぶきが飛び交う修羅場になる可能性があるわけですからね（笑）。

堀辺　そうすると「なんか違うんじゃないの」ってなりますよ。

――相撲の「立ち合いはお互いの息が合ったとき」っていうところからして、スポーツとしてありえないですもんね。

堀辺　ありえない。昔は時間制限さえなかったんだから。「気持ちが合うまで」って、1時間も2時間も合わない場合があるんですよ。そうすると、取組が三つぐらいでテレビ放送時間が終わってしまうんじゃないかと、そういう問題が生じたわけですよ。それでNHKの要請で「立ち合いは時間制限あり」という、いまのかたちになったわけ。

――「待ったなし」が生まれたわけですね。

堀辺　つまり、テレビ側の介入により相撲のルール変更が行なわれ、相撲の本質が変わったわけです。「お互いの気持ちが合うまで」というのは近代スポーツではとうてい考えられない価値観の一つですからね。

――野球でいえば、気持ちが合うまで、いつまで経ってもバッターボックスに立たないみたいなもんですもんね（笑）。

堀辺　そうそう。江戸時代の相撲では、1時間以上立ち合いを見守っていたこともあるんですよ。

――酒飲んだり、お茶飲んだりしながら。

堀辺　それはスポーツ競技とはちょっと違うかもしれないけど、日本の、ある一つの大切なものを表わしてる場合もあるんですよ。待ってあげるっていうのがね。そういうものが全部なしになってしまう可能性がある。

――これはたいへんな時期にきましたね。

堀辺　私なんかはどちらかというと、相撲をあんまり近代スポーツ、競技競技ってやらなくてもいいんじゃないの、という考えなんですけどね。もっとルーズなもので、八百長があるとしても、観客が見る目を持てばいいんじゃないかって。いまだって、全部が八百長でやってるわけじゃないんですからね。決して相撲は八百長主体ではないですよ。

――八百長はあるけども、それが主体で動いてはいない、と。

堀辺　そうなんです。ただ、そういうどっちつかずなものを排していこうというのが近代の思想だから。そういうグレーなものを認めていること自体が、世界からするとおかしなものとして見られる。欧米の価値観だと「まだそんなことしているのか」とはなってしまうんですけどね。

――なんか、それも寂しいですけどね。

堀辺　ちょっと寂しいですよね。でも、そうならざるをえないのかもしれない。星の貸し借りができないように、本場所はすべてトーナメントになるかもしれないしね。いずれにしても、大きな岐路に立ったことは間違いないですよ。

――わかりました。今回もありがとうございました！

【11年2月11日／都内・骨法武術館にて収録】

ほりべ・せいし■1941年、茨城県出身。50年にわたる命懸けの求道の末、喧嘩芸骨法、さらに全局面打撃制koppoを創始。格闘技・武道評論の第一人者でもあり、現在は月に二回のペースで漫画家・小林よりのり氏らとともに『ゴー宣道場』も開催している。

相撲は今度は逃げきれない

元・日本相撲協会外部委員 やくみつる

いまだ騒動が収まらない大相撲の八百長疑惑。この事件を受けて大相撲はこれからどうなってゆくのか。元日本相撲協会外部委員で、本誌でも相撲のご意見番としてたびたびご登場いただいているやくみつる氏に、その疑問をぶつけてみた。

聞き手／ジャン斉藤

――まずは大相撲八百長メールの第一報を聞いたときの率直な感想からお願いします。

やく 今度は逃げきれないな、と。

――「今度は」というのは？

やく いままで相撲協会は週刊誌の八百長報道に裁判を起こしてまでかわしてきたわけですけど、まあさすがに証拠が出ちゃったら逃げきれないなと思いました。

――やくさんは「観念するしかない」というコメントもされてますよね。

やく そうです、観念しました。これは厳然たるファンというよりは、むしろ角界スタンスに立ったコメントです。

――世間からは「前から八百長はあったと知っていた」という声が多いですよね。

やく その人たちは憤るよりは一様に「観念した」と言うべきだと思いますけどね。「そんなことは知りませんでした。裏切られた！」と言ってる方は、普段から相撲をあまり観てないんだろうな、と。普段から観てる人は「観念した」っていう感覚だと思いますね。

――やくさんは八百長という行為を込みで相撲を楽しんできたわけでしょうか？

やく そうではないです。というか「八百長ある、なし」も考えない。それを考えることすら野暮だと思ってましたから。まあ、ときに失笑しながら観てましたが。

――八百長のとらえ方にはいろんな声があると思うんですけども、世間の声はバッシングするような流れになってますよね。

やく それが観てない人の反応だと思います。あと各スポーツメディア、記者クラブに記者を送り込んでるような新聞社、テレビ局からの取材にはもう一通り意見を求められたんですが、「まずは一緒に観念しましょうよ」ということを申し上げるんです。たとえば新聞の社会部から電話があると「まず、貴社の相撲担当記者の方にしゃべらせてください」ということを申したりもしてきたんですが。

――あなた方だって知らないわけがないでしょう、と。

やく そうすると、それはなかなかおっしゃらないんですよね。内部ではずいぶん議論もしたらしいんですけど、そのスタンスを取らないんですよね。それはずるいなあと思いますけどね。より知っているところが黙ってるわけですから。

――今回の件は、警視庁が野球賭博の捜査中に発覚したわけですが、警視庁側が文科省に報告したことはどうお思いですか？

やく それは当初、釈然としませんでしたけどね。捜査上で知り得た秘密を報告する理由はあるの？って。だからといって相撲業界側はそんなことで抗ってる場合じゃないですからね。「論議のすり替えだ！」と言われるのが関の山ですから。

――我々はプロレス・格闘技雑誌なんですが、プロレスのケーフェイは近年ちょっとゆるんできてるところはあるんですけども、やっぱり相撲界っていうのはそこは完全にないものとして……。

やく そうですね。みんな情報を持ってることは持ってるんですよね。ところがそれが物証に裏づけられてなかったんで書いてこなかった。

――『週刊現代』との裁判にしても、宮城野親方が愛人に八百長の詳細を語った証言テープという物証を突きつけられても相撲協会は逃げきりましたよね。

やく あのテープも決定的だと思ったんですが、あれすら乗りきったので、いよいよもう……。

――八百長が問題になることはないだろう、と。

やく 思っていましたねぇ。そりゃテープよりメールのほうがハードとして新しいですもんね。

――相撲は今後どうなるとお考えですか？

やく まず、こんな問題がなくても相当な先細り産業だという懸念はあるわけですね。なんせ新しいファン層が獲得できてないわけですから。国技館に行ったってみんな年配の方ばかりですから。

――最近は不祥事も多いですしね。

やく たとえば先日、相撲番組の収録があって、スタジオにはカメラマンや音声さん、フロアディレクターとか、30～40人の若い人がいる。で、「相撲を観てる人はいますか？」って本番中に振ってみたんですね。すると、一人も手を挙げないですから。

――相撲番組の撮影スタッフすら観ていない。

やく まあ、撮影スタッフは夕方は忙しいでしょうけど、それにしたって一人も興味を示していない。これは世間の縮図だと思います。そんな

出ちゃったわけですが、こうなって

土壌スタイルの相撲だって、自分は充分に楽しむ心構えはありますが、

話もいろいろ騒がれてると思うんですが、そのへんはどうお考えでしょ

プロレス団体でも600〜700人の選手を抱えてる団体はないですよね

は世間の縮図だと思います。そんな産業なわけですから日本的ともいえる情緒を共有し合うようなファンというのはもう育たないだろう、と。ましてやサッカーなどでガチの乾坤一擲の一番なんかを観てますとね、こんなヌルいジャンルに興味を持つ意識も芽生えない。そうなると、やっぱりこれまでのようなことをやっていては、新規ファンの獲得はできないであろうと想像はします。

——新規層からすれば、いまの相撲はグレーでわかりづらいかもしれませんねぇ。

やく　それだったらもっとエンターテインメントに徹してるほうがおもしろいし、あるいはホントのガチのほうがおもしろいから。「どっちなんだろう?」と思わせるような中途半端なことではファンも獲得できませんよ。

——糾弾側からは「そういうことを知ってるんだったら、なぜ言わないんだ?」という声が高まってますね。

やく　へんな話なんですが、そこはしょせん一蓮托生なんですよ……。この件は外堀から埋めるのではなくて、やっぱり相撲業界本体から白状していかないと無理だろうなと思っていますね。

——いくら周囲が追及しようが無理だ、と。

やく　まあこうして内側から証拠が出ちゃったわけですが、こうなってもトップにその気が一向に見えない。で、これは『日刊スポーツ』にも書いてもらいましたけど、相撲の生殺与奪の権を握ってるのは文科省なんですね。

——公益法人認可の件ですね。取り消されると国技館やら財産やらを国に返還しないといけないという……。

やく　はい。そうなると存続は絶望ですので。ということは結局、生かすも殺すも文科省が相撲協会に二者択一を迫るのが一番手っ取り早いだろうと思いますけどね。

——二者択一といいますと?

やく　一つは、今回は名前の挙がってる14人にして、納得を得られず潰される。もう一つは相撲界が過去を自己否定してうえで「今後も続けさせてください」とする。その二者択一ですね。それは続けさせてもらうほうを選択せざるをえない。ごちゃごちゃ言ってると、土俵際を右に左に逃げますのでね。メールの調査だ、通帳だ、それで何かがあきらかになることがあるかもしれないですけど、ここはもう証拠云々の話ではない。

——ただ、いままでそれを込みで楽しんでたファンからすると「ここまでしなくていいんじゃないか」っていう声もありますね。

やく　でも、それじゃ続けさせてもらえないんですもん。それはいまの土壌スタイルの相撲だって、自分は充分に楽しむ心構えはありますが、それじゃ続けさせてもらえません。なくなっちゃうんですから。そこで抗ってもしょうがないですよ。そんな昔の文化を懐かしがってる場合じゃないですよ。

——相撲界の今後というところで、認可を外れたところでの継続というのはもう絶望的なんでしょうか。

やく　それは相当な規模の縮小ですよ。だってどんなプロレスの団体にしたって、600〜700人の選手を抱えてる団体ってないですよね。

——ないですねぇ。

やく　陣容としてはいまは決して多いと言いきれないぐらいの数なんですよね。この規模を維持して、その中からごく少数のものが関取に上がっていくっていう番付上の妙味というか、それがなくなったらそれもまた別の競技になってしまう。この規模を維持するのは、やっぱり普通の興行会社じゃ無理ですね。

——たとえばどこかの一門が旗揚げするにしても、それは草相撲大会レベルのものという。

やく　まあ、そんな感じになっちゃいますもんね。現状では力士だけではなく親方が100人以上いるわけです。で、行事さんがいて、床山さんがいて、世話人だなんだで1000人からの所帯になっている。

——それは認可なしでの維持は無理ですね……。

やく　無理です。

——たとえば今回の「星を売る、売らない」の話でいうと、給料体系の話もいろいろ騒がれてると思うんですが、そのへんはどうお考えでしょうか。

やく　十両と幕下の劇的な待遇の差っていうのがとかく元凶ではないか、と。実際、そこを守りたいがために八百長をやらかしたっていうのはあるにせよ、そこもいじりたくないですね。やっぱり、お相撲はお関取になるっていうのが最大のモチベーションですのでね、そこに劇的な差があるっていうのはアバンギャルドでいいと思いますけどね。

——実際問題として、相撲から八百長というのは根絶できるものなんでしょうか。

やく　システム上でそれをなくすことはできないと思いますよね。野球でもサッカーでも、八百長をできないシステムをこしらえてるわけじゃないですよね。

——厳密に言うと、やろうと思えばできますね。

やく　これはシステムの問題じゃないと思いますね。気概でもあるんです。ただ、いまその気概を現役力士に植えつけようと思っても、上層部にも同様の過去がある以上、言うことを聞くわけがない。「過去からさかのぼらなければダメだ」と言ってるのはそこですけどね。

——となると、問題の根は相当深いということですね……。

やく　ええ。相撲は土俵際に立たされてるわけではありません。土俵を割ってます。そこからどうやっていま一度土俵に上がらせてもらえるか。

【11年2月某日／電話取材にて収録】

ガンと闘う総合格闘家

性腺外胚細胞腫瘍 非セミノーマ

「もう一度リングに上がることがみんなへの恩返しなんです」

DREAMにも出場したことのあるファイター、宮下トモヤが現在左右の肺のあいだにある縦隔のガン「性腺外胚細胞腫瘍 非セミノーマ」と闘っている。一度は引退を決意したものの、再びリングを目指して闘病中の宮下の病室を訪ねた。

聞き手／鈴木佑　試合写真／今村陽子

宮下トモヤ

宮下　すいません、お待たせしちゃ

たときに「うわ、マジかよ……」って。

います。それで入院前日と当日にこ

立てることがあるかもしれないって

おきにトイレ行くのに起きちゃって。

ガンになった最初、キリがいいから格闘技は辞めようと思ったんです

宮下　すいません、お待たせしちゃって（恐縮しながら）。

――いえいえ。今日もお見舞いの方がたくさん来てたみたいですね。

宮下　いやあ、ホントにありがたいですね。やっぱり凄く励みになりますよ……（しみじみと）。

――今回は宮下さんがこういう状況になって、いま考えてることを中心に話してもらいたいんですけど、まず病気が発覚したときのことから聞かせてもらえますか？

宮下　ええと、最初は去年の10月18日に、練習後に部屋で休んでたら、ちょっと呼吸がおかしくなったんですね。息がしづらくてなって。いままでにそんなことなかったし、「とりあえず診てもらうか」くらいの感じで近所の内科に行ったんです。で、胸のレントゲンを撮ったら腫瘍が見つかったんですけど、その段階では悪性か良性かわからないということで、紹介状を書いてもらって次の日に専門の病院を訪ねたんですね。それから3週間くらい検査したら、次第にどういう症状なのかわかってきて。

――ガンだという事実がわかった、と。

宮下　はい。やっぱりそれまでは体調もよかったし、勝手に腫瘍も良性だと思ってたんですよ。だから、先生から説明を受けるときに「胚細胞腫瘍」って字で書かれても、どういう病気か全然わからなくて。でも、要は悪性、つまりガンだって言われたときに「うわ、マジかよ……」って。僕もガンに対して知識があったわけじゃないですけど、そのときはもの凄いショックを受けましたね。それですぐ、11月8日に入院したんですけど。

――病名を聞いたときにどなたか立ち会ったんですか？

宮下　所属ジム（パワーオブドリーム）の古川会長です。それから北海道の実家の両親に電話したんですけど、やっぱり凄く言いづらかったですね。だから「たいしたことじゃないよ」みたいな感じで伝えて。両親もそのときは冷静に振る舞ってましたけど、きっとショックだったと思います。それで入院前日と当日にこっちまで出てきてくれて。

09年に行なわれたDREAM唯一のケージ大会に参戦している宮下。今年はバンタム級ベルトが新たに新設される噂もあるだけに、またその大舞台に立てる日を目指したいところ。

――普通、そうなるともう格闘技どころじゃなくなると思うんですよ。

宮下　もちろん、僕もガンとわかって最初に決めたのが、「格闘技は辞めよう」ってことだったんですよ。生きるか死ぬかのときにそんなことやってられないっていうのもあったし、あとは自分のなかでもキリがいいと思ったんですね。

――キリがいい、ですか？

宮下　はい。ていうのは、DEEPでタイトルマッチも経験したし（10年8月27日、vs今成正和）、目標だったDREAMにも出場できたし（09年10月25日、vs藤原敬典）。歳も29になって先のことをいろいろ考える時期だったんで、「こういう病気になったし、もう格闘技はいいかな」と思って。

――ある部分で自分のなかで納得がいった、と。

宮下　そうですね。でも、入院したらちょっと冷静になったんですかね、最初は「病気になっちゃった」っていう事実を受け止めるのに精一杯だったんですけど、「でも格闘技は続けなきゃ」って前向きに思い直したというか。それに、やっぱり練習仲間が「待ってるから」って励ましてくれたのが大きかったですね。みんな、僕が格闘技を辞めるなんて微塵も思ってない感じで（笑）。あと、僕がもう一度格闘技をやることで、何か役に立てることがあるかもしれないって思ったんですよ。

――具体的にいうと？

宮下　僕がガンを克服して格闘家として復帰することで、同じ病気の人の励みになるかなって。あの、僕がガンになって実感したのが、この病気を克服した前例を聞くと凄く安心するってことだったんですね。ランス・アームストロングっていうロードバイクの世界的な選手がいるんですけど、その人も僕と同じ病気で再起不能とされてたんです。でも、それを乗り越えてまた第一線で活躍してるっていうのを、彼の自伝で読んで。だから僕自身もそういう存在になりたいなって思うんです。

――なるほど。いまは抗ガン剤治療ですか？

宮下　はい。5日間連続で投薬するのを1クールとして、それを4クールこなすんですけど。で、投薬したあとはけっこう身体にダメージがくるんで、2週間の休みを挟んで。いまはそれをこなすのが目標で、終了してから今後どういう方向で治療していくか、お医者さんと相談するかたちですね。

――抗ガン剤というとやっぱり副作用も？

宮下　そうですね、だるさとか吐き気が……。よく、みんなにも「どれだけきついの？」って聞かれるんですけど、これは言葉では伝えきれないと思います。あとは睡眠がよくとれないんですよね。腎臓に負担がかかるから、それを軽くするために24時間、水分を点滴で採り続けるんでけど、そのせいで夜中でも1～2時間おきにトイレ行くのに起きちゃって。

――それはキツイですね……。食欲はどうですか？

宮下　温かいモワっとしたものを受けつけなくなりますね。だから病院食も冷たいそうめんとか、あっさりして食べやすいものに替えてもらったり。で、投薬が終わって1週間ちょっとすると身体が元気になってくるんで、そのときに先生から外出許可がもらえると、外に好きなものを食べに行くんですけど。

――ブログを見ると焼肉食べてからラーメン食べに行ったり、食欲が旺盛ですよね（笑）。

宮下　へへへ、食べれないことへの反動です（笑）。調子いいときは病院食も3食じゃ足りないくらいなんですけどね。でも悪いときは満足に食べれないし、ホント食べ物を見るのも嫌になっちゃうんで。

――運動ができないことへの葛藤は？

宮下　そのストレスも最初は凄かったんですけど、いまは慣れましたね。入院当初、点滴につながってなかったときは階段を1階から6階まで昇降運動したり、いろいろやってたんですよ。でも、点滴がつながってる状態で腕立てしてたら血が逆流しちゃって、それからは「二度とやめよう」と思って（苦笑）。

――そ、それ、シャレにならないですよ（汗）。

宮下　ハハハ。やっぱり、ほぼ毎日運動してたのが普通の人よりしなくなっちゃったから、いまはあきらかに体型が変わってきてるんですよね。それがホントにつらいんですよね。

――そういう思いがあると、格闘技の夢を見たりしませんか？

宮下　あ、それはありますね。昨日もローでミットを蹴ってる夢を見たんですよ。いまはとりあえず試合じゃなくて、練習だけでもって感じですね。やっぱり薬の副作用もあるのか、精神的なアップダウンもあるんですよ。身体が弱ってくるとポジティブなことが考えられないっていうか、「復帰って凄く高いハードルなんじゃないか」とか思っちゃったり。

――そういうときはどうやって気を紛らわすんですか？

宮下　もう、ひたすら時間が経って、気分が収まるのを待つしかないですね。あとは人としゃべって元気をもらうとか。

――お見舞いは連日来てるみたいですね。

宮下　そうですね。もう99パーセント、格闘技関係ですけど（笑）。所属ジム以外にもいろいろな出稽古先の人がわざわざ来てくれたり、ほかにもスポンサーの方とか。

――出稽古はどういったところに？

宮下　リバーサルジムで勝村（周一朗）さんがプロ練を仕切ってるんですけど、僕はそれに何年も参加していて。その前に新宿のスポーツセンターに行ってた時期には、所（英男）さんや今成（正和）さんとも知り合いになって。

――所さんは『Dynamite!!』の試合後に、「僕らの練習仲間がガンと闘っています。皆さん応援をお願いします。名前は宮下トモヤといいます」ってマイクアピールしてましたね。

宮下　ありがたいですよね。TBSの煽り映像でも流れて、うまく使ってもらえたっていうか（笑）。あれで名前が知ってもらえて、次の日のブログのアクセス数も過去最高になりましたからね。あと、出稽古でいうとGRABAKAも多いんですよ。とくに山崎（剛）さんにはお世話になってて、所属は違いますけどセコンドについてもらったり。

――その山崎さんや勝村さんが中心になって、いまは格闘技仲間がDEEPやZSTの会場で宮下さんの募金活動をやってますね。

宮下　ホント、「みんなあったかいなぁ」と思いますよ……（しみじみと）。こういう状況なんで会場には行けないですけど、この前DEEPの映像を見せてもらったんですよ。

――佐伯（繁DEEP代表）さんが涙ながらに宮下さんのことを会場でお話ししたときですね。

宮下　いや、僕もあの佐伯さんの映像を観たときは泣いちゃいましたね。みんなが言いますけど、佐伯さんってホントに選手のことを考えてくれる人なんですよ。僕もDEEPに出始めの頃は緊張してしゃべれなかったんですけど、佐伯さんもああいう方なんですぐに打ち解けることができて。去年の8月にやったDEEPのタイトルマッチも、はじめは10月の50回記念大会でやるっていう話もあったみたいなんですけど、いま考えると病気が発症する前に試合を組んでもらえて、ホントよかったなって。あとは笹原（圭一DREAMイベントプロデューサー）さんもお見舞いに来てくださって。まだ僕なんかは、あのへんの方が見えると緊張しますね（笑）。

DEEPでは佐伯代表がファンへ涙ながらに宮下への支援協力を訴えた。2.25後楽園大会では「チャリティーエキシビションマッチ」として、勝村周一朗、砂辺光久、山宮恵一郎、石井大輔の総合ルールのタッグマッチが行なわれる。

DEEP、ZST、パンクラスの会場では宮下のために、多くの格闘家やファンがTシャツに激励メッセージを書き寄せた。宮下はつらいときはこれを見て励みにしてるという。

――そういえば、勝村さんからはナースとの合コンをお願いされてるってブログに書いてましたよね（笑）。

宮下　そうなんですよ～。でも僕の技術不足で、どうやって誘えばいいのやら……。「いま話題のタイガーマスクのリアル版と合コンしませんか？」って言えばいいんですかね？（笑）。

――ハハハハ。そういえば宮下さんは、DJ・taiki さんとも仲がいいらしいですね。

宮下　……へへへ。

――意味深な笑いですね（笑）。

宮下　僕、アイツとも古い付き合いなんですよ、それこそスポセン時代から。まぁでも、普通にはしゃべれないですよね（笑）。アイツ、コミュニケーション能力は高くないんですけど、人見知りってことでもないから、バーっとしゃべってはくるんですけどね。

――どんな話をするんですか？

宮下　なんだろ……まぁマニアックですから、趣味はあんまり合わないですね（笑）。でも、アイツがラーメン好きなんで、練習終わってからよく一緒に食べに行ったりしてましたよ。ああいう感じなんで誤解受けやすいかもしれないですけど、いいヤツなんで……とってつけたように聞こえますかね？（笑）。

――いえいえ（笑）。あと、ビックリしたのが、ケイン・ヴェラスケスに激励のサインをもらったとか？

宮下　そうなんですよ。でも僕、最初は誰だか知らなかったんですよ。

――ヴェラスケスを知らない!?

宮下　僕、UFCとかに全然詳しく

DJ・taikiが語る宮下トモヤ

宮下さんとは僕がパワーオブドリームに出稽古に行くようになってから仲よくなりましたね。「オタ芸を観に行こう」って誘ったこともあるんですけど、そういうオタク文化にちょっと差別があるのか、それはあっさり断られましたけど（笑）。

宮下さんの病気を聞いたときはかなりショックでした。練習先とかでも「ヤバいんでお見舞いに行ってください」って言ったりしてたんですけど、いざ本人に会ってみると凄く元気だったんで、いまは「治るんじゃないかな」って思ってます。

むしろ僕は治ってからのことが心配ですね。単純に「ちゃんと働けるのかな」っていうか。やっぱり、ほかのみんなはそういうことを本人に言わないんで、なんか僕、「ガン患者に何を言うんだ」って、悪者みたいな感じになってる気もするんですけど（笑）。

あと、いまは重病を患っているということでさまざまな人たちやメディアも注目していますが、時間が経過したりすると、それまで関心があった人が急に興味をなくさないかなって。時間が経っても病気が治っても、みんなこれまで同様、宮下さんに優しくしてあげてほしいです。

だから僕は自分ができる範囲内でサポートとして、「退院したら一緒に資格の試験受けよう」って言ってるんですけどね。僕は僕なりに先々のことも考えて宮下さんを応援していこうと思います。

なくて（苦笑）。ある方が凄いどや顔

事です」っていうことですね。小林

るかわかんないですけど、もうすぐ

って……。僕、最近は「ガンも才能

ほとんどが格闘技関係なんですよ。

宮下トモヤ

いまは「ガンになった人にしか伝えられないものがある」と思ってます

なくて（苦笑）。ある方が凄いどや顔でサインを持ってきてくれて、えーと、ヴェラクセクでしたっけ？

――いや、ヴェラスケスです（笑）。

宮下　ああ、そうか（笑）。で、よくわからなかったんですけど、チャンピオンって書いてあるから、とりあえず「お〜、ホントですか!?」って驚きつつ、「え、誰だコレ？」とか思って。そのとき一緒にヴェラスケスが載ってる雑誌も見せてもらったんですけど、僕は（マウリシオ・）ショーグンに見えたんで、「おぉ、ショーグンのサインですか！」とか言っちゃって（笑）。

――ハハハハ！

宮下　まぁ、サインを見た人はみんな驚くんで、とりあえず知り合いってことにしときます（笑）。

――それと、ガンから復帰をはたしたプロレスラーの小林邦昭さんからも手紙をもらったとか？

宮下　はい！　僕、昔はバトラーツの所属だったんですけど、そのときのジムの会員さんで、いまは新日本プロレスの社員の方がいるんですね。で、その人が小林さんに僕のことを話して、「手紙を書いてもらえませんか」ってお願いしてくれたみたいで。それから小林さんとはお互いのブログで何回かやりとりをさせていただいてます。

――お手紙にはどんなことが書いてありました？

宮下　「病気に勝つには気持ちが大事です」っていうことですね。小林さんは「5年生存率0パーセント」とか、僕より大変な状況だったのにそこから復帰されたので、その言葉に凄く重みを感じますよね。それにいまも身体を鍛えられてるみたいで。

――宮下さんは現役時代の小林さんのことは知ってたんですか？

宮下　いや、それが僕はプロレスを通ってこなかったんで、失礼な話ですけど全然知らなかったんですよ。でも、知り合いの人からタイガーマスクのライバルだった人だって聞いて。まだ実際にお会いしてないんで、僕が復帰できたらぜひ試合を観に来ていただきたいですね。

――復帰の意思はお医者さんに伝えてるんですか？

宮下　はい。一応、「わかりました」って言われました。これからどうなるかわかんないですけど、もうすぐ抗ガン剤治療の4クールが終わるんで、そのあとにまた話し合いですね。でも、お医者さんに無理だって言われたらしょうがないとも思うんですよ。そのときは潔くあきらめなきゃなって。でも、やっぱり格闘家として復活することが、いまの大きなモチベーションになってますし。

――こういう状況になって、死生観が変わったりしましたか？

宮下　それは凄い変わりました。はっきり言って、生きる生きないよりも、それまでの生き方が凄い大事だなと思うようになって。あの、今年の1月初めにDEEPのプロモーターだった服部啓さんという方がガンで亡くなられたんですね。で、生前に服部さんは、僕よりもきついはずなのに凄く前向きで、こっちに対して「頑張れよ、ガンに負けるなよ」って励ましてくれたんですね。その服部さんの姿を見てたら、自分も後悔しないような生き方をしたいって思って……。僕、最近は「ガンも才能じゃないか」って思うようにしてるんですよ。

みやした・ともや■1981年7月20日、北海道出身。柔道を経て、02年7月にプロデビュー。その後、パンクラスやZST、ケージフォースにDEEPとさまざまなリングに参戦。09年10月、DREAMに初参戦をはたし、10年8月には今成正和のDEEPバンタム級王座に挑戦。171cm、62kg。

――才能、ですか？

宮下　はい。「ガンになった人にしか伝えられないものがある」っていう意味での才能というか。まぁ、こういう言い方はおかしいかもしれないですけど（笑）。でも、たまにブログで「知り合いもガンなんですけど、宮下さんのブログを見て励まされてます」って書き込みがあるんですね。だから、いつかまたリングに上がって試合をしたら、もっとたくさんの人の励みになるかなって。まぁでも、ガンは再発とかもあるのでけっこう長い闘いになると思うんですね。これで「手術に成功して退院しました」ってなっても、2年くらいは安心できないと思うし。だからあせらずに取り組もうかなって。仲間の活躍を見てると頑張ろうって気持ちにもなれますしね。

――宮下さんの練習仲間の福田力さんがUFCに出場しますね。

宮下　ねぇ！　ちょっと前まで同じ日に試合してた人ですからね。たまに外出して一緒にごはん食べるときに福田選手を見て、「この人、UFCに出るんだよな〜。俺もこんなことしてる場合じゃねえな」って刺激になりますから。「また一緒に練習しよう」って声をかけてもらえるのもうれしいし。

――みんな、宮下さんのことを待ってるんですね。

宮下　ホント、ありがたいですよ。僕は高校卒業してから一人でこっちに来たんで、そこからの知り合いはほとんどが格闘技関係なんですよ。そういう意味で格闘技で得たものって強さだけじゃないんだなって思いますね。いまは、リングに上がって元気な姿を見せるのがみんなへの一番の恩返しだと思ってます。

――もともと、宮下さんは病気になる前に「もう一度、DREAMに出ることをモチベーションに生きてる」って言ってましたよね。

宮下　そうですね。やっぱりPRIDEに凄く影響を受けたんで。だから一度DREAMに出たときも実感がなかったんですよ。別世界だったというか、気づいたら出てたみたいな感じで。たしか10日くらい前にオファーがあったんですけど、そのときも全然意味わかんなかったですから。普通、DEEPとかでチャンピオンになってから出る場所じゃないですか？　現に相手の選手（藤原敬典）はZSTのチャンピオンだったし。だから、最初は「DREAMって名前の別の大会なんだろうな。でも、大会日時はあのDREAMと一緒だな。どういうことなんだろ？」って思ってたぐらいで（笑）。

――ハハハハ。宮下選手は一本勝ちも多かったのが大舞台向きというか、評価されたんでしょうね。

宮下　それで関係者の目に止まったんですかね。逆にそこしか評価するとこないですもんね（笑）。

――みんな、宮下さんのフロントチョークをまた観られる日を楽しみにしてると思います。

宮下　はい。皆さんにまた元気な姿を見せられるように頑張ります！

【11年1月24日／都内・宮下トモヤの入院先にて収録】

「アンデウソンにすべてを教えた」な読者プレゼント

kamipro PRESENTS

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①～⑧の質問の答えをご明記のうえ、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(商品は2011年3月24日(木)頃発送予定です)。

【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦あなたが好きな梶原作品は?⑧あなたがkamiproに望むことは?

【宛先】〒162-0805 東京都新宿区矢来町41-1 ザ・フタガミハウスNo.1
(株)ツー・スリー内『kamipro』編集部 「身を引くときが来たのでしょう」係まで

※応募締切は2011年3月10日(木)当日消印有効

PRESENT 01 SPECIAL PRESENT

1名様

ジョージ高野&ドン荒川直筆サイン色紙

[非売品]

ひさびさの『kamipro』登場となったお二方のサイン色紙! 取材現場では「ジョージは天才ですから!」「いえいえ、新日本で荒川さんにかなう人はいなかったですよ!」と、お互いをことさらヨイショ。二人の師弟愛を感じました、はい。

PRESENT 02

1名様

宮下トモヤ直筆サイン色紙

[非売品]

再びリングに上がる日を目指して闘病中の宮下トモヤ。DEEPなど格闘技会場では、募金など支援活動も行なっているのでどうかご協力を!

ブログ■http://ameblo.jp/pdamtg/

PRESENT 03

1名様

里村明衣子直筆サイン色紙

[非売品]

じつは里村がガイア時代に広田さくらをライバル視していたのを聞いて、広田フリークである聞き手の柳澤健さんは喜んでおられました、はい。

HP■http://www.sendaigirls.jp/

PRESENT 04

1名様

クレイジーヒルモデル トリプルネームTシャツ

[NO NEED NEW／¥4,095(税込)]

新田明臣の弟子、クレイジーヒルの所属ジムのバンゲリング・ベイ、出稽古先のX-FORCE、そしてNNNのトリプルネーム。サイズはM。

NO NEED NEW■http://no-need-new.com/

PRESENT 05

1名様

力道山感謝状

百田家秘蔵の超珍品! 厚生福祉事業に貢献した力道山が亡くなる半年前にもらった感謝状。リキさんこそ50年前のリアル伊達直人だ!?

闘道館■http://www.toudoukan.com/

PRESENT 06

1名様

UFCオープンフィンガーグローブ

堀江ガンツがあのマウリシオ・ショーグンにサインをもらったものの、乾かぬうちにしまったため、サインが汚れのように見えてしまうのは秘密です。

PRESENT 07

1名様

UFC126 Tシャツ

こちらもガンツ特派員のUFC土産。アンデウソンvsビクトーを中心にデデーンとプリントされたTシャツは、アメリカ仕様のSサイズ。

HP■http://www.ufc.com/

PRESENT 08

1名様

キックミット ワンショルダーバッグ

[リバーサル／¥13,650(税込)]

rvddwからなんとも技アリなバッグが登場! キックミットをリアルに再現したこちらは長さ調節可能、中には小物入れもあるので便利。

リバーサル■http://www.rvddw.com/

PRESENT 09

1名様

単行本

『今日が残りの人生最初の日』

[講談社／¥1,365(税込)]

プロ格闘家引退後もさまざまな分野で活動を続ける須藤元気が、またまた著作を出版! ロスジェネ世代へ贈る幸福論で幸せになっちゃおう!

HP■http://www.cmavi.jp/sudogenki/blog/

PRESENT 10

1名様

単行本

『達人空手家30人に見る空手「技」の歴史』

[東邦出版／¥1,890(税込)]

空手の技法はどのように生まれ、変遷していったか? フルコンの元祖であり、由緒正しき歴史を持つ極真出身の達人にその奥義を学べ!

HP■http://www.fullcom.jp/

PRESENT 11

5名様

単行本

『そんなこと、気にするな』

[廣済堂新書／¥840(税込)]

本誌ジャン斉藤の師にして20年間無敗の伝説の雀鬼、桜井章一が仕事と人生で勝ち抜くための方法を伝授。鬼気迫る熱いメッセージ満載!

HP■http://www.jankiryu.com/

kamipro156 応募券 星売買

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

こちらでも毎週プレゼント実施中!! http://kamipro.com/

kamipro 紙のプロレス
No.156
2011年3月9日 発行

発行人
浜村弘一

編集人
斉藤慎一
青柳昌行

編集統括本部長
ジャン斉藤

編集スタッフ
堀江ガンツ
松下ミワ
スズキィ
八木賢太郎（「サクラ咲いた」ため非番）

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
高橋くん

編集次長（卒業!?）
松林 貴

デザインGM
出田 一（TwoThree）

デザイン隊長
金井ヒサくん（TwoThree）

デザイン
松坂マツくん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
鎌田やっちゃん
白木みのる（以上、TwoThree）

カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
吉場正和
今村陽子
笹井孝祐
タイコウクニヨシ
梅木麗子
金山フヒト
丸山剛史

再発防止
入江理事長（TwoThree）

営業部
堂前秀隆
中村宣忠

業務部
樽本"年度末繁忙"義之

庶務部
原 正典
山内ユリコ

編集チアガール
金川"ナツコ"奈津子
安部"クリン"悠子

あまおうマダム
廣橋久美子

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431
東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）

発売元
株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177
東京都千代田区富士見2-13-3

印刷
図書印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

■広告掲載のお問い合わせは下記まで
株式会社エンターブレイン
スポーツ企画編集部 ☎03-3265-7166

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

[カスタマーサポート]
☎0570-060-555
（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00～17:00）
メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンターブレイン（URL: http://www.enterbrain.co.jp/）、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。

あらゆるジャンルのヤオガチに迫る！
次号の特集は

八百長

NEXT ISSUE

2.27『UFC127』大会詳報、日本の明日はどっちだ!?

No.157は3月24日（木）発売予定!

※地域によっては発売が多少遅れることもあります。ガチです!

kamipro 2011 156
ヒョードル完敗に格闘家の春夏秋冬を見た! 美しき落日——!!

2011年3月9日
発行人／浜村弘一　編集人／斉藤慎一、青柳昌行
発行所／株式会社エンターブレイン　〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
発売元／株式会社角川グループパブリッシング　〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3
enterbrain

9784047271036

特別定価:本体895円+税
雑誌61972-66 Ⓗ2011.06
Printed in Japan 図書印刷株式会社

ISBN978-4-04-727103-6
C9476 ¥895E

1929476008954